

『山城』と柱島な日々

タマモワンコ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゴジラが来たりゲートが開いたりフォーリナーがやって来た国、日本。

そんな国に深海棲艦がやって来たけどなんともなかつたぜ！

このお話は、提督、『犬走山城』とその指揮下の艦娘とその他いろいろな人たちが（技術チートや能力チートを使いつつ）過ごしていく物語。

…多分。

この作品は、ゲーム『艦隊これくしょん』の二次小説です。

キャラ崩壊、独自設定、他作品のネタなどがかなり盛りだくさんです。

特にキャラ崩壊に関してはかなりです。『提督のことが死ぬほど嫌いな金剛』がそのうち生まれてもおかしくないぐらいに崩壊しています。

戦闘は基本的に一方的です。

以下、特に本編に関わってくる他作品

- ・紺碧の艦隊、旭日の艦隊シリーズ
- ・ゴジラシリーズ
- ・ACE COMBATシリーズ
- ・R-typeシリーズ
- ・GATE ～自衛隊、彼の地にて斯く戦えり～

- ・ パワプロクンポケットシリーズ
- ・ 仮面ライダーシリーズ
- ・ メタルマックスシリーズ
- ・ アズールレーン
- ・ 鋼鉄の咆哮
- ・ 随時追加！

11 / 23 タイトルを『犬走山城ののんびり鎮守府日和』から『山城』と柱島な日々』に変更しました。

目次

設定など

情報まとめ13話時点 | 1

19話時点 装備カタログ！ | 13

21話時点情報倉庫 | 19

本編

はじまりはじまり／第1話 | 31

第2話 | 40

第3話 | 47

第4話 | 55

第5話 千代田ばっか。 | 69

第6話 旅編 | 80

第七話 大規模作戦開始 | 97

第8話 | 108

第9話 波乱 | 117

第10話 カガウスワン | 129

第11話 | 138

第12話 | 153

第13話 炎龍編 | 168

第14話 二つの戦い | 182

第15話 | 196

第16話 とても平和 | 204

第17話 二人目 | 211

第18話 メンテ明け | 221

第19話 バイド』は『出ないよー！ | 227

第20話	よし、伏線張ってくよー!	235
第21話	遂に	246
第22話	動き出す鉄の塊	254
第23話	おい、デュエルしろよ。	264
第24話	ちよつとした平行世界	274
第25話	山城、山城、山城。	293
第26話	最近平和。	305
第27話	もうすぐ秋イベ	316
第28話	R成分多め	325
第29話	波動砲が主武装	334
第30話	2017年秋イベ!	344
第31話	色々と終わってしまう時期	364
番外編		
番外編その1	深海なお話し	375

設定など

情報まとめ13話時点

主要キャラ・組織等のみ。

名前―本名

《犬走山城―犬走初 読み：いぬばしりやましろ（はつ）》

所属組織 ()内は最終階級

防衛大学校↓航空自衛隊（一等空尉）↓対特殊生物自衛隊（二佐）↓
現海軍中将・柱島泊地提督

柱島の提督。年齢は34歳。

父親は陸上自衛隊の自衛官であったが、1995年にデストロイアのオキシジェン・デストロイヤー・レイに巻き込まれて死亡している。母親は、初が自衛隊に入隊した直後に行方不明となっている。しかし、なぜか情報が存在しない。

後世（前世）では人ではなく超戦艦日本武尊であり、また後々世（今世）でも日本武尊の記憶を持っている。日本武尊の艦装も艦装の制作の始まった初期に作られており、現在は初が装備している。

なお、実艦の日本武尊も存在しており、『新・旭日の艦隊』の電磁投射砲装備の潜水戦艦となり各地で活躍している。

転生者であるため転生者の集まり『紺碧会』に所属しており、様々な装備などを保有している。

空自時代は加賀が隊長のメビウス小隊に配属され、二番機のメビウス2として哨戒や対怪獣戦闘を行った。なお、メビウス小隊は2003年のゴジラ襲撃により加賀と初以外は戦死し、その半年後初が特自へ異動となったためメビウス小隊は解体されている。

特自異動後、上陸の兆しが見えたゴジラの幼体の一種と思われる怪獣を撃破し、その功績から三佐となる。

深海棲艦出現後、ロシアの救援に単機で派遣される。装備はガル―ダ一機と日本武尊の艦装のみ。

ロシアで現地の人々と共に二年間以上戦うことになるが、四ヶ月目に通信機が破損、またロシアの各通信機も深海棲艦による電波妨害によって通じなくなり、日本との連絡がとれなくなる。六ヶ月目、日本政府はロシア壊滅と判断、また初はM I A認定され二階級特進し一佐となる。十八ヶ月目、ロシア内陸部を解放。また、深海棲艦となつていたガングートを保護した。その後カラ海を始めとした近海を解放し、艦娘部隊を編成し制海権を維持できるようにし、日本へ帰投した。生存が確認されたため二階級特進は取り消されたが、ロシア解放の功績を称えられ再び一佐となる。

その後、深海棲艦化の兆候が確認されたため、その対処のため二年半の間入院する。

退院後海軍へ異動。半年の講義等の後柱島の提督として着任する。

泊地着任後も中国戦闘機の迎撃や離反者の処分等を行っていた。

現在は特地へ派遣されている。提督の仕事の範疇を飛び出しているが本人は特に気にしていない模様。

性格は人によって違う答えが返ってくるため不明である。部下想いのやさしい人だ、と言う人もいれば暴力は当たり前、ミスをすれば殺される、などと言う人もいたりする。

ロシアではかなり評価が高い。

現メビウス小隊長。TACネームは、『ヤマト』。AC—130などの三発以上の機体の際は『トリニティ』。

《山城》

所属組織

海軍・大尉

柱島泊地所属の艦娘。年齢は24歳。

初に恋心を抱いている。

柱島の数少ない主力戦艦の一人であり、また秘書艦の一人である。

特におかしいところのない普通の艦娘であるため、日常フェイズでしか出番が無い。

好物はさばの味噌煮。

《衣笠》

所属組織

海軍・大尉

柱島所属の艦娘。年齢は26歳。

衣笠のなかでもかなり素晴らしい歌声と、幸運を持つ。

提督とは親友であり、恋情は全く無い。

よく体調を崩す。

《青葉》

所属組織

海軍・大尉

柱島所属の艦娘。年齢は26歳。

青葉新聞なる新聞を書いている。

提督へは、好奇心半分恋情半分。

提督の謎を、今日も彼女は追い続ける。

《霞―八幡霧子（やはたきりこ）》

所属組織

海軍・大尉

柱島所属の艦娘。年齢は16歳。

両親は10歳の時に深海棲艦に殺されており、たまたま霞の適性が

あつたため艦娘となった。

初を父のように敬い、慕っている。

戦いが終わったら警官になろうと思っており、すでに勉強を初めて

いる。

最近はいつも山風が初にくつついているため不機嫌。

《龍田》

所属組織

海上自衛隊（二等海尉）↓海軍・大尉

柱島所属の艦娘。年齢は21歳。

8000人に1人の確率でしか生まれない特殊な『イレギュラー』の一人。別に遺伝確率250億分の1とかではない。

艦娘の扱える装備であればどんな装備であつても操ることができ。大口径主砲から艦載機、陸上機、超兵器までどんなものであつても操れる。しかし、その代わりに防御性能が弱く、本人曰く7.7m機銃で大破するほどのこと。これがあるため前線にはでれず、普段は基本的に技研からの兵装テストの依頼を行っている。

また、泊地泊地内の対空兵器はすべて艦娘艦装を巨大化したものであるため、これらの管理と運用も行っている。

初はよい友人。

《加賀―加賀愛（かがあい）》

所属組織

航空自衛隊（三等空佐）↓海軍・中佐

柱島所属の艦娘であり、元空自パイロット。また、日本で一人目の『空母加賀』である。年齢は32歳。

元メビウス1。その実力は一機で十個小隊に値するという報告が国連からもたらされている。

艦娘としての実力もかなりのものであり、特に戦闘機の扱いが上手い。600機以上の敵機を相手に損失なしで全て撃墜するほど。

初期の横須賀鎮守府に所属しており、初が柱島に着任した後移動してきた。

初のことには信頼している。

基本的にポーカーフェイスだが初と二人きりの時は笑顔になることがある、という情報が青葉からもたらされている。真偽は不明。

また、仮面ライダーガタツクに変身する。変身すると性格が加賀美みたくなる。

あと、ゲーマーである。そして、スツーカー大好き。

TACネームは『ラバー』。

《蒼龍》

所属組織

海軍・大尉

柱島の艦娘。年齢は27歳。

爆撃機の扱いに長けており、高い命中率を誇る。

爆乳。

《飛龍》

所属組織

海軍・大尉

柱島の艦娘。年齢は26歳。

雷撃と水平爆撃が上手い。

蒼龍ほどではないが十分でかい。

《瑞鶴》

所属組織

海軍・大尉

柱島の艦娘。年齢は20歳。

加賀に憧れて艦娘になった。

加賀・蒼龍・飛龍の三人にみっちり仕込まれたため、制空戦、対艦攻撃、対地攻撃全てかなりの腕である。墳式機の扱いの基礎は比叡に教えてもらい、加賀と共に修正しつつ伸ばした。

胸は着痩せしているだけでそれなりにある。

《比叡―高杉由香（たかすぎゆか）》

所属組織

海軍・大尉

柱島所属の艦娘で、後無比叡が転生した存在。年齢は36歳。

初の義姉であり、いまは高杉長官の養子となっている。

好きな食べ物は焼き鳥。

《曙》

所属組織

海軍・大尉

柱島所属の艦娘。年齢は15歳。

戦闘機オタク。

《隴》

所属組織

海軍・大尉

柱島の艦娘。年齢は15歳。

カニは友達。

《大井》

所属組織

海軍・大尉

柱島の艦娘。年齢は25歳。

初に恋情を抱いている。また、初が隠している面を結構知っている。

最近出番が減ってきている。

《祥鳳》

所属組織

海軍・少佐

柱島の艦娘。年齢は23歳。

ケツコン艦だが、悲しいことにそこに愛はなかった。

振り向いてもらおうと頑張っているが、遅かった。

練度はかなりのものである。

《秋月》

所属組織

海軍・大尉

柱島の艦娘。年齢は17歳。
シャドームーンに変身する。

《那珂》

所属組織

海軍・大尉

柱島の艦娘にして泊地のアイドル。年齢は19歳。

艦娘になる前に深海棲艦に襲われ、深海棲艦一步手前まで深海棲艦化が進んでいた。入院し治療を行ったため深海棲艦にはならなかったが、左腕は戻らず切除された。現在は義腕を着けて生活している。初とは入院時代に知り合っており、互いに理解し会う親友である。普段是那珂の記憶を元に頑張って那珂らしくあろうとおちやらけているが、真面目で優しい女の子である。疲労がかさむと現れる。

《千代田―星野千代》

所属組織

海軍・大尉

柱島の艦娘。年齢は28歳。

艦娘の育成を行う艦娘学校二期生の首席であり、空母全てに適性をもっている。

空母建御雷の転生した姿であり、後世の記憶も取り戻した。現在は『ちよだ』と名付けられた改ジェラルド・R・フォード級の艦装も扱う。初の彼女である。

胸は蒼龍以上にでかい。泊地内のすべての艦娘の胸を揉みしだいた雪風によると、『マシユマロのように柔らかく、私を包み込んでくれる』とのこと。

TACネームは『シナノ』。

《伊藤獅子（いとうしし）》

所属組織

防衛大学校↓海軍・大将

横須賀鎮守府の提督。年齢は26歳。
防衛大学校きつての天才であり、日本で最初の提督。
天津風が嫁。

《かも》

所属組織

海軍・二曹

横須賀に送られてきた鷄の中になぜか紛れ込んでいた鴨。

鴨でありながら艦娘兵装等を操れる。また、改ズムウォルト級駆逐艦の操縦を担当する。

人の言葉を解す。また、ある程度なら意思の疎通がはかれる。理解できるかは別として。

八羽おり、いちかも、にかも、さんかも…と名付けられている。

一羽ごとに模様が微妙に違う。ただし、見分けられたのは初・千代・加賀の三人のみであった。

《ル級》

所属組織

深海棲艦中庸派↓海軍・中尉

亡命した深海棲艦。少し抜けているヲ級の補助を行う。
かなり頭がいい。また、中枢棲姫にも信頼されているようだ。

《チ級》

所属組織

深海棲艦中庸派↓海軍・中尉

亡命した深海棲艦。
亡命組のなかでは一番初のことを慕っている。

《ネ級》

所属組織

深海棲艦中庸派↓海軍・中尉

亡命した深海棲艦。

猫耳が生えており、人というよりは猫に近いようである。
ニヤ、としか言わないが、初は何を言ってるのかわかるようだ。
最近、執務室に寝床が設置された。

《富嶽・水神・快竜・爽海》

所属組織

海軍・少佐

艦娘版紺碧の艦隊のメンバー。スエズからきた敵遠征艦隊を全て撃沈した。

《犬走扶桑―犬走柊（いぬばしりひいらぎ）》

所属組織

海軍・大尉

初の実の妹。29歳。

日本武尊級戦艦二番艦天照である。
意外と設定がない。

《足利飛鷹―足利唯（あしかがゆい）》

所属組織

海軍・大尉

柱島所属の艦娘であり、また防空軽空母尊氏の転生した姿である。
柊の補助を行う。

《紺碧・旭日の面子》

基本的に解説なし。

原作とは50年ずれて転生しているため、敗戦を避けられなかった。

《Wizardry―ジョシユア・ブリストー》

エスコンZEROより。

ウィザード隊隊長。

どうやら北上とイイ関係のようだ。

《能代―大石三咲（おおいしみさき）》

所属組織

防衛大学校↓航空自衛隊（三佐）↓海軍・少佐

柱島の艦娘。また、海軍元帥大石蔵良の娘。年齢は31歳。

高い空戦技術を持ち、初めての女性のアグレッサーとなった。

防衛大学校にいたころに初に一目惚れして、未だに想い続けている。また、ストーリー紛いのこともしていた。

愛機はF-15C。TACネームは『ブロッサム』。

《山風》

所属組織

海軍・大尉

宿毛の艦娘だったが、初に保護され柱島に移動する。年齢は14歳。

初のことをお父さんと呼び、慕っている。

普段は基本的に初にしがみついてぶら下がっている。

それを見た青葉が思い付いたあだ名は『オナモミ』。

《大潮》

所属組織

海軍・大尉

柱島の艦娘。年齢は18歳。しかし、なぜか成長が遅くまだまだ中学生レベルの体型。

初からの評価は高い。

《吹雪》

所属組織

海軍・大尉

柱島の初期艦。年齢は18歳。

扶桑と山城を先輩と呼び慕う。
仲間想いの良い子。

かなり砲撃が上手く、水平射撃での命中率は8割程度。
組織など。

《柱島》

人口500人程度の島。柱島泊地と空軍基地がある。
泊地の提督は犬走山城。
かなりの戦力を保持する基地である。

・戦力一覧

《艦艇》

ヤタガラス級木造戦艦『オウスノミコト』（日本武尊）
改ジエラルド・R・フォード級航空母艦『ちよだ』
改ズムウォルト級駆逐艦8隻
つねがみ型輸送艦二番艦『つるが』
ひるが型補給艦四番艦『いつべき』

《航空機》

不明

《部隊》

ガルム隊
サイファー・ピクシー・PJ
ラーズグリーズ隊
ブレイズ・ナガセ・ダヴェンポート・グリム・スノー
ウィザード隊・ソーサラ隊
ジョシユア以下16名
メビウス隊
ヤマト（初）・シナノ（千代）・ラバー（愛）・ブロッサム（三咲）
ちよだ艦載機隊

《陸上戦力》

不明

《艦娘》

約170名

19話時点 装備カタログ!

《51cm三連装砲》

火力45 対空20 命中5 射程超長

《新三八弾》

対空50 装甲―1

主砲 高射装置 弾での対空カットインあり

《炉号弾》

対空75

対空カットインあり

《12.7cm単装速射砲複数配備+CIC》

火力10 対空45 索敵5 命中10 回避1 射程短

戦艦及び航空戦艦のみ装備可能。

日本武尊改の初期装備的なの？

《高速高精度機関砲複数配備+CIC》

火力2 対空50 命中3 射程短

《六二式酸素魚雷》

雷装24 命中20 射程短

《対潜攻撃弾》

火力7 対潜20

《スタンダード波動砲》

火力75 範囲1 対空125 射程中 装甲貫通(極小)

装備艦は昼戦及び夜戦にて砲撃可能

《拡散波動砲試作型》

火力50 範囲3 対空150 命中40 射程中

《スタンダード波動砲II》

火力80 範囲1 対空125 射程中 装甲貫通(小)

《スタンダード波動砲III》

火力90 範囲1 対空125 射程中 装甲貫通(中)

《デコイ波動砲》

火力45 範囲2 対空30 射程短

《デコイ波動砲Ⅱ》

火力60 範囲2〜4 対空45 射程短

ダメージ判定は複数回行われる

《デコイ波動砲Ⅲ》

火力75 範囲0〜6 対空80 射程中

《拡散波動砲》

火力65 範囲3 対空155 命中50 射程中

《メガ波動砲》

火力80 範囲1 対空130 射程長(装甲貫通大)

《ハイパー波動砲》

火力75 対空200 命中60 射程短 20回攻撃

一度の砲撃で20回攻撃するが、二順目の砲撃及び夜戦での砲撃が不可能となる。(魚雷は可能)

《ギガ波動砲》

火力200 範囲6 対空165 命中35 射程長

《スタンダード波動砲X》

火力75 対空40 射程中

着弾時20%の火力で追撃

《スタンダード波動砲XX》

火力80 対空45 射程中

着弾時40%の火力で追撃

《灼熱波動砲》

火力125 対空15 射程短

《灼熱波動砲Ⅱ》

火力135 対空18 射程短

《ナノマシン波動砲》

火力65 対空150 命中100 射程短

《分裂波動砲》

火力60 対空130 命中25 範囲3 射程中

《幻影波動砲》

火力80 対空45 射程中

《バリア波動砲》

火力30 対空50 装甲30 射程短

《バリア波動砲Ⅱ》

火力45 対空65 装甲50 射程短

《圧縮波動砲》

火力70 対空135 射程超長

《圧縮波動砲Ⅱ》

火力85 対空145 射程超長

《持続式圧縮波動砲》

火力60 対空160 射程超長

《持続式圧縮波動砲Ⅱ》

火力70 対空175 射程超長

《持続式圧縮波動砲Ⅲ》

火力80 対空180 回避13 射程超長

《光子バルカン弾 (海軍での名称：速射波動砲)》

火力30 対空130 命中20 射程短

敵の耐久値が低ければ低いほど命中に補正がかかる。

《光子バルカン弾Ⅱ》

火力35 対空140 命中25 射程短

《パイルバンカー (海軍での名称：波動式パイルバンカー)》

火力160 命中150 射程短

《パイルバンカー帯電式 (海軍での名称：波動式パイルバンカーⅡ)》

火力175 命中145 射程短

《パイルバンカー帯電式H型 (海軍での名称：波動式パイルバンカーⅢ)》

火力205 命中125 射程短

《索敵波動砲》

火力55 索敵50 範囲1 射程短

《索敵波動砲EX》

火力57 索敵65 範囲2 射程短

《捕捉追尾波動砲》

火力65 索敵20 命中50 範囲4 射程短

《衝撃波動砲》

火力95 命中40 範囲2 射程短

《圧縮炸裂波動砲》

火力105 命中40 範囲1 射程短

《ロックオン波動砲》

火力40 対空175 命中75 範囲2 射程短

《ロックオン波動砲II》

火力45 対空200 命中76 範囲3 射程短

《ロックオン波動砲III》

火力50 対空250 命中77 範囲4 射程短

《衝撃波動砲II》

火力115 命中45 範囲3 射程中

《カーニバル波動砲》

火力30 対空10 命中10 索敵2 射程中

《大砲（海軍での名称：波動キャノン）》

火力50 対空2 射程中

『地上で用いることが好ましい』：波動キャノン使用マニュアルから
抜粋

《カーニバル波動砲II》

火力120 対空25 命中20 索敵5 射程長

《バイド砲》

火力80 対空30 命中5 範囲2 射程短

《クリスタル波動砲》

火力90 対空5 射程中

命中時40%の威力で追撃

《超新星波動砲》

火力95 命中20 射程短

《バブル波動砲》

火力50 対空60 射程短

『大気圏内での使用を禁ずる』：高野五十六

《ライトニング波動砲試作型》

火力70 対空100 命中20 射程短

《ライトニング波動砲》

火力95 対空175 命中70 射程短

《バウンドライトニング波動砲》

火力110 対空120 命中100 射程短

『友軍施設内での使用を禁ずる』：高野五十六

《20インチ三連装砲&高性能射撃装置&無限装填装置》

火力45 対空30 命中75 射程超長

《20インチ三連装砲&高性能水上対空兼用電探&無限装填装置》

火力45 対空50 索敵60 命中5 射程超長

《5インチ単装速射砲複数配備&CIC》

火力10 対空45 索敵5 命中10 回避1 射程短

《20mm高精度機関砲複数配備&CIC》

火力2 対空50 命中3 射程短

《深海高性能推進機&核融合機関》

回避50 装甲10

《深海噴式戦闘爆撃機》

爆装240 対空72 索敵25 命中20 射程長

《深海噴式戦闘爆撃機（熟練）》

爆装300 対空120 索敵50 命中25 射程超長

《R-9A 『ARROW-HEAD』》

火力75 爆装120 対空250 射程中

《R-9A2 『DELTA』》

火力50 爆装125 対空300 命中40 射程中

《R-9C 『WAR-HEAD』》

火力65 爆装180 対空310 命中50 射程中

《R-9E 『MIDNIGHT EYE』》

火力55 爆装10 索敵200 射程短

《R-9/0 『RAGNAROK』》

火力75 爆装200 対空400 命中60 射程中

《RX-10『ALBATROSS』》

火力95 爆装135 対空50 命中40 射程中

《R-13A『CERBEROS』》

火力95 爆装140 対空350 命中70 射程中

《R-9DP3『KENROKU-EN』》

火力205 爆装5 対空50 射程短

《Ju-87D-5》

火力2 爆装12 対空5 射程短

《F-15》

火力2 爆装45 対空120 射程長

《F-16》

火力5 爆装20 対空100 射程長

《FA-18》

爆装240 対空72 索敵25 命中20 射程長

《F-35》

爆装245 対空60 射程長

《設定基準》

必要なし！その場のノリ！

嘘です。はい。波動砲はスタンダード波動砲を基準に数値化をなんとなく。

！
R戦闘機は波動砲を基準に、対空は波動砲の二倍。それ以外はノリ

ジェットとかはリアルな機体のペイロード等を基準に適當。
そんな感じ。

21 話時点情報倉庫

3、2、1、Let's go!^{絶望☆}

登場人物

犬走山城（犬走初―いぬばしりはつ）

階級：大将

柱島鎮守府の提督。35歳。

父親は死亡、母親は行方不明。

ロシアの英雄である。

義姉に比叡である高杉由香、妹に犬走柊がいる。また、養子ではあるが娘として朧である犬走七海がいる。また、いところに野崎維織と川田由良里がいる。

前世『日本武尊』の転生した姿であり、もちろん艦装も扱える。山城の艦装の適正もある。

柱島所属の航空隊『メビウス小队』のリーダーでもある。現在のメンバーはメビウス1：犬走山城、メビウス2：千代田、メビウス3：加賀、メビウス4：能代である。

深海棲艦化が九割方進行したところで止まったため、実際はほぼ深海棲艦である。識別コードは『航戦水鬼』。

最近山城との会話が減って悲しいらしい。

好物はカレー。

愛機はF-22、AC-130、A-10。

好きなR戦闘機はR-13AとR-9DP3とR-9/0。

：実はバツイチだったりする。

山城（角田宇莉―かくたうり）

柱島所属の艦娘。24歳。

柱島の数少ない主力戦艦の一人であり、秘書艦の一人でもある。

扶桑曰く、『提督に一番信頼されている艦娘』である。事実、『戦艦・

航空戦艦で一番好きな艦』という質問に提督は山城と即答していた。隠していることがたくさんあるとは扶桑の談。

好物はさばの味噌煮とカレー。

提督と二人でいる時間が減って悲しいらしい。

千代田（星野千代―ほしのちよ）

柱島所属の艦娘。28歳。

提督の彼女である。

前世『雷御建』であり、現在は改ジエラルド・R・フォード級正規空母の艦装を装備する。

ちなみに、最近の本編で提督との絡みがないが、本編外でも無い。さっぱり無い。

能代（大石三咲―おおいしみさき）

階級：中佐

柱島所属の艦娘。31歳。

戦闘機の操縦技術はかなり高く、空自で初めての女性のアグレッツサーとなった。

防衛大学校時代に初に一目惚れし、それ以降ずっと初のことを追いかけている。少し前まではストーカー紛いのこともやっていた。最近は少し自重している。

炎龍討伐の功績から中佐に昇進した。

海軍元帥：大石蔵良の娘である。

愛機はF-15C。

好物はカレー。

彼女は今日も提督のことを追い続ける。

比叡（高杉由香―たかすぎゆか）

柱島所属の艦娘。また、柱島の数少ない主力戦艦。36歳。

もともとは犬走家の拾い子であったが、前世の記憶を取り戻した際に高杉家の養子となった。

転生艦であり、前世も今世も比叡である。
ガルーダ1：タリズマンと良い関係らしい。
好物は大福と焼き鳥。

青葉（本名はまだ決まっていな。いずれ。）

柱島所属の艦娘。26歳。

提督とは提督がまだメビウス2の時代に知り合い、以降追いかけている。その瞳には好奇心と恋情が秘められている。

鎮守府のことを書いた青葉日報を毎日書いて、食堂に貼っている。
扶桑曰く、『最近情報は正しくなってきた』とのこと。

転生艦の一人であり、前世では『虎狼型航空戦艦一番艦 虎狼』であつた。

彼女の情報収集能力はかなりのものであり、どこからともなく情報を仕入れてくる。

好物はお好み焼き。

霞（八幡霧子―やはたきりこ）

柱島所属の艦娘。また、駆逐艦筆頭。16歳。

10歳のころに両親を深海棲艦に殺され、その後艦娘となつた。

初のことを父のように慕っている。

最高練度に達したことへのお祝いに、ガシヤットギアデュアルをもらつた。

誰かがアホなことをするとどこからともなくスリッパを取りだし、叱ると同時にそれで頭を叩く。とてもいたい。

将来警察になるために勉強している。

好物はジャガイモのニョッキ。

加賀（加賀愛―かがあい）

柱島所属の艦娘。32歳。

元メビウス1であり、現在はメビウス3である。その戦闘能力は単機で十個飛行隊に匹敵するという情報が国連からもたらされている。

日本で一人目の空母加賀であり、その空戦技術は恐ろしいものである。

彼女の笑顔の写真は裏市場で恐ろしいほどの値段で取引されている。ただしその大体は別の空母加賀であり、加賀愛の笑顔の写真は存在しないとも言われている。

仮面ライダーガタックと仮面ライダースナイプに変身する。ガタック変身時は性格が加賀美みたくなるとか。

最高練度のお祝いにガシヤットギアデュアルβをもらった。

好物はスシローの焼きとろサーモン。あれなら五十皿は行けるとか。

愛機はF-22。

スツーカーを愛する空母である。

瑞鶴

柱島所属の艦娘。20歳。

加賀に憧れて艦娘となった。

戦闘能力は化け物達（加賀・蒼龍・飛龍）にしつかりと叩き込まれたため、国内でもトップレベルの強さである。

噴式機の扱いも、千代田のf-18との一対一の格闘戦ならばほぼ勝利できるほどである。AAM?無理です。

提督曰く、『まだ伸びる』そう。おそろしや。

他所の瑞鶴は甲板胸とか言われているが、柱島の瑞鶴はそれなりにはある。が、周りがやけにでかいので少し気にしているようである。

衣笠

柱島所属の艦娘。26歳。

衣笠のなかでもかなりの歌声と幸運を持っている。

提督とは親友である。

なにやら提督との間になにかあったようだ。

那珂

柱島所属の艦娘。19歳。

昔深海棲艦に撃たれ、深海棲艦一步手前まで深海棲艦化した。識別コードは『軽巡棲鬼』。

初は良い友人である。

朧（犬走七海―いぬばしりななみ）

柱島所属の艦娘。15歳。

初の娘。

国内で唯一艦娘用の波動砲とR戦闘機を作れる存在。ただし、そのことは秘匿されている。

ハイパー波動砲がお気に入りようだ。

最近、小さい生首達を連れていているという噂が流れている。

磯波

柱島所属の艦娘。25歳。

提督に恋情を抱いている。

千代田と同じ方法で旅行に誘おうとしたが、山城によって（本人は無意識だが。）阻止されてしまった。

旅行はしっかりと楽しんでできた模様。

赤城

柱島所属の艦娘。25歳。

どうもネタ要員になりつつある。

ボーキを銀蠅しては加賀にボツシユート（海へほんなげる）されている。

波止場篠和（はとばしのかず）

階級：大将

佐世保鎮守府の提督。24歳。

若くして大将となった。また、宿毛の提督の離反への対応等と同時に期に行われたブラ鎮と不正の是正の後に現れた『新貴族』と呼ばれる

若い将校たちのリーダー格の存在である。

能力は：まあそれなりにはあるようである。

航空攻撃のマニユアルを作成して各提督に配布したが、帰ってきたのは文句のみであったとか。

ちなみに初は焼いた。

初の35歳で大将は十分おかしいが、こいつの24歳で大将はもつとおかしい。つまり…？

野崎維織

野崎重工工業株式会社の社長。42歳。

日本の防衛兵器を作っている会社の一つである野崎重工の社長であり、また初のいとこである。

迷惑のかけっぷりは原作とそんなに変わらない。

川田由良里

野崎重工の社長秘書。28歳。

野崎重工の社長秘書で、ぐうたらな維織を働かせることのできる一人。

パワポケ13の麻美ルート…に近いルートを通っている。ちなみに13主は麻美とくつついた。

初がロシアでMIAとなったときはさすがのゆらりも錯乱したとか。

野崎久藤（のぎきくどう）

野崎維織の専属ボディガード。

察しのいい人はわかっていると思うが9主。また、この小説では9主IIレッド説採用です。

桜井いつき（さくらいつき）

提督研修生。34歳。

初の後輩であり、初が目標。あと恋のライバル（一方的ではある

が。)

ちつこくてぴこぴこしている。

防衛大学校卒業で、五年前までは特生自衛隊所属だった。

組織

柱島

規模は大きくはないが、戦力としては呉と同等の鎮守府。泊地ではなく鎮守府。提督は犬走山城。また、提督の研修に桜井いつきが来ている。

基本的には海域の攻略はせず、国内外の問題解決や他鎮の補助、援護及び救助を行う。

そこまで大きな島ではないのだが、3000m級の滑走路や空軍基地、各港湾施設に豊富な対空火器、あげくのはてには戦車などもたくさんある。とりあえず大体ある。

広場の下にはミサイルサイロがある。初曰くV2（ドイツ産）しかないとのことだが、実際はV2（ベルカ産）もある。

試作兵装の試験を行うためのスペースもあり、基本的には立ち入り禁止である。龍田であっても提督の許可が必要。『竜宮城』はこの試験スペースの地下にある。

攻撃、防衛どちらにおいてもかなりの実力を誇る。攻撃では弾道ミサイルや爆撃機、所属艦艇による攻撃、防衛では所属している戦闘機隊による迎撃や短SAMや高射砲などの対空攻撃、また対潜哨戒機や各護衛艦による迎撃など。

以下、所属戦力

艦娘海軍

提督：犬走山城大将

艦娘

170名（内主力艦66、準主力艦42、練成中62）

（秘匿艦）：

・伊601『富嶽』

・伊501『水神』

- ・伊502 『快竜』
- ・伊503 『爽海』
- ・伊701 『乙姫』
- ・伊702 『浦島』
- ・伊703 『竜宮』
- ・特殊潜 『鳴門』
- ・伊900型9隻
- ・伊1000型16隻
- ・特呂号潜30隻
- ・伊3001 『亀天』
- ・伊10001 『須佐之男』
- ・装甲空母 『建御雷』
- ・戦艦 『日本武尊』 及び潜水戦艦 『新日本武尊』
- ・戦艦 『天照』
- ・航空戦艦 『虎狼』
- ・航空戦艦 『海狼』
- ・軽空母 『尊氏』 計72隻

海軍

所属艦艇

- ・やたがらす級木造戦艦 『おうすのみこと』
- ・改ジエラルド・R・フォード級正規空母 『ちよだ』
- ・改ズムウォルト級駆逐艦八隻
- ・つねがみ型輸送艦二番艦 『つるが』
- ・ひるが型補給艦四番艦 『いつぺき』
- ・その他タグボートなど多数

柱島空軍基地

基地司令官：犬走山城大将

所属部隊

- ・メビウス隊四名（初、千代田、加賀、能代）
- ・ガラム隊三名（サイファア、ピクシー、PJ）
- ・ラーズグリース隊（ブレイズ、エッジ、チョッパー、アーチャー、

ソーズマン)

- ・ガルーダ隊二名(タリズマン、シヤムロック)
- ・ウオーウルフ隊四名(ビシヨップ、ガッツ、他二名)
- ・ウィザード隊八名(ジヨシユア他七名)
- ・ソーサラ隊八名(アンソニー他七名)
- ・ちよだ艦載機隊五十六名
- ・ゴルト(現在任務中) 八名
- ・イービス隊(Su-57の部隊) 二名
- ・サヴァー隊(Tu-142MZの部隊) 25名
- ・空中管制機サンフラワー
- ・迎撃機 マジック

所属機

- ・F-115C×4 (ガラム1、ガラム2、能代、初)
- ・F-115E×2 (ガルーダ1、ガルーダ2)
- ・F-115S/MTD×8 (ソーサラ隊)
- ・F-114×6 (ラーズグリーンズ隊、初)
- ・F-116C×2 (ガラム3、初)
- ・F-116XL×4 (ウィザード隊)
- ・F-118C×16 (ウィザード隊、ソーサラ隊)
- ・F-118F×33 (ちよだ艦載機隊、千代田、初)
- ・F-22×6 (ウオーウルフ隊、初、加賀)
- ・YF-23×4 (ウィザード隊)
- ・F-35A×1 (初)
- ・F-35C×25 (ちよだ艦載機隊)
- ・X-02×1 (初)
- ・ADF-01×2 (ブレイズ)
- ・ADFX-02×1 (ガラム2)
- ・CFA-44×2 (初)
- ・fenrir×2 (初)
- ・E-767×1 (サンフラワー)
- ・改E-767『光龍』×1 (マジック)

- ・ A-10×10 (初、ガルーダ、ウォーウルフ)
- ・ AC-130×2 (初)
- ・ B-1B×2 (初)
- ・ B-2×1 (初)
- ・ Tu-160×1 (初)
- ・ Su-33×3 (初)
- ・ Su-47×9 (ゴルト隊、初)
- ・ Su-57×5 (イービス隊、初)
- ・ MIG-1.44×1 (初)
- ・ Tu-142MZ×5 (サヴァー隊)
- ・ Ju-87D-4×2 (初)
- ・ Ju-87D-5×1 (初)
- ・ Ju-87G-2×2 (初)
- ・ シーホーク×3 (初)

所属戦車

- ・ 一〇式戦車×5
- ・ 一三式自走砲×1
- ・ 一五式対空戦車×10
- ・ M1A5×5
- ・ ゲパルト×6
- ・ パンツァーリ-シ×3
- ・ T-90×50
- ・ T-14×50
- ・ ジープ×5
- ・ ハイエース×1
- ・ 自走マトリョーシカ×200

各種説明

- ・ 改ズムウォルト級駆逐艦

ズムウォルト級駆逐艦の初期案の通りのすごい駆逐艦。アスロツクも、艦隊防空もあるんだよ。

・改ジエラルド・R・フォード級正規空母
事実上のジエラルド・R・フォード。

・つねがみ型輸送艦

おおすみ型輸送艦の後継艦。同型艦は7隻存在。

艦型はひゅうが型と似ているが、少し胴が太い。

基準排水量は14550t、満載時は20050t。

全通甲板であるためヘリコプターの運用も可能である。

戦闘員450名、民間人1500名、戦車は最大25両収容できる。

また、自衛用の武装としてVLSセル8セルとCIWS4基を装備している。

七番艦『いとしま』は艦娘母艦に建造後改装されており、内部に艦娘ドックや工廠機能、そして指令艦としての機能を備えている。

・ひるが型補給艦

ましゅう型補給艦の後継艦。同型艦は4隻存在。

ましゅう型をさらに大型化した艦であり、補給機能に関しては搭載量以外に変化は特に無い。搭載量はかなり増えている。

入院設備は強化されており、床数は増えて65床となっている。区分は重傷者用の第一病室が12床、軽症者用の第二病室が44床、女性用または隔離室となる第三病室が9床となっている。

基準排水量は16000t、満載時は29650t。

自衛用の武装としてVLSセル8セルとCIWS8基を装備している。

・Ju-87

名前や形はWW2時のスツーカーだが、エース仕様（IIエースコンバット方式）である。なので高度5000mの水平飛行で2000km/h出たりする。爆弾もたっぷり積めるし、G-2も37mmをガトリングの如く撃ちまくれる。ああ、おそろしい。

・改E-767『光龍』

E-767の上部に高性能対空レーダーと高精度迎撃レーザーを装備した弾道ミサイル迎撃機。

自衛用火器に30mmレールガンを装備している。

・自走マトリョーシカ

ロシア陸軍と柱島の秘密兵器。

その性能は全て秘匿されている。

一説には周辺の物質を強制的に核融合反応を起こさせ、回りのものを消滅させる兵器だという。

柱島に送られたものは初専用の倉庫に厳重に保管されている。

・竜宮城

転生者達が集う施設。柱島の試験スペースの地下に存在する。

潜水艦ドックを持ち、紺碧、旭日艦隊の拠点にもなっている。

さらに、転生者の記憶を取り戻す装置もあるようだ。

…あるのだろうか？

本編

はじまりはじまり／第1話

20XX年。世界中の海は、ハワイを中心として発生した深海棲艦によって制圧され、人類は制海権を失った。

各国は沿岸部を占領され、内陸部へ撤退、又は他国へ脱出し、亡命政府を作り、国の名だけを残していた。(但しアメリカは除く。あいつらはおかしい。)

そんな中日本はというと、ゴジラが来なくなったことをいいことに各地に陸自の駐屯地を増やしゴジラがどこに来てもすぐに大規模の部隊を展開できるようにしたり、海自の港を各地に置いたり、レーダーを増やしたり、メカゴジラをガルーダとともに完全に修理したり、MOGGERAをロマンの元量産したりしたあげく、なんか空から降ってきたマグロ食ってるようなやつを吹き飛ばしたり、銀座に開いたゲートから出てきた異世界人を難なく撃退したあげく異世界とのんびりと外交をしていたりと結構自由に過ごしていた。

が、やはり海洋国家故、深海棲艦の脅威にはさらされた。だが、日本ではほぼ日常茶飯事の襲撃。メーサーやメカゴジラ、MOGGERAそして各地の自衛隊やスパーX3を動員し迎撃を行った。通常兵器は効果のなかったものの、対G兵器は過剰と言えるほどの効果を発揮したため、陸地や人的な被害はほぼなく、領海までは守ることに成功した。しかし、シーレーンの封鎖は深刻な問題となり、空路による輸送が確立するまでは各地で物資不足が進んだ。

深海棲艦の登場から2年。日本、アメリカ、そしてアメリカにて亡命政府を構えていたイギリス、ドイツ、イタリアに、第二次世界大戦時の軍用艦の『記憶』を持つ者が出現した。深海棲艦への対抗策を喉から手が出るほど欲していた各国は、迷わずに『Fleet girls』を実戦へと投入した。しかし日本では、元々対抗策はあり、またその扱いや環境、法整備、『艦娘』を指揮する『提督』の育成、そして艦娘についての研究やその武装の更なる改良の余地の模索などで

実戦への投入は遅れ、投入を開始したのは各国から遅れた二年後であつた。

最初の鎮守府となつたのは横須賀。ここには防衛大学校きつての天才が提督として着任した。ここには『初期艦』と呼ばれる五人も着任し、艦娘としての仕事を横須賀鎮守府提督とともに作り上げていった。

横須賀鎮守府での一年の試験運用の結果、艦娘の兵装の開発に必要な『工廠』、艦娘の装備の修理に特化した施設『入渠ドック』、艦娘の現地への移動に使う輸送艦及び高練度の部隊の空挺による高速展開に用いる輸送機などが必要と言うこと、また艦娘の疲労抜きや休息のために、ある程度の休暇や娯楽施設が必要なことがわかつた。

その情報を元に各地にあつた海自の港を利用して、海自から独立した艦娘部隊を指揮する『大本営』は鎮守府を作成し、艦娘部隊を各地に正式配備していった。

初期の頃には多少国民から反対はあつたものの、それも物資の不足がひどくなるにつれて収まっていた。なお自衛隊は、ゴジラへの対応でかなり手一杯なのに、更に変なの処理まではやってられないから代わってくれるのはうれしい、と初期から賛成していた。当時の防衛大臣が艦娘の電を見て一目惚れしたからだ、という噂はいまだにまことしやかにささやかれてはいるが。

そんなこんなで深海棲艦の襲撃から六年目。山口県に属する柱島に、新しい泊地を作つた。それが柱島泊地である。

そこに、私、犬走山城は提督として着任した。

その頃各鎮守府では北方への迎撃作戦『礼号作戦』が行われており、そんな中での着任はかなり大変であつた。

そんな中で着任し一年半。戦力も充実し、毎日をのんびりと過ごしている。

そんな日々を、色々と紹介しようと思う。

…：台本形式で。

く戦力く

山城「提督、暇です。」

犬城「いや、そう言われても困るよ。もうすぐ大規模作戦なんだから我慢してくれ。」

山城「大規模作戦にしては育成が適当すぎませんか？うちでまともに戦力になる駆逐艦が少なすぎます。」

犬城「うーん、確かに駆逐艦は少ないねえ。戦力に数えれそうなのは9隻しかいないね。」

山城「輸送作戦と札が来たらもう駄目ですよ。」

犬城「んー、でも、駆逐つ子育てる気が起きないんだよねえ。」

山城「大潮ちゃんのとときみたいに3―2―1ブートキャンプでいいじゃないですか。」

犬城「あれ結構ボーキ食うのよ。鉄しかないうちの鎮守府だときついんよ。」

山城「でも駆逐不足は問題です。」

犬城「なんだよねえ。というか、そういうことを言い出したら足りないものだらけだしね。重巡は摩耶と衣笠だよりだし、低速戦艦は長門しか動けないんだよねえ。」

山城「なら育てればいいじゃないですか。」

犬城「うちの低速戦艦役は山城と日向が担ってるからねえ。」

山城「大和型いるのに。」

犬城「航空戦艦になったら…。」

山城「ないですね。」

犬城「まあ、そうなるな。」

山城「でも空母は充分育ってますね。大鷹はまあ仕方ないとして、少し練度が劣るのはアキラと葛城ですか。あと…。」

犬城「赤城だな。空母唯一の40レベル代。」

山城「赤城さんって一人目の戦艦の長門さんと同期でしょう？なんでここまで練度が低いのですか？」

赤城「そうですよ提督！なぜこの一航戦、赤城を使ってくださらないのですか！」モグモグ

犬城「一つ目、出撃すると三分の二は大破して帰ってくるから。二

つ目、当たり前のように銀蠅してるから。OK？」

赤城「いいえ、納得できません！私が出れば加賀さん並の戦果だつて！」

犬城「却下。大人しく寝てろ。」

赤城「そんなあああ！」

バタン

犬城「…平和だな。」

山城「そうですか。」

く主砲く

大和「あの、質問なんですけど！」

長門「んー？なんだー？」

大和「主砲って、どれが一番いいんでしょうか。」

伊勢「そりゃあ貴女の46cm三連装砲でしょ？」

日向「いや、そうだろうか。」

伊勢「え、どういふことよ日向。」

日向「確かに46cm砲は火力においては最高の火力だろう。確かに『強い』。だが、弾丸の互換性等を考えると、正直現地では砲を統一してくれたほうが楽だ。わざわざ二種類の大きさの弾丸をもつてくなんざ無駄だからな。そうなると、35.6cm砲が『良い』のではないだろうか。」

武蔵「ふむ。確かに当時ならそうかもしれんが、今の我々は艦娘だから、別に弾薬の規格なぞないぞ？全員同じだからな。」

日向「む、そういえばそうだったな。やはり当時のことを元に考えてしまうな。直さなければ。」

長門「しかし、そうなると最高火力の46cm砲でいいんじゃないか？」

扶桑「いいえ、違いますよ。」

長門「どう言うことだ？」

扶桑「確かに当時の我々の中では46cm砲が実戦に出た中ではおそらく一番でしょう。しかし、今の時代には更にでかい砲があるんで

す。」

武蔵「な、我々大和型よりもか!？」

扶桑「はい。『日本武尊』という戦艦です。初期及び第一次、第二次改装の時点では51cm三連装砲を積んでいました。初期と第二次改装後は二基、第一次改装後は三基も。」

大和「す、すごいですね。どれ程の大きさなのでしょう。」

扶桑「それが大きさは初期の時点では大和さんより一回り小さいんです。」

大和「え?」

扶桑「ただ、なぜか第一次改装後は40mほど艦が伸びているんですよ。よくわかりません。なにせ秘匿艦でしたから。」

長門「そういえばその艦はいまどこに?」

扶桑「わかりません。公式では既に戦没しているはずなのですが、海自でも深海棲艦との戦いのときに目撃情報が相次いで出ていたりしています。」

長門「そうなのか。だが、その日本武尊の艦装があれば戦局も少しは良くなるかもな!」

大和「そうなんですか。なら、私は提督に51cm三連装砲を積んでもらえるように話してみます!」

犬城「んー?呼んだか?」

大和「あ!提督!私の艦装の砲、話し合って決まりました!」

犬城「ん?あああれか。何になったんだ?」

大和「51cm三連装砲三基で!」

犬城「却下。そんな一品物の砲なんかうちにはありません。」

大和「えー。」

犬城「えー、じゃない。火力がほしいなら46cm三連装砲で我慢してくれ。」

大和「ぶー。はい。」

犬城「51cm三連装砲か。日本武尊の艦装、どこ行ったんだろうなあ。」

くカラオケ大会く

ナツカチャーン

キーゾーイテルワーアナターガーワータシーラーハートノシセン
デーミテールーコートニー

犬城「どうしてこうなった。」

山城「いつの間にかすごい大規模になってますね。海自の方もいま
すねこれ。呉から来られてましたものねえ……。」

衣笠「え、なにこれ。なにこれ！」

犬城「カラオケ大会、らしい。完全に那珂のライブになってるが。」
加賀「……ふむ。彼女しか歌っていないカラオケ大会というのは気に

入りませんね。ちよつと次に入れてきます。」

犬城「お、おう。」

ビスマルク「なによこれ……。」

犬城「大規模なカラオケです。」

ビスマルク「ええ……?」

衣笠「んー、よし!次に入れてくる!」

犬城「……。」

山城「提督、歌いたいんですね?」

犬城「歌いたいけど……、ここまで人がいるとなあ。俺みたいな下手
な人間には厳しいです。」

デデン!

犬城「お、加賀さん始まったな。さすがだな。」

山城「……、勝手に入れてやろうかしら。」

青葉「ていとくうー。がっさ知りませんかあー?」

犬城「……おまえはなんでもう酔ってるんだ?」

青葉「びいるが、美味しかったです。」

犬城「……そか。」

山城「あ、加賀さん終わりましたね。」

青葉「ていとくでもいいですよ。いっしょにのみましょー?」

犬城「ほら、探してた衣笠が歌ってるぞ。」

青葉「…へ？」

キラツ☆

犬城「…上手いな。」

山城「そうね。加賀さん以上かしら。」

青葉「が、がっさつてこんなに歌が上手かったのですか!?あとでインタビューしなければ!」

犬城「…すげえな。」

ビスマルク「…。」

犬城「ん?ビスマルクどした?」

ビスマルク「ちよつといつてくるわ。」

犬城「お、おう。いつてら。」

衣笠『みんな、ありがとー!衣笠で、星間飛行でした!じゃ、次の人に…』

ビスマルク『ちよつと待ったあ!まだ舞台を降りるには早いわ、ガツサ!二人で歌うわよ!』

衣笠『え、ちよ、ビスマルク!』

ビスマルク『衣笠とビスマルクで、ライオン、私たちの歌を聞けえ!』

♪

ワーワー

犬城「おお、あのコンビすげえな。まるでランカとシェリルだ。」

山城「ほら提督、私たちも行きますよ。」

犬城「へ?何処に?」

山城「そりや、舞台にですよ。ほらほら!」

犬城「え、ちよい、まって、まってえええ!」

ズルズル

青葉「一人取り残されてしまいましたあ。こうなりや一人で飲みますかねえ。」

ウワアアア!イイゾー!

衣笠『つ、疲れたわ。』

ビスマルク『お疲れさま!という訳で、衣笠とビスマルクでライオ

ンでした！では、次の方、どうぞ！』

山城『どもどもー！柱島秘書官No. 2の山城です！』

犬城『提督の山城ですー！』

『二人会わせて山城ですー！』

ケツキヨクヤマシロジヤネーカ！アツハツハ

山城『では早速歌わせてもらいます！W山城で、革命デュアリズム！レッツゴー！』

デンセツノアサニ

チカアタコトバ

ワカチアウコエニ

キセキヲテラセ

カクメイヲレッツツシャウト！

カクメイヲレッツツシャウト！

青葉「…結構提督と山城さんも上手いなあ。今度特集でも組んでみますかね。」

この後海自の方々と一緒にJAMプロを歌い続けたそうなの。

くゴジラく

霞「そういえば、よく海自の人がゴジラゴジラ言ってるけど、ゴジラってなんなの？」

犬城「んー、ゴジラはなあ。ま、一言で言えば怪獣だ。最強クラスなの。」

霞「ふーん。強いなの？」

犬城「ああ。正直日本中の自衛隊が集まっても勝てん。」

霞「…へ？深海棲艦を簡単に潰すあの自衛隊が!？」

犬城「ああ。そもそも、自衛隊が深海棲艦に対して使っている兵器は元々そのゴジラへの対抗兵器、対G兵器というものだからな。」

霞「それどんな化け物なのよ…。」

犬城「怪獣だ。一応、今までも迎撃はできているが、いつなにが起るかわからないからな。最近では自衛隊イコール対G部隊みたいな扱いだからな。彼らも大変だよ。」

霞「私たちで何かできないかしら。」

犬城「んー、無理だな。艦娘の兵器じゃゴジラにや効かないし、チヨロチヨロされても自衛隊の邪魔だからな。あっても民間人の避難誘導程度だろうな。」

霞「自衛隊って、すごかったのね…。」

犬城「日本もおかしいがなあ。」

霞「まあ、ねえ。」

オチはない。

第2話

く鉄く

山城「大変です提督、鋼材倉庫が完全に満杯です！」

犬城「はあ!? あそこには大和を500隻も作れる量の鋼材が入りきるようにできてるんだぞ!? んなばかな！」

山城「その大和を500隻も作れる量が貯まってしまったんですよ! どうするんですか!？」

犬城「：んー、とりあえず遠征計画を考え直そう。第二艦隊は引き続きバケツとボーキを集めさせる。第三、第四艦隊は東京へ行くのを一旦止めさせて、第四艦隊は編成を変更、水上機母艦を二隻いれて水上機の前線輸送へ行かせよう。第三艦隊は帰ってきたしだい南西への鼠輸送へ切り替える。」

山城「了解。通達しておきます。」

犬城「：しつかし、まさか鋼材が満杯とはねえ。」

山城「燃料弾薬は最大備蓄の5分の1、ボーキは10分の1しかありませんけどね。これ大規模作戦きついんじゃない？」

犬城「ま、そのときはそのときよ! 今作戦では雲龍が着任してくれるといいな！」

山城「いつまでも601空を零戦に乗っけておくのは勿体無いですものね。」

犬城「だな！」

く古参その1く

山城「そういえば、家の古参ってどんな人たちでしたっけ？」

犬城「んー? 古参? それは初期メンバーか? それとも各艦種の一人目のことか？」

山城「初期メンバーですね。」

犬城「んー、初期はなあ：。」

山城「? なにかあるんですか？」

犬城「異動したやつらがいるんだが、その資料がないんだ。」

山城「え？」

犬城「春の大規模作戦の時の空襲で鎮守府ごと燃えた。」

山城「あー、あのときのですか。大体の施設が吹き飛びましたものね。」

犬城「ああ。だから今となってはわからん。ただ、当時の主力級は全員残っているぞ。」

山城「じゃあ、今残っている人の中の古参メンバーは誰なんですか？」

犬城「んーと、初期艦から順に、『吹雪』『時雨』『神通』『龍田』『鳥海』『千代田』『祥鳳』『千歳』『木曾』『隼鷹』だな。」

山城「へー。意外な人もいますね。」

犬城「へ？そうか？」

山城「ええ。だって、龍田さんとかいつも提督に絡みながらお酒を呑んでるだけじゃないですか。」

犬城「ちゃんと仕事してるが？」

山城「え？いつもお酒呑んでるだけじゃないんですか？」

龍田「あらー？ちよつとそれはひどいんじゃないかしらー？」

山城「へっ!?龍田さん!?!い、いつの間に!。」

龍田「うふふ、ずっと。」

犬城「どこのストーカーだ。というかホントにいつでも近くにいるからこええんだよ龍田よう。ま、龍田は前線や遠征には出ないが、その代わりに新兵装や試作兵装のテストをしてもらってるんだ。」

山城「へー。…あれ？でも軽巡だと装備に限界があるのでは？大口径砲とか。」

犬城「ああ、普通の龍田はそうなんだが、家の龍田はすべての兵装を装備できるんだわ。」

山城「え、それ最強じゃないですか。」

犬城「その代わりに燃費が悪いのと、攻撃に弱いんだわ。うん。」

山城「弱い？どのくらいですか？」

龍田「んー、7.7mm機銃で大破するくらいかしら。」

山城「よわっ!?!」

犬城「ま、その代わり航空機だろうと陸爆だろうと超兵器だろうと扱えるから、大抵は後方支援だな。基地航空隊の管理運営も龍田の仕事だ。」

山城「ああ、だから大規模作戦の間は酒を飲みに来なかったのですね。」

龍田「そーいうことー。」

山城「…ちよつとまっつけてください。さりげなく流れてますけどなんでそんな特殊な能力を持つてるんですか？」

犬城「んー、ま、俗にいうイレギュラーだな。大体艦娘八千人に一人位だそうだ。」

山城「みんなこんな感じなんですか？」

龍田「違うわよー？大体は他の子に比べて劣っていることが多いわ。ただ、その分変なところで優秀だったりもするわ。」

山城「変なところ？」

龍田「そうねえ。とあるところの吹雪は、運動能力が他の子に比べて数段劣っていたわ。ただ、指揮能力や勘がすごかったから、とても活躍したそうよ。」

山城「へえ。」

龍田「他には、運が低い代わりに回避がすごくまい雪風ちゃんとかもいたみたいね。探せば結構いるわよ。」

山城「へー。」

犬城「あ、そうそう。二式水戦をやっと配備出来たから、試験おねがい。」

龍田「わかったわー。じゃねー。」

く古参その2！く

山城「そういえば、この前の古参メンバーの話でいた意外な人のことを聞きたいんですけど。」

犬城「んー？誰のことだ？」

山城「鳥海さんです。」

犬城「んー？そうか？」

山城「ええ。だって鳥海さん、少し前までもう関取かって位コロコロしてたじゃないですか！」

犬城「あー、まあ昔はなあ。『重巡？軽巡？そんなのより戦艦だろ！』って時だったからなあ。最近も、対空の摩耶と衣笠が中心だったしなあ。」

山城「それが古参なんですか…。」

犬城「…ちなみに、あのコロコロから頑張つて痩せたら、バストが5ほど増えたそうだ。」

山城「太りたくはないです。」

犬城「そか。」

鳥海「へぶちっ！…誰でしょう、私の噂をしているのは…。」

く空母ごとの役割く

蒼龍「加賀さーん、私のとこの烈風隊の相手をお願いしますかー？」

加賀「ええ、いいわよ。」

葛城「…あの、瑞鶴先輩。」

瑞鶴「んー？なーにー？」

葛城「なんでみんな、対戦闘機戦演習は加賀さんに、対爆撃機戦演習は蒼龍さんに、対攻撃機戦演習は飛龍さんに頼むんですか？他にも空母は居るのに。」

瑞鶴「それはね、三人とも正規空母だから搭載機数が多いでしょ？」

葛城「それはわかります。でも、それなら瑞鶴先輩や翔鶴さん、それに赤城さんでも良いじゃないですか。」

瑞鶴「そういえばそうね。慣わしみたいなものだったから私は特に疑問に思っていなかったわ。」

葛城「うーん、なんででしょうか。」

瑞鶴「なんでかしらねえ。」

翔鶴「あら、瑞鶴に葛城ちゃん、おはよう。二人とも何をうんうん唸っているの？」

瑞鶴「あ、翔鶴ねえ！おはよ！」

葛城「おはようございます！」

瑞鶴「えつと、なんで対航空機の演習を加賀さんや蒼龍さんと飛龍さんに頼むのかなって。」

翔鶴「ああ、それはね瑞鶴。三人がそのエキスパートだからよ。」

葛城「エキスパート？」

翔鶴「ええ。加賀さんは戦闘機での空中戦が、蒼龍さんは爆撃機での対艦と対地の急降下爆撃が、飛龍さんは攻撃機での対艦雷撃や対地攻撃、水平爆撃が上手なの。」

葛城「んー、でも、翔鶴さんだつて雷撃は上手いじゃないですか。」

翔鶴「ありがとう、葛城ちゃん。でもね、あの三人はただ上手いだけじゃないの。」

葛城「どういうことですか？」

翔鶴「あの三人はね、演習相手の練度に合わせて強さを変えてくれるのよ。」

葛城「え、どの程度にですか？」

翔鶴「例えば加賀さんならキルレシオが必ず最初に決まった値になるそうだし、蒼龍さんと飛龍さんは命中率を5%単位で変えられるそうよ。」

瑞鶴「え、でも実戦だと結構はずしてない？」

翔鶴「加賀さん曰く、『万全の状態で挑める演習と、なにが起こるかわからない実戦とは全く違うから。』だそうよ。」

瑞鶴「なによその言い訳。なら加賀さんは演習ならキルレシオ50対0とかできるのかしら。」

翔鶴「残念だけど瑞鶴。それなら昔やったわ。」

瑞鶴「…へ？」

翔鶴「二人が着任する前にあった、春の大規模作戦。その作戦の前に、空母の練度上げのために、提督が『大規模空中戦演習』を行ったの。この演習では、空母は祥鳳さん以外が艦戦を目一杯に積んで、そ

の子達を使ってバトルロイヤル形式で空中戦をして、最終的に生き残った機体の母艦は優勝、というルールだったわ。」

葛城「なんで祥鳳さんは出なかつたんですか？」

翔鶴「当時、秘書艦を代われる人が居なかつたのよ。」

葛城「え、山城さんは？」

翔鶴「あの頃は不幸に見舞われ過ぎたせいで引きこもってたわ。」

瑞鶴「なにそれ！詳しく聞きたいかも！」

翔鶴「やめてあげてちょうだい。この話は山城さんの心の傷が開くから。」

瑞鶴「ちえ。あ、その演習はどうなったの？」

翔鶴「そのころから加賀さんは空中戦が強かつたから、みなまずは加賀さんの機体を落とそうとしたの。勿論私もそうしたわ。だけど、加賀さんの子達はそれらをことごとく撃ち落として、なんと最終的にキルレシオ653対0という恐ろしい結果を残して、優勝したの。」

葛城「へー！すごいですね！」

瑞鶴「でもいまは私達もいるし！きつと加賀さんだつて倒せるはずよ！」

加賀「あら、そう。でも、そういうことを言うのは貴女自身の強さを引き出せるようになってからにしてください。貴女はその三つ全ての才能も延び白もそして貴女だけの強さもあるのだから。」

瑞鶴「…へ、あ、はい！」

葛城「やりましたね瑞鶴先輩！加賀さんに認めてもらえましたよ！」

瑞鶴「う、うん。えへへ。」

加賀「ま、大規模作戦の前ですから提督に提案すれば『第二回大規模空中戦演習』もあり得るかもしれないですね。提案しましょうか？」

蒼龍「あ、なら大規模急降下爆撃演習もやりたい！」

加賀「それは貴女が命中率100%を出して終わりでしょうに。」

蒼龍「いやいや。外すかもしれないじゃん？」

瑞鶴「あ、加賀さん！空中戦演習お願いします！」

加賀「ええ、いいわよ。全力で来なさい。」
瑞鶴「はい！」

蒼龍「でもさ、今大規模空中戦演習をしてもどうせ加賀さんがキル
レシオ1025対0とか叩き出すでしょ。」

翔鶴「いや、今なら祥鳳さんが出れますから1073対1くらいは
…。」

蒼龍「その時点で意味無いじゃん。」

葛城「逆にその状況で1とれる祥鳳さんって何者なんですか!？」

蒼龍「私と加賀さんと飛龍の強みの八割をそれぞれ持った猛者だ
ね。特に艦爆の扱いは私に迫るものがあるね。あれは怖い。」

葛城「こわっ！」

第3話

く 駆逐く

朝潮「提督、これは…戦車ですか？」

犬城「ああ。旧西ドイツのカノーネンヤークトパンツァー4―5だ。駆逐戦車だな。」

朝潮「これも駆逐なんですね。どんな活躍をしたんですか？」

犬城「んー、冷戦期の西ドイツの防衛を担ったな。といつても、戦闘はなかったと思うが。」

朝潮「というかなんでこんなものを？」

犬城「知り合いのドイツの人がくれたのよ。何かに役立つかもしれないって。」

朝潮「…どうするですか？これ。」

犬城「…砲を外してヤグアルーにでも改造しようか。正直なところ、戦車は間に合ってる。…ランドモゲラーで。」

朝潮「でも、普通の戦車もいていいんじゃないでしょうか？」

犬城「ここに攻めてくるのは深海棲艦だからねえ。こいつの砲じゃ効かんのよ。」

龍田「あらあらあ。いい戦車じゃない。どうしたのこれ？」

犬城「ドイツからやってきた。ヤグアルーにでもしようと。」

龍田「あら。だったら技研に送ってあげれば？艦娘の揚陸兵器の強化に戦車が欲しいって言ってたから。」

犬城「上陸戦に駆逐戦車とか要らんだろ…。ま、送ってやるかな。」

龍田「じゃあ、代わりにA―10もらっておいてー？あれ一回乗ってみたいのよー。」

犬城「…今度乗つけてやる。」

龍田「やったー♪」

朝潮「…あれ？もらうんじゃないんでしょうか。」

く 試作兵装そのいちく

明石「提督！、また工廠になんか変なのが届きましたよー！」

犬城「んー？わかった、すぐいく。」

山城「なんですか変なのって。」

犬城「また技研だろ。」

山城「技研？」

犬城「ありや、知らんのか？」

山城「ええ。」

犬城「ま、移動しながら説明する。行くぞ。」

山城「はい。」

山城「で、技研って？」

犬城「技研は、『新技術研究開発部門』の略で、艦娘の兵装や対G兵器の開発を担っていて、日本の国防の要でもあるな。」

山城「へー。」

犬城「艦娘兵装はその艦娘部門が作っているんだ。んで、今回うちテストしてもらいに来たってことだろうな。」

山城「あれ？でもなんでこんな末端にそんな大事なことを？」

犬城「龍田がいるからな。あいつならほぼ全ての装備の試験ができる。」

山城「なるほど。」

犬城「お、ついたついた。んで…これか。」

山城「これは…砲弾ですね。それも35.6cm砲の。」

犬城「んー、そうなるよ、あれかな？」

龍田「多分その予想はあってるわー。」

犬城「やっぱり、『新三八弾』か。」

龍田「ええ。といつても、まだ試作の試作だから実戦配備はまだまだ先よ。」

山城「しんさんばちだん？なんですかそれは。」

比叡「今新三八弾って言いましたか!？」

山城「え、ええ。どうしたのよ比叡。」

比叡「うっわー！懐かしい！昔は高杉長官と一緒にこれで敵を叩き

落としたものです！」

山城「…へ？そんな兵器知らないわよ？どういうことよ提督。」

犬城「あー、比叡も、例のイレギュラーなんだ。それも特殊な。」

山城「…またですか。」

比叡「あー、記憶の話ですね？私は、どうもこの世界とはまた別の日本の『比叡』の記憶を持っているんです。なので、色々と皆さんとは違ったんです。」

山城「…そう。もうなんかわけわからないわ。」

龍田「ま、ちよつとテストをしてくるわー。」

比叡「あ、私も手伝います！」

く提督の秘密く

青葉「…はい、青葉です。現在私は、鎮守府横の空自さんの格納庫の方に忍び込んでいます。」

青葉「…今回、『空自の格納庫のなかにいくつかよその格納庫がひっそり紛れている』という情報を得たので、調べに来てみました。」

青葉「…しかし、どこまで行ってもイーグルばかりです。つまらないですね…あれ？」

青葉「…あれは提督ですね。あの格納庫から出てきました。なぜでしょう。」

青葉「…まあ、見てみましょうか。おや。かなり大きい格納庫がここから五つほど続いています。では中を拝見…。」

青葉「…なんとということでしょう。ここは航空機の博物館でしょうか。何機もの軍用機が、多国籍に渡って格納してあります。」

青葉「…A—10に、F—22に、F A—18に、F—35に、M I G—1.44に、T—50に、あれはS u—47!? つ、次の格納庫を…。」

青葉「こ、これはB—52!? しかもT u—160まで!じゃあ次の格納庫は…?」

青葉「B—2!?なんでこんなものが!ああもう!次です!」

青葉「A C—130が三機も!こっわ!」

青葉「そして最後は…、うわあ。A—10がいっぱい。地上目標を絶対に殺すつもりですね。」

「貴様…そこでなにをしている!」

青葉「ひえっ!見つかってしまいました!逃げます!」

ダダダダダダ

マテエ!

青葉「…ふう。なんとか逃げ切れました。いやあ、いいネタがとれました。」

犬城「あれ、青葉じゃねえか。どした?」

青葉「あ、提督!ちよつと取材に行つてました!!」

犬城「ふーん。どんなの撮れたか見せてくれよ!」

青葉「駄目です!いくら提督でもそれは!」

犬城「うーん、そっか。なら仕方ない。」

青葉「わかつてくれて嬉しいです!」

犬城「…ほれ、青葉。こつち見て!」

青葉「はい?」

パシヤ

ピカツ

青葉「きやつ…」

バタツ

衣笠「…て、お…て!起きて!」

青葉「むにゃ…あれ?おはようございませう、がっさ。」

衣笠「なにがおはようよ!執務室で提督に延々と質問を浴びせ続けたあげく仮眠室でぐっすり熟睡するなんてなに考えてるのよ!それにもう夕方よ!」

青葉「あー、仮眠室、かなり寝心地いいんですよ。」

衣笠「言い分け無用!というか一日中寝てるなんて言語道断よ!部

屋に運んできた提督も苦笑いだったわよ！」

青葉「うー、がっさごめんなさいー！」

衣笠「謝るのは私じゃなくて提督でしょ！謝ってらっしゃいー！」
青葉「はーい。」

ガチャパタン

衣笠「はあ、全く。提督を怒らせるなんて滅多におこらないことをやらかしちやつて。もうやだ。」

空自さんイ「にしてもさ、なんで犬走さんはこんなに軍用機を持つてるんだ？」

空自さんロ「たしか、『部下だけに戦わせるのは嫌だからな。』って言ってたな。」

空自さんハ「でもちよつと過剰戦力じゃないか？特にA―10とか多すぎるだろ。なんだ？敵地でも耕すのか？」

空自さんイ「A―10式農業かw」

空自さんロ「まああの人いろんなこと繋がりがあからな。敵に回したくないな。」

空自さんイ「犬走さん空自の元エースパイロットって話もあるしな。俺らがF―22に乗って挑んでもA―10で返り討ちにされるぜ。きつと。」

空自さんハ「おお、怖い怖い。」

※もちろんリアルの筆者はそんなことはありません。

くカレー)

山城「うん。やっぱり、カレーは美味しいわね。」

犬城「うえーい。やつと晩飯だー。」

山城「あら、提督。もう間宮さんはお休みですから、自分でよそつてくださいね。」

犬城「うい。」

ガラガラ

山城「？提督、何してるの？」

犬城「んー？チーズかけてんの。」

山城「へー。チーズですか。」

犬城「ん。結構うまいぞ。ここに卵をいれると味がまるやかめになる。」

山城「そういうのもあるんですね。」

犬城「ま、好みの問題だから他人にはあまり言えないし、見せもしないけどな。」

山城「あら？じゃあ私には見せてもいいんですか？」

犬城「ま、いいだろ。山城だし。」

山城「ふふ、そうですか。」

犬城「いただきます。ん、やっぱうまい。」

「7砲身30cmガトリング砲？」

龍田「提督、これって…。」

犬城「…だねえ。」

金剛「あ！テイトクウ！どーしたんですか!？」

榛名「こんにちは、提督。どうなさいましたか？」

犬城「おお、金剛に榛名。いや、試作兵装が届いたんだけどさ…。」

金剛「試作兵装？なにに？『7砲身30cmガトリング砲』…？
なんというか、強そうデスネ！」

榛名「へえ。七砲身ガトリング、それも30ですか。まるでA—10のアヴェンジャーみたいですね！」

犬城「残念だが榛名。多分アヴェンジャーそのものだ。」

榛名「…へ!？」

犬城「技研のやつらとんだけA—10好きなんだよ…。家に何機も
寄越してくるしよ…。」

龍田「確かにロマンはわかるんだけどねえ。本物の艦ならともかく、人間の形をした私達にこれは撃てないわねえ。」

金剛「これが試作兵装…。おお、軽いデスネ。」

犬城「…は？軽い？あれは全部まとめたら2t近くある代物だぞ！？」

金剛「よし！撃ってみましょ！ほら、龍田！テイトク！榛名！行きますよ！」

犬城「えー、30cm砲とのことなので目標の固さは重巡レベルにしておく。」

金剛「リョーカイデス！さあ！ぶっぱなしますよ！」

犬城「開始！」

金剛「ひゃっはー！」

ボン ボン ボン ボン

ドン ドン ドン ドン

犬城「…。」

龍田「…。」

榛名「？どうされました？ふたりとも。」

犬城「金剛。中止だ。」

金剛「えー？なんでデスカ！」

犬城「こんなのはアヴェンジャーじゃねえ！ただの砲だ！」

龍田「ええそうよ！アヴェンジャーはあの発砲音と、あの着弾音がいいんでしよう！こんな音じゃあ満足できないわ！それに火力も足りないわ！人間ぐらい霧にできなきゃ！こんなんじゃ殺せもしないわ！」

犬城「こいつは送り返して、ちゃんとアヴェンジャーにしてこいつて言ってくる。」

龍田「ええ。お願い。」

金剛「ええ…？」

榛名「アヴェンジャー好き多いですねえ。」

金剛「榛名。現実逃避してる場合では無いネ。というかこれが現実ってことでしょうか。頑張れ。」

榛名「…はい。榛名はアヴェンジャー狂でも大丈夫です！」

金剛「その意気ネ！」

第4話

「七駆とのんびり。」

曙「…ねえ、クソ提督」

潮「曙ちゃん。」

曙「…ねえ、提督。なんで急に私達にアイスをおごってくれたの？」

犬城「んー、なんとなく。」

漣「はっ！わかりましたよ!?!この後四人ともまとめてさらわれて、一人づつねつとりと…」

犬城「岩山！両斬波あ！」

漣「むぎゆ!?!」

朧「critical。1024ダメージ。漣轟沈。」

漣「勝手に殺すな！」

犬城「はあ。そう言うことは公共の場で言うもんじゃありません。二度と連れてこんぞ。」

漣「すいませんでした。」

犬城「ま、本当に何となく、たまたまお前らがいたからついででつれてきたんだ。」

潮「暑かったですし、ちようどよかったです。」

曙「…そうね。ありがと、提督。」

朧「おいしい。」

犬城「そうか。ならよかった。」

鎮守府は今日も平和です。

「今日の秘書艦」

犬城「大井っちー。今日山城休みだから秘書艦お願いー。」

大井「いいですけどその代わりそのぐでぐでするのを直してください。普段みたいにもっとピシツとしてください。」

犬城「やーだー。気を抜けるのは大井っちと二人きりの時ぐらいだ

もーん。」

大井「はあ：どうしてこうなったんでしょう。」

犬城「んー、大井はちよつと知りすぎてるからねえ。」

大井「提督が隠していることが多すぎるんです。」

犬城「そうかなー？あははははは。」

大井「ほんと、なんでそんなに隠し事が多いんですか？皆を信用していないわけではないでしょうに。」

犬城「うーん、今のぐでぐでは、皆はそんな提督を望んではないんだろうと考えて隠してた。」

大井「たまたま私が見てしまったのがきっかけでこうなったわけですか。不幸ですね。」

犬城「一つでも私の事を多く知ろうとしている連中からすればとてもでかい情報だろうけどねえ。」

大井「で、あのしまつてある『羽』はいったい？」

犬城「んー、あれについてはあまり話したくないんだけどなあ。」

大井「そうなんですか。ならまあ、いいです。」

犬城「そか。よし！んじやあぐでぐでと仕事を進めますかね！」

大井「やる気があるのか無いのかはつきりしてください。」

犬城「50：50ぐらいかな。」

大井「そうですね。」

コンコン

霞「第三艦隊旗艦、霞です。遠征の報告に来ました。」

犬城「入れ。」ピシッ

霞「失礼します。」

犬城「北方への輸送ご苦労だった。あっちの様子はどうかだった？」

霞「少々敵の偵察機が多かった気がするわ。多分、また敵の空母が集まりつつあるのかもしれないわ。」

犬城「わかった。ありがとう。」

霞「これが報告書よ。」

犬城「お疲れさま。第三艦隊は今日明日は休みでいいぞ。」

霞「了解。では失礼するわ。」

犬城「おう。」

犬城「…ふいー。」グデー

大井「戻るのが早すぎます。あと30時間はもたせてください。」

犬城「いいじゃん今ぐらい…。常に仮面を被ってるようなものなんだよい。というか大井つちと二人きりの時間は休みの無い俺にとっての休暇のようなものなんだー。満喫させてくれー。」

大井「はあ。ならいつそ私も気を抜いてぐでぐでします。二人でぐでぐです。」

犬城「おお、いいねえ。ぐでぐでとぐでぐでぐでぐでぐでぐでぐでぐでなー。」

大井「グデー

犬城「グデー

コンコン

加賀「提督。加賀です。」

犬城「入れ。」ピシッ

加賀「失礼します。」

ガチャ パタン

大井「あれ、加賀さんは今日はお休みのはずでは？」ピシッ

加賀「はい。ただ話がありました。」

犬城「話？なんだ、不満があつたならもつと早くに言ってくれれば改善したのに。」

加賀「いえ、違います。第二回大規模空中戦演習の提案に来ました。瑞鶴達話しているのを聞いて懐かしく思ったので。」

犬城「ふむ。確かにいいかもしれんな。よし、こちらで計画を練っておく。草案ができたら意見を聞きに行く。」

加賀「わかりました。では失礼します。」

ガチャパタン

犬城「…ふいー。」グデー

大井「…うなー。」グデー

大井「ああ、たしかにこれは少し気持ちいいですね。気を張っていった後の脱力。」グデグデー

犬城「分かってくれて嬉しいよ大井っちー。」グツデグデー
ぐでぐでと一日は過ぎていきましたとき。

く会議く

祥鳳「さて、それでは『第1回提督情報交換大会議』を始めたいと思います。」

霞「いや、なにやってんのよケツコン艦。」

祥鳳「提督曰くケツコンカツコカリは今まで鎮守府を支えてきたことの功績を讃えて贈るものだとのことです。愛は完全に確認できていません。」

朝潮「つまり、ケツコン艦じゃなくても妻ポジ嫁ポジに入ることができる、ということですか。」

祥鳳「そういうことです。なお今回の会議は、提督に関する情報の共有、及び更なる情報を引き出すための今後の行動を決めるものです。では欠席者の報告をお願いします。」

扶桑「山城が曙ちゃんと朧ちゃんを連れて遊びにいったわ。」

潮「野球を見に行くって言ってました。多分カープの試合だと思いません。」

北上「大井っちが提督室に行ってから帰ってきてないよー。」

加賀「大井さんなら秘書艦をやっていました。」

北上「あ、やっぱり？結構大井っち秘書艦やってるんだよね。」

天龍「龍田は陸攻の整備に行つたぞ。あと、木曾は龍田に連れていかれてた。」

青葉「がっさが胃痛で休みです。」

荒潮「大潮ちゃんと霰ちゃんはどっかへ行ってしまったわー。」

伊勢「日向は広島に遊びに行つたよー。」

鳥海「摩耶は蒼龍さんと対空演習に行きました。」

千歳「千代田は買い物に行つたわ。」

金剛「比叡は龍田さんに頼まれた兵装試験をやつてマース！」

祥鳳「わかりました。では早速はじめていきましょう。なにか、提督に関する情報、なんでもいいです。」

榛名「はい。提督は、GAU-8 アヴエンジャーが好きなようです。」

大和「アヴエンジャーというと、あのアメリカの雷撃機ですか？」
榛名「いいえ、アメリカのジェット攻撃機であるA-10に積んであるガトリング砲です。提督曰く、『アヴエンジャーはあの火力がいのよ、火力が。』とのことでした。」

朝潮「あ、そういえば、不確定な情報ではあるんですけど、いいですか？」

祥鳳「ええ。いいですよ。」

朝潮「どうも提督は、そのA-10を所持しているようです。」

金剛「その情報はどこから？」

朝潮「どこではなく、言動から何となく感じたことではあるんですが、龍田さんが提督に、『技研からA-10をもらつておいて、あれに一度乗つてみたい。』という話への返答に、『今度乗つけてやる。』と返したんですよ。だからもしかしたら持つてるのではと。」

鳥海「確かに変な返答ですが、もしかしたら借りるあてがあつたのかもしれないね。どちらにせよ証拠がないのでなんとも。」

鳳翔「あ、そういえば、この前のカレーの日、提督は、間宮さん達がもうお休みになっていたので自分でカレーをよそつたそうなのですが、次の日に間宮さんと冷蔵庫の中身を確認したところ、りんご10個、食べるラー油一瓶、冷凍ご飯3合分、あとチーズが少々無くなっていました。提督が食べたものも含まれているかもしれません。」

秋雲「そういえば、提督は私達が見てない時はとでもぐでぐでしてるとつていう噂を聞いたことがあるよ。」

祥鳳「まさか。一度も見たことはありませんよ?。」

秋雲「ありや、祥鳳さんが見たことないなら嘘情報かなあ。」

青葉「あ、そういえばちよつと前に、『もしケツコンカツコマジをす

るなら誰を選ぶか』って聞いたことがあったんですけど、そのときは候補ならって教えてくれました。」

榛名「だ、誰でしたか!？」

青葉「えっと、大井、山城、龍田、衣笠、祥鳳、加賀、那珂、能代、千代田、伊14、比叡、龍驤、五十鈴で、将来も含めていいなら隴、霞、曙、神風、磯波、照月、野分、卯月、荒潮。それと、これとは別に『あと大潮だな。大潮は将来別嬪さんになる。』とのコメントもありました。」

千歳「え、これもう絞られてるってことですよね。」

青葉「いえ、この後に『こいつらならなんだかんだでいい妻になれると思う。俺以外の男んところでもな。もちろん他のもいい子ばっかだからな、誰でも十分すぎると思う。あと俺だと、正直場の雰囲気は流されるから状況を作って告白とかすりや流れるかもしれんな。』と笑いながら言っていました。」

鳥海「うーん、社交辞令的な発言なのか、それとも本心なのかかわかりませんね。本心ならまだ可能性はありますが…。」

青葉「結構提督は取材には正直に答えてくれますから、多分本心だとは思いますが。」

川内「はいはい！提督は竹本泉っていう漫画家さんが好きみたいだよ。」

秋雲「ほう。ソースは?。」

川内「私は醤油が好き。んで根拠は、この前提督の私室に忍び込んだら、本棚にその竹本泉さんの漫画がびっしりあったの。ちなみに少女漫画みたい。ちよつと違和感はあるけど。」

秋雲「なんだって！（宝塚口調）」

川内「どうしたの急に。」

秋雲「なにかが降りてきました。」

祥鳳「さて、他にありますか?。」

……

祥鳳「無さそうですね。では今後の方針を。」

愛宕「はい。提督がR—18な事に興味があるのか気になる

わー。出来るならどういふ趣向なのかもー。」

秋雲「あ、じゃああたしが聞いてみるよ。今度の同人誌のネタが無
いとか理由つけて。」

愛宕「あら、じゃあお願いねー。」

加賀「知りたいことと言えば、提督の趣味ではないですか？どうも
なんというか、私たちは提督の公私の公しか見ていないような気がし
ます。」

青葉「あ、なら私が取材してみます！」

川内「私は適当に忍び込んでおくよ。」

祥鳳「では、そういうことで、今回の会議は終わりにしたいと思
います。では、お疲れさまでした。」

犬城「あ、ねこめの四巻がいつのまにかでてる。買いにいこうか
な。」

大井「ああ、竹本泉さんの？」

犬城「そうそう。竹本泉さんの漫画は読んで楽しいし何より飽き
ない。」

大井「あのふわふわした感じがいいんですよね。」

犬城「わかってくれるか。流石だ大井っち。」

大井「勿論です。私ですから。」

犬城・大井「あははははは。」

く怪談く

臃「そこにはなんと…その女性がいたのよ。」

潮「ひやあああああああ!？」

臃「はい、おしまい。やっぱ怪談はたのしいね。」

漣「おーこわ。じゃ、ラストはご主人様だね！」

犬城「んー、そうだな。じゃあ、あの話にしよう。その名も、『わん
わんらんど』。」

曙「あれ？そんな怖い話じゃ無さそうね。」

潮「よ、よかった…。」

犬城「んじゃ、はじめるぞ。」

少し昔、あるところに各地の不思議スポットなんかを調査して回っている男がいた。

その男は、こんな話がある町で聞いた。

『入ると誰も帰ってこない集合住宅のメンテナンスハッチがある』と。その男はそれに興味を持ち、大家さんに許可をもらって調査の記録のためのボイスレコーダーを持ってそこへ入った。

『…なぜか俺は少し古い店のなかに入った。』

店のなかには棚と、檻がいくつか並んでいる。だが、棚はほぼ割られ、檻は全て蓋が開いているな。

窓の外は田舎で、草がぼうぼうと生えた庭と畑、そして錆び付いた『わんわんらんど』とかかれたポールぐらいしか特に無いな。

二階へ続く階段をみつけた。

階段を上ると、そこには…

犬がいた

いや、犬じゃない

犬がこつちに来た

いや、あれは犬じゃない

犬から逃げる

犬じゃない

誰かたちが歌う

ワンワンワン

ワンワンワン

ワンワンワワン

ワンワ

ンワン

僕らは イヌだぞ

元気だぞ

檻の中には 戻らない

僕らは イヌだぞ

元気だぞ

不幸はどつかに 飛ん

でった

僕らは イヌだぞ

元気だぞ

幸せいっぱい

イヌだか

ら

ワンワンワン

ワンワンワン

ワンワンワワン

ワンワ

犬城「さあ。まだ判明していないな。」

漣「え、『判明』?」

犬城「そういえば家つてけっこうメンテナンスハッチあるよな。」

隴「ちよ、提督?」

曙「いやいや、まさかね。ない、わよね?」

犬城「ははははは。」

漣「もうハッチに入れないわこれ。」

犬城「はっはっはっは。あ、わんこ。」

隴・漣・曙「「ひやああああああ!?!」」

犬城「冗談だ…あれ?」

漣「むきゅ…。」

曙「にゅー…。」

隴「」

犬城「…なんてこった。というかにゅーってなんだ?」

く仮面ライダーごっこく

犬城「は?仮面ライダーごっこ?」

扶桑「はい。最初は長門さんと陸奥さんを巻き込んだ駆逐の子達がやるだけだったんですけど、いつの間にかこんなに大規模になって、ならいつそ提督も誘おう、と。」

大井「面白そうですね。」

犬城「ふーん。どんなもんなんだ?」

扶桑「正義と悪に別れて、団体で戦う感じですよ。例えるならライダー大戦のわちゃわちゃですね。艦装の召喚機能を使って明石さんの作った特製スーツを呼び出して変身して、わちゃわちゃって感じですよ。」

犬城「ありや、明石も似たようなの作ってたのか。」ボソツ

扶桑「合計二回行われて、二回目はライダーと怪人を入れ替わる感じですよ。」

犬城「よし!面白そうだし参加しよう!大井はどうする?」

大井「勿論参加します。で、私たちは最初はどっちですか?」

扶桑「ライダーですね。開始は正午だそうです。」

犬城「了解。適当に乱入するよ。」

扶桑「わかりました。では失礼しますね。」

ガチャパタン

犬城「おう。」

大井「あれ、でも私たちそんなスーツなんて持ってませんよ?」

犬城「それなら問題ないよん。実は似たようなのを作っているのさ。しかも人間でも使えるやつを。」

大井「え、なにそれすごい。」

犬城「ま、やるなら派手にやろうか!一回目は…で、二回目は…で行こう。」

大井「確かにそれは面白そうですね。」

犬城「さて、では始まるのを待ちますかね。」

睦月「…提督、こないな!」

如月「…そうね。」

加賀「…時間よ。」

カチャ カチャ カチャ カチャ…

龍鳳「この、足音は…!」

秋月「…」

島風「シャドームーン!」

睦月「くそっ!変身!」

Open up

如月「最初からラスボスね!」

スリ…ツ…ワン

如月「変身!」

如月「宇宙…キタ…!」

加賀「変身!」

h e n s h i n

ウオオオ

犬城「お、始まったな。つて、あれはシャドームーンか。いいねいね。」

大井「ピンチになるまで現れないってどうなんですか…？ま、面白いで参加しますけど。」

犬城「のんびりのんびり。」

オータムーン「ふん！」

睦月「うわあああ！」

Limit break!

如月「うおおお！ライダーロケットドリルキイイク！」

加賀「クロックアップ！」

Clock up

1：2：3：

加賀「ライダーキック！」

Rider kick

加賀「うおりやああ！」

オータムーン「シャドーセイバー！ジョアア！」

加賀みん「ぐああ！」

Clock over

如月「きやあああああ！」

オータムーン「ふん。ライダーなど口ほどにもないな。」

島風「くそ！誰か、誰か！」

ザッザッザッザッ：

島風「あ、あれは…！」

加賀みん「提督！それに大井さん！」

犬城「待たせたな。」

大井「遅れたわ。さあ、いくわよ山城！」

犬城「わかった、大井！」

犬城「変：身！」

キユイイイイイン

ギチギチギチギチ
シュインシュイン

大井「変……身！」

犬城「俺は太陽の子！仮面ライダーBlack！RX！」

大井「仮面ライダーBlack！」

龍鳳「あ、勝ったわ。」

オータムーン「何!?ブラックサンが二人だと!？」

犬城「いくら信彦であつても、鎮守府の平和を乱すのならば容赦はせん！」

大井「行くぞ！」

(地面叩き)

犬城「トウア！」

大井「キングストーンフラッシュ！」

オータムーン「くっ、シャドービーム！」

ドカーン

犬城「トウア！」

チョップ

オータムーン「ぐあああ！」

犬城「よし、行くぞBlack！」

大井「ああ！」

犬城・大井「ライダーダブルキック！」

オータムーン「ぐあああああ！」

犬城「止めだ！リボルケイン！」

バチバチバチバチ

オータムーン「ぐあああああ…、流石だ、ブラックサン…。」

一欠

ドカアアアアン

放送「あー、あー。ただいま怪人側が降参しましたのでライダー側の勝利となります。」

睦月「ええ…。」

秋月「いやあ、流石に二人がかりはどうしようもないですね。」

犬城「まあ、そうなるな。」

大井「流石に大人げなかったかしら。ハイパームテキとパーフェクトノックアウトの方が良かったかも。」

犬城「どちらにせよあれだな。」

大井「まあ、怪人のはそこまで強くないからなんとかなるわよ。」

秋月「そうですかねえ？」

この後ウルフオルフェノクとホースオルフェノクに変身して、大暴れしたそうなの。

なに？手抜き？気のせいだ。

第5話 千代田ばっか。

く千代田と まえのひく

犬城「休暇？俺がか？」

山城「ええ。たまには休むことも大切ですよ？」

大井「執務の方は私たち秘書艦sがやつとくから、来週一週間のんびりしてらっしゃい。」

犬城「いや、一週間も急な休暇は困る。やることない。」

那珂「じゃあカラオケでも行ってくればー？」

千代田「失礼しまーす。提督ー、休暇の申請に来たー。」

犬城「休暇か。いつからだ？」

千代田「来週いっぱい。ちよつと旅行にー。」

犬城「へえ、いいな。俺も来週まるまる休暇にされてしまったからな。何をするか迷ってるんだわ。」

千代田「え、提督も来週休暇なの？」

犬城「ああ。」

千代田「なにをするの？」

犬城「うーん、自室に引きこもって漫画読んだりゲームしたりかな。『よみきりもの』をまとめて読んだり、あとメタルマックス4もやるかねえ。」

千代田「要するに未定？」

犬城「そういうこつた。」

千代田「ふーん。あ！じゃあ一緒に旅行行かない？」

犬城「え、でも旅館とかもう遅いだろ？」

千代田「いやー、元々は千歳お姉と一緒にいくはずだったんだけど、なんかその期間の水曜日に好きな芸人さんの講演があるから行ってけないって。だから、ちゃんと二人分あるから問題ないよ！」

犬城「ほう。…よし、ならその旅行にお供させてもらおうかな。」

千代田「やったー！提督と二人で旅行くよ。」

犬城「んで、何処に行くんだ？」

千代田「首都圏！」

犬城「何てアバウトな。」

千代田「一週間かけて色々回るの。東京の方はすごいからね！」

犬城「わかった。じゃ、準備しておくよ。来週の月曜朝何時だ？」

千代田「えつと、朝の6時に家の飛行場。そこから9時に出るリムジンバスで福山駅まで行って、11時10分発の新幹線で東京まで行くわ。で、ホテルはなんと帝国ホテル！一週間ここを中心にいろんなところを適当に見ていくよ。」

犬城「よくとれたな。」

千代田「頑張ったからね。」

犬城「そか。」

千代田「ま、そんな感じ。にしても提督と一緒に。楽しめそう！」

山城「…パルツ」

大井「まあ千代ちゃんだしあれなことは起きないわよ。落ち着きなさい山城。」

那珂「提督が楽しめるならいいじゃん？」

山城「そうね。…そういえば祥鳳さんはどうしたのかしら。」

千代田「え、祥鳳さんならさつき食堂にいたよ？トンカツほおばってた。」

山城「祥鳳さん…。」

犬城「あ、そういえば飛行機はとってあるのか？」

千代田「…あ。」

犬城「用意しておくから、安心しろ。ちょうどいいしな。千代田、飛行機の操縦経験は？」

千代田「一応複葉機も単葉機もターボプロップも操縦出来るよ。流石に正規パイロット並みではないけど。」

犬城「なら大丈夫か。んじゃ、当日はC-130で行くぞ。」

千代田「え？」

犬城「特殊仕様で操縦が2人のみのC-130が家の飛行場にあるから、それで行く。んで、一週間ほど荷物を積み込むために空港に置いておいて、最後は乗って帰る。どうだ、完璧だろ？」

千代田「まあ、うん？うん！」

犬城「よつしや。んじゃ、そういうことで。あ、山城。ちよつと散歩に行ってくる。」

山城「はいはい。暗くなる前に帰ってきてくださいね。」

犬城「うーい。」

ガチャパタン

犬城「さて、あれの整備でもしますかねえ。」

くお風呂く

《鎮守府 お風呂 露天》

犬城「ヤーヤーヤーヤーヤーヤー♪」

ガラツ

大井「あら。やっぱり居たわね。」

千代田「あ、ほんとだ。提督ー♪」

犬城「大井に千代田…。おまえらな、俺が風呂入ってるのをわかって入ってくるのもういいにしても、せめて前ぐらい隠せよ…。」

大井「そんなの今更でしょうに。」

千代田「それにどうせすぐ取るんだから関係ないよ?」

犬城「もういいよ…。」

大井「というか、女性が風呂に入ってきて逃げも狼狽えもしない提督も十分あれよ。少しぐらい変な反応してくれてもいいのに。」

犬城「ここで山城が入ってくるとかだったらビビるが、おまえらとは何度も入ってるしなあ。」

千代田「でも、あの空襲でお風呂が吹き飛ばなかったらこんな状況なかったわね。そう考えるとよかったかも。」

犬城「いや、普通は混浴なんざしないだろ…。あの時は仕方なかったけど。」

大井「でも、いま二人の美女とお風呂に入っているのに。なーんもないの?」

犬城「流石になれた。」

千代田「えー。大井っちの素晴らしい体を見慣れるなんて他の人見れないよ?」

大井「見慣れられた……。なんか悲しいわね。」

千代田「あー。提督大井っちなかせたー。」

犬城「ええー。」

大井「くそう！ならばいつそ体にも覚え込ませてやるー！」

千代田「えっ？」

犬城「ちよ、大井!？」

ギユウ

大井「∴／／／」

千代田「抱き、ついた？」

犬城「なー!？」

千代田「そして提督が顔真つ赤にしながら対岸へ逃げた！」

犬城「さ、流石にそれは無理！理性が持たんわ！」

大井「え、うそ？」

犬城「流石に直は無理だ。服を挟んでならよくされるが、それは、無理。」

千代田「あらー。」

大井「∴なら、まあいいか。」

犬城「はあ。俺は上がるわ。」

大井「じゃあ私も。」

千代田「わたしもー。」

く千代田と さいしよのほう!く

千代田「ねえ、提督。これさ。C—130じゃないよね？」

犬城「ああ。AC—130だな。」

千代田「いやいやいやいや。なんでこうなったのよ。」

犬城「色々あったのだよ。気にするな。」

千代田「ええ……。」

犬城「ほら、荷物積み。行くぞ。」

千代田「はーい。」

ババババババババ

千代田「あ、そうだ提督。旅行の間は私は『星野 千代』だから、千代って呼んでね。」

犬城「偽名か？」

千代田「どちらかと言うと本名かな。艦娘になる前の名前。」

犬城「へえ。艦娘になる前の名前を教えてもらうのははじめてだな。」

千代「あれ、意外。全員のを把握してるのかと思ってた。」

犬城「そもそも俺が知りようが無い情報だからな。」

千代「へえ。」

犬城「…じゃ、旅行の間は俺のことは初と呼べ。」

千代「はっ？それは偽名？」

犬城「…本名だ。他のやつには言うんじゃないぞ。」

千代「わかった！へー。犬走初が提督の本名なんだー。あれ？じゃあ『山城』ってどっから来たの？」

初「色々あったんだ。ま、旅の途中で話してやるよ。」

千代「やった♪よし！じゃ、レッツゴー！」

《柱島―広島間 上空》

千代「そういえば提督、このAC―130どうしたの？」

初「俺の所有物だ。空自の格納庫の中に隠してある。」

千代「なんで隠すの？」

初「下手に知られると延々と飛ばさせられるのが目に見えてるから。」

千代「あー、そういうこと。」

初「ちなみにAC―130だけじゃなくていろいろな機体が置いてある。」

千代「んー、なんか提督、」

初「初だ。」

千代「初、やけに色々喋ってくれるね。いつもは教えてくれないのに。」

初「いまは答えても特に問題ないからな。鎮守府だどこで聞かれるかわからん。」

千代「ああ、そういうことだったんだ。」

初「ああ。ここなら問題はないし、千代を信用しているからな。」

千代「勿論教えないわよ。」

初「ならばよし。」

《広島空港》

千代「広島だー！」

初「千代、うるさい。」

千代「だって初！鎮守府の外だよ！初めてだよ！」

初「そういえば千代は鎮守府から出ることがなかったもんな。出身は何処なんだ？」

千代「福井の山奥。」

初「あ、そうなんだ。にしちや関西弁は出ないな。」

千代「頑張つて覚えたからね！初は何処の出身はなの？」

初「俺か？俺は福山だ。」

千代「ありや、じゃあ地元なんだ。」

初「まあな。ほれ荷物持て。さつさと行くぞ。」

千代「はーい！」

《福山駅》

千代「ふつくやまー！」

初「うるさい。んー、まだ時間はあるな。お弁当でも買いに行くか。」

千代「あれ？食べないの？」

初「そこまでの時間はないからな。多少余裕をもって動きたいし、新幹線で食べればいいしな。」

千代「わかった！じゃ、行く？」

初「おう。」

初「んで、悩んだあげくカツ丼と。」

千代「うう…。やっぱあっちにしとけばよかったかな…?」

初「もう遅い。」

日向「おや、提督に千代田じゃないか。そんな大荷物で何処に行くんだ?」

初「ん、日向じゃん。ちょっと千代と一週間旅行に行ってくる。」

日向「ほう。二人きりでか?」

初「ああ。」

日向「ふーん。ふーん?」

初「なんだそのジト目は」

日向「いいや? やつと射止めたやつがでたのかあ、と。ま、頑張つてこい。色々な。」

初「ああ。あ、なんか土産いるか?」

日向「ラーメン。」

初「わかった。」

日向「じゃあな。千代田、夜の営みはほどほどにな?」

千代「…へっ!」

初「じゃな。」

千代「…あ。」

初「千代どした?」

千代「たぶん、日向さん大きな勘違いをしているかも。」

初「どんな勘違いだ?」

千代「私たちが結婚したんだと。」

初「…oh…。」

千代「…行こっか。」

初「…だな。」

《新幹線》

千代「新幹線。」

初「三時間ほどかかるから、のんびりするかね。」

千代「ねーねー、初には特別な人っているのー?」

初「それは、そういうことについての質問でいいのか?」

千代「うん。」

初「んー、特に居ないな。」

千代「そっかー。」

初「ほら、飯食うぞ。カツ丼。」

千代「カツツドウン!」

初「ん、結構うまい。」

千代「さすが和幸。」

《東京駅》

初「東京だー。」

千代「先に言われたー!」

初「とりあえずホテルにチェックインするか?」

千代「うん。荷物おかないと辛いね。」

千代「ホテルきれいだった。」

初「そら帝国ホテルやし。さて、今日はどうする?」

千代「まずは皇居の周りを歩こー!その後は神宮球場に行つてカープの試合を見るよ!」

初「りょーかい。」

《流石にリアルで歩いてきたわけではないのでダイジェストなのです》

初「おお、あれが国会議事堂か。やっぱ映像で見るとは違うなあ。」

千代「おお!これが噂に聞く最高裁判所!」

初「…へっ!？」

千代「ありや、変な反応。この前も大井つちと三人で入ったのに。」
初「いや、提督スイツチ入ってないときはただの男だから。という
かまで。この風呂は触れずに入れるほど広くは…」

千代「うん、知ってる。」

初「えー?」

千代「ふふふ。初、私は貴方とひとつになるためにこの風呂に来
たのよ…。」

初「あ、あの千代?落ち着こう?な?」

千代「ふふふ。もう遅い!脱出不可能よ!諦めなさい!」

初「だー!もう!受けてたとうじゃねえか!」

ヤー!

ナー!

《何があつたかは皆さんの想像にお任せするのです。ただの肌が触れ
合うだけの混浴でもよし、ピーでもよしなのです。》

初「…。」

千代「あははは…。ごめん初、頼むから機嫌直してよう…。」

初「…はあ。ま、若気の至りってやつだな。仕掛けた千代も、受け
た俺も悪い。取り敢えず、旅行中は言っただけにしてくれ。突然はき
つい。」

千代「…へ?」

初「帰ってからは…、うーん。無理だな。たまに二人で旅行にでも
行くかね。」

《あ、これはもうピーやつちやっただみたいなのです。救いようがない
のです。爆発しろなのです。》

千代「まつ、待って!?!じゃあ、私と?」

初「…ああ、そうか。こういうのは俺から言わなきゃな。『星野千代
さん。私と付き合っしてほしい。』」

千代「…急に、なんで?」

初「そもそも好きでなきや二人きりの旅行も混浴もせんよ。」

千代「…や、やったああああ！」

初「お、おう、そこまでか？」

千代「うん…うん！」

初「そつか。ま、明日もあるんだから、寝ようか。」

千代「一緒のベッドで寝ていい？」

初「んー。ま、いいか。いいぞ。」

千代「わーい！」

ギユウ

初「ははは。ま、ゆっくり、ゆっくりな。」

こうして一日が終わった。

第六話 旅編

く大騒ぎく

日向「んで、やはり提督は千代田を選んだのか？」

山城「え、どういうこと？」

日向「だって、あの提督が千代田と一週間も旅行だぞ？ どう考えてもハネムーンか何かだろう？ どうなんだ山城。」

山城「いや、たまたまよ、たまたま。 たまたま二人の休暇の時期がぴったり重なって、たまたま千歳が旅行に行けなくなって、たまたま千代田が提督を誘って…あれ、偶然が多いわね。」

大井「…たしかに出来すぎてるわね。」

那珂「こういうのはやっぱり青葉さんじゃない？ それと一応千歳さんも。」

祥鳳「そうね。『えー、青葉さん、千歳さん、至急執務室まで来てください。少し話があります。』」

ガチャ

青葉「はいはいー！ 呼ばれて飛び出て青葉ですう！」

千歳「はいはい、千歳ですー。何かありましたか？」

大井「ええ。提督と千代ちゃんについて。」

千歳「千代田？ 今旅行にいつてるわね。提督と。」

青葉「え、ええ!?! 二人で旅行ですか!?!」

千歳「ええ。」

青葉「それってあれですか、ハネムーンとかですか!?!」

千歳「違うわ。二人は付き合ってすらないもの。」

青葉「じゃあ、アレなことはない？」

大井「…それは分からないわね。だって、千代ちゃんは提督のことが好きだもの。それに、提督も千代ちゃんをかなり気に入ってるもの。アレなことが起きてもおかしくはないわ。」

千歳「あら。ならよかった。」

山城「…よかった？ なにがですか？」

千歳「あ、しまった。」

青葉「なにを企んでいたのか話してもらえますか？私、きになりませ！」

千歳「…ま、いつか。いいわよ。私が仕組んだのは、『千代田を旅行にいかせること』と『提督をその同時期に休ませること』よ。」

那珂「いやいやいや。千代田さんの方はどうにかできても、提督の方は無理じゃない？」

祥鳳「…そういうことだったんですね、千歳さん。」

青葉「なに!?知っているのかSHO—HO！」

祥鳳「ええ。元々、提督の休暇の話は千歳さんの案だったんです。大規模作戦の前だから、提督にサプライズで一週間程休暇をあげたらどうかって。」

千歳「ま、ある意味賭けでもあったんだけどね。見事に当たったわけだ。うんうん。」

日向「しかし、なんでそんな事を？」

千歳「そんなの決まってるでしょう？妹である千代田のためよ。あの二人は元々仲がいいから、あとひとつきつかけさえあればくつつくだろうなあ、と思ってるね。」

山城「…千代田はその事は？」

千歳「知らないわ。完全に私の独断だから、あとは千代田の気持ちと行動次第ね。」

大井「…そう。でもまあ、あの二人ならアレなことは無いと思うけどね。特に提督。」

千歳「そうなのよねー。そこが一番の問題なのよね。うまいこと千代田が崩せればいいのだけど。」

山城「結果は帰ってくるまで分からない、ということね。のんびり待ちましようか。」

大井「そうね。」

那珂「別に提督が幸せならいいと思うんだけどなー。なんでみんな深刻そうな顔してるんだろ？」

く横須賀鎮守府 一般公開の巻く

初「おー。そういや今日は横鎮の一般公開の日だったな。」

千代「すごい人だねえ。」

初「ま、のんびりと回るかねえ。」

舞台のお姉さん『はいはい！次に艦娘シュミレーターやってみた
い人ー！』

千代「あーねーねー初！シュミレーターがあるよ！艦娘シュミレ
ター！あれかなりリアルで楽しいのよね！」

初「へえ。こいつはすげえ。かなり大規模だな。お、艦装まで選べ
るのか。おお、日本武尊まである。」

千代「やろやろ！」

初「本職のものがやっていいのか…？」

千代「いいじゃん！今はただの人だよ！」

初「まあ、そうか。」

千代「はいはい！やってみたーい！」

舞台のお姉さん『じゃあその女性の方！舞台にどうぞ！』

千代「やった！行ってくるね！」

舞台のお姉さん『彼氏さんもどうぞー！』

初「どうやら俺もみたいだな。」

舞台のお姉さん「お二人の名前を教えてください！」

千代「星野千代です！」

初「犬走初です。」

舞台のお姉さん「じゃあ、まずは千代さんから！シュミレーターを
やったことはありますか？」

千代「一度だけあります！」

舞台のお姉さん「じゃあ、操作とかは大丈夫？」

千代「はい！」

お姉さん『じゃ、早速はじめてもらいましょう！レッツゴー！』

千代「えーっと、艦装はー、千代田で。」

お姉さん『おお！さすが経験者！艦装はなんと難易度の高い軽空母

の千代田をチョイスしました！これはみものですね！」

千代「さあ、始めるわよー！出撃！」

シユゴオオオ

お姉『カタパルトで出撃です！さあ、すでに敵は広範囲に広がっています！一人でどこまで横須賀鎮守府を守れるのでしょうか！』

千代「さあいくわよ！戦闘機隊発艦！続いて爆撃機隊及び雷撃機隊発艦！」

お『早速最新鋭戦闘機の烈風、そして彗星と流星を発艦させました！さすがですね！』

千代「さあさあ！いくわよー！第一次攻撃隊いっけー！」

○『すごい！爆撃と雷撃でどんどん敵を撃沈していきます！もう40隻も撃沈しました！しかし、ここからは敵に空母が現れます！自身を守りきれるのでしょうか！』

千代「！敵機！烈風隊、一撃離脱よ！正確に行きなさい！対空機銃、敵の牽制！」

○『すごい！敵機をどんどん落としていきます！…あれ、どこからか雷撃が？』

千代「え、雷撃!?きやあ！」

お姉『おおっと！ついに初ダメージ！どうやら雷撃は潜水艦からのようです！さらに二本！放射状に広がっていききました！』

千代「軸ブレーキ脱！最大戦速！…なんて無理かー。」
ドーン

お姉さん『残念！いいところまでいったのですが、潜水艦にやられてしまいましたー。』

千代「むー。悔しい！よし、初、あとは頼んだ！」

初「へ？俺？」

お姉さん『おお！彼氏さんもやりますか！どうぞどうぞ！』

初「えー？」

お姉さん「やり方は大丈夫ですか？」

初「まあ、千代のを見てたので。」

お姉さん「それじゃあ、お願いします！」

初「はあ…。まあ、やるからには本気でいきますかね！」

お姉さん『おお!?なんと日本武尊の艦装を選びました!日本武尊の艦装は、武装の数が多すぎて本職の方でも操作するのは難しいと聞きます!さあ、彼氏さんはどこまで行けるのでしょうか!』

千代『初ー!がんばれー!』

初「よし、ヤマトタケル、出撃する！」

お姉さん『さて、かつこよく飛び出しましたが周りは敵だらけ!どうするのでしょうか!』

初「駆逐軽巡は副砲で片付けろ!重巡は噴進弾で潰せ!戦艦は主砲の零式弾!ただし一撃で仕留めろ!」

ババババババババドーンババババババババババシユゴオオオ

お姉さん『すごい!すべての武装を適切に使っています!どんどん敵が沈んでいきます!』

千代『だけど、ここからだよ!ここから空母と潜水艦が来る!』

初「!敵機か!主砲炉号弾装填!敵機群の先頭を狙え!つてえー!」

ドゴーン

初「弾着まで3…2…近接信管作動!今!」

ドカアアアン

お姉さん『おお!敵機が一瞬で蒸発しました!』

千代『なにこれこわっ!…!初、左から魚雷!』

初「!迎撃用意!マ式豆爆雷つてえー!」

ポンポンポン

ドドドカアアアン

初「よし、主砲Z弾装填!つてえー!」

ドーン

ドボオオオン

お姉さん『な、なんとクラスター弾で潜水艦を撃沈しました!』

初「迎撃成功!敵の殲滅に移る!主砲零式弾、つてえー!」
ドーン

お姉さん『空母轟沈!さあ、ラスボスの登場です!ラスボスは飛行

場姫！』

千代『飛行場…あつ（察し）』

初「飛行場を確認した。主砲、B型弾装填！主砲、撃て！」
ドドドカアアアン

／ウワアアア／

お姉さん『げ、撃破！撃破です！おめでとうございます！』

初「っしやあ！」

千代「やったー！」

初「いえーい。」

お姉さん「すごいですね！今までにやったことが？」

初「いや、無いです。ただ、日本武尊は好きで色々調べたので。」

お姉さん「ああ、わかりますかあのロマン！あの伝説の戦艦はやっぱり調べますよね！」

初「ですね！」

お姉さん「あ、写真とつていいですかー？広報紙に使いたいんですけども。」

千代「いいですよ！」

初「え、ちよ。」

お姉さん「はいはい！こっち見てー！ほらほら、せっかくだからもつと近くに！よし！はい、チーズ、サンドイッチ！」

パシャ

お姉さん「はい！ありがとうございました！では、見事クリアした犬走初さんとその彼女さんの星野千代さんのカップルに拍手ー！」

パチパチパチパチスエナガクバクハツシロー！

千代「いえーい！クリアおめでと！」

初「さーんきゅー！なんてな。」

千代「にしても、よくあんなに動けたね。」

初「ふっふっふっ。意外と優秀な初って言われるくま。」

千代「球磨じゃん。」

初「くま。」

「やっぱお前か。山城。」

初「ん？お前は…。」

獅子「ああそうだ。ここの提督の獅子だ。というかお前はこんなところで何やってんだ。しかも…隣の子は千代田か？」

初「ああ。今は二人で休暇とって旅行中だ。」

獅子「え、仕事は？」

初「部下に任せた。」

獅子「そうか。あと何日ほどこっちに？」

初「あと5日丸々いて、六日後に帰る。」

獅子「長いな。じゃ、明日うちに来てくれないか？遊びに来てくれ。」

初「だってさ。どうする？」

千代「行く行く！楽しそうだし！」

初「だそうだ。んじゃ、明日も来るよ。」

獅子「了解した。」

横天津風「貴方ー!?どこー！次のツアー始まるわよー！」

獅子「お、天津風が呼んでるな。んじゃ、また明日な！」

タツタツタツ：

千代「明日やること決まった！」

初「なんだそのフィニアスチックな言い方は。」

千代「あつはつは！ま、もつと見て回ろ！」

初「へーへー。」

く超騒ぎく

山城「ちよつと！青葉！なんでよりによってあれを丸々記事にしちやうのよ！」

青葉「ジャーナリストとしてこの特ダネはせざるを得ないでしょう！」

山城「おかげで何人も体調不良で休んじやってるのよ！あーもう！不幸だわ！くっそ不幸だわ！」

那珂「ねーねー！あの艦娘シュミレータークリアした人がはじめて

出たんだってー！」

祥鳳「え、あれをですか。どんな変態ですか。」

那珂「えーつと、旅行で来ていた犬走初さんと星野千代さんのカッブルだって。初さんは日本武尊の艤装でクリア、千代さんも大体8割ほどクリアしたんだって。あ、写真乗ってる。…これって。ねえ、これって提督と千代田さんじゃない？」

祥鳳「…ほんとだ。え、カップル!？」

山城「なんですってえ!？」

大井「ナンテコッタ」

山城「提督が…。」

このあと数日間鎮守府はほぼ機能不全となった。さすがに那珂ちゃんだけではきつかったそうなの。

〽横須賀鎮守府 訪問の巻〽

初「んで、再び来たぞ横鎮!」

千代「いえーい!」

獅子「ま、取り敢えずようこそ横須賀鎮守府へ。取り敢えず執務室の方で話そう。」

初「あ、もしかして仕事な感じ?」

獅子「ああ。」

犬城「ならここからは山城に千代田だ。」

千代田「わかったわ。」

獅子「…なんか雰囲気が変わった気がするんだが気のせいかな?」

犬城「ああ。提督スイッチいれたからな。」

千代田「私も艦娘スイッチをいれたからね。さあ、行きましょう。」

獅子「お、おう。」

獅子「まあ千代田ちゃんとは初めて会うことになるからな。一応自己紹介を。俺は横須賀鎮守府の提督の伊藤獅子。」

横天津風「私は秘書艦の天津風よ。」

犬城「んじや俺らからも。俺は柱島泊地の提督の犬走山城だ。」

千代田「一緒に旅行に来てた千代田です。」

獅子「そーいやお前のケツコン艦は祥鳳じゃなかったか？」

犬城「うちはケツコンというより勲章扱いだからな。」

獅子「そうなのか。」

犬城「ああ。」

獅子「まあ、本題に入る。いい加減に色々なものをそつちで引き取ってほしい。」

犬城「色々なもの？なんのことだ？」

獅子「…まさか連絡がいつてなかったのか？色んな所からお前んとこに色々と送られてくるんだけどよ、それが全部うちになぜか来るんだよ。いい加減うちじゃ管理できないから持って帰ってくれ。」

犬城「あー、もしかして昔ここ所属だったからこつちに送ってんのか。次からはうちに送ってくれるか？」

獅子「できる限りはそうする。」

犬城「頼む。んで、何があるんだ？」

獅子「えーつと、艦艇十隻、航空機30機、車両25両、砲40門、ヘリ三機、機関銃120個、艀装四個、艦娘装備15、3DS三つ、謎のベルト六つ、刀一振、鶏35羽だな。」

千代田「…へ？」

横天津風「あ、懐かしい反応。」

犬城「結構あるな。細かい内訳もらっていいか？」

獅子「ほれ。」

犬城「なにに…。改ジエラルド・R・フォード級航空母艦一隻、改ズムウオルト級ミサイル駆逐艦八隻、そしてヤタガラス級木造戦艦二番艦『オウスノミコト』!?なんでこいつがいるんだよ！」

獅子「知るか。」

犬城「ええ…。なんで家なんだよ。」

獅子「お前だからだろう。」

犬城「なるほど。ま、続き行くぞ。航空機は全部F-35Cの改良型か。ま、空母だしなあ。」

獅子「少ないんじゃないか？あの航空母艦は75機は積めたはずだが。」

犬城「あとは自前で用意しろってことだろ。流石にC型だけだと機銃掃射にガンポッドが必要だし、スパホでも乗つけるか。…それとA-10。」

獅子「ほんととお前A-10好きだな。」

犬城「勿論シーフランカーも仕様をあわせて乗つける。」

獅子「まさかの混載である。」

犬城「ま、今の世界じゃいがみ合うこともないしなあ。軍事では。で、次は車両か。なに、M1A4が五両に戦車運搬車五両、パーンツィリ-S1三両にゲパルトが六両、ジープが五両にハイエースが一台。対空戦車多いな。」

獅子「なんでこんなに最新鋭なのが来るんだ？」

犬城「一つに、俺の過去の行い。二つに、日本、それも瀬戸内なら確実に安全だし、自衛隊なら撃沈されることもない。で、こんな新鋭艦や新鋭戦車とかなら迷わず使うはずだから、損失もなく実践データが得られる。アメリカの近海で自分達でやるよりも安全だろうからな。ま、実際はガルダとかMOGERAでなんとかするんだが。」

獅子「あー、そういうことか。確かに近海にいるのは強硬偵察の潜水艦位だしな。」

犬城「ああ。砲は…ああ、ヤタガラスの換装用か。まあ百発限りだしな。へりはまあシーホークよな。で、機関銃は全部AK-12だな。作りすぎたのか？」

獅子「それは手紙つきで来たぞ。『余ったからやる』とのこと。」

犬城「最近裕福になったからっていろいろ作りすぎだと思う。」

獅子「俺もだ。」

犬城「んで、艦装は…うお、また『オウスノミコト』か。」

獅子「それはお前のだ。」

犬城「こんなところにあつたのか。てことは改修は済んだってことか。」

獅子「ま、そういうことだろう。」

犬城「んでもうひとつも『オウスノミコト』か。んで最後の二つは…お、千歳型航空母艦改装試作艦装『千歳航改紺』と『千代田航改紺二』か。ふむ、千歳と千代田でタイプが違うのか。要するに試してみても良い方を改良して採用しよう。」

千代田「え、私の艦装？」

犬城「ああ。試作だがな。」

千代田「やった！じゃあ、帰ったら早速試してみよつと！」

犬城「おう。んで装備は…うん、近代兵装たっぷり！」

獅子「まあ、そうなるな。」

横日向「呼んだか？」

獅子「呼んでないよ師匠。」

横日向「そうか。おや、初めて見る顔だな。取り敢えず君たちにもこの特別な瑞雲をやろう。大切にしろよ。」

犬城「お、おう。」

千代田「あ、ありがとう？」

横日向「じゃあな。」

犬城「なんだいまの。」

千代田「さあ。」

犬城「はあ。DSはいいか。んでベルトは…ゲームドライバーか。あとバグドライバーとII。んで刀は…ああ、日向のか。んで鶏？」

獅子「ああ。」

犬城「飼うか。」

千代田「あはは。だね。」

犬城「ま、帰りに持って、というか乗って帰るか。」

千代田「あ、じゃあ新幹線キャンセルしておくね。」

犬城「頼む。」

獅子「じゃ、5日後の朝に来てくれ。んでこのあとなんだが、うちの稽古をつけてやってくんねえか？千代田ちゃんも試作艦装のテストもかねて、さ。」

犬城「いいか、千代田？」

千代田「ええ。いいわよ。」

獅子「よつしや！じや、人集めてくるわ。ちよつとのんびりして
てくれ。」

犬城「いや、艦装のチェックをしておきたい。」

獅子「わかった。じやあ天津風、案内してやってくれ。」

天津風「わかったわ貴方。こつちよ。」

犬城「おう。」

天津風「で、艦装はどうかしら？」

犬城「問題ない。というか前よりも良いかもな。」

天津風「前…？」

犬城「ははは。気にすんな。千代田はどうだ？」

千代田「これすごいよ！電磁カタパルトにジェット艦載機に多目的
へりに機関なんて原子炉だよ！それにCIWSにSAM！しかもL
aWSまで！すごい！」

犬城「それジェラルド・R・フォードのじやねえか？」

天津風「みたいです。ちなみに千歳さんの方はジョージ・H・W・
ブッシュですね。」

犬城「アメリカ艦じやねえか？」

天津風「主がちとちよなので日本艦です。いいですか？」

犬城「アツハイ。」

天津風「よろしい。では行きましょう。」

犬城「おう。」

獅子「お、やっと来たか。へー。意外と似合ってるな。」

犬城「旅行中は制服を着るつもりはなかったが、持ってきておいて
よかった。」

千代田「私もだよ。んでメンバーは…」

犬城「扶桑、時雨、夕立、赤城、金剛、大鳳、神通、天城、雲竜、利
根、筑摩、それと天津風か？」

獅子「ああ。」

犬城「んで、俺らはなにをすれば良いんだ？」

獅子「そりゃあ演習相手よ。二対十二で。」

犬城「こんだけでよかった。」

千代田「同意。」

犬城「あー、今回演習の相手になる柱島の提督の犬走山城と千代田だ。休暇でこつち来てたんだが捕まっちゃまったんでこうなった。ま、全力でこい。」

『ハイー!』

犬城「よろしい。では、30分後に演習を開始する。配置に就いておけ。」

『了解しました!』

犬城「さて、こつちも行きませうかね。」

千代田「提督、それ木なんでしょ?大丈夫なの?」

犬城「ああ。大丈夫だ。特殊な金属を使った木で出来ているからな。」

千代田「…へ?」

犬城「行くぞ。」

千代田「あ、はい。」

獅子『うーい、では開始の合図はさせてもらおうよー。では、演習開始!』

千代田「艦載機発艦!急いで!」
シュゴオオオ

犬城「お、早速艦載機が来たな。こつちの艦載機は高高度に退避させてくれ。」

千代田「了解。」

犬城「主砲炉号弾装填。電探と連動。主砲、撃ち方始め!」
ドドドドドドドドドドドド

千代田「え、全門斉射!」

犬城「弾着まであと10…9…8…7…6…5…4…3…2…近接信管作動!今!」

ドカアアアアン

千代田「！敵数機生存！」

犬城「了解。対空噴進弾、発射！サルボー！」

シユゴオオオ

ドドドーン

千代田「…全機撃墜！そして偵察機から入電！敵艦隊発見！」

犬城「航空機を向かわせろ。直掩にホーネットを十機残しておけ。」

千代田「了解！よし、ライトニングIIにスーパーホーネット！れっ

つごー！」

ゴオオオオオ…

犬城「長距離対艦噴進弾、五本発射！」

ゴオオオオオ

犬城「着弾まであと30…20…10…9…8…7…6…

5…4…3…2…弾着、今！」

千代田「着弾！金剛、天城、筑摩轟沈判定！敵艦隊が乱れた！よし、

第一航空隊、対艦ミサイル発射！」

《対艦ミサイル発射。》

千代田「時雨、夕立、神通に着弾！轟沈判定！」

犬城「まもなく主砲の射程範囲内に入る。入り次第射撃を開始する。」

千代田「了解！第二航空隊、JDA M投下！他の機は対空ミサイル

で直掩機を落として！」

《ボムズアウェイ》

《f o x 2 ! f o x 2 ! 》

犬城「主砲の射程に入った。データリンク。」

千代田「JDA Mにて赤城、雲竜、利根轟沈判定！」

犬城「主砲零式弾装填。主砲、撃ち方始め！」

ドドドーンドドドーンドドドーン

犬城「着弾まであと10…9…8…7…6…5…4…3…2…弾

着、今！」

千代田「…大鳳に二発直撃！轟沈判定！扶桑に至近弾！天津風回避
！」

犬城「了解。主砲再装填。対艦ミサイル発射！」
シユゴオオオ

千代田「！天津風、対空ミサイルにて迎撃！また対艦ミサイル発射！」

犬城「む、隠していたか。千代田、スーパーホーネットで天津風に機銃掃射。ミサイルには気を付けろ。対空ミサイル発射。」

シユゴオオオ

千代田「了解！さあ、空襲よ！」

ヴオオオオン

ガガガガガ

犬城「インターセプトまで10秒、9…8…7…6…5…4…3…

2…1…マークインターセプト！」

ドーン

犬城「迎撃成功！」

千代田「天津風速射砲にて迎撃を開始。扶桑発砲！」

犬城「主砲、撃て！」

ドドドドドドドドドドドド

千代田「扶桑に直撃弾！扶桑轟沈判定！」

犬城「まもなく天津風が副砲の射程に入る。」

ドーン

犬城「おお、扶桑の弾が直撃。第一装甲板で防いだ！被害微少！」

千代田「敵の速度が落ちた！機関にダメージが入ったと思われる

！」

犬城「了解。Z弾装填。主砲、つてえー！」

千代田「直撃でいいのかな？天津風大破！」

犬城「止めだ！副砲斉射！打ちまくれ！」

ドドドドドドドドドド

千代田「天津風撃沈！」

獅子『はい、演習終了です。お疲れさまでしたー。』

犬城『了解、帰投する。』

犬城「はい、お疲れさまー。」

横夕立「現代兵器のオンパレードなんてずるいっばい！」

横雲竜「というかうちの航空隊、全滅…。」

横赤城「まさか水平爆撃にやられるなんて…。」

横金剛「索敵では勝つてたのに。」

犬城「航空機が密集しすぎだな。あれだと普通の三式弾でも運が悪いと八割落ちるぞ。もう少し広がれ。」

横天城「わかりました。」

犬城「あと、天津風と夕立と時雨はミサイルとかがあるんならさつさと使え。出し惜しんだら死ぬからな。」

横天津風「はい。」

犬城「扶桑は十分だ。あそこまで回避して、しかも反撃までしたかな。威力的にもルフラなら沈んでただろうから、ほんと十分だと思う。」

横扶桑「ほんとうですか！嬉しいです！」

犬城「神通はしゃーない。流石にな。」

横神通「あははは。」

犬城「んじや、失礼する。」

千代田「失礼しました。」

獅子「ああ。また来てくれよ。」

犬城「いやまあ来るんだがな。」

獅子「ああそうだったな。じゃ、準備しておくからな。」

犬城「ああ、頼む。」

獅子「…スイツチ切つていいぞ？」

初「あ、ほんと？わーい。」

千代「初、疲れた。早く帰ろ！」

初「ああ。じゃ、さいならー。」

獅子「お、おう。じゃあな。」

横天津風 「…え、雰囲気変わりすぎじゃない？」

獅子「それな。公私をきつかり分けてるんだろうな。あれは真似で
きん。」

横天津風 「普通無理よ。」

獅子「だろうな。ある意味お似合いのカップルかもな。公私どちら
も。」

横天津風 「まあ、そうかも？」

第七話 大規模作戦開始

く帰ろう。く

初「というわけで受け取りに来たぞー。」

千代「来たー。」

獅子「おう。旅行は楽しめたか？」

初「ああ。勿論。」

千代「そりやそーじゃん！」

獅子「そうか。じゃ、荷物は『オウスノミコト』に積んでくれ。ほぼすべて荷物は空母に積んである。勿論特別な瑞雲も。」

初「了解。ありがとうな。」

獅子「今度はこつちから行かせてもらうよ。またな。」

初「ああ。いつでもこいよ。それでは失礼しました！」

千代「しました！」

千代田「あーあー、提督、こちら空母《ちよだ》。聞こえてるー？」

犬城「こちら戦艦《オウスノミコト》。問題なく聞こえている。駆逐艦達もついてきているな。」

千代田「うん。ついてきてるよー。なんかカモの列みたい。可愛いかも？」

犬城「実際潜水艦のカモだからな。対潜警戒厳にせよ！」

千代田「了解。」

……

千代田『ふーふーふーふふつふつふふふふ♪…ん、提督、潜水艦！方位305、距離27000、艦数3！』

犬城『推進音はどうだ？』

千代田『んー…、うん、カ級で間違いないよ！どうする？こがもちやんたちにアスロック撃たせる？』

犬城『いや、アレを使う。』

千代田『アレをですか!?!しかしあれは秘匿兵装です!』

犬城『なに、問題ない。』

千代田『了解しました。…こんなんでもいいですか?』

犬城『ナイスな演技だ、千代田。よし、一番二番主砲乙弾装填!方位305、距離27000!よし、つてえー!』

ドドドドドドオーン

犬城『弾着まであと10…9…8…7…6…5…4…3…2…時限信管作動、今!』

千代田『…船体の断裂音を確認。撃沈と思われませう。』

犬城『了解。対潜戦闘、用具収め。引き続き柱島へ向かい航行を続ける。』

千代田『了解。』

＼クエー／

＼クワツクワツクワツ／

＼クエー／

千代田『あ、こがもちゃんからも了解って。』

犬城『…え?』

＼占領?／

ヲ級「ヲツヲツヲー! やつとやつて来たぞ柱島!」

イ級「キュー!」

ル級「本当にたまたまだがな。我々だけがなんとかここまでこれた感じだ。」

チ級「でも、ここは柱島。艦娘の本拠地。12人?じゃ足りないと思う。」

ヲ級「ヲツヲツヲー。実は、ここの提督がいなくてみんなやる気がないって話なんだ。だから、これだけでも簡単に占領できる!はず!」

イ級「キュー!」

ヲ級「おうおうイ級は可愛いな。」

ル級「はあ。ま、もう退くに退けないからな。前進あるのみだ。」

……

ヲ級「え、すごい簡単に上陸できてしまった。なんで？」

イ級「キユー？」

ル級「ん、あそこの酔っぱらいに聞いてみよう。なああんた、どうしたんだ？」

隼鷹「あー？どうしたもこうしたもあるかい！みーんな提督が千代田とくつついちまったって知って自棄になつて酒飲んだ挙げ句つぶれちまつてんのよ！ま、あたしや結婚を祝うために取っておくはずの酒を飲んじまつただけだけどね！あつはつは！」

ル級「え、そんな事ですか？」

隼鷹「ま、提督への愛が原動力の奴が多すぎたつてことさね！ん、あんな深海棲艦か？じゃ亡命か占領かい？あつはつは！こんなところに来るとは物好きだね！ま、なんなりとしていきな。なんかしてもどうせ提督が帰つてくりや元通りさ！あつはつは！」

ル級「提督は何時帰ってくるのだ？」

隼鷹「んーと、1900だな！船で帰ってくるとか言ってたな！」

ル級「そうか。ありがとう。あ、そうだ。この深海の銘酒をやろう。これは上手いぞ！」

隼鷹「おお、ほんとか！ありがとうさん！」

ル級「なに、話を聞くだけと言うのは主義に反するのな。私なりの貴女へのお返しさ。」

隼鷹「あつはつは！面白いやつだな！美味しく頂くよ！」

ル級「じゃな。」

隼鷹「じゃーな。」

隼鷹「…船だし間違つちやないな、うん。」

ル級「ヲ級、ここの提督は1900に船で帰ってくるそうだ。」

ヲ級「ほう！なら、船着き場に深海の旗を掲げ、占領したことを知

らしめたあとに砲撃で沈めてやろう！さあ、あと二時間しかない！準備するぞ！」

イ級「キュー！」

……

犬城『あー、長旅ご苦労様でした。まもなく柱島、柱島です。お忘れものなどございませんようご確認ください。…ん、あれは…。』

千代田『どうしたの、提督？』

犬城『うちの港に深海の旗が立ってる。占領されたのかもしれない。千代田、ライトニングにガンポッドを満載で全機上げろ。こがも！全艦主砲での戦闘用意！場合によってはC I W SとL a W Sの使用も許可する！指示を元に攻撃しろ！』

＼クエー／

＼クワツクワツクワツ／

＼クエー／

犬城『全艦、我二続ケ！左回頭82！全艦、単縦陣で行くぞ！』

千代田『了解！』

ヲ級「…なあ、ル級。確かにあれは船だけどさ。」

ル級「戦艦…。それに正規空母に重巡クラスが八隻。しかもしつかりとこつちに砲がすべて向いているうえ、上空にはジェットが…んと、30は飛んでるな。しかも機関砲を四つもぶら下げてる。」

チ級「リ級ちゃん…白い布あったよね？早く振ろう。」

ヲ級「ま、まだ負けた訳じゃないじゃん！やってみたら倒せるかもよ！ほら、ル級砲撃！」

ル級「…わかった。主砲、てー。」

ドーンドーンドーンドーンドーンドーンドーンドーンドーンドーン
ドーンドーン

犬城『む、敵発砲。』

犬城「亡命だからな。」

千級「する。」

犬城「決めるの早いな!？」

千級「だって戻っても殺されるか実験対象にされるだけだもん。戻りたくない。」

犬城「そりゃひどいな。」

千級「だって、上のやつらのほとんどは私たちを駒程度にしか思っ
てないもの。」

犬城「ふむ。そうか…。他の子達はどうするんだ?」

ル級「衣食住は大丈夫なのか?あと、実験に使われたりとかは無
いのか?」

犬城「衣食住は恐らくうちに住むことになるから問題はない。実験
は、させない。多少話は聞くかもしれないがな。」

ル級「させない?ということはやはり…」

犬城「ああ。上層部では話が出るだろうな。まあ、そんな話が来て
もません。大丈夫だ。」

ル級「だが、起きてしまったら?」

犬城「そんなときや日本が不幸なことになるだけだ。問題ない。」

千代田「いや問題大有りよ。なんで日本が不幸なことになるのよ。」

犬城「そりゃあロシアさんに圧力をかけてもらうからな。」

千代田「あー。うん。そういうことね。」

犬城「ロシアは深海棲艦の亡命にもかなり寛容だからな。頼まなく
とも情報さえ流せばいい。あとはテレビ局にでも情報を流せばおし
まいよ。」

千代田「うわあ。」

ル級「かなりすごいことをやろうとしているのはわかったような気
がする。わかった。私も亡命させてくれ。」

犬城「了解。他の子は?」

又級「又。」

千級「残るって。」

犬城「お、おう?」

ホ級「あたしは残る！楽しそうだし！」

ツ級「私も亡命させてください。1日24時間労働はもう嫌なんです…。」

犬城「おおう、それは辛いな。」

ネ級「ニヤ。」

犬城「わかった。」

千代田「かわいいかも。」

隼鷹「え？え？」

リ級「私も亡命する。」

犬城「了解。んで、お前らはどうする？」

イ級「キュー！」

ロ級「キュー！」

ハ級「キュツキュキュー！」

ニ級「キュキュツキュキュツキュキュツキュキュー！」

犬城「…そうか。ヲ級に付いていくのか。ヲ級、どうする？」

ヲ級「…亡命、させてくれ。こいつらを死なせるわけにはいかん。」

犬城「了解した。じゃ、手続きしに行くぞー。」

いちかも「クエー？」

犬城「お前らは…鶏たちの面倒を見ておいてくれ。後で連れていくから。」

いちかも「クエー！」

犬城「よし、頼んだぞー！」

那珂「ああ…提督…。お帰り…。」

犬城「お、おうただいま。那珂、アイドルがしちやいけない顔をしてるぞ。」

那珂「あははは。流石に一人で五日間も全部やるのは厳しかったよ…。」

犬城「なに？山城に大井に祥鳳はどうしたんだ？」

那珂「寝込んだじゃった。『提督が千代田と付き合っちゃったあああ！』とかいって熱出して。」

犬城「はあ？なんでそんなデマが流れてるんだ？」

那珂「え、デマ？」

千代田「ええ。付き合つてなんかいないわよ？そりや二人で旅行に行ったから勘違いされるような気はしてはいたけど。」

那珂「え、でも艦娘シュミレーターの記事に犬走初と星野千代のカップルつて…。」

犬城「は？犬走初って誰だ？」

千代田「星野千代？」

那珂「え、あれ提督じゃないの？」

犬城「ああ。」

那珂「…あああああ！もう！」

犬城「な、なんだ!?どうした!？」

那珂「ならなんで私がこんな苦勞しなきゃいけないのよ！」

犬城「那珂、落ち着け。休暇とアイスやるから！」

那珂「団子とケーキもお願い！」

犬城「わ、わかった。」

数日後、付き合つてないという情報が広がり、やっと元の鎮守府に戻ったそうなの。

突然の比叡回

犬城「大規模作戦は地中海から出てくる敵艦隊の撃滅、及び地中海に突入、欧州解放の足がかりを作る、か。」

比叡「インド洋を通つて紅海を抜け、地中海ですか…。インド洋、行きたくないです…。」

犬城「…ああ、そうか。比叡はインド洋で沈んだんだったな。」

比叡「はい。潜水艦からのミサイルにやられて…。そのせいで高杉長官も覇気を無くしてしまつたと聞きますし…。あのとき沈まなければ…！」

犬城「もう過ぎたことだ。過去の事を悔やんでも仕方ない。それよりも同じ事を起こさないために努力しよう。」

比叡「…はい！そういえば、先行して潜水艦たちを出撃させた、と

言ってましたが、うちの子達は誰も出ていませんよ？」

犬城「：お前なら分かるんじゃないか？居ない潜水艦、そして紅海からくる艦隊。」

比叡「：な！まさか提督！紅海雷撃作戦をこの世界でやるつもりですか!？」

犬城「ふふふ。そういうことだ。」

比叡「提督、流石です！あの世界の戦術や作戦は大抵奇策ですからね。相手にも読めませんよ！」

犬城「だな！あつはつはつはつ！」

比叡「にしても、なぜ私の世界の事を？紅海雷撃作戦は話してないはずですが。それに：X艦隊についても。」

犬城「：実はな、俺は日本武尊なんだ。」

比叡「：ガチですか。」

犬城「ああ。基本的にはヤタガラス級木造戦艦『オウスノミコト』となってる。ただ、一部のやつらはこの事は知ってる。」

比叡「そうなんですか。この鎮守府には？」

犬城「千代田とX艦隊、そしてお前だけだ。」

比叡「わかりました。できる限り秘匿します。」

犬城「頼んだ。」

比叡「さて！あの子達はどうなりましたかね！」

犬城「連絡を待つしかないさ。あ、この資料しまつといて。」

比叡「あ、はい。」

く紅海雷撃作戦く

富嶽『こちら富嶽。敵は気づいていないわ。全艦、無音浮上。』

水神『こちら水神。あのときと一緒でいいのかしら？』

快龍『そういう指令だ。やるぞ。』

富嶽『よし、これより心臓作戦と連動した作戦である紅海雷撃作戦を開始する！全艦USM、てー！』

爽海『てー！』

快龍『全弾発射完了！』

列車砲姫D「砲用意！つてえー！」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド
ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

列車砲姫A「おや、戦艦が一隻生き残ったか。よし、全員でそいつを集中砲火だ！」

列車砲姫B「よっしゃ！いくぞ！」

列車砲姫C「な！北から敵機来襲！」

列車砲姫D「なにい!?総員、トンネル内へ退避！」

列車砲姫A「駄目だ！間に合わない！う、うわあああああああ！」
ボン

ボンボンボンボンボン

ゴオオオオオオオオオオ

列車砲姫B「ギャアアアアア！」

ドカアアアアン

尊氏観測機「…敵列車砲陣地は完全に吹き飛んだ。トンネル内の弾薬が爆発したようだ。おお、山が完全に吹き飛んでしまった。やはりサーモバリックは最高だな！」

映像で見たい方はニコニコ動画のキーワード検索で『旭日のチート艦隊』と調べるといいかも？5話あたりで見れるよ！このシーンはかなり作画がすごいので見てみてほしいっばい！『紺碧のチート艦隊』も投稿してくださっているのでOVA版紺碧の艦隊、旭日の艦隊すべてみるかも！ただコメントがアレなのでNG共有強かコメントを消すといいです。

第8話

く妹く

犬城「あー、皆、インド洋の制海、制空権奪取ご苦労だった。次の地中海突入に向けて頑張ろう！」

山城「そういえば、地中海からの敵艦隊はどうなったのですか？新型の大型艦が出たという話も聞きますが。」

犬城「ああ、それなら先遣部隊が全て撃沈したそうだな。」

山城「おお、それはすごいですね。」

「おーにーいーさーまー！」

犬城「む、この声はぐあっ！」

ガシイッ！

犬走扶桑「お兄様ー！会いたかったですー！」

祥鳳「え、お兄様!？」

犬走扶桑「はい！犬走山城は私の兄です！」

足利飛鷹「待つてください扶桑さま…。はやいです…。」

犬走扶桑「あら、飛鷹が遅いのよ。」

犬城「あー、うん。二人とも自己紹介。」

犬走扶桑「あ、そうですね。私の名前は犬走扶桑です。もちろん扶桑の艦装の適合者ですよ。そして犬走山城の妹です！」フンスツ

足利飛鷹「私の名前は足利飛鷹。扶桑さまの付き人です。そして飛鷹の艦装の適合者です。」

山城「うーん。でも扶桑ねえさまも飛鷹さんもうちには居るんですよ…。」

犬走扶桑「あー、たしかにそうだね。じゃあ、妹さんとも呼んでくれればいいよ！」

足利飛鷹「私のことは尊氏とでもお呼びください。」

山城「妹さんに、尊氏ね。わかったわ。」

犬桑「よろしくね！」

足利「よろしくお願ひします。」

く魚雷挺く

P T小鬼「キャハハ、キャハハ！」

ドーンドーン

山城「くそつ、あたらない！」

日向「ああもう！鬱陶しいなこいつらは！」

P T小鬼「キャハハー！」

パシユパシユ

古鷹「な、比叡さん魚雷！」

ドーン

比叡「この程度問題ないよ！でも、こいつらうざいわね！提督！電探連動射撃の許可を！」

犬城『許可する。』

比叡「了解！ほらほら小鬼め！豆を喰らって帰りなさいな！」

バババババババババ：

P T小鬼「キャアアアア」

摩耶「：そうか！別に砲に頼らなくても良いのか！よし、機銃！あいつら潰すぞ！」

ブウウウウウウウン

山城「なるほど！」

バババババババババ：

龍驤「機銃掃射や！流星！その20mmの威力見したり！」

………

山城「やったわ！あの忌々しい魚雷挺どもを全て沈めてやったわツ！」

日向「疲れた。」

比叡「艦隊を地中海へ行かせるためですから、頑張りましょう！」

山城「まあ、そうね！」

P T小鬼「キャハハハ。」

〈基地航空隊〉

犬城「おう龍田。基地航空隊の調子はどうだ？」

龍田「あら提督。いい感じよ。で、なんのようかしら？」

犬城「ああ、こいつを置きに来た。」

龍田「あら。スツーカーじゃない。でもこれ艦載機じゃないの？」

犬城「それはJ u—87 C。これはJ u—87 D—5。20 m機関砲、それもマウザー砲を積んだ急降下爆撃機だ。」

龍田「あら、それは凄いわね。」

犬城「まあドイツだからな。」

龍田「そういえばまだ四式戦は配備されないの？」

犬城「ああ。技研は結構手間取って居るようだ。」

龍田「そう。早くしないとジェットが置かれ始めちゃうわねえ。」

犬城「もうできてるんだよなあ。試作ではあるが。」

龍田「あら、そうなの？」

犬城「ああ。陸上機だとうちにも2機つつF—15とF—16が配備されている。艦載機は千歳と千代田のF A—18とF—35があるな。」

龍田「うーん。四機だと心許ないわね。それがB—1とかならずごいんだけど。」

犬城「まあ、試作だしな。そのうち本配備が始まるさ。」

龍田「まあ、そうね。」

〈ガングート〉

ガングート「おお、初殿。おはようございます。」

犬城「だから今の俺は山城だから。」

ガングート「逆になぜ隠すのだ？提督はロシアの英雄だ。誇つていいことだ！」

犬城「よく考えてみる。その事を知って、変な慢心や過信が生まれたらどうする。それに、艦娘にはできる限り知られたくないんだ。もう過去の事を掘り葉掘り聞かれるのは嫌なんだ。」

ガングート「むう。ならば仕方あるまい。隠しておこう。」

犬城「頼む。」

ガングート「了解した。」

青葉「初？それにロシアの英雄？どういうことでしょう。調べてみますかねえ。」

く会議 そのに！く

祥鳳「はい、それでは『第二回提督情報交換大会議』を始めたいと思います。ではまず、欠席者の報告を。」

千歳「千代田は提督と一緒に試作艦装のテストに行ってるわ。」

山城「扶桑ねえさまは妹さんと一緒に遊びに行きました。」

潮「曙ちゃんと朧ちゃんは執務室で寝ています。」

北上「大井っちは今日は秘書艦だよ。」

天龍「龍田は基地航空隊の整備をしてるぜ。」

鳥海「摩耶は飛龍さんと対空演習です。」

赤城「加賀さんと蒼龍さんは食べ物を食べに行きました。」

サラトガ「ガングートは煙草を買いに行くと言いつつ三日間帰ってきてません。」

伊勢「日向は龍田のところで新しい水上機のテストとかなんとか。」

青葉「がっさは頭痛で休みです。」

金剛「比叡は尊氏さんと遊びにいったでーす。」

祥鳳「了解しました。では始めましょう。最初に、前回の最後に調査することになったことの報告を。」

秋雲「はいはい。提督のアレな趣味なんですけど、無いって。うん。」

愛宕「え、どういうこと？」

秋雲「全くわからなかった。もしかしたら提督、すごい純粋なのかも。」

愛宕「ええ…。」

川内「あ、提督の趣味なんだけど、どうもゲームみたいだね。提督

の部屋をちよつと漁ったら、ゲームがわさわさと出てきた。」

北上「ふむ。なら今度ドラクエについて語り合いますかね。」

青葉「提督への取材でもゲームと返されました。」

川内「なら確定だね！」

青葉「あ、で提督なんですけど、提督はやはり『犬走初』のようですよ。また、ガングートさん曰く『ロシアの英雄』なのだそうです。」

ヴェールヌイ「ロシアの英雄？だが私はそんなことは知らないが。」

青葉「はい。これについて調べた所、提督は元自衛官、それも対G部隊である特生自衛隊所属だったようです。あ、そのときはまだ犬走初ですね。で、当時滅びかかっていたロシアに単機で派遣され、そしてロシアを救っていますね。」

祥鳳「え、単独ですか!？」

青葉「いえ、現地の人と協力してですね。ですが、持たされた装備は戦闘機一機と自衛用装備、それと多少の必要物資のみのようです。」

神通「それはまるで：死にいかせているような。」

青葉「ただまあ、その後土地を取り戻しているところから見ると、提督の力量を評価して、なのかもしれませんね。」

神通「なるほど。それだけ提督が化け物じみていたと。」

青葉「まあ：そうなのでしょう。」

那珂「あれー？でも前に提督に犬走初なのかって聞いたたら、明確に否定されたよ？それに、千代田ちゃんも星野千代ではないって。」

夕張「あ、それなんですけど、少し思い当たるところがあつて調べてみました。その星野千代さんは、二年前に艦娘学校を首席で卒業している人です。なんとその千代さん、空母系の艦装全てに適合していたすごい人なんですよ。」

那珂「つてことは、やっぱり二人ともそうなんじゃん！なんで嘘ついたんだろ！むー！」

祥鳳「：はっ！まさか、提督はとてつもない悪人だとか！隠さないと表の世界で生きていけないような事を抱えてるとか？」

川内「：なら、余計に提督の事を探らなきゃだね。それも、提督に怪しまれないように。」

山城「…そうね。そうになると、その妹の犬走扶桑や尊氏なんかも怪しいわね。そして、千代田も。」

千歳「妹を怪しむのは嫌だけど…、正義のためよ。頑張るわ!」

雷「面白そうね! 駆逐艦でも頑張りますよ!」

電「なのです!」

………

千代田「あの一、提督?」

犬城「ああ、ここでは初でいいぞ。」

千代「あ、じゃあ私も千代ね。で、初。」

初「なんだ?」

千代「その…、ここ、何処?」

比叡「ふっふっふー! それは私がお教えしよう!」

千代「え、比叡さん!」

比叡「ここは、柱島泊地地下にある転生者の集う秘密基地、その名も『竜宮城』だよ!」

千代「え、転生者!」

尊氏「はい。我々の居た世界では、日本はアメリカやドイツと戦い、最終的に平和を手にしました。ですから、もうあの世界にあまり未練はありません。しかし、この世界はこのまま行けば確実に深海棲艦に負け、人類は滅びてしまいます。それを回避するために集い、戦っているのが私たち転生者なのです。」

比叡「もちろん、いままでも滅ぶような状況にはあつたんだ。日本人なら誰もが知っているあいつのせいだね。」

千代「…ゴジラですか。」

比叡「うん。だから、転生者たちは国を守るために対G兵器や特生自衛隊を作った。それのおかげでゴジラによって国が滅ぶのは回避したんだけど…。」

千代「深海棲艦が現れてしまった。」

比叡「そう。通常兵器が効かないことはわかっていたから、上層部

は大慌てだったよ。すぐに艤装の作成に取り掛かったしね。まあ、対G兵器があまりにも過剰な威力を出したおかげでそこまでのことにはならなかったけど。」

尊氏「さて、ここまでは艦娘が現れるまでです。現れるまではただ単に別世界の記憶を持った人間だったのです。だけど、艦娘になれた転生者はまた特殊だったのです。」

千代「…特殊？」

尊氏「はい。転生者かつ艤装の適合者は、なんと前世の艦の記憶を持っていたのです。人間ではなく。」

千代「…つまり、その前世の『艦艇』が転生して、人の体をもったってこと？」

尊氏「はい。それが、前世の艦の艤装に適合した転生者なのです。前世で超戦艦日本武尊であった犬走山城もとい犬走初、その二番艦の天照であった犬走扶桑もとい犬走終（ひいらぎ）、前世で防空軽航空母艦尊氏であった私、足利飛鷹もとい足利唯、前世で戦艦比叡であった比叡もとい高杉由香。そして、前世では超巨大航空母艦、建御雷であった。それが星野千代、貴女なの。」

千代「…え!?!私!?!」

唯「はい。とはいっても、まだ記憶は無いようですが。」

千代「う、うん。前世の記憶はないよ?。」

唯「転生者にも二種類居ます。一つに記憶を持った状態である程度育った状態で目覚める場合。もう一つに、その世界で一から生まれる場合。二つ目の場合、大抵は前世の記憶は思い出しません。ただ、何かしらのきっかけが原因で思い出すことはあります。それは前世での強烈な出来事だったり、些細な違和感だったりと色々です。」

千代「へー。」

唯「そして、千代さん。貴女にもこれから記憶を取り戻していただきます。」

千代「…うえ!?!どうやって!?!」

由香「というわけでここに建御雷の艤装があります!」

千代「あー、まさか。」

由香「はい！さあさあ、直ちに装備したまえ！」

千代「え、記憶を取り戻すって大丈夫なの!? 例えばほら、いままでの記憶が消えちゃうとか!」

唯「それなら問題ありません。少しひどい頭痛が起こる程度です。私も経験しましたが、意外となんとか耐えましたよ。」

千代「少しひどい頭痛!? やりたくないー!」

初「諦めてやれ。後でアイス奢ってやるから。」

千代「…じゃあ、やるから後で御褒美ちょうだい?」

初「褒美だと? はっはっはっ! 良いだろう! 成功の暁には大判を三百枚やろうではないか!」

千代「ははー! ありがたきしあわせ! ってそうじゃない! わかってよ!」

初「わかってるわかってる。後でな。じゃ、頑張れ!」

千代「うん!」

……

千代「というわけで取り戻したー!」

初「おめでとう。これで転生者の仲間入りってわけだ。」

千代「じゃ、御褒美!」

初「はいはい、わかった。ほら、行くぞ。」

千代「うん!」

由香「順調に転生者が集まりつつありますねえ。」

唯「だけど、転生者の事を知られてはいけません。日本が優位に立っていられるためにも。」

由香「ですね。特にアメリカなんか知られてしまっっては、何をしてくるかわかりません。あっちはひどいことになってますからね。」

唯「あっちの動き次第では手を切ることも考えなければいけないかもしれませんね。まあ、前世と違ってロシアが味方であってくれるのでなんとかはなりそうではありますが。」

由香「どちらにせよ慎重に、ですね。」
唯「ええ。頑張りましょう。」
由香「はい！」

第9話 波乱

く開戦、そして襲撃く

犬城「ドラクエで一番のヒロインはバーバラだろJK。」

加賀「いいえ、違いますね。ドラクエ最高のヒロインはビアンカです。これは譲れません。というかあんな終わり方をしているヒロインはよくありません。」

犬城「あのラストだからいいのだよ。ハッピーエンドよりもビターエンドの方がいいって白瀬さんもいつてた。というかこっちは生存が確定してるんだから、この先のストーリーだってあるさ。実際漫画はifストーリーでいったし。」

加賀「漫画は別次元の話なのでノーカンです。むう。ヒロイン談義はやめておいた方が良かったですね。」

犬城「答えが出にくい口論は色々不幸を招くからねえ。」

プルルルルル

犬城「お、電話だ。ちよつとすまん。」

ガチャ

犬城「はい、柱島の犬走です。」

黒田「飛行場担当の黒田です、隊長。」

犬城「おお、どうしたんだ?」

黒田「中国機が、緊急着陸の許可を求めています。どういたしましようか?」

犬城「…ふむ。緊急着陸の許可を出せ。飛行場の兵は対歩兵装備、第一種戦闘配備。」

黒田「了解しました。」

犬城「加賀さん、俺が居ない間仕事を頼む。」

加賀「わかりました。気をつけて。」

犬城「ああ、ありがとう。」

初「で、何があったんだ?」

黒田「隊長!?!敬礼!」

初「うむ。現状の報告を。」

黒田「はい。着陸した機に乗っていたのは、中国の閣僚の方でした。」

初「ほう?なぜ日本に脱出を?」

黒田「彼らの言うには、中国でクーデターが起こり親深海棲艦の政権がたつてしまったとのことです。」

初「ふむ。確かに親深海棲艦派を抑えていた彼らは脱出するしかないだろうな。」

黒田「また、その新政権は深海棲艦にとって最大の敵である日本を深海棲艦とともに滅ぼす、と掲げているそうです。」

初「つまり、深海棲艦のみならず中国軍も攻めてくる、ということか。」

黒田「はい。」

初「…とりあえず、この情報はすぐに大高首相へ伝えろ。彼らは輸送機にて東京へ送れ。」

黒田「了解しました!」

初「頼んだ。ああ、それと航空隊はいつでも迎撃に出れるように準備しておけ。もちろん装備は対人だ。彼らにも仕事をしてもらおう。」

黒田「了解しました。」

犬城「たっだいまー。」

加賀「て、提督!大変です!」

犬城「おおう!?!加賀さんがここまで取り乱すなんて珍しいな。どうした?」

加賀「そんなのんきなことを言っている場合ですか!中国が日本に宣戦布告しました!」

犬城「そいつあ律儀なこと。開戦理由は?」

加賀「深海棲艦の敵だから、だそうです。訳がわかりません。」

犬城「お、大高首相の会見だな。あ、そうだ。『あー、あー、千代田、

妹の方の扶桑…めんどいな、終！あと龍田、執務室へ直ちに來てくれ。』さて、会見を見るかね。』

加賀「はあ。」

大高『えー、本日8月16日午前8時15分、中華人民共和国が我が国日本国に対して宣戦布告を行いました。深海棲艦の敵であるため、深海棲艦の同盟国中華人民共和国は宣戦布告する、とのことです。』

記者『なぜ中国はそのような理由で我が国に宣戦布告したのですか？』

大高『はい。どうやら、中華人民共和国は過激派の親深海棲艦組織によるクーデター政権が樹立されてしまったようなのです。』

記者『では、今までの政権はどうなったのですか？』

大高『三割はそのクーデターの際に殺されたそうです。残りの人たちは飛行機にて脱出し、先ほど日本の柱島の飛行場に不時着しました。現在空自の輸送機にて東京へ向かっています。』

記者『では、そのクーデター政権は正当な中華人民共和国の政権ではないのですか？』

大高『はい。前政権のものが譲り渡すでもなく、また正式な政権樹立ではない、と現在こちらに向かっている閣僚の方に確認できています。そのため、本日宣戦布告をおこなったのは中華人民共和国を騙るテロリストであると言えます。』

記者『今までは深海棲艦に対し、対特殊生物法を元に戦って来ましたが、これが中国軍に対して適用出来るのですか？』

大高『いいえ、出来ません。なので、中国軍が攻めてきた場合は、自衛権を元に特生自衛隊を除く自衛隊による迎撃となります。ただし、もし中国での調査によって現クーデター政権が過激派深海棲艦の傀儡政権であると判明した場合、中国閣僚の要請があれば国連決議第1570番、『深海棲艦に関する決議』で決まったことを元に、中国の解放のため進軍することはあり得ます。』

記者『そのときは中国軍とも…？』

大高『すいません。少し待ってください。なに?…わかった。えー、現在、中国軍の戦闘爆撃機500機以上が日本に向かって来ています。各基地から迎撃機がスクランブルしています。また、ロシア軍にも応援を要請しています。』

千代田「ただいま来ましたー。どうしましたー?」

犬城「遅い!中国軍の戦闘爆撃機が日本に向かっている!今すぐ『ちよだ』を動かせ!艦載機を対空装備で上に上げろ!あとこがも達もズムウオルトに乗せろ!長距離対空ミサイルによる敵機迎撃の準備だ!一機たりとも国土を攻撃させるな!終は俺の代わりにオウスノミコトに乗れ!全兵装使用を許可する!龍田は鎮守府内の対空兵器を管理しろ!近づく敵機は全て落とせ!加賀は鎮守府を頼む!」

加賀「提督は!?!」

犬城「俺は空に上がる!急げ!敵は待つてはくれんぞ!」

ピーピーピー

犬城「どうした!」

黒田「敵機群領空侵入まであと30分です!今から迎撃部隊をあげます!」

犬城「了解した!俺も上がる!」

黒田「どれですか!」

犬城「F-22だ!リボン付き!」

黒田「了解!準備しておきます!」

加賀「提督!お気をつけて!」

犬城「ああ!」

黒田『こちら管制塔!隊長、離陸を許可します!』

初『了解。犬走初、TACネーム『ヤマト』、コールサイン『メビウス1』、出撃する。』

Sunflower『こちら空中管制機サンフラワー。本土防衛に上がった君たちの指揮を取らせてもらう。各機、状況を報告してく

れ。』

omegal『こちらオメガ小隊、スタンバイオーケーだ。』

wizardl『ウィザード隊及びソーサラー隊、いつでも行ける。』

blaze『ラズグリーズ隊、五機とも問題ない。』

Chiyodal『ちよだ』艦載機隊、全機問題ありません!』

yamatomobiuslonstandby.』

Sunflower『ヤマト、お前はまだ中隊詐欺をやっているか。』

yamoto『中隊を組むような余りが居ないから仕方ないだろう。』

omegal『ははは!皆お前と組むと戦果を皆持つてかれるってわかってるからな!給料のために組まんだろうよ!』

yamoto『んなもん横取りしてもおとしやいいじゃねえか。』

Sunflower『はあ…。おまえらなあ…。…ん、その…。白鳥に数字のゼロのFA-18。貴様のTACネームと所属を答えろ。』

shinanono『私?TACネームはシナノよ。』

Sunflower『女性パイロットか。所属は?』

shinanono『空母ちよだよ。ただ、勝手に上がったから小隊には入れてもらえてないわ。』

yamoto『あー、シナノ、船はどうしたんだ?』

shinanono『比叡に任せたわ。』

yamoto『…さよか。』

Sunflower『ほう、知り合いなのか?ならちようどいい。シナノ、君はヤマトの二番機だ。これ以降、君のコールサインはmobius2だ。』

shinanono『了解!メビウス2、小隊に加わるわ。』

omegal『ひゅーひゅー!お似合いのカップルだな!』

shinanono『え、よく付き合ってるってわかったわね。』

omegal『…え?』

Sunflower『はあ…。ほら、もうすぐ接敵する。気を引き締める。』

yamato『了解。』

Sunflower『あー、こちらは航空自衛隊所属のJ-WACS、サンフラワーだ。貴機群は日本の領空を侵犯している。直ちに引き返せ。さもなければ進攻とみなし撃墜も辞さない。繰り返す。直ちに…』

enemy captain『全機、行くぞ！日本を叩き潰せ！中国、そして深海棲艦に栄光を！』

enemy『オーツ！』

Sunflower『…駄目なようだな。よし、全機交戦を許可する。全て叩き落とせ！一機も取り逃がすな！』

wizard1『ウイザード1、エンゲージ！』

omegal『オメガ1、fox2！』

yamato『よし、シナノ！花火の中に入ったむぞー！』

shinano『了解！さあ、ボムズアウェイ！』

ボーン

yamato『さあ！6AAM、翼下ポッド合わせて18射線！食らえ！』

chopper『おいおい！なんだあのコンビは！一瞬で30機以上落としやがった！』

schwarze leader『ハハハッ。化け物海兵が化け物海兵カツプルに格上げだな！』

pixy『二人組なら俺達も負けてないぜ？』

wizard1『ラリー。お前らはおまけがついて番犬トリオだろう？』

PJ『おまけとはなんですかおまけとは！』

cipher『ハハハ！確かにそうだな！PJはおまけだな！』

PJ『サイファーまで！ひどい！』

garuda2『俺達はコンビだけど…あいつらには敵わないな。』

garuda1『対地ならワンチャンあるかもな。』

Sunflower『まあ、そうか。』

yamato『こんな戦場で生き残った君たちにはミサイルを二本
づつやろう。』

shinano『FABドローン！』

ボンドカアアアアア

garudal『こいつあひでえや。』

garuda2『…ひえー、だな。』

Sunflower『あー、敵機全て撃墜。これより帰投するぞ。

…！潜水艦発射ミサイル!?!』

edge『まさか、散弾ミサイル!?!』

chopper『全機、高度5000フィート(1500メートル)

以上上昇しろ！死ぬぞ!』

shinano『なにに？ 炉号弾?』

yamato『どちらかというところだ！ 上昇するぞ!』

ドオオオン

Sunflower『全機無事か!?!』

Chiyo dal『もちろん!』

omega5『ストーンヘンジに比べればましだな。』

Sunflower『よかった。しかし潜水艦だと、浮上しないと
我々ではどうにもできないな。』

ドオオオン ドーン

schwarze leader『なんだ？ 水の柱が二本も立った

ぞ?』

wizardl『何があった、サンフラワー?』

Sunflower『今確認を…む? 暗号電だ。なに、『我、雷撃二
テ所属不明潜水艦二隻ヲ撃沈ス 竜宮ノ亀』…どういことだ
?』

PJ『竜宮ノ亀つてあれですよ? 艦娘がピンチになると、どこか
らともなく敵を雷撃で全滅させる謎の潜水艦! 実在したんだ! す
げえ!』

Sunflower『…まあ、我々はそれに救われたようだ。よし、

全機帰投しよう。』

pixy『了解。さ、PJ。帰るぞ。』

PJ『えー！竜宮ノ亀を探したいんですけどー。』

cipher『駄目だ。』

PJ『そんなー。』

pixy「んで、撃墜数はヤマト、シナノ、ブレイズの虐殺トリオがトップスリーか。」

wizardl「お前の相棒も結構落としていたが、まああれには敵わんな。」

PJ「レーザー積んだらあれぐらい落とせるんですかねえ…？」

pixy「そうでもないから、F-16にレーザー載つけようとするなよ。」

PJ「はい。」

pixy「んで、その三人はどこに？」

cipher「ヤマトとシナノは鎮守府へ帰ったぞ。」

PJ「え、もしかしてシナノさんって艦娘!？」

pixy「なるほど。ならヤマトと付き合っけていてもおかしくはないな。」

cipher「ちなみに結構かわいかった。」

pixy「艦娘は皆標準以上だろう？」

wizardl「北上さんはいい人だ。」

PJ「みんなかわいすぎますね！で、ブレイズはどこに？」

cipher「そこで漫才やってるが。」

PJ「え？」

ナガセ「確かにあれは敵だけど、あんな落とし方をする必要はなかったでしょう!？」

ブレイズ『はい』『ピピー』

ナガセ「もう少し、優しく、バイルアウトしやすいように撃ってあげるとかもできたでしょう!？」

くニンジャ？く

犬城「ねーねー大井っちー。最近俺の部屋が少し荒らされてるんだけどさ、心当たりない？」

大井「あるわけないでしょうに。とういか気のせいでは？」

犬城「いや、それはないな。俺が竹本泉さんの読み切り漫画の発売順を間違うはずがない。」

大井「それは確かに無いですね。提督に探りを入れる者。何者でしようか。」

犬城「わからん。ただ、あの部屋にはゲームと漫画位しかないから、政治的な意味はないと思う。」

大井「じゃあ艦娘ですかねえ？」

犬城「かねえ。でもあそこに忍び込むとなると、忍者でもないと思しいだろうな！ははは！」

大井「私でも行けそうですけどねえ。あ、今度漫画を読みに行つて良いですか？」

犬城「おう。徹夜で読みに来てもいいぞ。」

大井「じゃ、今日の仕事が終わったら一緒に行きましょう？」

犬城「了解した。じゃ、さっさと仕事を終わらせちまおう。」

大井「はい。」

くガチャく

犬城「なーなー衣笠く。パワプロのガチャ代わりに引いてくれー。」
衣笠「え、なんで？自分で引けばいいじゃん？」

犬城「いやー、なんかさ、他人に引いてもらった方がいいの出るんだよね。少し前に加賀さんに引いてもらったらPSRのハッチ引いてくれたし。あれは嬉しかった。」

衣笠「提督ハッチ好きだもんね。この前の着物ハッチ逃した時とか泣き崩れてたもんね。いいよ、回したげる。」

犬城「頼む！」

衣笠「よーし、まわすよー！」

犬城「羅針盤は回すものじゃないです。」

衣笠「お、虹色の野球ボール。SRは確定だね。」

犬城「つしやあ!」

衣笠「え、喜びすぎ。」

犬城「俺が回したらPR祭りだから…。」

衣笠「あー、うん。心中お察しします。おお?…え、SR3つ!」

犬城「なんとっ!」

衣笠「あー、でも目玉の大谷投手はPRだね。」

犬城「SRが3つもあるだけで十分なのです…。」

衣笠「えーっと、SRは須藤…ああ、あのディレイドアームくれる投手と、あ、新しい高校の野手だね。おお、コツがパワヒと打球ノビしかない。でラストは…うえ!」

犬城「…え、PSRの大谷投手!? ナイス衣笠!」

衣笠「やったー! すごいね、他人のだと出るね! 今度私のガチャも

回してよ!」

犬城「おう! いいの出してやるぜ!」

後日衣笠のを回したところ、PR祭りだったのは言うまでもない。

…あ、これ筆者のリアルの話です。運がない人はガチャを他人に回してもらおうといいよ!

第10話

カガウスワン

「これがほんとの犬城」

犬城「加賀さん、前方からヤク！」

加賀「機関砲で段幕張ります！」

ガガガガガガ

ボン ボン ボン ボン

加賀「あ、落ちました。」

犬城「くそっ！おのれyak—9T！くらえ、20mm6門！ス

ツーカーの底力を見せてやらあ！」

ガガガガガガ

ドーン

犬城「え、やられた。」

加賀「あ、スピットに見事にやられましたね。」

犬城「おのれブリテンんんんんんん！」

加賀「むう。勝てませんね。」

犬城「だねえ。ウォーサンダー面白いんだけど、勝てない。」

加賀「火力は足りてるはずなんですけどね。」

犬城「ま、本職と格闘戦するのがそもそも間違ってるのかもな。」

加賀「何を言いますか。スツーカーの無限の可能性は果てることはあ

りませんよ。ほら、もう一戦行きましょう。」

犬城「だといいいんだがなあ。」

ドタドタドタドタガチャ

山城「てっ、提督！提督！大変です！」

犬城「んー？どうしんだ山城、そんなにあわて…て…。」

加賀「提督？どうしたんですか、絶句し…て…。」

山城「その…耳と…尻尾が…。」

犬城加賀「山城がわんこになっちゃったああああ!？」

犬城「…で、なにがあった？」

山城「知りません！起きたらこんな姿になってました！」

加賀「山城、お手。」

山城「しませんよ！」

加賀（　　・ω・　　）

犬城「むう。原因がわからないとどうしようもないな。とりあえず尻尾もふっていいか？」

山城「駄目です。」

犬城（　　・ω・　　）

山城「とりあえずどうかしててください！」

犬城「無理。」

山城「そんなあ…。」

犬城「だってどうしようもないし。ま、コーヒーでも飲め。」

山城「有難うございます…。はあ。」

加賀（耳が閉じた。かわいい…）
モフッ

山城「ひやうううう!?」

加賀「おお、すごいモフモフです。」

山城「あつ、やんつ、か、加賀さん、あん、尻尾、揉ま、ないで、いやんつ」

犬城「おー、俺も触っていいか？」

山城「だ、あんつ、ダメです！ていと、んつ、提督はだめ！絶対に！」

犬城「そんなー。」

山城「加賀さ、んつ、揉むの、やめてっ！」

加賀「嫌です。」

山城「こっちはつ、んつ、胸を鷲掴みにつ、されて激しく揉ま、ああんつ、揉まれているようなか、ん、感覚なんです！やめ、やめてください加賀さん！」

加賀「むう、それならやめます。」

山城「はあ、はあ、はあ…。」

犬城「…犬耳と尻尾が生えて、着物が少し崩れた山城が顔を赤くして息を荒げながら座り込んでいる。なんとというか凄い扇情的だな。」

加賀「女の私でもそういう感情が芽生えるあたり、かなりの色気で
すね。」

山城「はあ、はあ、もう、知りません！ふん！
ガチャパタン

加賀「あーあ、行ってしまいましたね。」

犬城「もう少し見ていたかったがな、犬耳山城。」

加賀「ですね。」

山城「きやああああああ！」

犬城「！今のは山城の声か!?行くぞ加賀！」

加賀「はい！あのモフモフは守らねばなりません！」

犬城「そうじゃないが…まあ行くぞ！」

犬城「！居たぞ！こっちに倒れてる！山城、大丈夫か！」

山城「…提督…今まで…ありがとう…。ガクツ」

犬城「山城!?応答しろ山城！山城おおお！」

加賀「そんな…山城が…モフモフが…ああ…」

犬城「やましろおおお…、ああああ…」

摩耶「…なあ、あんたらなにやってんだ？」

犬城「摩耶！山城が、山城があ！」

加賀「モフモフが…。戻っている…。ぐすつ」

摩耶「…山城笑ってるけど。」

犬城「山城が…え？」

加賀「モフモフ…。」

山城「…ぶふっ。あはははははは！」

犬城「…へ？」

加賀「モフモフがない…。」

山城「あははははは！あー、面白かった！二人ともガチな反応してく
れて笑いをこらえるのが大変だったわ。」

犬城「山城…。」

加賀「モフモフ…ない…。」

山城「？」

犬城「よかったああああ！うわああああん！」

山城「ちよ、提督!?うわああ!?なに!?スイッチ入っちゃったああ!?」

摩耶「…へ!?提督ガチ泣きだし!ちよ、妹さーん!尊氏さーん!だれかああ!?」

加賀「モフモフ…。」

大井「提督を泣かせたのは誰だあ!」

摩耶「うわあ!?大井さん、どっから出てきた!?」

大井「床下よ!それよりなにをしたあ!摩耶あ!」

摩耶「アタシじゃねえ!山城が死んだふりして提督騙したんだ!」

大井「やーまーしーろー?」

山城「加賀さんに尻尾をもふられた仕返しにやったのよおお!今はすぐ後悔してるわ!」

大井「はあ…。提督隠してたのに、見事に公開しちゃったわね。」

摩耶「え、隠していた?」

大井「ええ。皆にとつて良い提督である『犬走山城』であるために、弱い部分は全て隠して今までやって来たのよ。その隠していたもののひとつがそれ。」

摩耶「…なんで大井さんはそれを知ってた?」

大井「おそらくそういう部分を鎮守府で一番知っているのは私よ。」

まあ、たまたま、ね。」

摩耶「そうか。ま、深くは追及しないでおく。んで、あれどうすればいいんだ?」

大井「ほおっておきなさい。それより加賀さんの方が深刻じゃないかしら?」

加賀「モフモフ…。」

摩耶「…毛皮でも握らすか。どうぞ、加賀さん。」

加賀「ああ…!モフモフ…!はっ!山城は!」

大井「大丈夫、生きてるわ。」

加賀「はあ…。よかった…！」

犬城「…あー、すまなかった。取り乱した。」

摩耶「あつはっは！面白いものが見れたから別にいいぜ！」

山城「もともと私のいたずらのせいだから…。ごめんない。」

犬城「うん…大丈夫だ。…ごめん、少し風に当たってくる。」

山城「あ…はい。」

加賀「…パワプロなら評価が10ほど上がるイベントでしょうか。体力とやる気、精神ポイントダウンで。」

大井「まあ、そうなるわね。」

く会合く

《大高首相宅》

大高「さて、皆さん。今日はお集まりいただきありがとうございます。今回は色々議題はありますが、まずは報告から。何かありますか？」

海軍少将：前原一征「はい。中国の海軍力ですが、水上戦力に関しては張りぼてとしか言いようがありません。どれも旧式艦ばかりであり、こちらの水上艦隊との艦隊決戦となれば勝利できるでしょう。しかし、その代わりに潜水艦戦力がかなり充実しています。通常の潜水艦だけでも100隻以上。さらに、シンファクシ級ミサイル潜水空母という潜水艦が数隻あるようです。」

大高「ほお。潜水空母ですか。」

前原「はい。どうやら無人ジェット戦闘機を十機程度搭載しているようです。また、弾道ミサイルはかなりの脅威になります。まず、この弾頭は再突入後3000メートル前後で中弾をばら蒔き、さらにその中弾は1500メートル前後で破裂、子弹をばらまくという面及び空間制圧兵器です。これの範囲かつ1500メートル以下の航空機は確実に撃墜されます。また、対地攻撃に使用された場合、かなりの被害を広範囲に及ぼすことになります。よって、このシンファクシ級ミサイル潜水空母を最重要目標のひとつとするべきであると思

ます。また、これの対策に各地に弾道ミサイル迎撃を常に用意しておく必要があります。」

初「この弾道ミサイルですが、今回は散弾頭でしたがこの弾頭を炉号弾頭のようなサーモバリック弾頭に変えられてしまうと、対応が混乱することになります。特に、今回の迎撃の時のようにエース部隊が固まっている際にこれを撃ち込まれた場合、最悪全滅しかねません。」

大高「ふむ…。早急に対応策を練る必要がありますな。本土だけでなく、部隊も守る方法もですな。」

泰山航空工業株式会社社長・東野源一郎「あの、それなのですが、こちらですでの対応兵器の試作が済んでおります。」

大高「おお、本当ですか。」

東野「はい。空中管制機に随伴して行動する機体で、前世の『斜銃』の発想を元に、E-767と言われていた『星龍』の上面に最新レーダーシステム及び迎撃用全天候高精度プラズマレーザーを一門搭載、また自衛火器として航空機搭載30mmレールガンを二門搭載しております。早ければ再来月にでも一号機を納入できるかと。」

大高「早いですな。いや、少し早すぎませんか？」

東野「実はですな、深海棲艦による被害での星龍喪失の可能性を考えて十機ほど作っておいたのですが、そのときは全く被害も出ず手持ちぶさたとなっていたのです。ですが、こんなところで役に立つとは。十機全てを納入するのに半年もかからないかと。」

大高「それはすばらしい。では早速お願い致します。」

東野「了解です。」

大高「他に、何かありますか？」

軍令部総長・高野五十六「はい。どうやら、一部の鎮守府及び泊地にて提督や艦娘によって強姦や暴行、なかには監禁や拷問等が行われているようなのです。特に幌筵や单冠、宿毛の状況はかなり酷いそうです。また、他の泊地でも提督が関与しないところでの艦娘による暴行などがあるそうです。ただ、どれも尻尾を出さないために対応しづらいというのが現状です。」

千代『え、そんなのあるの?』（ボソボソ）

初『うちは結構いいほうだ。他所は酷いところはほんと酷い。』(ボソボソ)

大高「ふむ…。それは由々しき事態ですね。対深海棲艦の要のひとつである艦娘がそのような状況では、中国への対応にも支障が出るかもしれませんな。」

初「：艦娘による探りを入れますか？」

大高「：いや、ここは陸軍に任せてもらおう。本郷くん。東機関で調査をしてくれ。」

諜報機関『東機関』指揮官、陸軍少将・本郷義昭「わかりました。すぐに行きます。」

大高「あとは…中国ですな。」

高野「はい。中国海軍はそこまでではありませんが、空軍、そして陸軍が問題です。」

海軍元帥：大石蔵良「現在中国陸軍は300万人程度のようにです。また、空軍は戦闘機及び爆撃機は三千機程度のようにです。特に戦闘機パイロットはエース揃いのようで、通常の空自パイロットだと多少苦労することになると思われます。」

大高「そうか。やはり数が多いな。」

大石「ですがしつかりと手を打てば倒すことは容易です。手を間違えないこと、そして敵の奇策に嵌まらぬようにすればこの戦、負けることは無いでしょう。」

大高「そうですね。ふう。さあ、難しい話はこちらまでにして、夕食としましょう！旨い魚を取り寄せてありますからな！」

高野「星野くん、いや、今は千代田かな？」

千代「た、高野総長！お久し振りです！」

高野「ははは！そんなに畏まらなくていい。やはり君も転生者だったのか。」

千代「はい。前世では建御雷でした。」

高野「おお、建御雷だったのか。なら高杉君と川崎君も呼ぼう。高杉君、川崎君、建御雷が居るぞ！」

海軍元帥：川崎弘「なに、建御雷ですと？」

海軍元帥：高杉英作「どれどれ、おお、千代君ではないか！久しいな！」

千代「高杉教官！お久し振りです！」

高杉「うむ、元気そうで何よりだ。」

川崎「：ううむ、艦の転生は聞いてはいたが、あの巨大で堂々としていた建御雷がこんな小娘になっているのは、なんというか：複雑ですな。」

高杉「ははは。そのうち慣れる。私も比叡が艦娘の姿になって私の前に現れたときは絶句しましたからな！」

高野「まあ、そうだろうな。星野くん、初のやつとは上手くやっていけるかね？」

千代「はい！付き合い始めてもう二ヶ月になりますが、楽しくやっていけています！」

高野「ほう？付き合っているのか。ははは。若さというのは良いものだな。」

高杉「なに!?付き合っているだと!?犬走！」

初「はい!?なんででしょうか！」

高杉「貴様！建御雷に手を出したのかあ！」

初「ヒエエエ!?!」

川崎「ふふ、鬼高杉の特訓コースだな。」

高杉「根性を叩き直してやる！表に出ろお！」

千代「きよ、教官！落ち着いてえ！」

高杉「貴様なんぞに建御雷はやらあん！」

千代「教官んんんんんん!?!」

ワーワーギヤーギヤー

大高「ははは、高杉さんもまだまだいけますな。」

前原「あれは上司というより父親見たいですがね。」

大高「ははは、そうですね。」

ヒエエエエエ!?!

「私の提督はパイロット、そしてわたしもパイロット」

大井「そういえば、なんで提督はF-22に乗って迎撃に行ったんですか？提督は海兵でしょう？」

犬城「ああ、俺は元々空自パイロットだったんだ。そのあと特自行って、ここに来た。」

大井「へー。昔からエースだったんですか？」

犬城「いいや？俺がここまで強くなれたのは隊長のお陰なんだ。」

大井「隊長とは？」

犬城「ん、俺はメビウス小隊に配属されたんだが、そのときにメビウス1をやっていたのが隊長だ。F-22乗りなんだが、国連の評価では一機で十個小隊分の戦力になる、と言われるほどだったな。」

大井「ちよつと待ってください。十個小隊ですか!？」

犬城「ああ。だから、今の俺でも全く及ばないよ。その人は今は別のところに配属されてる。で、その後にメビウス1になったのが俺。ま、今となってはメビウス小隊も俺と千代田だけなんだがな。」

大井「へえ…。」

加賀「その事なんですけど『メビウス2』。上の許可が降りたので復帰します。」

犬城「え、まじですか加賀さん、いや、隊長？」

大井「…え、え!?!隊長って加賀さん!？」

加賀「はい。私は一人目の加賀にして初代メビウス1です。で、高野総長から兼職の許可が降りたので、本日付でメビウス3としてメビウス小隊に参加します。一番機は頼みますよ？泣き虫ヤマト？」

犬城「が、がんばります…。ひえー。」

大井「…なんか、色々あります。」

第11話

〈艦戦談義〉

赤城「さて、空母の皆さん。今回集まってもらったのは、最強の艦戦を決めるためであります。」

加賀「そうですか赤城さん。それはとても面白そうですね。帰っていいですか?」

赤城「だめです!」

千歳「最強の艦戦、ですか?」

赤城「はい。艦載機を扱うものとして、これだけは決めておきたいと。」

瑞鶴「ならさ、最強の艦爆も決めるべきじゃないですか?」

飛龍「なら最強の艦攻も!」

赤城「面白いですね!では早速あればどうぞ!」

加賀「:ならば、その3つすべての部門にドイツのJ u—87を推薦します。」

瑞鶴「え、3つ全部!? スツーカが!」

加賀「はい。スツーカは、瑞鳳さんがいままさに推薦しようとしていた九九艦爆よりも古い機体であり、また大戦を通して終戦まで使われた機体です。」

瑞鳳「なっ!で、でもでも、そんな古い機体なら九九艦爆の方が勝っているわ!それに艦載機じゃないわ!」

加賀「甘いですね。スツーカには艦載機型も存在していて、800kg魚雷を一本積めました。また、爆撃機としては戦果が示す通りですし、後期においては固定武装に20mm機関砲を搭載しており、十分な火力もあります。また、対地攻撃機型のG型もありバリエーションは豊富です。」

飛龍「待った!さりげなくスツーカで一括りにしているけど、艦載機じゃない機体も混ざっているわ!それに、魚雷搭載機は実戦配備されてなかったはずよ!それは無いわ!」

加賀「むう。押しきれれると思ったのですが。」

飛龍「ふふーん。どうよ！」

赤城「うーん、まあこれは残念ながら無し、という事で…。」

瑞鶴「はいはいーい！じゃあ橘花が最強よ！あの速度ならどの戦闘機だつて追い付けないわ！」

葛城「たしかに、そうですね。艦載機？ですし。」

千代田「…なら、FA-18が最強じゃないかしら？」

赤城「そんな現代兵器、艦娘の装備にはないので無しです。」

千代田「え、でも」

加賀「そうですね。あつたとしてもこんな末端には来ない秘匿兵装でしょうね。」

千代田「！あはは、確かにそうですね。」

加賀「全く…。」

尊氏「あのー、そもそも試作機しかないような機体が艦娘の装備になつて居るのですから、比較は難しいかと…？」

赤城「あ。」

尊氏「あはははは。」

く比叡と提督く

犬城「…なあ、比叡。」

比叡「はーつー？二人きりの時ぐらいお姉ちゃんと呼んでくださーい。」

犬城「…はあ。姉さん。仕事の邪魔だから膝から降りてくれ。」

比叡「いーやつ！」

犬城「…不幸だ。」

比叡「…んー。昔はもっと甘えてくれたのにー。」

犬城「俺ももう大人だ。それに、今は仕事だ。」

比叡「あー、そつか。初は仕事中はほぼ別人格に近いもんね。いやあ、弟が気持ち悪いよ。」

犬城「ああん？なんでだ。」

比叡「だつてさ、提督の仕事中の初が山城二人で二種類、パイロットの初がヤマトで一種類、軍人としての初が一種類、そして本当の初

が一種類。合計五種類の顔を持つてるんだよ？ここまでくると気持ち悪いよ。」

犬城「…たしかに、言われてみればそうだが…。それぞれに適した顔を作るのはもう癖に近くなってるからな。どうしようもないんだ。」

比叡「そっかー。いつかは本当の初で居られるようになるといいね！」

犬城「…まあ、そうだな。」

比叡「そういうことは千代ちゃんにも期待だね！」

犬城「千代は…うーん。まあ特に気にしないと思うが。」

比叡「そうかなあ。にしてもあれだよな。よく初が好きだー、って言っている人も居るけどさ、大体の人はその初のことを全く知らないんだよね。」

犬城「まあ、そうだな。ある意味お見合い結婚が近いかもな。」

比叡「ま、もう千代ちゃんがいるから遅いけどね！」

犬城「まあ、そうなるな。」

青葉「ふふふ。壁に青葉障子に青葉、どこであろうと青葉です。色々と情報がてに入りましたねえ。まだまだ手に入れて、悪人を表に出してやりましょう！」

〈団体〉

犬城「うーん、やっぱり滑走路が一つだと足りんか。」

ピクシー(Pixy)「ああ。迎撃に上がるのならやはり二本あった方が早く上がれるだろう。」

犬城「けど、土地がね…。」

サイファー(Cipher)「ま、今のままでも小隊ずつは上がれるんだからいいんじゃないか？」

犬城「戦闘機は良くても爆撃機がねえ。」

黒田「隊長、民間機が緊急着陸を求めています。」

犬城「そりやまたなんでだ？」

黒田『燃料漏れだそうです。』

犬城『そうか。んじや、着陸を許可してやれ。民間人はC―130で呉に送ってやれ。』

黒田『了解、着陸を許可します。』

犬城「うーん、そもそもうちの飛行場は島をまたいたいらにして無理やり3kmの滑走路を作った物だからねえ。これ以上増やすとなると、完全に戦闘機用か、島の外にメガフロートで作るか、だねえ。」

PJ「でもちよだがありますから、艦載機はそっちから飛ばせばいいんじや?」

犬城「まあ、パイロードに問題がなくなった今の日本ならなんとかなるが…。お前らや俺らは飛べんぞ。」

PJ「あ。」

サイファー「いつぞやのヴァレーの時みたいに、XB―Oが来て滑走路を壊されたらどうしようもないな。ま、敵討ちはシナノがやってくれそうだが。」

犬城「即行で治せばA―10とかC―130なら飛べるが、戦闘機とかはちよつと怖いな。」

ピクシー「ん?なあ、あれって民間機か?」

犬城「ん?ああ。燃料漏れで緊急着陸を求めてきた。ま、直ぐ帰ってくれるだろ。というか送り返す。」

ピクシー「じゃあなんで機体を滑走路のど真ん中に置いたまま乗員が降りてきてんだ?」

犬城「は?」

黒田『隊長!民間機がこちらの誘導に従いません!』

犬城『はあ!?!なんでだ!』

黒田『不明です!滑走路のちょうど中心で民間人が固まっています!』

ドカーン

犬城『次はなんだ!テロか!』

ピクシー「違う。あの民間人ども、自分達の飛行機を吹き飛ばしやがった。」

ビショップ (warwolf1) 「なんだ！敵襲か!？」

サイファー「いや、敵襲ではなく暴動、かな？ま、ゲームの言葉を引用するなら『騙して悪いが』ってやつか？」

ピクシー「サイファー、少なくとも俺らはいつらと仲間だとは思っていなかったし、あいつらも依頼ではないな。あとACに乗っていない。」

PJ「じゃ、AC-130でも飛ばしますか？」

犬城「駄目だ。1500mでは飛ばしてはならん。」

ガッツ (warwolf2) 「まあ、なんかあつたときにあの人たち潰してしまうかもしれないしな。」

黒田「隊長。なんなんでしょうか、あれ。座り込みを始めましたよ？」

犬城「わからん。得体の知れない以上、様子見だ。基地のやつには近付かないよう言っておけ。」

黒田「了解です。」

ブレイズ (blaze) 「なんだ、まだ朝だが。なにがあつた？」

グリム (archer) 「敵襲…ではないですね。なんでしょう。」

ピクシー「ん？あいつらなんか広げ始めたな。何か書いてあるな…なにになに…？」

《戦争反対!》

《日本の平和を乱すな!》

《戦闘機はいらない!》

《世界は変わった!戦いは要らない!》

ガッツ「…なんだありや。」

ビショップ「アメリカで言う白人史上主義者のようなものだ。現実が見えていないんだ。だからあんなことが出来る。」

ピクシー「ははは!『世界は変わった』か!笑えるな!とりあえず核を落としていいか!？」

サイファー「やめろ。もう落ちた。」

ピクシー「ああ、そうか。そうだったな。」

犬城「むう。仕方ない。空母からの離着艦が出来るやつは空母ちよ

だの方へ移ってくれ。機体は多少制限されるが、上がれないよりはましだろう。」

ブレイズ「了解した。」

ビシヨップ「了解。俺たちもいく。」

犬城「頼んだ。…はあ。俺はあいつらの説得に向かうかねえ。不幸だ。」

サイファー「頼んだぞ、基地司令官?」

犬城「善処する。」

犬城「あー、私は柱島航空自衛隊基地司令官の犬走山城です。貴方は航空機の離陸を妨害していますので、今すぐ滑走路上から退いて下さい。」

団体A「ふざけるな! 戦争するための飛行機を飛ばさせてたまるか!」

団体B「日本に戦闘機は要らない!」

団体C「日本から出ていけ!」

犬城「聞く耳持たず、か。どうするかねえ。」

団体A「お前らが出ていけばいいんだ!」

団体B「そーだそーだ!」

犬城「はあ。わかりました。我々は出ていくつもりなど毛頭ないので、いつまでも座り込みを続けていて下さい。じゃ、そういうことで。」

団体C「はあ!? ふざけるな! 出ていけ!」

ワーワーギャーギャー

ピクシー「んで、どうするんだ?」

犬城「彼らが諦めるか全員餓死するまでは飛行場は使えないので、ちよだで防空艦及び臨時の飛行場として使う。陸上機は、当分お休みだ。ただし、整備は怠るな。」

サイファー「了解。いやはや、面倒なこった。」

犬城「ま、意味のないことだと示すために、ちよだは彼らから見え

る位置で艦載機を飛ばしてもらおう。それを見れば諦める…かも？」
サイファー「諦めてくれたらいいがな。」

ブーブーブーブー

PJ「スクランブル！行きましようサイファー！」

ピクシー「落ち着けPJ。俺達は飛べん。」

PJ「あ、そうでした。むー。」

ゴオオオオオ：

ピクシー「お、ちよだの機体だな。」

犬城「敵機は少数らしい。問題は無さそうだな。」

サイファー「お、あいつらざわつき始めたな。」

犬城「そりや、滑走路は占拠したはずなのにどこから戦闘機が飛び立ったわけだからな。お、ちよだが見えたな。」

PJ「…やっぱ、空母ってでかいっすね。」

ピクシー「そりや、移動空軍基地だしな。」

サイファー「おや、一人こつちに来たな。」

団体代表「貴様！なぜ日本に空母があるのだ！自衛隊は空母を持たないはずだろう！」

犬城「あー、あの艦は対深海棲艦兵器としてアメリカ軍と共同運用しているものであり、決して自衛隊のものではありません。はい。」

代表「ふざけるな！あれを今すぐ止めろ！」

犬城「ふむ。ならば、貴方達は今すぐ滑走路から立ち退き、広島へお帰りください。そうすれば、あの艦は止めましよう。また、緊急時以外動かさないことも誓いましょう。」

代表「…待ってる。皆と話し合ってくる。」

ピクシー「いいのか？」

犬城「ああ。要求は艦を止めることだからな。艦載機は陸上で使ってやればいい。次の大規模戦闘の後に空母に下ろして、あとは使っちゃれ。」

PJ「うわあ。ひどい。」

犬城「生きて帰れるだけましだろ。」
サイファー「おや、答えが出たようだな。」

代表「…わかった。我々は立ち退く。今すぐあの艦を止めろ！」

犬城「へーへー。じゃ、旅客機を用意しますのでそれにのつて帰ってくださいね。『あー、こちらヤマト。ちよだ、艦を停止してくれ。』」

千代田『りよーかーい。』

代表「…止まらんではないか！」

犬城「何万トンもある物体が一瞬で止まると思うのであれば今すぐ高校の物理を勉強することをお勧めします。では、誘導にしたがって旅客機にお乗りください。」

代表「…くっ！わかった。」

PJ「で、普通に帰しちゃうんですか？」

犬城「まっさかー。広島空港には警官が待機していて、降り立った瞬間確保よ。」

ピクシー「まあ、色々やらかしたからな。仕方無いだろう。」

アナウンサー『本日午前11時頃、高校生3名を含む36名を、滑走路占拠及び殺人未遂、器物破損の疑いで逮捕しました…』

犬城「これでこういうことをやるやつが減ってくればいいんだがなあ。」

加賀「無理でしょう。」

犬城「まあ、そうなるな。」

取材く

記者「では、早速色々と聞かせていただきますと思います。よろしくお願いしますね、犬走さん、千代田さん、山城さん。」

犬城「はい。よろしく申し上げます。」

千代田「お願いします。」

山城「お願いします。」

記者「ではまず、犬走提督は艦娘と同じように艦装を付けることができる、という噂があるのですが、これは本当なのでしょうか？」

犬城「ふむ。まず、私にに関して言えば、付けることができます。しかし、これすなわち私が特別である、と言うわけではありません。」

記者「と言いますと？」

犬城「元々、艦娘の付けている艦装は男性の自衛官が装備して深海棲艦と戦うはずだったのです。しかし、艦娘として覚醒する女性が現れたことにより外から艦の記憶をインプットしなければならぬ男性よりも、元々記憶を持っている艦娘の方が安全であるとされて、男性が艦装を装備することは無くなったのです。ですから、私も装備できますし、もちろん貴方も装備できます。」

記者「そうだったのですか。では、犬走提督は装備したことはおありですか？」

犬城「いいえ、ありません。」

記者「そうなのですか。では次に、艦娘のお二人なのですが、艦娘の仕事はやはり大変なのですか？」

千代田「うーん、私はそうでもないかな。そりやまあ戦うのは大変だけど、みんな優しいからね。問題ないよ。」

山城「大変ね。元々不幸なせいで、仕事をしていても不幸なことがガンガン起きるせいで大変。ほんと大変！あーもう！」

犬城「落ち着け山城。」

記者「では、犬走提督はどうですか？」

犬城「そうですねえ。提督の仕事は皆が手伝ってくれるので、そこまでではないですね。まあ、書類との戦いですのでなんとかありません。」

記者「ふむ。そうなのですか。では、次の質問です。この柱島には先日存在が公表された空母ちよだをはじめとかなりの戦力がこの小さな島にありますか、これはなぜなのですか？」

犬城「それはですね、一つに柱島は呉軍港の補助であります。故に、

呉が壊滅した場合であってもこの瀬戸内を守れるように戦力があるのです。また、呉から出る船の護衛も請け負っているため、艦娘戦力もあるのです。ただまあ、ちよだに關しては米国の気まぐれのほうが正しいですが。」

記者「ふむふむ…。では次に、：

記者「はい、いじょうです！ご協力ありがとうございました！」

犬城「うい。一応、できた記事は上を通してね。では、お疲れさまでした。」

記者「はい！ありがとうございます！」

千代田「ふいー。つかれたー。」

山城「正直一番疲れるわねー。」

犬城「まあしゃーない。さ、能代がカレー作ってくれたらしいし食べに行くかね。」

山城「え、能代カレー!?私も食べたいです！」

千代田「能代ちゃんのカレー美味しいんだよね！」

ガチャ

能代「ふふふ。大丈夫です！たっぷり作ってありますから！」

犬城「能代…いつからいたんだ？」

能代「ふっふっふっ。ずっとです！」

犬城「龍田といいおまえといい、なんで某ストーカーの真似をするんだ？」

能代「流石に服装とかまで揃えたり同居したりはしませんよ？」

犬城「わかつとるわい。」

能代「あつてもずっと近くに居るだけです。」

犬城「…え？」

能代「もちろん千代さんといたしたときも隣の部屋に居ました。」

犬城「…まじかよ。」

能代「おおまじです。この能代、提督にどこへでも着いていくつもりです！」

犬城「空にも？」

能代「行つていいのなら。」

犬城「今度二人で話し合いな？」

能代「はい♪」

千代田「二人とも！カレーカレー！」

能代「はい！」

犬城「うーい。」

く視線く

バキツ！

犬城「あー、また折れてしまった。」

霞「またなの!?これで今日三本目よ！もうあんまり更のえんぴつないんだから、大事にしてよ！」

龍田「そうよー？物は大切にしなきゃー。」

千代田「そうよ。ま、シャーペンでも使う？」

霞「いや、さりげなく居るけど、二人とも仕事はどうしたのよ。」

龍田「今日はお休みよー。」

千代田「私はここにいる方が仕事がりやすいの。」

霞「…そう。で、司令官はどうしたのよ。あんたがえんぴつを折るなんておかしいわ。」

犬城「…あーうん、ずっと視線を感じてな。どうも気になるんだ。」

霞「視線？別に感じないけど。」

龍田「そうねー。」

千代田「んー、確かに見られてるような気はするけど、そこまで気にするほどじゃないんじゃない？」

犬城「むう。…はっ、まさか！」

霞「え、どうしたの？」

犬城「能代！能代はいるか！」
スタツ

能代「はい、ここに！」

龍田「ひやあ!?どこからでてきたの!？」

能代「天井裏です！」(キリッ)

霞「バカもーん！」スパーン

能代「いたーい！なに!?スリッパ!？」

霞「なんで天井裏なんかにいるのよ！」

能代「ふふふ！提督有るところにこの能代あり！提督の近くに私は居なければならぬのよ！」

霞「司令官！このバカどうにかして！」

犬城「…まだ居るな。」

霞「司令官!?ちよつと!？」

犬城「能代。もう一人ここに聞き耳を立てている奴が居る。見つけれるか？」

能代「提督のご命令とあらば！」

ダダダダダガチャバタン

龍田「え、行動早い！」

…ダダダダダガチャバタン

能代「捕まえました！」

青葉「いたい！能代さんいたいですう！」

千代田「はやっ!？」

犬城「青葉だったのか。こういうことはするなと言ったはずだが？」

青葉「確かに言われました。ですが、提督の隠し事が多すぎるのでやりました！後悔はしていません！」

犬城「もちろん公開もしていいよな？」

青葉「ええ！まだ。」

犬城「そうか。ま、その記事は一応俺を通してくれ。あと、こういうのはやめてくれ。気が散る。」

青葉「むう。わかりました。ただし！今度取材をさせてもらいますからね！たっぷり聞きますから覚悟しててください！」

犬城「わかった。」

能代 「能代にご褒美。くれます?」

犬城 「あー、なにがほしい?」

能代 「提督。」

犬城 「却下で。」

能代 「えー。じゃあ、メビウス小隊への参加は?」

犬城 「は?」

千代田 「へ?」

犬城 「あー、戦闘機乗れるの?」

能代 「乗れるもなにも元パイロットよ? そうね、名前を言えば提督は思い出してくれるかしら? 私の名前は『大石三咲』よ。どう? 思い出したかしら?」

犬城 「…。」

能代 「…おーい? 提督?」

犬城 「…。」

能代 「ちよ、ねえ、なんで無視するの? え、なんで電話取り出したの?」

犬城 「…。」

プルルルルル

能代 「え、いったいどこに電話してるの?」

大石 『はい、大石ですが。』

犬城 『大石長官! なんでもうちに長官の娘さんがいるんですか!』

大石 『おお!? おお、犬走君か。ということはやつと三咲はカミングアウトしたんだな? ま、うちの娘を頼むぞ。三咲のやつ、昔から貴様にお熱でな。ま、幸せにしてやってくれ。結婚はしなくてもいいからな。』

犬城 『いや、ちよつと待ってください長官!? なんでもあんなに変わってるんですか! 主に髪型と色!』

大石 『君に気に入って欲しくて、だそうだ! はっはっは! ま、頑張れ!』

プツツ

犬城 「長官!? 長官! なー! 切られた!」

能代「提督！無視しないで！」

犬城「あー！もう！わかつたから！大石三咲！貴官をメビウス小隊の四番機、メビウス4として合流することを認める！」

能代「やった！これで空でも一緒だ！」

千代田「ちよ、提督！大丈夫なの？」

犬城「ああ。こいつは腕は確かだ。」

千代田「へえ。提督が認めるなら確かなんだろうけど…。」

能代「そして私はここで宣戦布告するわ！」

犬城「なにをだ？」

能代「星野千代！私、大石三咲はいつか初を奪い取って見せるわ！首を洗って待ってなさい！」

千代田「なに？…ふふふ、いいわ！いつでも受けてたつわ！初は私ものなんだから！」

青葉「あ、そういえば提督。なんで千代さんと提督は本名を隠したんですか？」

犬城「んー、隠した、というよりはスイッチを入れ換えた、というのが正しいかな。いつまでも提督でない、艦娘でない気分ではないからな。」

青葉「つまり特に特別なことはないと？」

犬城「ああ。だから初でもいいが、出来れば山城で。」

青葉「わかりました。」

ブーブーブーブー

犬城「！スクランブルだ！」

ガチャ

加賀「提督！」

犬城「わかつている！千代田、能代、行くぞ！」

千代田能代「了解！」

ダダダダダ…

青葉「んー、提督達は大変そうですね。ね、霞ちゃん？」

霞「そうね。ま、やっぱり司令官は悪人なんかじゃなかったのよ。よかつたわ。」

青葉「ですね。」

第12話

〈宿毛攻略作戦〉

犬城「山城、一週間ほど、鎮守府を頼んでいいか？」

山城「はあ。別にいいですけど、何ですか？」

犬城「宿毛攻略作戦に参加することになった。」

山城「…は？提督、寝言は寝ていてください。宿毛は我々の軍の泊地ですよ？なんでそこを攻撃するんですか。」

犬城「宿毛の提督が裏切った。元々あそこは艦娘への強姦やら監禁やらを提督がやっていたから他のそういった鎮守府と共に捜査されてたんだが、単冠の提督が捕まったのを見て危機感を覚えたんだろうな。その宿毛の提督、『矢野知立』はなんと宿毛を要塞化して立て籠りやがったんだ。」

山城「えー。なんて面倒な。」

犬城「だからうちの部隊も動くんだ。矢野から逃げてきた艦娘によると、ほぼすべての艦娘は矢野に洗脳に近いことをされているそうで、大体のやつは矢野を狂信しているとのことだ。まともなやつはみな、といっても六名だけだが、命からがら逃げ出したそうさ。五名は今うちの飛行場の方で治療している。残りの一人は現在搜索中だ。」

山城「…やっぱりその子達も？」

犬城「ああ。酷かった。」

山城「そう、なの。」

犬城「ま、そんな状況なので、うちの空海戦力も出るようになった。なのでいってくる。ちなみに千代田と比叡、あと能代も連れていく。」

山城「了解。頑張ってるね。」

犬城「ああ。」

《宿毛湾沖》

犬城「あーあー、比叡、聞こえるかな？」

比叡『はい！聞こえてますよ！すごいですねオウスノミコト！比叡

よりも舵の効きがいいですよ!』

犬城『そうか。千代田はどうだ?』

千代田『大丈夫だけど…、友軍を撃つの?』

犬城『裏切った以上、撃つしかあるまい。まともなやつは死ぬか逃げた。もうあそこには敵のみだ。ちよだ艦載機による空爆と、俺の乗るAC—130による対地攻撃、最悪の場合オウスノミコトで止めを刺す。』

千代田『…了解。』

犬城『では作戦開始。千代田、艦載機を上げろ。』

千代田『了解。艦載機発艦始め!』

犬城『さて、こちらAC—130、コールサイン『トリニティ』。こ

れより地上目標への攻撃を開始する。三咲!頼むぞ!』

能代『了解!さあ、AC—130の力!見せてあげるわ!』

バババババババババババババババババ:

犬城『対空砲火ア!潰せ!』

能代『了解!105mm砲、ファイア!』

ドカアン

Chiyodal『こちらちよだ艦載機!これより無誘導爆弾による一斉空爆を開始する!』

犬城『よつしや!頼むぞ!』

Chiyodal『チヨダー!ボムズアウェイ!』

ドカアアアアアン!

能代『うひやあ!なにも見えない!』

犬城『ぬおお!凄い衝撃波だ!』

Chiyodal『こちらチヨダー!うちらで大体吹き飛ばして

やったぞ!』

能代『初!地上には特に目標は見えないよ!』

犬城『了解した。全機、全艦帰投せよ。』

比叡『了解。』

千代田『了解。』

犬城「それで、どうしてまたここに、しかも陸で私が来なければならんのですか？」

陸軍水陸両用特殊師団『霞部隊』指揮官 陸軍少将・千葉州作「わかりません。というか初さん。貴方は軍は違えど中將なのでですから、敬語でなくても良いのですよ？」

犬城「まあ、なんとなくです。」

能代「でも、なんで海の人の中が来なきやならなかったんでしょうか。」

犬城「知らん。」

能代「でしようね。」

千葉「おそらく全滅しているとは思いますが、一応警戒してくださいね。」

犬城「了解。」

犬城「…何も、居ませんな。」

千葉「…ですね。遺体すら見当たりません。」

能代「凄い爆発だったから…、みんな吹き飛んじやったんだと思う。」

犬城「2000ポンドのゲリラ豪雨だからな。」

千葉「遠くから見えていましたが、あれは酷かったですね。」
ガラツ

千葉「！誰だ！」

宿毛鹿島「ヒイ！」

ダツダツダツダツ

能代「逃げた？」

犬城「千葉少将。この状況で生きているということは出撃や遠征に出ている艦がいるか、もしくはあの爆発から逃れられるシエルターがあるのか。どちらにせよ追うべきです。前者なら保護。後者なら」

千葉「逮捕、または殺害ですな。」

犬城「はい。行きましょう。」

タタタタタタタタタタ：

《宿毛泊地・地下》

宿毛鹿島「て、提督！他所の人間が上に！」

矢野「なに!?全員！艀装展開！すべて殺すぞ！くそっ！もうすぐ迎えが来るといふのに！」

「ほおう？迎えねえ。どこから来るんだ？」

矢野「な、何者だ！」

犬城「なあに、通りすがりの提督さ。覚えておけ。」

千葉「むう、三十人は居ますな。」

能代「なにカツコつけてるのよ提督！貴方たち！武器を捨てて投降しなさい！そうすれば死ぬことは無いわ！」

矢野「ふざけるな！撃て撃て！」

宿毛金剛「撃ちます！ファイアー！」

能代「ちよ、うわあ！提督、退避、退避ー！」

犬城「当たらんよ！」

千葉「んな分けないでしよう！下がりますよ！」

宿毛金剛「やつらは下がリマシタ。どうしますかー？」

矢野「ここから出ず、次に来たときすぐ撃てるようにしておけ。」

犬城「さて、どうしようか。やつらは迎えを待っているみたいだが。」

千葉「とすると、中国、それも潜水艦でしょうか。」

犬城「…ふむ。ならばうちの基地から対潜哨戒機をあげよう。しかし、ここはどうする？」

千葉「この深さなら、バンカーバスターでも潰せるかと。」

犬城「…よし、柱島飛行場のガルーダ隊にストライクイーグルでの発進を伝達。5時間後にここにGBU-28が着弾するようにしろ。我々は退避だ。」

能代「まさか国土に爆撃するなんてね。」

犬城「占領された土地を取り戻すための軍事作戦だ。仕方ない。」

千葉「退避しましょう。いつ敵が来るかわかりません。」
犬城「分かっている。」

《宿毛泊地・地上》

千葉「…まさか、もう迎えが来ているとは。」

犬城「…千葉少将、能代。二人は脱出しろ。」

能代「提督は？」

犬城「残って囷になる。今柱島からAC—130とA—10、あと
ズムウオルト達が向かっている。そいつらが来るまでは持たせる。」

千葉「…了解。頼みます！」

犬城「ああ。…また会おう。」

能代「初、私も…」

犬城「駄目だ。行け。」

能代「…はい。帰って来て、くださいね。」

犬城「当たり前だ。ほら、行け。…千葉少将。能代を、三咲のことを頼みます。」

千葉「了解です。それでは。」

犬城「ああ。…さて艦装展開。…敵は…広場に固まっているな。主
砲、炉号弾装填…。」

日本武尊妖精「了解、主砲炉号弾装填。」

犬城「副砲、高角砲はいつでも撃てるようにしておけ。」

妖精「主砲炉号弾装填完了。」

犬城「了解。一斉射で行く。目標、敵上陸部隊。撃て。」

妖精「撃て！」

ドドドドドドドドドドオン…

妖精「弾着まであと3…2…弾着、今。」

ドカアアアアアン！

犬城「むう、凄い爆風だ。電探、周辺警戒。」

妖精「了解。」

犬城「さて、他にいるのか。それともあいつらが釣れるのか。」
妖精「どうやら、周辺には誰もおらんようです。」

宿毛鹿島「ああ!?潜水艦、潜水艦がやられてる!」

矢野「くそっ!全艦、艀装で対空射撃!潜水艦を守れ!」

宿毛照月「つてえー!」

犬城「おお、流石だな。」

千代田『こちらシナノ、AC—130。やっと着いたわ。どうすればいい?』

犬城『120mmを潜水艦にぶちこんでやれ。沈めてしまっただぞ。』

千代田『了解!』

バタバタバタバタバタバタバタバタバタ…

宿毛照月「!提督!次はAC—130だよ!ヤバイよ!あんな空飛ぶ戦車やら空飛ぶトーチカなんて艦娘じゃ落とせないよ!」

ドオオオン

ドカアアアアアン!

宿毛鹿島「ああ、潜水艦の艦橋が…。」

ドオオオン

ドカアアアアアン!

ババババババババババババババババ

ヴオオオオオオン…

千代田『潜水艦撃沈!』

犬城『よくやった。AC—130はこのまま命令あるまで待機。』

矢野「そんな…。潜水艦が…。」

犬城「貴様ら。」

宿毛金剛「!貴方はさっきの!」

宿毛鹿島「なんのようですか!」

犬城「なに。最後に聞きに來ただけさ。さて、君たちはいま分岐点に立たされていることは分かるな。降伏して生きるか。あくまで裏

切り者として死ぬか。」

宿毛鹿島「そうですね。」

犬城「さて、君たちはどうする?」

宿毛金剛「…そんなの、決まってマス。貴方を殺して皆でニゲマス！」

ドン

犬城「うおつ、あぶね。そうか。ならば仕方ない。貴様らは祖国を裏切った! 艦装再展開!」

妖精「展開完了!」

宿毛照月「な、男が艦装を!」

犬城『千代田! 交渉は決裂だ! 撃て撃て!』

千代田『了解! バルカアアアン、ゴー!』

ヴオオオオオオ:

ババババババババババババババ

宿毛照月「ぎゃっ!」

宿毛金剛「照月! demn it!」

犬城「各砲自由射撃! 撃て!」

妖精「つてえー!」

ドオオオオン

千代田『提督! 120mmぶちこむから逃げて!』

犬城『ちよ、え!? うわああああ!』

ドオオオオン

ドカアアアアアアン!

犬城『はあ、はあ、俺死んでるんじゃないか?』

千代田『生きてますよ。敵全滅。終わりです。』

犬城『了解。全機帰投せよ。』

war wolf1『了解。帰投する。』

千代田『さっさと帰って来てね。』

犬城『わかっている。』

ガラッ

「やつと、外に出れた…。なに、これ。敵襲でもあったのかな…?」

犬城「誰だ!」

山風「ひい!誰!」

犬城「…待て、落ち着きなさい。私は柱島泊地の提督の犬走山城だ。そしてここは宿毛泊地跡だ。君は?」

山風「え…、て、提督…?」

犬城「ああ、そうだ。取り敢えず落ち着け。話をしよう。」

山風「わ、わかった。」

犬城「はい、息を吸ってー、吐いてー。」

山風「すうー、はあー。」

犬城「どうだ?落ち着いたか?」

山風「う、うん。私は…宿毛泊地の山風。でも…これは、どうなってるの?」

犬城「…君の提督は、日本を裏切ったんだ。そして、最後まで降伏せずに、彼に味方する者と共に死んだ。」

山風「そう…なんだ。その、死んだ中には不知火さんとかも居たの?」

犬城「不知火?不知火ならばこちらで保護している。あと天津風、春雨、海風、野分もだ。」

山風「ほんとに!?!天津風も春雨も海風も野分も、みんな大丈夫なの!?!」

犬城「…まあ、生きてはいる。傷は酷いが。」

山風「そうなんだ…よかった…!」

犬城「…取り敢えず私と一緒に来てくれ。」

山風「わかった…『お父さん』。」

犬城「…what?」

山風「え?」

犬城「いや、俺はお父さんじゃないよ?」

山風「だって不知火さん達が、『本当の提督はお父さんみたいに優しい人だ』って言った。だから…お父さん。」

犬城「うん？うん、まあいいか。」

能代「提督！大丈夫!？」

千葉「犬走さん！無事でしたか！」

犬城「ああ、千代田に120mm榴弾砲で殺されかけたが、無事だ。あと、行方不明者も保護した。」

能代「それって…その子？」

山風「宿毛泊地所属の駆逐艦、山風…。放っておいていいよ。」

千葉「ふむ、またダウンナーな艦娘ですな。」

能代「ふーん。」

山風「お父さん…この人たちは？」

能代「お父さん!?!?どういふことよ初！」

犬城「待て能代。」

能代「なら私はお母さんよ！よろしくね！」

犬城「なんでやねん。」

能代「だって私は初の妻でしょ？」

犬城「そのような事実はありません。」

山風「うん…お母さんじゃない。だって提督じゃないから。」

千葉「ははは！残念でしたな。」

能代「がっかり。外堀も深かったかあ。」

犬城「ま、帰るぞ。これ以上空けていたらいつまた鎮守府が壊滅するかわからん。」

能代「あははは…。」

犬城「帰投だー！」

能代「我が家だー！」

山風「新しい…おうち。」

犬城「さて、千葉少将は部隊へ戻ったし、取り敢えず不知火達に会いに行くか。」

能代「あ、じゃあ私は山城に帰還の報告をしておくね！」

犬城「頼む。じゃ、山風。行こうか。」

山風「わかった。」

コンコン

犬城「不知火、犬走だ。話と、あとお客さんが一人だ。」

不知火「わかりました。どうぞ。」

ガチャ

犬城「皆、調子はどうだ？」

天津風「提督さん？ええ、みんな完治したわ。でも…いいの？私たち駆逐艦なんかこんな…」

犬城「うちじゃそれが当たり前だ。女子供がそんな傷を残していい訳がなからう。」

天津風「…そう。ありがとう、提督。」

海風「それで、お客さんとは？」

犬城「ん、おお。入ってくれ。」

山風「…！海風姉！不知火さんに天津風さんに野分さんに春雨姉さん！」

海風「山風!?!よかった！生きてたのね！」

山風「うん…！地下にあいつらに閉じ込められてたから、逆に助かったみたい。」

不知火「な、鎮守府に戻ったのですか!?!」

山風「ううん。はぐれたあと、捕まったの。それで、地下の部屋に一人で閉じ込められてた。」

犬城「地下でよかった。地上だったら今ごろは形も残っていなかった。」

不知火「地下でよかったって、一体なにをしたのですか？」

犬城「ははっ。」

天津風「え、いやなにをしたのよ。」

犬城「なに、2000ポンドのゲリラ豪雨と120mm榴弾の雨が降っただけさ。」

野分「一応聞いていいですか？何ポンド落としたんですか？」

犬城「えーっと、12機で各四個だから…合計約100000ポンド」

ド。約50tだな。」

春雨「ひええ…。」

天津風「それ、もうクレーターでもできたんじゃないの？」

犬城「意外と更地になっただけだった。」

山風「でも…あいつらは地下にいたはず…。どうしたの？」

犬城「迎えが来たから油断して全員で出てきたところをAC―130でまとめてどーん。迎えに来ていた中国潜水艦もA―10とAC―130で吹き飛ばした。」

山風「生き残りは？」

犬城「ゼロだ。」

山風「そうなんだ…。ちよつと、かわいそうかな。」

犬城「敵だからな。仕方あるまい。」

不知火「…その、我々はどうなるのですか？処分、ですか？」

犬城「まさか。うちの所属になると思う。見事に六人ともうちにはいないからな。」

春雨「本当ですか！じゃあ、六人とも一緒にいられるんですか!？」

犬城「確定ではないが、出来る限りそうする。」

山風「お父さん…ありがとう。」

不知火「…提督、いえお父様。その、これからよろしくお願いします。」

犬城「うん、なんでみんな俺を父親にしようとするのさ。」

天津風「だって、貴方は私たちを守ってくれる父親のようなものでしょ？だから、お父さん。」

犬城「はあ…。ま、呼ぶのは構わんが本当の父親にはなれんからな。それに、守りきれられるかもわからん。そこだけはわかっておけ。」

山風「わかった。」

ジー

犬城「ん？誰だ？」

日向「ジー」

犬城「日向か。ドアの隙間から見てどうした？」

日向「…結婚もしていないのに子持ちの提督が居るらしい。」(ボソツ)

犬城「うっさいわ!」

この日の後から、駆逐艦の中で提督をお父さんと呼ぶのが流行った
そう。

〜ルイージ掘り〜

犬城『あー、敵艦隊の撃滅後すぐですまないのだが、君たちにはジブラルタル近海にて行方不明となっている潜水艦の捜索に向かつて欲しい。』

比叡『編成はどうしますか?』

犬城『いや、そのままでもいい。第一艦隊は旗艦比叡、瑞鶴、加賀、熊野、最上、摩耶。第二艦隊は旗艦衣笠、大井、木曾、霞、五十鈴、朝潮での機動艦隊だ。』

比叡『それで、潜水艦って…』

犬城『“永遠の二番手”だな。』

比叡『いや、ルイージでしょ?』

犬城『いわゆる日陰者だ。』

比叡『そんなに悪く言わなくてもいいじゃないですか!』

犬城『甘いぞ、比叡! 401に勝る潜水艦などいない!』

比叡『ど、どうしたんですか!? 提督?』

犬城『らりるれろ! らりるれろ! らりるれろ!』

比叡『提督! しっかりして! 提督!! 提督! …っ!』

ブツツ

ザザザザザ…

欧州棲姫「…ナンダコレ。」

…艦これ。

山城「提督…。無線でふざけるのはやめてください。」

犬城「いやー、傍受されてる気がしたからふざけてみた。必要なことは連絡したし、命令書は紙で届くからいいかなあ、と。」

山城「はあ…。そうですか。」

く石油危機く

山城「提督。燃料がありません。」

犬城「知ってる。」

山城「このままだとジブラルタル近海でのルイージ搜索のみではなく、キプロス沖での松輪の搜索にも支障が出ます。どうしますか。」

犬城「取り敢えず、燃料優先で遠征に出てもらおう。あとは、出来る限り早く二人が見つかることを願うのみだな。」

山城「…ドローバーには、いかないんですか？」

犬城「行きません。」

山城「そうですか。」

大潮「帰還しましたー。燃料いっぱいですー。」

犬城「これが一瞬でなくなるんだからやってられんよなあ。」

山城「全くです。」

大潮「無くなるならもう一度いけばいいんですよ、司令官!」

犬城「そうだな。…：そーいや大潮は俺のことお父さんとか呼ばんな。」

大潮「あ、呼んだ方がいいですか?」

犬城「大潮の自由でいい。ただ、意外だったただけだ。」

山城「確かに真っ先に呼びそうだと思っただけだ。」

大潮「司令官、公私はある程度は分けるべきだと思います。」

犬城「ほう。つまり俺はまだまだ艦娘のことを知らんということか…。精進せねば。」

山城「提督、それ以上はプライベートに関わるのでいけません。」

大潮「正直なところ、艦娘も提督のことを知れなすぎるので、もう少し隠し事を減らしてもいいと思います。」

犬城「最近気にしてる。だが、場合によって顔を作るのもう癖み

たいなもんなんだ。これ以上作らんようにはしているが。」

大潮「顔？」

犬城「ああ。比叡曰く少なくとも五つはあるそうだ。提督として二つ、パイロットとして一つ、軍人として一つ、そして元々の俺が一つ。」

山城「それ、どうやって管理しているのよ。」

犬城「うーん、服装と、状況かねえ。鎮守府にいるなら基本提督のスイッチは入ってるし、スクランブルの警報がなりやあパイロット、迷彩服を着て武器を持てば兵士、どれでもなければ本体、みたいに。」

大潮「あ、それわかります。制服着て、艀装をつけるともうスイッチが入りますよね。」

山城「大潮ちゃん、なんか喋り方変よ？」

大潮「今は公私の私の方なので。」

山城「あ、そうなの。」

大潮「…でも、司令官はいつも鎮守府にいますし、居ないときは空に上がってますよね。本当の司令官はいつ出てきているのですか？」

犬城「…全く出てきていないな。最後は千代田との旅行の時だから一ヶ月前。その前はロシア解放の時だから2年ほど前か。」

山城「それ…本当の貴方は生きているの？」

犬城「いや、ここにいるだろ？」

山城「体じゃないわ。精神よ。このままじゃ本当の貴方は死んでしまっわ。」

大潮「そ、それは大変です！司令官が死んでしまいます！」

犬城「勝手に殺すな。まあ、そのうちな。」

大潮「じゃあ、こんど一緒に旅行に行きましょう！休暇取って！」

犬城「まあ…そのうち。」

大潮「約束ですからね！」

犬城「おう。」

第13話 炎龍編

く特地へ そのいちく

山城「は？また出張ですか？」

犬城「ああ。次は特地だそうだな。」

山城「なんでまたそんなところに。」

犬城「竜が出たんだと。」

山城「竜？それならたしか特地派遣の部隊が倒したでしょう？」

犬城「前の奴より強いのが出たんだと。んでなぜか俺。」

山城「断ってください。うちにそんな余裕はありません。」

犬城「ちなみにこれを断るとロシアへ栄転だそう。能代と一緒に。」

山城「なにがなんでも行けと。というかなんで能代。」

犬城「どちらかと言うと逝けだな。うちにある戦力が欲しいんだろ
うな。」

山城「どういうことですか。」

犬城「海軍上層部にもそういうやつはいるのさ。上手く根回した
上で、俺が消えれば国を潰せるほどの力を入れる。高野総長も
やらせまいと頑張っていたみたいだが、無理だったみたいだな。」

山城「でも、どうやってそんな竜を倒すんですか？現地の人たちは
恐ろしく苦勞したと聞きますし。」

犬城「なに、上の一部がそんなことをするなら俺は全力で遂行して
やるだけさ。」

山城「わかりました。：後ろから撃たれたりしないように気を付け
てくださいいね。」

犬城「うーん、どちらかと言うと危険なのは俺よりみんなだな。」

山城「え？」

犬城「俺がいない間にここを攻めてくるかもしれん。その間、頼む。
最悪鎮守府を吹き飛ばしても構わん。命を最優先に動け。」

山城「：はあ：。わかりました。全力で守ります。」

犬城「頼んだ。じゃ、早速行ってくる。」

山城「はい。いつてらっしやい。」

《柱島空軍基地》

ピクシー「んで、お前さんどうするんだ？F-15か？」

犬城「いいや。ムカついたから一瞬で吹き飛ばす。ノスフェラトで行こう。」

ピクシー「いや、あれは秘匿機体じゃないのか？航空機搭載レールガンとか。」

犬城「ああ、それならもう大丈夫だ。この前ミサイル迎撃機の『嵐龍II』がロールアウトしたからな。もうレールガンは問題ない。さすがにモルガンはまだあれだがな。」

ピクシー「あのECMはなあ…。」

犬城「ま、そういうことだから。あともし変なやつが来たら注意しておけ。」

ピクシー「了解。生きて帰ってこいよ。」

犬城「おうともよ。」

《土浦航空基地》

犬城「…は？なぜノスフェラトを持っていつてはいかんのですか？」

軍令部所属海軍大将：大島大介「当たり前だろう！今は戦時中だぞ！こんな最新鋭の機体を国防に使わずしてどうする！別でF-4を用意してあるからそれで行け！」

犬城「わかりました。じゃあ、一度柱島へ戻ってノスフェラトを置いて、再度F-15辺りで来ます。」

大島「いや、それはならん！今すぐ特地向え！ノスフェラトは私が責任を持って預かる！」

犬城「いやいや、こんな最新鋭の機体を放置するわけにもいかんでしょう？ぱっぱと戻ってきますので。」

大島「だめだ！今すぐ行くのだ！現地で何が起きているのかすぐにはわからないのだから急げ！」

犬城「…ですが、F-4は複座機ではありますが、後席に乗せる相方がおりません。」

大島「それならば問題ない。私が連れてきている。宮西大雅2等空佐だ。腕は私が保証しよう。」

宮西「よろしくお願ひします、犬走中将。」ニコツ

犬城「…その、すいません。私は今までずっと単座機が中心で、複座機に乗るときも後席には信頼できる人しか乗せていなかったもので、どうもよく知らん人を後席に乗せる気になれんです。」

大島「だがそれしかないのだ！諦めていきたまえ！」

高野「ほおう？随分と無理矢理な理論だな、大島？」

大島「誰だ…な、高野総長!？」

高野「久しぶりだな、初。」

犬城「お久しぶりです、高野総長！」

高野「それで、だ。確かに大島の言うとおり、最新鋭の機体を基本平和なあっちへ持っていくのは惜しい。」

犬城「ですが、知らん人を後席に乗せて飛べるほど人として私はできてはおりません。」

高野「ああ、わかっている。だから、連れてきた。」

犬城「へ？」

能代「はーっー！」

犬城「はあ!?!な、なぜ能代がここにいるのですか？」

高野「ははは！なに、なんとなくこんなことになる気がしてな！鎮守府から拐ってきたのだ。(あと、ついでにおまけも置いてきた。ボソツ)」

犬城「(…有難うございます。ボソツ)ということは、やはりF-4に乗らなければならんですか。」

高野「ああ。すまないがF-4だ。ただ、ACE仕様に改造はしてある。機種番号を与えるならF-4EJ改S、と言ったところか。」

犬城「それだけでも十分です。Sはズイルバーからですか。」

高野「ああ。F-4Eと言えば元ドイツ空軍のケラーマン中佐だからな。あの方は恐ろしい腕だった。」

犬城「伝説のエースの一人でありましたからな。しかし、ノスフェラトはどうするのですか？」

高野「ああ、それなら私が柱島へ運ばせておこう。ちょうど三日後に柱島基地に配備される輸送艦と補給艦が横須賀を発つからな。それに載せて運ばせる。」

犬城「輸送艦と補給艦：ああ、つねがみ型輸送艦2番艦『つるが』とひるが型補給艦4番艦『いつペキ』ですか。わかりました。よろしくお願いします。」

高野「ああ。ちょうどいいから、F-4と共にいまから運んでしまおう。F-4は銀座、ノスフェラトは乗れるパイロットがいないから陸路で運ぶことになる。陸路ゆえちと荒っぽい移動にはなってしまうが。」

犬城「お願いします。」

能代「え、なにに？私どうなるの？」

犬城「特地の空でドラゴン狩りだ。」

能代「え、え？F-4で!？」

犬城「ああ。」

能代「まじですかい…。」

犬城「まじです。ほんととはレールガンで消し飛ばすつもりだったんだが、装備制限のあるミッションでした。」

能代「ああ、だからノスフェラトなのね。」

高野「よし、少ししたら積込を行う。大島、手伝ってくれ。」

大島「…わかりました。」

宮西「よろしいのですか大将。みすみす最新鋭の機体を逃がすのですか？」ボソボソ

大島「高野総長が相手ではどうしようもあるまい。なに、あの機体は手に入らずとも鎮守府を落とせばよい。」ボソボソ

宮西「わかりました。」ボソボソ

高野「特地に出発するのは5日後だ。色々と準備があるのでな。それまでは銀座でのんびりとしていてくれ。」

犬城「了解しました！」

能代「了解！」

《東京・銀座》

犬城「ここが銀座か。やはり東京はすごいな。ビルしかない。」

能代「いやまあ都心部だけだけだね。」

犬城「…能代、最近口調が完全に昔に戻ったな。」

能代「ま、今は艦娘というより空自の人間のような気がするし。あ、今は三咲でいいよ。」

犬城「じゃあ俺は初なのか。ま、あと5日か。訓練ぐらいしたかったんだが。」

三咲「今回の任務は長くなりそうだねえ。」

初「ああ。面倒なことにな。ん？」

三咲「どうしたの？」

初「…いや、なんかやけに見られてるなあ、と。」

三咲「んー？あー、確かなーんか見られてるね。なんだろう。」

初「さあ？というかほんと自衛官しかいねーなあ。」

三咲「だね。たまーにここら辺で働いてる人がいるぐらいで、9割方自衛官さんだねえ。」

男性自衛官「あ、あの！」

初「ん、はい？どうしました？」

男性自衛官「も、もしかして犬走初一等空佐でありますか！」

初「あー、元ですが。今は海軍中将なので。」

男性自衛官「中将というと自衛隊では将レベルではありませんか！あ、あの、サインをいただけませんか！」

初「ん、いいですよ。何に書きます？」

男性自衛官「えっと…えっと…あ！このカバンをお願いします！」

初「あいよ。……………ほい。」

男性自衛官「ああ…！有難うございます！家宝にします！」

初「あははは…。ありがとうございます。」

男性自衛官「はい！有難うございました！」

三咲「…元気な人だねえ。」

初「だな。さて、腹も減ったし飯でも食いにいくか。」

三咲「おお、いいね、いいね！いいいこー！」

初「わかったから引つ張るな。」

三咲「にしてもなんで初が行かなきゃならないんだろーね。」

初「んなもん決まってるだろ。俺に死んでほしいやつが上にいるのさ。総長と能代がいなかったら多分あの宮西とか言うのに後ろから撃たれてたな。」

三咲「ええ…。なんでそんな。」

初「まあ、うちの戦力はおかしいからな。奪えば国を一つくらい簡単に潰せるしな。」

三咲「そう考えるとうちっておかしいねえ…。」

初「だな。」

三咲「というかF-4でドラゴンを倒せるの?。」

初「さあ？少なくともノスフェラトを行かせまいとしたところから、レールガンならあつさりと倒せるんじゃないか?。」

三咲「でもF-4、そこまで対空性能はすごいわけじゃないでしょ? 20mmにAAM-3ぐらいでしょ?もし装甲目標だったら、厳しんじゃないの?。」

初「そうなんだよなあ。鱗とかがゴジラ並の強度を持っていたりしたら、その時は20mmガンポッドをうまく使う隙間狙ってスナイプするしかないな。ううむ、辛いな。」

三咲「うーん。どうするかねえ。」

初「最悪の場合は、『重装甲』、『高機動』、『高速度』、『高火力』。正直これだと、F-4どころかF-15やF-35とかでも厳しいとおもう。ノスフェラトやモルガンレベルでやっとなぐり会えるレベルだ。または核。」

三咲「前に出たでかいやつは、えーっと、『速力はF-4と同等、またはそれ以上』、『旋回半径は一次大戦の複葉機以下』、『機動力はハリヤーか戦闘ヘリ並』、『装甲は戦車以上』。全部あるわね。」

初「…。これの上位個体だろ?無理じゃね?。」

三咲「んー、ミサイルの飽和攻撃なら？」

初「ははは。ガルーダでも盗んでこようか。」

「コーヒーのおかわりはいかかですか？」

初「あ、いただきます。」

三咲「私も。」

初「…うん。旨い。」

三咲「だね。んで、オキシジェンデストロイアーでも作る？」

初「歴史を繰り返してはならん。うーむ、どうするかねえ。」

「なら、酸素を奪ってやればいい。相手は生物だからな。」

初「なるほど。確かにそれなら殺せるかもしれん…ん？」

三咲「え、私じゃないわよ？」

大石「ははは。ま、燃料気化爆弾なんかはいいんじゃないかな？初くん。」

初「のわああああ!?大石長官!?え!?なんで!?!」

三咲「え、ちよ、お父さん!?何してるのよ!」

大石「はつはつは!ちよつとした遊び心さ。ま、相手は生物だ。鉄の塊じゃあない。そこも考えていいとおもう。」

初「ふむ。有難うございます。それで、なんでここに当たり前のようにおられるのですか？」

大石「ん?そりや、ここは俺の店だからな。内地にいるときだけ開いているんだ。」

三咲「お父さん…、なにやってるのよ…。」

大石「ま、ちよつとした息抜きだ。お前らも頑張れよ?」

初「はい。」

三咲「あつたりまえよー。」

………

初「さて、どうする?燃料気化爆弾はひとつの手だが…。」

三咲「正直対空ボムキルなんて無理よねえ。」

初「というか燃料気化爆弾でボムキルなんざ出来るのは千代田ぐらいだ。というか千代田だけでいい。そんなやつが何人もいてたまる

か。」

三咲「むー。」

初「ぬー。」

カランカラン

大石「いらつしやい。おお、高野総長。どうされましたかな？」

高野「ああ、ここに初と三咲くんはいるかね？」

大石「ええ、いますよ。あそこの席です。」

高野「ふむ。よかったよかった。ああ、コーヒーを頼む。」

大石「わかりました。」

高野「…ふむ。二人とも困っているようだな？」

初「ああ、高野総長。そうなんですよ。どうやっても龍を倒すイメージが沸かんです。」

三咲「そうなんですよー。F-4の装備じゃ勝てる気がしませんー。」

高野「それなのだが、対ドラゴン用、対戦車用の装備として120mmキャノンポッドを試作したんだ。」

初「…は？！すいません。もう一度言っていたらいいかも？」

高野「いや、120mmキャノンポッドをだな…。」

初「…そのー、あのー、なんでこうそんな使い道に困るような装備をポンポンと作るんですか？！120mmとか撃ったらパイロンごと、いや羽ごと砲が吹き飛ぶと思うのですが。」

高野「それなら問題ない。無反動砲だから、そこまで酷いことにはならん。ただ、HADは役に立たんが。」

三咲「無反動砲だと、射程も短いからヘッドオンか、後ろをとっての射撃って感じかしらね。」

高野「ただまあ、重いから増曹すら積みなくなるのが欠点だな。それと、運動性がかなり悪くなる。」

初「それはあれですか。さしずめ現代のカノーネンフォーゲルと言ったところですか？」

高野「まあ、そうだな。ただ、これなら確実に龍を葬れるだろう。」

初「だといいんですが…。どちらにせよ現地部隊に敵情報を聞くことが必要ですね。一応ノスフェラトの出撃も視野に入れておいてください。今のところ航空機で最大の単発火力はあれのレールガンなので。」

三咲「それか核。」

高野「核はならん。」

三咲「知ってますー。」

初「一応モルガンやフェンリルもありますけど、あれは秘匿機体故あつちに持つてくのは厳しいですね。」

高野「…あれはどうだ？特殊燃料気化弾頭のLSWM。あれならば高度や天候によってはどんなやつでも叩き落とせる。」

初「ただ、それをやるには付近に誰もいないようにしなければなりません。そうになると、使える状況は少ないですね。」

高野「…まあそうだな。むむむ。対空かつ高火力となると難しいな。」

三咲「うーん。もう、いつそ一度キャノンポッドでやってみて、駄目だったらまた考えよ。多分このまま考えても無駄。」

初「そうかも、しれん。」

高野「うーむ。レールガンユニットをどの機体でも使えるようにできればいいのだがなあ。」

初「ですねえ。」

三咲「…あれ、もう日が沈み始めてる。」

初「本当だ。…ホテルに行くかな。」

高野「ふむ。俺も仕事をせねばならんな。じゃあこれでお開きだ。おお、そういえば三日間はのんびりしていいいな。仕事は忘れて一旦リラックスしてこい。」

初「はい。わかりました。」

高野「じゃあな。」

三咲「ありがとうございます！」

初「んで、当たり前のように同じ部屋なのな。」

三咲「そりや、夫婦だからね！」

初「寝言は寝て言え。」

三咲（　　・ω・　　）

初「しよぼんとしても認めません。」

三咲「ならば既成事実を作ってやるこんちくしよー！」

初「うお!?ちよ、まて！落ち着け！思い止まれ！」

三咲「バアアアアニング、ラアアアブ！」

初「それは金剛のセリフだああああ…」

く吹雪く

吹雪「山城さん！資料持ってきました！」

山城「あら、吹雪ちゃんありがとう。でも、着任は貴女の方が早いんだからさん付けで呼ばなくていいのよ？」

吹雪「いいえ、私にとつて憧れの人ですから！」

山城「そう、ありがとう。嬉しいわ。」

扶桑「山城、氷小豆もらってきたわよー。」

吹雪「扶桑さん！こんにちは！」

扶桑「あら、吹雪ちゃん。こんにちは。今日も元気ね。」

吹雪「だつて憧れの二人と一緒に仕事ができるのですから！元気に
なりますよ！」

扶桑「ふふ。かわいいわねえ。」

夕立「ふーぶーきーちゃーん、遊ぼー。」

吹雪「夕立ちちゃん！んー、いまは山城さんのお手伝いをしているか
ら…」

山城「行つてきなさい、吹雪。友達は大切よ。」

吹雪「山城さん…！はい！夕立ちちゃん、行こ！」

夕立「うん！じゃ、広場にいきましょ！みんな居るわ！」

タツタツタツタツ：

山城「元気ねえ…。」

扶桑「貴女は元気が無すぎよ。」

山城「…でも、姉さま。提督は死地へ行っているのです。元気に笑ってなど居られませんよ…。」

ダダダダダダダダガチャ

吹雪「や、や、や、山城さん！お、お客さんです！」

山城「客？どなた？」

吹雪「た、高野軍令部総長です！」

山城「…不幸だね。」

高野「失礼するよ。」

山城「総員、敬礼！」ビシッ

高野「うむ。楽にしてくれ。」

山城「えっと、その…、どんなご用でしょうか？」

高野「ああ。まずひとつに、輸送艦『つるが』と補給艦『いつべき』の受け渡しだ。あと、勝手に拐った能代だが、彼女は犬走くんとともに龍の討伐に向かわせた。事後報告ですまん。」

山城「え、二人で、ですか？」

高野「ああ。あのままだと犬走くんは後ろから撃たれかねんかったからな。メビウス小隊の一員だった彼女を連れていった。」

山城「そうですか。なにもなければいいのですが…。」

高野「ははは！犬走くんは女を襲うようなやつじゃないさ！」

山城「いや、能代の方が提督を襲うような気がして。提督は押しに弱いですし。」

高野「まさか！三咲くんはそんな娘じゃあないさ。」

山城「だといいのですが。」

高野「んで、もうひとつ。おそらく犬走くんのいない間に友軍が攻めてくるか、占領してこようと思われ。」

山城「やはり、ですか。」

高野「ふむ、その反応は犬走くんも予想していたのか。」

山城「はい。」

高野「そうか、なら話は早い。ここの防衛は私に任せてほしい。また、犬走くんが不在の間はこのリストに載っている者以外は敷地内に

入れてはならん。この命令は大高首相直々のものだし、もちろん天皇陛下の許可も降りている。これを破るものは朝敵である、と言って脅してやれ。」

山城「このリストに載っている人物は…？」

高野「なに、私が信頼できるとした人物だ。それも特に、な。」

山城「わかりました。遂行します。」

高野「頼んだ。もちろん、敵が武力に頼ったとしても我々が守る。もちろん君たちにも手伝っては貰うがな。」

山城「わかりました。よろしくお願いします！」

高野「うむ。あと、もし犬走くんが戦死した場合、柱島泊地は放棄する。所属戦力は、艦艇及び陸上戦力は横須賀、航空機及び航空隊は土浦、艦娘は宿毛配備となる。」

山城「…了解、しました。」

吹雪「…え、司令官が…戦死？」

高野「以上だ。では、俺はすぐに帝都に戻らねばならんのでな。失礼する。」

山城「はい。お疲れさまでした。」

高野「じゃあな。」

ガチャ パタン

山城「…。」

吹雪「や、山城さん？司令官が、戦死ってどういうことなんですか？」

扶桑「えーっと、その、吹雪ちゃん。これはそのー、」

吹雪「教えて下さい、山城さん！」

山城「…いま、提督は特地に龍退治に行っているわ。」

吹雪「龍？龍って、あの火を吐くあれですか!?そんな！ただの人間の提督がそんなのと戦ったら、殺されてしまいます！なんで提督を止めなかったんですか！」

山城「わかつているわよ！でも、行かなければ提督はシベリア送りにされて、ここは糞野郎どものものになる！行っても死んだら糞野郎

どもの思う壺！でも、提督は糞野郎どもが私たちを苦しめないように死地へ行く道を選んだ！」

扶桑「ただ、かなり高野総長も色々としてくれてるみたいだからなんとかなるかもしれないけど…。」

吹雪「でも！」

山城「…吹雪ちゃん、わかって。提督は、皆を守るために特地へ行つたの。私はそれを止めることは出来なかった。今は、提督の帰還を祈るしかないのよ。」

吹雪「山城さん…。」

扶桑「…にしても二人ともさっぱり触れないけど、提督が死ぬと能代さんも一緒に死んじゃうのよね。」

山城「能代は、大丈夫だと思うわ。彼女はたくましいから。」

扶桑「…そう。」

く犬と戦車と人く

三咲「あれ、初それ3DS？」

初「ああ。特地は娯楽が少ないそうだからな。一応持ってきた。」

三咲「なにやってるの？」

初「メタルマックス4。」

三咲「なにそれ。」

初「犬と戦車と人が織り成すrpgだっけか。初代の謳い文句は、『龍退治はもう飽きた！』だったな。」

三咲「へー。龍って、やっぱドラクエ？」

初「ああ。だがまああれほどは売れなかったが、それでも未だに根強いファンがいる作品だな。ファミコン、スーパーファミコン、PS、PS2、DS、3DS、スマホゲームなど多くの個体で出ているしな。」

三咲「へー。にしても…戦車？」

初「ああ。世界観はドラクエはファンタジーだが、メタマは…世紀末だな。北斗の拳みたいな世界。」

三咲「へー、文明の滅んだ未来、みたいなの？」

初「ああ。その通りだ。んで、世界中に異常な進化をした生物やら、人を殺すようにプログラミングされたマシンやらがいる。んで、それを倒して金を稼いでいるのがハンターだな。主人公は大抵これだ。」

三咲「まあ要するに、おもしろいのね？」

初「ああ。」

三咲「じゃあ、今度おすすめのやつ貸して！やってみたい！」

初「おう。なら、メタルマックス3がおすすめかな。あれは多少操作性やストーリーに難はあるが、ある程度道が決まっているからやりやすいと思う。」

三咲「じゃあ、それ！」

初「ほれ。これだ。」

三咲「え、3DSがもうひとつ？なんで二つも持ってるの？」

初「二つあればできることが増えるからな。」

三咲「あ、うん。そう。ありがと。」

第14話 二つの戦い

「特地へ そのに！」

三咲「…はあ。ついに行くのね…。」

初「…不幸だわ…。」

高野「すまないな。ただ、これをできそうなのはあまりいなくてな。」

初「…わかりました。行って参ります。」

高野「特地の平和を、頼む。」

初「はい。我が家を、私の家族を頼みます。」

高野「ああ。」

初「よし！行くか！」

三咲「…うん！よっしゃー！レッツゴー！」

初「…ここが、特地か。」

三咲「すごい、自然だね。ふあんたじー、って感じ。」

「あー、すいません。」

初「はい！なんででしょうか？」

伊丹「どちらさまですか？特地には許可の降りた人しか来れないのですが…。」

初「…もしや、貴方は『二重橋の英雄』の伊丹一等陸尉でありますか？」

伊丹「あ、はい。陸上自衛隊所属、一等陸尉の伊丹耀司であります。」

初「はじめまして。今回特地甲種害獣の討伐のために本土から派遣されました、犬走初と、」

三咲「大石三咲であります！」

伊丹「ああ、本土からの増援でしたか！わかりました。あ、トラック載せてもらっていいですか？誘導しますんで。」

初「はい、大丈夫です。」

伊丹「んじや、失礼します。積み荷はなんですか？」

初「F-4と、対ドラゴン用試作兵装、予備パーツ、燃料と弾薬、あ

と食料ですね。」

伊丹「おお、F-4ですか。こつちにあるF-4はそのドラゴンのせいでどれも修理中だったので、嬉しいです。」

初「にしても、龍はどんな感じですかね？航空機で倒せますか？」

伊丹「正直、AC-130レベルの火力かつF-15並の速度と機動性がないと被害は免れない、です。」

初「そうですか…。試作の武器が効けばいいのですが。」

伊丹「そういえば、その試作兵装ってのはどんなものなんですか？」

初「120mm無反動キャノンポッドだそうです。」

伊丹「…いやいやいや。そんなものあるわけないじゃないですか。航空機に積めませんよ？」

初「大丈夫だ、問題ない」って高野軍令部総長が。」

伊丹「ははは、大変ですね。あ、ここに止めておいてください。後で荷下ろしします。」

初「了解しました。」

レレイ「伊丹、栗林が休憩終わっても戻ってこないって怒ってる。早く戻るべき。」

伊丹「うわお、さっさと戻ろ。」

レレイ「…？伊丹、この人たちは？」

初「ん、ああはじめまして。龍討伐のため日本本土から派遣された犬走初です。」

三咲「大石三咲よ。…子供？」

レレイ「大人だ。そして伊丹の配偶者。」

初「…伊丹さん…。」

伊丹「…文化の差って恐ろしいですね。ははは。」

三咲「…ドンマイ。」

伊丹「ほら、それより行きましょう。」

レレイ「またな。」

三咲「またねー。」

伊丹「あー、戻ったぞー。」

栗林「遅い！一体どこほつつき歩いてたんですか！仕事です仕事！」

伊丹「ちよ、まて栗林！」

栗林「待ってられるか！座って仕事しろ！」

伊丹「なー！もう！内地から派遣された人たちが来たから迎えてたの！」

初「あははは……」

栗林「あ、し、失礼しました！一等陸曹で伊丹の秘書の栗林志乃です！」

初「どうも、内地から派遣されました、犬走初です。」

三咲「大石三咲です。よろしくお願いします。」

栗林「へ？」

伊丹「というわけだから栗林、二人の案内してく」

栗林「ええええええ！」

伊丹「ぬおお!?なんだ、どうした栗林!？」

栗林「いや、なんであんたは当たり前のように接してるのよ！『ロシアの英雄』犬走初さんに、『女性自衛官初のアグレッサ』の大石三咲さんよ!?驚かない方がおかしいでしょ！」

伊丹「え?え、まじすか？」

初「あつはつは！まじまじ。本当。いやー、ちよつとした意地悪かな?改めまして、元航空自衛隊一等空佐、現海軍中将の犬走初であります。」

三咲「元航空自衛隊三等空佐、現海軍少佐の大石三咲です。艦娘の時の名前は能代です。」

伊丹「へ、えつ!?空佐!?めっちゃ上の階級じゃないですか!す、すいません！」

初「あははは！いいいいいよ。どうせいまは自衛官じゃないからね。んで、早速だけど機体をおろして調整したあと、少し飛びたい。いいか？」

伊丹「わかりました！すぐ準備させます！」

栗林「うわあ、すごい。本物だあ……。」

初「うわあ、すごい目がキラキラしてる…まあたしかに、いつも柱島に引きこもってるからねえ…。そんなに祭り上げられたくもないし。」

栗林「あ、あの、あとで手合わせしてもらってもいいですか?」

初「あー、ごめん。俺肉弾戦はそんな強くないからから…」

伊丹「あー、ならやめといたほうがいいですね。栗林はこつちじや神に近い生き物扱いされていますから。」

栗林「ちよ、言わないでよ!」

初「うわお。俺じゃ死んじまうな。」

栗林「むう…。」

初「すまんな。」

伊丹「あ、荷下ろし終わったそうです。」

初「了解。んじや、機体の調整するかね。」

三咲「こんな青い空を飛べるのかー。楽しみ。」

初「だな。」

《夜。夜だ。誰がなんと言おうと夜だ!そしてアルウスの酒場だ!》

ロウリイ「へえー。つまりその人はロシアって国の英雄なんだあ。」

栗林「ええ。すごい強いんだと思う。」

ロウリイ「でもお誘いには乗らなかつたんでしょう?」

栗林「うん。」

ロウリイ「じゃあさ、後ろから攻撃してみたらどうかしら?本当に強いならそれぐらいかわしてみせるわ、きっと。」

栗林「あ、いいわねそれ。じゃあ、ちよつと行つてく…」

ロウリイ「あら、どうしたのお?」

栗林「こつち見てた…。聞こえてたのかも。」

ロウリイ「え、でも私でもここのなかじやこの距離では聞き取れないわよ?」

栗林「…もしかして、なんか感じたとか?」

ロウリイ「第六感ってやつ?」

栗林「かも。」

伊丹「初さん、どうしました？」

初「んー、あの黒い服の女性、なんかオー…雰囲気が違うなあ、と。」
伊丹「ああ、ロウリイですか。彼女は巫神って言って、まあ神様見習いみたいな種族なんです。」

初「へえ。神様ですか。」

三咲「…うん、雰囲気の違いなんてわからないよ初。」

初「そうか？」

三咲「うん。」

初「そっかー。ま、そのうちわかるようになるさ。」

伊丹（多分無理だと思う。）

その後一週間、キャノンポッドでの砲撃の練習や対ドラゴンを想定した演習を行った。それはまさしく、月月火水木金金の毎日であった。

そして特地へついてから八日目。

伊丹「それでな、栗林のやつがさー」

栗林「初さん！出ました！」

初「ん、なにがですか？」

栗林「ドラゴンです！いま、イタリカの町にまっすぐ向かっていると報告が！」

伊丹「な、イタリカだって!?!」

初「人口密集地だな。よし、出撃する。行くぞ三咲。」

三咲「らじやー！」

管制塔『メビウス1、離陸を許可します。』

初『了解。メビウス1、離陸する。』

ゴオオオオオオオ：

伊丹「…頼むぞ、犬走さん…。」

初『レーダーに反応は?』

三咲『無い。…ん、あれ!』

初『…おお、黙視で確認。でかいな。』

三咲『あの大きさ、そして固さ。まさしく空の要塞ってところなのかしら。』

初『なに、要塞なら戦車で落とせる。攻城戦だ!いくぞ!』

三咲『了解!地に落としてやろうじゃない!』

龍「グオオオオオ!」

初『よーし、ヘッドオン!』

三咲『進路そのまま!よーそろー、よーそろー、つてえー!』
ボオン

初『Miss!』

三咲『Demnit!』

初『くそ、あいつ避けやがる』

三咲『初、ヘッドオンで600まで近づいて下さい。確実に当てます。』

初『わかった。よし、もう一度正面からだ!』

龍「グオオオオオ!」

ボオツ

三咲『敵機発砲!』

初『回避する!カウンターマニューバじゃあい!』
ギョオオオオオン

三咲『回避成功!』

初『よし、ヘッドオン!』

三咲『よーそろー!』

初『1000…800…700…今!』

三咲『ファイア!』

ボオン

ドオン

龍「グオオオオ!!!」

三咲『命中!羽が片方もげた!』

初『おお、落ちた。よし、これより追撃戦に移行する。』

三咲『オーラアイ!』

龍「グオオオオ…」

蜻蛉……………

初『いやはや、少しやり過ぎたかな?』

三咲『頭が吹き飛んじやったね。』

伊丹『あー、あー。メビウス1、こちら伊丹。現在そちらへ向かっている。どのような状況か?』

初『こちらメビウス1。龍の頭と左羽を吹き飛ばした。どうやら活動を停止した模様。』

伊丹『了解。メビウス1、帰投して下さい。』

初『了解。帰投する。』

一同『『『『かんぱーいー!』』』』

伊丹『いやー、流石ですね!あの龍を簡単に倒すなんて!』

初『いやいや、高野長官の試作兵装がきれいに決まったからですよ。』

伊丹「でもあんな航空機に戦車砲をほん付けした、それこそ現代のシフトウーカとも言えるような機体である龍を倒したんですから、誇って良いですよ!」

倉田「それなら犬走さんは魔王でありますな!」

桑原「そして嫌がる大石さんに言うわけか。」

倉田桑原『休んでる暇はないぞ三咲、出撃だ!』あっはっはっは!」

初「はははは…」

《二日後》

初「それでは、お世話になりました!」

三咲「なりました!」

伊丹「また来てくださいね。できれば仕事以外で。」

栗林「次こそは手合わせを…」

初「やだ!」

栗林「そんなー。」

伊丹「あつはつはつは!」

初「それでは!」

三咲「さよーならー!」

く 激闘 柱島く

扶桑「山城、ミサイルが来たわ!」

山城「了解! 龍田、SAMで迎撃して!」

龍田「はいはい!」

吹雪「敵揚陸艦接近します!」

山城「航空支援お願い!」

blaze『了解。』

ビイイイイ…

千代田『こがもたちが敵潜発見!』

山城「アスロツクでの撃沈を許可するわ!」

千代田『了解!』

シユゴオオオオオ…

山城「くそつ、なんでこんなに断続的に来るのよ! もう五日目よ!」

那珂「潜水艦での潜入みたいだね。対潜哨戒機はどうしたの?」

山城「それが、どこの飛行場もまともに取り合ってくれないのよ。

『そんな事実が有るわけ無い』って。」

吹雪「なんでですか! 実際に今こうして戦闘が起きているというのに!」

山城「保身よ、保身。どうせそんなやつらしか居ないのよ。うちに
対潜哨戒機があれば…!」

吹雪「保身って何からですか!」

山城「上の方にいる糞野郎よ！糞が！」

『お困りのようだな、同志諸君！』

山城「な、その声は！」

ガングート『はっはっは！そうだ！日本の一番の友好国たるロシアの艦娘、 GANG』

Sarato ga「ガングート！一体一ヶ月も何処に行っていたのですか！サラは心配していたんですよ！」

ガングート『え、ちよ、いや、そのだな？』

Sarato ga「言い訳なんていりません！サラは…サラは心配で…！グスツ」

山城「襲撃されてるなかでおまえらはなにやっとなんじゃあ！」

Sarato ga「きやあ!?S, Sorry山城。」

ガングート『あー、それでなんだが。』

山城「なにかしら!？」

ガングート『お、怒るな山城。』

山城「じゃああんたは何してるのよ！」

ガングート『ロシアから帰って来たんだ！大統領の贈り物もある！』

山城「なにを貰ったの？」

ガングート『あー、Su-57が二機と、Tu-142MZが五機！それとT-14が50両だ！あとマトリョーシカが200個！』

扶桑「マトリョーシカ…？」

山城「Tu-142MZって対潜哨戒機じゃない！ちようど良いわ！燃料はもつ？」

ガングート『勿論だ。』

山城「なら、柱島周辺と各水道を索敵して！潜水艦がわらわらいるみたいなのよ！」

ガングート『はっはっは！任せておけ！』

ブオオオオン…

warwolf1『山城。敵軍戦闘機を発見した。どうすれば良い？撃墜か？』

山城「ええ！お願い！」

warwolf1『了解。よし、ガッツ行くぞ！』

warwolf2『了解！』

ガングート『各哨戒機からデータが来た！千代田、データリンクする！』

千代田『ええ！こがもたち！土竜狩りよ！』

／クエー！／

blaze『おお、潜水艦撃沈だ。』

swordsmen『こつちでも確認した。』

chopper『こつちでも確認だあ！良いね良いねえ！ロックが似合いそうな快進撃だ！』

archer『じゃあ、EDFが優勢な時のアレでも流しますか？』

edge『グリム、それはフラグになるからダメよ。』

archer『そうですか…。あれ好きなんですけどねえ。』

シユゴオオオオオ！

edge『な、潜水艦発射ミサイル！』

chopper『不味い！対潜哨戒機を狙ってやがる！』

ガングート『何!? 戦闘機ならともかくTū-142MZでは上げられん！』

Saratoga「ガングート！逃げて！」

magic『ならば私に任せてもらおう。』

warwolf1『な、マジック!? 日本にまだいたのか！てつきり

アメリカへ帰ったのかと思っていたぞ！』

magic『ははは！いや、色々あったのさ！それよりもいまはミサイルだ！』

山城『何をする気!?』

magic『なに、ただレーザーで打ち落とすだけさ！それ、ロックオン！』

warwolf2『レーザー!? マジック、お前まで！』

magic『ファイア！』

ビイイイイ…

ドカアアアン…

magic『…迎撃成功!』

千代田『データリンク! 目標敵シンファクシ級潜水艦! アスロック
ファイア!』

シユゴオオオオオ

ドカアアアン!

ガングート『よし、敵潜に直撃と思われる爆発音を探知! 敵潜、浮
上する!』

magic『デイスイズナイアーツド　なんてな』

archer『浮上を確認! 糞、やっぱりこいつはでかい!』

garudal『対地なら任せておけ。行くぞシヤムロック!』

garuda2『ああ! やってやろうタリズマン! ガルーダ2、f
ox2!』

garudal『ガルーダ1、ボムズアウエイ。』

ドンドーン　ボオオオン

chopper『対艦攻撃なら俺らだろう? よし、対艦ミサイル発
射!』

edge『発射、発射!』

blaze『TLSファイア。』

wordsman『なんて風情の無い。よし、対艦ミサイルファ
イア!』

ドンドーン　ドドオオン　ドカアアアアン!

ガングート『…、撃沈確認! よし!』

山城『よし、このまま押しきるわよ!』

那珂『山城! 大島海軍大将から連絡! 『救援は要るか』だって!』
山城『くたばれ糞野郎、とでも返しといて!』

那珂『了解!』

《大阪港》

大島『クタバレクソヤロウ』だとお!』

宮西『どうも調子にのっているようですね。艦娘風情が。』

大島「我慢ならん！今なら大高のやつも旅行で居ない！行くぞ！1
5. 5mm砲の威力を見せてやろうではないか！」

宮西「出撃する！」

「…」

《柱島》

Sunflower「…ん？接近する艦を発見。友軍艦だな。山城
どうする？」

山城「回線を繋げるかしら？」

Sunflower「ふむ…繋がった。どうぞ。」

山城「こちらは柱島鎮守府提督代理の山城です。現在柱島は襲撃下
にあるため、今すぐ180度回頭し、大阪湾へ向かってください。繰
り返します。現在柱島は…」

大島「黙れ！貴様なんぞの命令に私が従う理由など無い！今すぐ鎮
守府と武装を引き渡せ！さもなければ武力行使も辞さん！」

山城「拒否します。柱島への入港等は許可された人物のみしか出来
ないように現在なっています。」

大島「ふざけるな！私は海軍大将だぞ！艦娘ごときが私に逆らうの
か！」

山城「この命令は天皇陛下及び大高総理大臣、そして高野軍令部総
長三名による命令です。大将レベルでは覆すことは出来ません。今
すぐ回頭しないのであれば命令違反及び利敵行為として貴艦を撃沈
します！」

大島「そんな嘘などに騙されるか！砲撃するぞ！」

大高「山城さん。代わってくれるかな？」

山城「…はい。お願いします。」

大高「代わりました、大高です。大島くん。君はやはり中国の方と
繋がっていたのだね。悲しいです。」

大島「な、大高首相!？」

大高「ええ、その通りです。今はたまたま柱島の方に旅行に来てい

ましてな。このような状況なので柱島鎮守府へ避難させてもらっていたのです。それで…まだやるのかね？」

大島『首相…いや、こんなところに大高がいるわけがない！主砲砲撃用意！』

大高「…駄目だったようです。すいませんな。」

山城「…いえ、仕方のないことです。敵艦の撃沈を命令します。」

Sunflower『了解。全機、あの艦を…ん!?なんだ、高速で接近する機を確認！コールサインは…メビウス1！』

ウウウウウウウウ：

山城「なに？サイレン音？」

Sunflower『回線繋がった！』

初『ああああああああ！ジェットで急降下とかするんじゃないか？たあああああああ！』

三咲『初のばかあああああ！いくら鎮守府が砲撃されそうだからってジェットで75度の急降下とか死ぬわよおおお！』

初『くそおおお！食らえ、120mm砲うううう！』

ボオンボオンボオンボオン

三咲『機首あげて、機首！』

初『ぬおおおお！』

三咲『あ、当たったの!?!どうなの!?!』

Sunflower『め、命中！敵艦轟沈！』

三咲『よっしゃ！ざまあみやがれ裏切り者！』

山城「…え、なんとかなったの？」

大高「…そのようすな。はっはっは！流石は初！思いもしないところから恐ろしいことをしてくれますな！」

山城「は、はあ…。よかった…。」

《その後少し経って、執務室》

山城「お帰りなさい、提督。」

犬城「ああ。ただいま。お疲れさまだな。」

山城「お互いね。龍は倒せたの？」

犬城「ああ。初見で倒せた。」

山城「ならよかったわ。」

犬城「そっちはどうだったんだ？」

山城「もう大変だったわよ！五日間もずっと敵が来るんだもの！被弾より先に疲労で死にそうだったわ！」

犬城「そうか。お疲れさん。なんか欲しいもんあるか？」

山城「そうね。まずは寝かせてちょうだい。そのあと考えるわ。」

犬城「そうか。んじゃ、もう上がっていいぞ？」

山城「…そうさせてもらうわ。おやすみ。」

犬城「ああ。おやすみ。」

《今回の敵軍撃退及び特地甲種害獣の撃破の功績を称え、大将への昇進とする。これからの活躍を期待している。》

第15話

くドーバーへく

犬城「あー、ドーバーに展開している横須賀の部隊から救援要請があった。これを受けて、急遽うちから支援を送ることになった。」

加賀「それで私たちですか。ですが、この子は…」

照月「そ、そうですよ！私はまだあの戦場にいくには早いです！」

犬城「だが、摩耶を連れていく余裕がないんだ。そうなると対空艦が居なくてな…。」

瑞鶴「なら、私たち空母が戦闘機をたっぷり積めば！」

Saratoroga「…うーん、そうすると次は打撃力が足りないのでは？敵はかなり奥地に居るみたいですし、弾薬が足りるかどうかな…。」

翔鶴「そうなると少しでも打撃力を高めるしかない…のですか。」

犬城「ああ。」

照月「うう…なら、仕方ありません。まだ練度の低い身ですが、精一杯頑張ります！」

犬城「すまん。編成は、まず本隊として第一、第二艦隊。そしてその支援に第三艦隊を出す。」

衣笠「合計18隻、すごい大艦隊ね。」

犬城「あっちまで行くからな。まず第一主力航空艦隊は旗艦照月、比叡、加賀、Saratoroga、瑞鶴、翔鶴。五人は照月をできる限り守ってやってくれ。」

比叡「了解です！」

犬城「次に第二前衛水雷船隊は旗艦衣笠、大井、五十鈴、木曾、霞、朝潮。基本は五十鈴と朝潮と木曾は対潜攻撃、大井と衣笠と霞は夜戦での止めをやってもらう。」

大井「ま、つまりはいつも通りね。」

犬城「そういうこと。」

衣笠「うーん、今回はカッターインが出ない気がする…。ごめん提督、今回は役に立たないかも。」

犬城「去年の夏もそんなことを言いながら8割以上カットイン叩き出してたじゃねーか。大丈夫大丈夫。」

霞「見張り員込みでカットイン率四割切ってる私って一体…。」

朝潮「霞、多分それはあなたがダメなんじゃないなくて衣笠さんがかかしいんだと思うわ。うん。」

木曾「去年の夏は敵の海月が可哀想だったもんなあ…。うん、あれはひどかった。撃った弾が全部海月の顔に直撃するとかあったもんな。」

犬城「絶対誤認だつてそれ。まあ第三支援艦隊も発表するぞ？第三支援艦隊は、旗艦山城、日向、千代田、千歳、夕立、吹雪だ。」

夕立「出撃っほい！」

吹雪「そうだねー。ですが司令官、砲撃支援なら私よりも火力が出る大潮ちゃんの方が良いんじゃないですか？」

犬城「大潮はだな…。」

大潮「大潮、帰投しましたよー！油たっぷりです！」

山城「なるほど。霞ちゃんも朝潮ちゃんも出撃すると、大発を積める駆逐艦は大潮ちゃんだけですものね。」

犬城「ああ。睦月や如月、それと阿武隈が改二になれば代わってもらえるんだが…。」

千代田「三人とも少し足りないんだよね。ま、少ししたら代われるようになるから、それまでの辛抱だね。」

犬城「ああ。まあ、その編成で頼む。では、出撃！敵不明艦を撃沈せよ！」

一同「了解！」

く曙と提督く

曙「ねえ、クソ提督。」

犬城「んー？」

曙「クソ提督がファイターパイロットってほんとなの？」

犬城「青葉が新聞で公表してたじゃん。まじまじ。」

曙「じゃ、じゃあさ、戦闘機を見せてくれない？見てみたいの！」

犬城「んー、じゃあ、仕事が終わって、山風をなんとか引き剥がしたらな。」

曙「やった！ありがと、お父さ…いや、クソ提督！」

犬城「罵倒された!？」

山風「Zzzz…」

く一区切りく

《ドーバー海峡》

比叡「敵艦は敵不明艦と戦艦棲姫のみです！これが最後！夜戦で止めをお願いします！」

衣笠「了解！さあ！衣笠達の夜戦、見せてあげる！」

《夜

戦

突

入

！

！》

衣笠「ごめん！夜偵が不調で飛ばせない！」

五十鈴「駄目！照明弾不発だわ！」

朝潮「探照灯照射します。」

衣笠「逃げてても無駄よ！」

ドーン ドンドン

朝潮「…駄目です！戦艦棲姫に当たりましたが効果なしです！」

衣笠「ごめん！大井っち、木曾っちお願い！」

大井「わかったわ！さあ、新しい副砲の力、見せてもらおうわ！海の

もずくとなりなさいな！」

霞「大井さん、もずくじゃなくて藻屑よ！」

大井「え、もずくでしょ？」

朝潮「私ももずくだと思うわ。」

霞「あーもう！バカばっか！」

大井「まあいいわ！うりゃ！」

ドンドンドーン ドンドンドーン

朝潮「数発命中！敵艦…未だ健在！」

大井「そんな!？」

木曾「任せておけ！」

ドーン

朝潮「駄目！回避された！」

五十鈴「嘘！もうダメじゃ」

木曾「ははは！お前らの指揮官は無能だな！」

ドドーンドドドーン

ドカーン ドカーン

朝潮「な、全弾命中！敵不明艦轟沈！」

木曾「つしやあ！」

衣笠「敵戦艦撤退していくわ！」

霞「逃がさないわ！魚雷、つてー！」

ドカーン

朝潮「一本命中！…だめ、敵速変わらず！海域から離脱しました…。」

五十鈴「追撃をしましょうか？」

山城『こちら山城、敵不明艦の撃沈が我々の任務よ。無理な追撃はせず、前線基地に帰投しましょう。』

衣笠「了解。みんな、帰投するよ。」

大井「了解だ。」

《ジブラルタル基地》

犬城『あーあー。これ聞こえてる？』

比叡「聞こえてますよ！」

犬城『それならよかった。まず最初に、敵不明艦の撃沈、ご苦労だった！この後なのだが、その海域に現在行方不明となっている独国空母が居るそうなのだ。それを捜索してほしい。』

比叡「独国空母というと、フォン・リヒトフォーヘン級ですか？」

瑞鶴「え、なにそれ？」

犬城『いや、グラーフ・ツェッペリンだそうだ。』

比叡「ああ、あの装甲空母ですか。」

加賀「いえ、グラーフ・ツェッペリンは赤城さんを参考にした普通

の空母ですよ?」

比叡「あれ?あれ?」

犬城『んー、まあ、そいつの搜索をたのむ。』
衣笠「りよーかいー。」

犬城『たのむぞ。では以上!』

比叡「うーん、うーん?」

瑞鶴「んでさ、フォン・リヒトフォーヘン?ってなんなの?」

比叡「ドイツの急造空母です。ニミッツと同レベルの大きさで同型艦が16隻ほどいたはずです。」

瑞鶴「それはすごいわね。やっぱり戦果もすごかったの?」

比叡「:アイスランド沖海戦では三隻が敵に被害を与えられず他の艦とともに轟沈、その後もほとんど戦果なくほとんど撃沈されました。ちなみに搭乗員曰く『塵バケツのような船』だそうです。」

瑞鶴「ええ:~?」

比叡「まあ、そういうことです。急造はいかんです。」

瑞鶴「そうね。うん。」

Saratoroga「:そんな船ありましたっけ?」

山城「知らないわよ。」

Saratoroga「まあ、そうなりますか。」

↳ 新たな空母改二

犬城「ふーん、ふーん?」

摩耶「提督、なにふーふーいってんだ?」

犬城「んー、いやこれこれ」

摩耶「ん、なにになに? 『海外大型正規空母の改二及びそれに伴う新艦載機の実装』? おお。また改二か!」

犬城「ああ。しかし誰だろうな?」

摩耶「んー、今のところいる海外正規空母つーと、アクイラ、サラトガ、この前保護したアークロイヤル、現在搜索中のグラーフ・ツエツペリンの四隻だな。」

犬城「ただ、アクイラとグラーフは未成艦、特にグラーフは艦載機が更にifを重ねることになりそうだな。」

摩耶「だな。あるとしたらスツーカーのD-4とかE型、あとは墳式機としてMe262の艦載機型とかだろうかねえ。」

犬城「スツーカーはあつてもシユヴァルベはきびしいだろうなあ。」

摩耶「アクイラはわからないな。イタリアには詳しくない。」

犬城「どちらにせよイタリアだと計画機だろうな。」

摩耶「デスヨネー。んで、アークロイヤルは…あとまだできていない艦載機？はウォーラスとロックだな。載つけてないやつも含めていいならシーファイアとかファイアフライとかシーハリケーンとかだな。」

犬城「まあ有り得なくはないな。大きさはサラと変わらんしなあ。」

摩耶「そのサラトガは…改二だとすると夜戦空母かねえ？」

犬城「まあ一番可能性のあるのはサラだろうな。横須賀に試験的に夜間艦上戦闘機が配備されたって話だし。」

摩耶「ほーん。…また設計図かね？」

犬城「それどころかカタパルトもかもしれん。実際に1944年にカタパルトを装備しているからな。」

摩耶「へー。じゃあジェットも使えるのかね？」

犬城「木製甲板でジェットは駄目だろ…。あつてもF6FかF8F、FH-1それかA-1ぐらいだろ。」

摩耶「スカイライダー…それはやばいだろ。」

犬城「まああれは化け物だから…。まあどうせ夜間型のF6Fだろ。」

摩耶「ま、情報もそのうちくるだろ。のんびり待とうぜ！」

犬城「だな。」

くL.V.99く

《仮面ライダー》つこ第二回》

青葉(2号)「くうっ！なんなんですかあれは！ダメージが入りません！」

野分 (V3) 「一体どうなってるんでしょようか。」

翔鶴 (ゲム) 「アツハツハツハツハ！私是不滅です！」

加賀 (スナイプ) 「くそ、さすがデンジャラスな『ゾンビ』ですね。RPG的に言うなら高防御・毎ターンHP全回復でしょようか。」

如月 (フォーゼ) 「なにそのチート！ずるい！」

翔鶴 「ははははははは！神の才能に不可能は無いのだあああああ！」

野分 「いけない、翔鶴さんがおかしくなってます！」

青葉 「早く止めないと！」

加賀 「無理です！私たちにはアレを止められません！ああ、Lv.50があれば！」

「なら任せてもらおうかしら？」

如月 「その声は…霞!？」

霞 「その通り。んで、そいつが敵？」

翔鶴 「アツハツハツハツハ！」

加賀 「ええ。ですがどうも高防御かつ全回復するせいで倒せないんです。」

霞 「へえ…。面白い。心が踊るわ！」

デュアル ガシヤット!!

The strongest fist!
What, something next stage?

霞 「MAX大変身！」

ガツチャーン！ マザルアップ！

赤い拳強さ！青いパズル連鎖！赤と青の交差！

PERFECT KNOCK OUT♪

霞 「パーフェクトノックアウトLv.99！さあ、楽しませてもらうわよ？」

翔鶴 「貴様なんぞに私が倒せるかあ！」

霞 「遅い遅い！」

翔鶴 「くそお！」

犬城 「霞ー、聞こえるー？ご飯だからそろそろ帰ってきてねー。』

霞「…もう少し遊ぶつもりだったけど、気が変わったわ。とどめよ。」

ガツチョーン ウラワザ!

ガツチャーン!

PERFECT KNOCK OUT! CRITICAL B

ONBER!

霞「うおらあ!」

翔鶴「ぐあああああ!?!」

ドカアアアン

K.O.

霞「これで終わりよ。さて、ご飯ご飯。」

加賀「それはガシヤットギアデュアル!どこでそれを!?!」

霞「最高練度のお祝いにつて司令官にもらったの。」

加賀「ふむ…なら私はβを頼んでおきますかね。」

霞「じゃ、頑張つてね。…ふふふ、ご飯、ごっはんー♪」

加賀（かわいい。）

第16話 とても平和

くそういえば戦時下だったく

犬城「いやー、なんというか、平和だねえ。」

…ドカアアアン…

山城「そうですねえ。」

…ドカアアアン…

犬城「弾道ミサイルの雨が降ってなければもつと平和なんだけどねえ。」

…ドカアアアン…

山城「ミサイル迎撃機の改E-747の『光龍』の増産も決まりましたし、ミサイルはあまり怖くありませんね。」

…ドカアアアン…

犬城「これが日常になりつつあるのが怖いね。でもさ、こんだけ撃ってくるなら二割ほど核を混ぜてもいいと思うんだけどね。」

…ドカアアアン…

山城「確かにそうですね。実は本命は別とか？」

…ドカアアアン…

犬城「潜水艦か航空機だろうねえ。でも海も空も敵さん全く動かないしねえ。」

…ドカアアアアンドカアアアン…

青葉「しれーかーん。面白い情報を手に入れましたよー。」

…ドカアアアン…

犬城「どんな情報だー？」

…ドカアアアン…

青葉「それがですね」

…ドカアアアン…

山城「待って。」

…ドカアアアン…

青葉「はい？」

…ドカアアアン…

山城「窓閉めるわ。」

：ドカアアバタン

山城「台詞ごとにこれはさすがにくどいわ。」

犬城「まあ、そうなるな。」

青葉「あ、それで情報です。」

犬城「おう。」

青葉「まず、横須賀の艦娘が『竜宮ノ亀』から電文を受け取ったそうです。」

犬城「内容は？」

青葉「えーつと、『敵本命は潜水艦と思われる。十分注意されたし。』だそうです。」

犬城「ふむ。なら航空機は捨て駒にされる可能性もあるか。」

山城「それが本当の情報ならね。敵の攪乱かもしれないわ。」

犬城「かもな。ま、頭の片隅に入れておこう。で、他にもあるんだろ？」

青葉「はい。なんと隕石騒ぎです。」

犬城「ふむ。どこに落ちたんだ？」

青葉「ウイグルと、カナダだそうです。」

犬城「うーん、なんか嫌な感じがするな。」

青葉「そうなんですよ。なんというか、どうしても嫌な感じが拭えなくて。」

比叡「しっつれいしまーす！あれ？提督と青葉ちゃんはなにを怖い顔をしてなやんでるの？」

山城「いや、なんかウイグルとカナダに隕石が落ちたらしいんだけど、嫌な感じがするんだそうよ。」

比叡「ウイグルとカナダ…？うーん、わかんないかな。あ、そうだ！ちよつとネットで聞いてみる！」

青葉「ネットですか…。うーん、便利になったものですねえ。」

犬城「だな。」

比叡「んー、だめですね。わかりません。」

犬城「そか。ならしやーない。んで、なんか用事があつたんじやな

いのか？」

比叡「おお、そうでしたそうでした！提督、新三八弾の試験が終わったので、最後に提督に見ていただこうかと！」

青葉「ああ、あの新対空砲弾ですか！新聞にのせたいので私も見ていいですか？」

比叡「見てもいいけどすごい光だからカメラは多分無理だよ？」

青葉「ありや、そうなんですか。でも、見たことを書くこともできませんから！」

比叡「じゃあ、行こう行こう！ほら提督も！」

犬城「わかったからグイグイ引っ張るな。山城、執務室を頼むー。」

山城「わかりました。いってらっしゃい。」

《兵装試験場》

青葉「いやー！初めて入りましたよ、ここー！」

比叡「…さて、ここなら人は居ませんね、初。」

犬城「ということは、なにかあったんだな？姉さん。」

青葉「え、なにになに？どういうこと？」

比叡「さっきの隕石です。青葉ちゃん、隕石は先に落ちたのはウイグルの方？」

青葉「はい！あれ、でもなんでそれを？」

比叡「その隕石の場所なんだけど、前世の『マヴラブ』っていう作品で隕石が落ちた場所と同じなの。」

青葉「前世というと、比叡さんの？」

比叡「まあそうですね。それで、その隕石にはとある生物が着いていたの。」

犬城「…あー、思い出した。あれか。」

青葉「え、なんで提督が思い出すんですか？」

犬城「Beings of the Extra Terrestrial of human race、和訳は『人類に敵対的な地球外起源

種』通称BETA。それが隕石とともにやって来た。」

青葉「…あ、あの提督。何をいつて…?」

比叡「多分青葉ちゃんも思い出すんじゃないかな。」

犬城「なにかインパクトがあれば…。」

青葉「え、え?」

比叡「インパクト…うーん。あ。」

犬城「あ、もしかして同じ事を思い付いた?」

比叡「多分。じゃあせーのでいきましょう。せーの、」

犬叡「まりもちや」

青葉「おもいだしました。はい。」

比叡「ということは、やっぱり青葉も転生者なのね。」

青葉「へ、転生?」

比叡「よし、じゃあ早速記憶を取り戻しに行こうそうしよう!」

青葉「え、え、え!」

犬城「大丈夫大丈夫。痛くないから。」

青葉「え、え?うーん、提督になら…」

犬城「ちよつと頭痛で気を失う程度だから。」

青葉「いやだああああ!」

比叡「あつはつはつはー!」

青葉「たゝすゝけゝてゝかゝつゝさゝあゝあゝあゝ!」

*But nobody came.

青葉「ああああああああ…」

蜻蛉……………

《柱島泊地地下・竜宮城》

青葉「うう…。まだ少し頭が痛いです…。」

犬城「まあしゃあない。んで、青葉は前世はなんだったんだ?」

青葉「あ、はい。前世では『虎狼型航空巡洋艦一番艦虎狼』でした!」

犬城「え、まさかの旭日艦隊の面子かよ。」

青葉「そういう提督はなんなのですか？」

犬城「日本武尊だ。」

青葉「失礼しました。」

犬城「許す。」

青葉「やったー。」

犬城「ま、これからもよろしくな。」

比叡「よろしくー！」

青葉「はい！これからもよろしくおねがいしますね！」

↳料亭会議

《いつもの神楽坂の料亭》

大高「皆さん、お久しぶりです。今回は火急の内容のため集まれる方のみ集まってもらいました。木戸外相はいまロシアへ渡っています。今回の会議はかなり長いものとなると思いますので、無理はしないようにしてください。では、高野さんお願いします。」

高野「はい。まず最初に中国の行動ですが、最近は毎日のように弾道ミサイルを打ち込んできています。が、量は少しずつ減ってきておきます。無意味だと考えたのか、それとも残りの球数が減ってきているのかは不明です。」

前原「その事なのですがどうやら内陸での戦闘に向けられているため日本へ来るものが減っているようです。」

大高「内陸というやはり？」

前原「はい。例のBETAです。核もそっちに向けられているようです。」

大高「ふむ…。自国内で核を使うほどとは。BETAとはどのようなものなのでしょう。」

高野「それなのですが、見事に前世にこれの出る作品があったのです。が…。」

大高「?どうされましたか？」

高野「いや、そのですね。その作品は一応すべて確認したのですが、

正直なところMOGERAを用いればほぼ問題なく対処が可能です。ただ、敵の数が多いため現在の配備数だと押しきられてしまう可能性があります。」

大高「ふむ、ではMOGERAを増産しますか？」

高野「はい。特地からの資源のお陰でいくらでも作れます。」

東野「では光龍の生産と平行して大急ぎでつくみましょう。」

大高「お願いします。そのBETAですが、どうやらウイグルから東進して中国中心部へ向かっておるそうなのです。」

大石「これは…三つ巴になりますか。」

高野「そうだな。人と深海と宇宙の三つ巴だ。まるでSFだ。」

大高「どちらにせよ対策は立てておきましょう。」

高野「ですな。」

く恋するPJく

PJ「ボー

サイファー「なあラリー。あいつどうしたんだ？」

ピクシー「ん？PJか？」

サイファー「ああ。最近ボーツとしていることが多いからな。」

ピクシー「あいつ、恋をしたんだそうだ。」

サイファー「…は？すまん。聞き間違いか？」

ピクシー「まじだ。しかもその相手は名前も素性もわからんそう
だ。」

サイファー「おいおい…。そりやないだろ。どういうことだ？」

ピクシー「この前の襲撃の時、迎撃戦に参加していた女性と仲良く
なったんだそうだ。ま、そのあとは会えてないんだがな。」

サイファー「…いくら失恋したからって、空想の女性を作るのはど
うなんだ？」

ピクシー「だよなあ。」

PJ「ボー

くそ魚雷挺く

霞「ああああああ！もう！鬱陶しい魚雷挺ね！」

比叡「紅海でもこいつらはかなり鬱陶しかったです！」

照月「…うーん。」

加賀「どうしたの照月ちゃん？」

照月「いや、たしか、ここにいる魚雷挺の数は情報では3群か5群のはずなんですけど、明らかに三分の五倍じゃないですよね。」

加賀「たしかに九倍近くいるわね。」

比叡「もしかしてあれかな、群の数が一増えると三倍とか。」

山城「たしかにそのレベルの差よね。群の数が多いとどれだけ撃つてもいなくならないのよ！ああ！不幸だわ！」

瑞鶴「ひゃっはー！機銃掃射じゃーい！」

翔鶴「不滅だああああ！ヴアアアアアアアアアアアアアアハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！」

Saratoroga「加賀さん！加賀さん！お二人がおかしくなってますー！」

加賀「放っておきなさい。」

Saratoroga「ええ…？！」

第17話 二人目

「那珂と提督」

那珂「今日は私が秘書をするよ。」

犬城「おう。今日は元の性格なのな。」

那珂「んー？別に提督とならいいし。」

犬城「そか。ん、なになに、『中国と休戦、日露中協力でのBETA殲滅へ』。はは、はつやい休戦だな。」

那珂「それだけBETAがヤバイってことでしょ。」

犬城「だろうな。ん、なになに？『ゴジラ出現か？13年ぶりの第一種警戒体制発令』。ほう、『昨日、日本政府に匿名の人物から情報が届いた。それによると、『深海棲艦占領下の〇〇島の放射線濃度が急激に高まっている』とのことである。防衛大臣によると現在調査のため立ち入りを亡命深海棲艦を通して深海棲艦と交渉しているとのことである。』…匿名の人誰だろうな。」

那珂「深海棲艦じゃない？結構いるみたいよ？」

犬城「まじかよ…。テロとか起こされたらひとたまりもないな。」

那珂「うーん、それはないらしいよ。人間にほぼ完璧に変装できるのは姫級だけらしいし。」

犬城「ならいいんだがなあ…。」

ネ級「ニヤ。(ただいま。)」

犬城「おうおかえり。」

那珂「おかえりネっちゃん。」

ネ級「ニヤ？(なにしてるの?)」

犬城「新聞読んでる。」

那珂「今日の秘書だから居るの。」

ネ級「ニヤ。ニヤン？(へー。あ、膝の上に座っていい?)」

犬城「ん？いいぞ。」

ネ級「ニヤ！(やった!)」

ピョン ストン

ガチャ

山風「おはよう、お父さん…。」

犬城「おはよう。」

那珂「おはよう、山風ちゃん。」

山風「おはよう、那珂さ…ちゃん。」

那珂「なんで言い直したの？わたしはどっちでもいいのに。」

山風「那珂ちゃんって呼ばないと…神通さんが怖い。」

那珂「…ああ、ごめんね。あとで叱っておくよ。」

山風「お願い…。あ、お父さん、膝に乗せ…」

ネ級「「デー」

山風「あ…。」

犬城「ざんねん、ネ級がもういるのよ。」

ネ級「ニヤ。(ごめんね。)」

山風「…じゃあ、腕で我慢する。」

ガシイ

犬城「あう。」

那珂「あー、それ左腕使えるの？」

犬城「むり。がちりホールドされてる。」

那珂「仕事は？」

犬城「右腕と文鎮でなんとか。」

ネ級「ニヤア？(手伝おうか？)」

犬城「んにや、いいよ。」

那珂「私がいるしね。」

ネ級「ニヤー。(そっか。)」

犬城「ありがとな。」

山風「…ねえ、なんでお父さんと那珂さ…ちゃんはネ級が何て言ってるかわかるの？」

那珂「あー、それはね。」

犬城「俺と那珂は昔深海棲艦化したんだ。だから深海棲艦達が何て言ってるかわかる。」

山風「え、深海棲艦に？」

那珂「うん。たまーにいるんだけど、深海棲艦の組織に侵食された

りして、深海棲艦化してしまう人が居るの。」

山風「どうやって?」

那珂「大抵は深海棲艦の弾丸だね。あれにたまについてる組織が体内で融合してしまうパターン。だいたい千発に一発、そういう弾があるの。私はまだ艦娘じゃないときに当たって、深海棲艦化がおこったの。」

犬城「深海棲艦と戦闘したあとに必ず入渠するのはそれがあからなんだ。修復材には浄化作用があるからな。」

山風「そう、だったんだ。」

犬城「ああ。んで、俺は特殊な例で長期に渡って深海棲艦の血を浴び続けたせいで深海棲艦化がおこった。長い期間かけて溜め込んだものだったから、処置は大変だった。」

山風「もう、大丈夫なの? 深海棲艦になつたりしない?」

犬城「ん? もう完全な深海棲艦にはならんよ?」

那珂「そうだねー。処置はできてるしね。」

山風「え、『完全な』って?」

犬城「んー、これは見てもらった方がはやいかな。」

那珂「あ、じゃあ変身するの?」

犬城「ああ。ネ級、降りてくれるか? あと山風も離して?」

ネ級「ニヤア。(わかった。)」

ピョン

山風「ん。」

犬城「ありがとう。よし、いくぞ那珂!」

那珂「わかった!」

犬珂「ライダー……変、身!」

シュピツ

ピカーン!

山風「うわ、まぶしい!」

ネ級「ニヤ。(遊びに行ってくる。)」

トテテテテ…

戦艦水鬼? 「…ふう。この姿になるのは久しぶりだな。」

山風「え、誰？なんで：戦艦水鬼？の男バージョンがいるの？」
軽巡棲鬼「だねー。うーん、ロングはやっぱり邪魔かなー。」

山風「それに：軽巡棲鬼も！な、那珂ちゃんとお父さんはどこ!？」
犬城（航戦水鬼）「俺だ俺だ。山城だ。」

那珂（軽巡棲鬼）「私は那珂だよー?」

山風「え、え？どういうこと!？」

航戦水鬼「んー、深海棲艦化つてのは、止めることはできても治すことはできないんだ。」

山風「止めることはできても治すことはできない：?」

軽巡棲鬼「うん。そして、深海棲艦化は段階的に進んでいくから、止まった時点までの変化はもう戻らないの。」

航戦水鬼「完全な深海棲艦化は脳が深海棲艦の組織に侵食された状態を言うんだが、俺と那珂はそのひとつ前の段階で止めることができただ。だから、人間の中で生きていられる。」

軽巡棲鬼「完全に深海棲艦になっちゃうと思者がぐっちゃぐちゃになつて、殺すことしかかんがえられなくなるんだって。」

山風「そう、なんだ。でも、なんでそれなのにいつもの姿でいたり、その姿に変身したりできたの?」

航戦水鬼「それはだな、いつもの姿はあくまで元の姿を再現したに過ぎないからだ。」

山風「：:どういうこと?」

軽巡棲鬼「えつとね、艦装には使用者の記憶や、艦娘の記憶があるのはしってるよね?」

山風「うん。」

軽巡棲鬼「その記憶の中に、使用者の姿の記憶もあるの。それを元に艦装が元の姿を『再現』して、『形作って』いるの。だから、自分の意思でこうして深海棲艦の姿になることもできるの。」

山風「そう：:だったんだ。」

航戦水鬼「ま、そういうこつた。」

軽巡棲鬼「じゃ、戻ろつかー。」

航戦水鬼「だな。」

／change／

犬城「…ふう。やっぱこっちの方がいいかな。」

那珂「そうだねー。」

山風「お、お父さんは色々すごいね。」

犬城「まあ、そうなるな。」

く提督のタマゴく

山城「提督のタマゴ…ですか？」

犬城「ああ。提督になる人は普通は三年間現場、というか鎮守府で研修を受けることになってるんだ。」

山城「へえ。提督は受けたんですか？」

犬城「んにゃ。とつとといけこのばかやろうこのやろうって言われて最低限のことを詰め込まれてここに飛ばされた。」

山城「ええ…。」

犬城「んで、今日その新人ちゃんが来るってわけよ。」

山城「へー。どんな人なんですか？」

犬城「知らん。」

山城「…へ？」

犬城「軍令部の遊び心の溢れた御方が当日まで情報を一切くれないんだ。」

山城「ええ…。」

ガチャ

高野五十六「はっはっは！その方が面白いだろう？」

犬城「ぬわあ!?!け、敬礼！」

山城「高野総長!?!ど、どうされましたか!?!」

高野「いや、どうもなにも新人君をつれてきたんだ。ついでに情報も。」

犬城「まさか総長直々にですか？」

高野「ああ。ま、これぐらいいいだろう？さてでは御対面といこうか。桜井くん。」

桜井「はい。」

山城「あれ、女性の方なんです。気が合うかな…って提督!? なんと窓から逃げようとしてるんですか!」

ガシイ

犬城「やめろ! 離せ山城! 俺はもうあの生活は嫌なんだああああ!」

山城「ちよ、提督!? いったいなにを言っているんですか!」

高野「そ、そうだ初くん! いったいどうしたのだね!」

犬城「離してください! あいつらが、あいつらがやってくるうう!」

桜井「…えーつと、失礼します。」

ガチャ

犬城「あゝ。」

桜井「…え?」

桜井「ああああああああああ!」

犬城「うわああああああああ!」

高野「な、桜井くんまでいったいどうしたんだ!」

桜井「な、な、な! なんて先輩がここにいるんですか!」

犬城「モウダメダー、オシマイダアアア」

高野「な、先輩だと?」

桜井「はい! 初先輩は私の高校と大学の先輩で、そして私の目標の人なんです…けど。」

犬城「ヤメロー、シニタクナイ、シニタクナイ!」

山城「それがこんな状態と。」

桜井「なんででしょうか。あ、そうだ! 姉御達に相談でもしてみますか! 発見の報告と一緒に…」

犬城「やめて! いつきちゃんそれだけはやめて! 今あいつらに居場所がばれたらここが火の海になる! ただでさえ最近表舞台に立ちすぎてたのに特定までされたら俺死ぬからあ!」

桜井いつき「ひ、必死ですね先輩。」

犬城「初でいいよ…。あの7人に会ったら絞り尽くされるよ。全ての面で。」

山城「いったいどういうことなの…?」

高野「さあな。学生時代のことだろうからわからんな。」

犬城「アハハ、不幸だわ…。」

いつき「その口癖まだ直ってないんですか…。ま、これから三年間よろしく願いますね、初さん！」

犬城「ああ…よろしくな。」

???「ふっふっふ、私の手にかかればいつきの監視なんてお手の物です。さて、みんなに教えてあげますかねえ♪」

犬城「!?!」キュピーン

いつき「?どうしたんですか初さん。急に振り向いて。」

犬城「なんか不幸を感じた。ああ、不幸だわ…!」

山城「はいはい不幸不幸。」

高野「あー、うん。とりあえず自己紹介とはいかがか?」

いつき「あつ、はい。親切高校卒業生、提督候補の桜井いつきです。よろしく願います。」

山城「今日の秘書艦の山城よ。よろしくね。」

いつき「はい!」

くジュースく

いつき「にしても、提督の仕事ってあんまり忙しくないね。」

犬城「まあ、うちは基本暇な鎮守府だからな。最前線とか横須賀呉のようなでかいところだとこれの400倍は忙しいだろうな。」

いつき「うへえ。小さいとこでいいから楽な方がいいな。」

犬城「高野総長にでも頼め。」

いつき「うー。」

蒼龍「あ、当たり前のようにタメ語なんですね。」

いつき「そりゃあ、先輩後輩の前に私と初はライバルだからね!」

蒼龍「ライバル?なんのですか?」

いつき「もちろん恋のライバルだよ!姉御をめぐつての!」

蒼龍「え、提督高校のころ誰かを追いかけていたんですか!」

犬城「いいや? まったく。どちらかと言うと追いかけて回された。」
いつき「…まあ、実際のところそうなんだよね。初、校内でもヤバイ部類の人たちにやけに好かれたもんね。」

犬城「いつあいつらがここに来るかわからんから…。来たら終わりだな。」

蒼龍「いったいなになが…?」

ガチャ

臯月「しれーかーん!」

江風「失礼するぜー。」

犬城「ん、どうしたんだ?」

臯月「うーんとね、三人に聞きたいことがあつてきたんだ!」

江風「三人はなにジュースが一番好きだ?」

いつき「また不思議な質問だね。なんで?」

臯月「えつとね、駆逐のみんなでジュースを一杯つくって、パーティーをしようって話をしてるんだ!」

犬城「なるほど。」

蒼龍「ジュースかー。私は桃かな。」

いつき「んー、私はグレープフルーツかな。」

犬城「俺はオレンジだな。あ、リンゴはやめてくれ。」

江風「うおーたーさーばーってのを使うからだいじょうぶだ。」

犬城「ならよかった。」

蒼龍「なにになに? 提督、リンゴ嫌いななの?」

犬城「いや、リンゴジュースが嫌いなんだ。」

いつき「へー。意外ね。トマトとキノコが苦手なのは知ってたけど、リンゴジュースかー。なんで?」

犬城「…昔な、ホテルに泊まったときにディナーで出た飲み物があつたんだが、お茶だと思って飲んだらリンゴジュースだったんだ。しかもめっちゃ不味いやつ。」

臯月「うわあ。確かにそれは辛いね。」

犬城「それいこうどうしてもリンゴジュースは駄目でな…。」

江風「…え、そんなことか!？」

犬城「ああ。」

江風「まじかよ!もったいねえ!」

いつき「ピコーン」

いつき「ねえねえさつきちゃん。」ボソボソ

皐月「ん?なんだいいつきちゃん。」ボソボソ

いつき「初のリングゴジュース嫌いを治すために、とびっきりのリン

ゴジュースをつくらない?」ボソボソ

皐月「いいね!わかった、話しておくよ!」ボソボソ

いつき「お願いね!」ボソボソ

犬城「二人ともどうした?」

皐月「いいや、なんでもないよ!」

いつき「うんうん。」

犬城「ならいいんだが。」

皐月「じゃ、今度ね!」

いつき「うん!頑張つてね!」

江風「もちろんさ!」

く第五拾戦術く

加賀「やりました。」

犬城「最高練度おめでとう!という訳でどうぞ。」

加賀「やりました!」

いつき「…え、そんなおもちゃでいいの?」

犬城「おもちゃじゃないぞ?」

いつき「いやいや、どう見ても仮面ライダーの変身アイテムのおも

ちゃでしょ。」

犬城「なに言ってるんだ。俺お手製のガシャットギアデュアルβだ
ぜ?もちろん変身もできる。」

加賀「いわれるよりも見る方が早いと思います。では早速。」

キューーン

BANG BANG SIMULATION!

I r e a d y f o r B a t t l e s h i p !

加賀「第五拾戦術！」

デュアルアップ！

スクランブルだ！出撃発進バンバンシミュレーション！発進！

加賀「これが…レベル50ですか。なんだかガタツクとそこまで変わっていませんね。」

犬城「その感想はひでえや。」

いつき「いやいやいや。なんで当たり前のように変身してるのよ。」

加賀「うちでは普通ですよ？」

いつき「ええ…？」

犬城「気にしたら負けだ。あと、あんまガタツクと同じ同じ言ってるとうんメイノーするぞ？」

加賀「すいません。」

犬城「ならよし。んじゃ、たのしめよ。」

加賀「はい。」

第18話 メンテ明け

く新たなる改二く

犬城「とうわけでサラ改二ばんざーい！」

加賀「夜戦空母ですか…面白い。」

サラトガ「はい！夜間発艦しての攻撃ができるようになりました！ただ…。」

蒼龍「んー？どしたん？」

犬城「その夜間攻撃隊とともにに配備される夜間戦闘機と夜間攻撃機が大本営から来るはずだったんだが、条件にこんな任務がな。」

飛龍「なになに…？え、軽巡と駆逐2隻を含む艦隊で5―5!?ふざけてるの？」

サラトガ「まじってやつです。6―2はなんとか突破したんですが…。」

犬城「うちは5―5は出撃経験がないからノウハウがないんだよなあ。だからレ級が怖い怖い。」

赤城「私はボーキがこわいです！」

加賀「ボツシュートとなります。」

赤城「そんなあああああああああ…」

加賀「ただでさえ少ないボーキを食べるとは。少しは自重してほしいものです。」

アークロイヤル「なんだ、今のは？」

アキラ「いつものことです。そのうちなれますよ？」

アークロイヤル「ええ…？」

サラトガ「私だけでは夜間攻撃ができませんよ…ね…。航空隊がないので…。」

加賀「一航戦の子達なら出撃できます。」

蒼龍「二航戦も！」

瑞鶴「五航戦もいけるわ！」

日向「四航戦もいけるが？」

サラトガ「あら？あらあら？これは…夜間戦闘機隊とかいららないの

では？提督。」

犬城「こいつらは中身がおかしいんだ。中身が。ただまあそんなだよなあ。なぜかできそうな化け物。パイロットどもでも夜間戦闘はできないんだよな。」

明石「あ、それは艦装の都合だそうですよ。」

犬城「どういうことだ？」

明石「空母の艦載機はどうしても本体の艦装から離れてしまうため、動くためのエネルギーを太陽エネルギーで賄っているのです。それゆえ夜間は行動ができません。」

加賀「では、夜間戦闘機はどうしているのですか？」

明石「はい。今回の夜間戦闘機は、太陽エネルギーに加えて母艦からの赤外線によるエネルギー補給が可能となったのです。ですから、夜間であっても補給機構を持った母艦が近くにいれば行動ができるのです！」

犬城「なるほど。だからサラトガはその機構を積んでいるから夜間航空攻撃ができるわけか。では、普通の艦はどうするんだ？そんな機構は積んでいないと思うが。」

明石「そこで『夜間作戦航空要員』です！彼らのもつ誘導灯からなんか色々あつてエネルギーが送れるんです！」

犬城「なんか色々つて？」

明石「なんか色々です！」

犬城「なるほど。」

蒼龍「…まあ、エネルギーは送れるわけだね。うん。」

明石「はい！」

犬城「まあ、夜戦前提なら選択肢の一つとしてあつても良いかな。ま、のんびりと進めるかね。」

サラトガ「ですね。レ級は強いですから。」

く磯波新グラヒヤツハアアアア！

犬城「休暇？何日だ？」

磯波「5日ほどです。少し旅行に行つてこようかなあ、と思つて。」

犬城「どこに行ってくるんだ？東京？」

磯波「いいえ、石川県の加賀温泉にでも行こうかなあと。写真を撮りながら、青春18きっぷでのんびりと楽しみながら。」

犬城「写真？それに加賀温泉となると横須賀の加賀さんみたいに自撮り旅か？」

磯波「わ、私なんて写っても誰も嬉しくありませんよ。加賀さんみたいにきれいなわけではありませんから。えっと、青葉さんにカメラの使い方を教わったので、実践もかねて風景を撮ってこようかなー、なんて。」

犬城「なるほど。そりゃあいい練習になるな。にしても温泉かあ。行きたいなあ。」

磯波「…あ、あの、なら一緒に行きませんか？」

犬城「え、いいの？宿とか？」

磯波「まだまだ先なので、取り直しはできると思います。」

犬城「ふむ…じゃあ」

山城「だめです。」

犬&波「えー。」

山城「提督が休暇を取ると毎回毎回何かが起こるじゃないですか。もうその対処するのは嫌なので。」

犬城「むー。だそうだ。すまん。」

磯波「い、いえ。私が誘ったのが原因ですから。それでは、失礼しますね。」

犬城「おう。」

ガチャ パタン

磯波「…はあ。失敗です。」

吹雪「だね。山城先輩がまさか障害になるとは思ってもいなかったよ。」

深雪「ま、まだまだチャンスはあるって！取り敢えず旅行を楽しんできな！」

初雪「その間私は引きこもっておく、から。」

浦波「いや、遠征だよ、遠征。ほらいこー！」

初雪「あああああ！はなしてえええ…」

磯波「そう…ですね！楽しんで、気分転換してきます！」

吹雪「うん！楽しんできてね！」

く空母がカッツイン？く

犬城「戦爆連合攻撃？なんだそりゃ。」

祥鳳「大本営が採用した航空攻撃の戦術の一つだそうです。いくつか種類があつて、FBA攻撃やBA攻撃などがあります。」

犬城「FBA…？なるほど、Fighter・Bomber・Attackerか。」

祥鳳「はい。マニュアルによると、『戦闘機が道を開きつつ対空兵装を機関砲で潰し、爆撃機が砲を急降下爆撃で潰し、雷撃機が雷撃にて撃沈する』とのことですよ。」

犬城「なるほど、理にはなつていますが実戦で行うのは難しそうだな。」

祥鳳「はい。ゼロや烈風の機関砲ではしっかりと守られた対空砲を壊すことはできませんし、あのときのように機銃掃射で敵兵が死ぬわけではありませんから対空兵装の無力化は難しいでしょう。それに、この戦術での要は雷撃ですから、雷撃機に対空砲火が向いてしまうと沈められない可能性もあります。」

犬城「つまり、雷撃を決めるための囷に戦爆隊はされるわけだ。ふむ、戦爆『隊を囷とした雷撃機による』連合攻撃なんてところかね？」

祥鳳「FBA攻撃ではそうですね。BA攻撃は…」

犬城「ミッドウエー海戦でのアメリカ海軍の戦いみたいなのところか？雷撃機が囷になり、急降下爆撃でとどめをさす。」

祥鳳「…はい。『雷撃機の被撃墜は確実なれど、確実かつ多大なる戦果が得られるであろう』とも書いてあります。」

犬城「どこのどいつだ、そんなマニュアルを作ったのは…。戦果よりも帰ってくるごの方が重要だろうに。」

祥鳳「えっと、『波止場 篠和大将』ですね。」

犬城「波止場というところ…あの『新貴族』とか名乗ってるアホな若造どもの筆頭か。なんだろう、なんか頭を抱えている高野総長の姿が思い浮かぶ。」

祥鳳「…それで、どうしますか？このマニュアル。」

犬城「焼こう。べつにその程度の考えなら当たり前のようにしていたしな。」

祥鳳「ですね。」

く本筋にかかわらないく

犬城パラパラ

隳「おはようございます。今日の秘書艦の隳です。」

犬城「おう、よろしくな。」

パラパラパラドォ!

隳「なにかニュースはありますか？」

犬城「ああ。いつぞやのBETAが全滅したそうさ。今は地下施設の破壊中だそうさ。」

隳「ああ、中国の。…あれ、アメリカのやつはどうなったんですか？」

犬城「あつちにはただの隕石だったそうさ。一応核で焼却したそうだが。」

隳「当たり前のように核をつかいますね…。」

犬城「ま、中国の二の舞にはなりたくないだろうしな。あとは…『島吹き飛ぶ、ゴジラ出現か』か。」

隳「ゴジラ…来るんでしょうか。」

犬城「さあな。現在捜索中としか書かれていないからわからん。次は…『日本の内陸部に広い範囲に時空の歪み、隔たれた世界が存在か。』…なんだそりゃ。」

隳「時空の歪み…バイドでもいるのでしょうか。」

犬城「なら波動兵器を実用化しなきゃならん。」

隳「ですね。」

これだけ。

くグラーフツエツペリンく

比叡「…どうやら、行方不明となっていたグラーフツエツペリンは既に撃沈されていたようです。捜索の結果、彼女と思われる遺体を発見しました。遺体は彼女の部隊へ移送済みです。」

犬城「…了解した。悲しいことだな。」

比叡「…はい。あと、照月ちゃんは少しトラウマになってしまったようです。ああいうものをみた経験がありませんでしたから…。」

犬城「そう…か。それは完全に俺のミスだな。こういった場合を全く想定していなかった。」

比叡「この予想は難しいとは思いますが。まさか、亡くなっていると…。」

犬城「だが、こうしてあったのだ。次回以降無いよう気を付ける。それと、照月は？」

比叡「霞ちゃんや朝潮ちゃんが面倒を見ています。多少は回復傾向にあるようです。それと、彼女の所属していた部隊の部隊長から、伝言が。」

犬城「なんと？」

比叡「『彼女を帰投させてくれて、ありがとう。』、と。」

犬城「…そうか。わかった。報告ご苦労だった。」

比叡「はい。失礼します。」

ガチャ パタン

犬城「…精進せねば、ならんな。」

第19話 バイド『は』出ないよ!

く親く

龍驤「失礼するでー、装備開発の報告にーって提督、どないしたんそれ？」

霞「Zzzz…」

犬城「いや、眠そうにしてたから膝枕をしてあげたら寝ちゃった。」

龍驤「男の膝枕とか誰も喜ばへんやろ。」

犬城「それは…思った。」

龍驤「そういえば、山風はどしたん？」

犬城「宿毛の子達と遊びにいつてる。」

龍驤「なるほど。」

霞「んみゆ…」

犬城「ありや、起こしちゃったかな？」

霞「お父さん… お母さん… 行かないで…」

龍驤「…なんや。この寝言は？両親にでも捨てられた夢か？」

犬城「…いや、違うだろうな。霞は艦娘になる前に両親を深海棲艦に殺されているんだ。多分…その時の夢かもしれん。」

龍驤「…それは、辛いな。にしても結構艦娘にはそういう子が多いなあ…。」

犬城「…戦争だからな。仕方あるまい。」

龍驤「…そうやな。そういえば提督の両親はどうしとるん？」

犬城「…父さんは、1995年に死んだ。母さんは、防衛大に入学した日に行方不明になった。」

龍驤「…すまん、悪いこと聞いた。」

犬城「いや、もう十年以上経ったことだ。大丈夫だ。」

龍驤「そう、か。…もし、無理をしとるんやったら相談しいや？うちとか、お衣とかおるさかい。」

犬城「ああ。ありがとうな、龍驤。」

霞「うにゆう…。」

《どこか、遠くて近い場所》

? 「あの子は、元気ででしょうか。」

? 「どうしました?」

? 「…いえ、なんでもありませんよ。さつさとどっか行って下さい。」

? 「はいはい、わかりましたよー。」

くおのレ級く

サラトガ「やられました!」

犬城「んなああああ! なんなんだあのレ級! 固いし強いしなんなんだよ!」

瑞鶴「5—5…恐ろしい海域だね。」

翔鶴「うーん、せめてもう一機噴式機があればいいのですが…。」

犬城「景雲の改修は進めてないのだ! 主にネジがない!」

明石「ちよつと計算してみました、ネジが89個は必要ですね。」

犬城「36個しかねえ! ええい! 明石、ネジを出せ! ネジを出せえええ!」

明石「そんな!? 私には出来ませんよおお!」

犬城「とにかく拷問だ、拷問にかけろ! ネジの在処を吐くまで拷問にかけろおお!」

明石「いやあああ!」

霞「落ち着かんかあい!」

バシーン

犬城「ぎゃああああ!」

バタツ

朝潮「ちよ、霞!? 司令官をスリツパで殴るとはどういうことですか!」

霞「明石さんが拷問にかけられるよりはいいでしょう!? 取り敢えず装備を見直してもう一回出撃するわよ!」

サラトガ「ですね! 頑張っていきましょう!」

く地球の平和を守るためー♪

《神楽坂の料亭。いつものところってやつ。》

高野五十六「今回集まってもらったのは他でもない。本州全域にて確認された『時空の歪み』についてだ。」

犬走山城「先日報道されておりましたな。大体の人は気にしてはいないようですが、一部の人間が騒いでいますね。」

川崎弘「騒いでいた？なにをかね。」

犬城「はい。一部の人間が『バイドだ、バイドが来る』とネットで。」

川崎「バイド？なんだそれは。」

犬城「えーつと、『R—type』というシューティングゲームに出てくる敵キャラの総称です。極めて強い排他的攻撃衝動に支配された本体が異層次元空間に存在する超束積高エネルギー生命体とのことで、有機物、無機物問わず融合捕食する能力があります。」

川崎「なんと、それは恐ろしい。」

高野「まあ、その可能性もなきにしもあらず、というわけだ。」

高杉英作「ですがこの世界はゲームではない。いったいどうするのですか？」

高野「そこでだ。取り敢えず賢議院の若いのにR—typeシリーズをすべてやってもらい、また資料を全て集めた上で情報を時系列に並べて提出してもらった。」

大高弥三郎「待つてください高野さん。なぜ賢議院に？情報部ではないではありませんか。」

高野「私もそう考えていたのですが、どこから聞き付けたのか私のところまでやって来てやらせてくれ、といわれましてな。やる気がある方が楽しめますでしょうから、彼らに頼んだのです。」

大高「ふむ、そういうことでしたか。ううむ、やはり賢議院の方々は少し：不思議なところがありますな。それで、成果はありましたかね？」

高野「はい。まず、バイドは本体が異次元に存在するため、その異次元の本体に干渉し撃破するには『波動兵器』と呼ばれる兵器かバイ

ドを利用して作られた『フォース』と呼ばれる兵器が必要となる。ただ、バイドはまだ確認していませんのでフォースの作成は不可能だ。」大石蔵良「となると、対抗できる兵器は波動兵器しかないわけですか。」

高野「そういうことだ。現在製作チームを立てて作ろうとはしているが、いかんせん手探りゆえに進まん。」

大高「ただ、それがなければ日本はたちまちバイドによって蹂躪されてしまうでしょう。出来る限り早い完成をお願いします。」

高野「わかりました。全力を持ってあたります。」
プルルルル

犬城「うお、すみません。電話が。」

大高「いいですよ。出てきなさい。」

犬城「はい。すみません。」

犬城「はい、犬走です。」

隳「てっ、てっ、てっ、提督！大変！」

犬城「ん、隳か？どうした。」

隳「デイリーの開発、鉄多めで回したら波動砲できた！スタンダード波動砲！」

犬城「…はあ!? までまで！んなわけあるか！どうせあれだろ？ 謎機関の間違いとか！」

隳「波動砲なんだって！生首の妖精さんもそういつてる！」

犬城「なんだよ生首の妖精さんって！」

隳「いつの間にか居たの！ゆっ、ゆっ、って鳴いてる！」

犬城「なにそれかわいいな!? わかった、データをこっちに送れるか？」

隳「うん！すぐ送るね！じゃあ切りまーす！」

犬城「頼むぞー！」

大高「おお、犬走くん、戻りましたか。大きな声を出していましたかどうかしたのですかな？」

犬城「それがですね、うちの艦娘が波動砲の開発に成功したということです。しかも工廠で、です。」

高野「なんだと!?それは、本当か!？」

犬城「みたいですが…。いま情報をこっちに送ってもらっています。…お、来ました。」

大高「おお、どのような感じですか?」

犬城「えーっと…。名前はスタンダード波動砲、艦種問わず装備可能で、火力プラス75、範囲プラス1、対空プラス125、昼戦及び夜戦にて砲撃可能…だそうです。」

大石「…ひどいな。なんだこのステータスは。」

高野「ふむ、まあ納得できる範囲の数値ではあるな。波動砲は戦艦の主砲クラスの火力だし、光学兵器だから貫通するしな。それにR-typeでは水中でもぶっぱなしていたことから潜水艦でも撃てるのだろうか。」

犬城「あ、開発の時の数値も送られてきました。えー、燃料30、弾薬50、鋼材100、ボーキ10だそうです。」

高野「な、少ないな!？」

犬城「いやデイリー開発なら多いんですけどね。」

高野「だがこのデータが得れたことは大きい!すぐ技研に送って検証する!」

大高「ふむ、では今日のところはここまでにいたしましょうか。高野さんも今すぐ試したくてうずうずしているようですね!」

犬城「では私も、開発した艦娘とともにもう少し試してみようと思います。」

高野「ああ!頼む!」

く波動は我にありく

朧「まじで出来ちゃったんです!波動砲!」

犬城「マジだったよ…。」

朧「どう?お父さん!」

犬城「…流石だ、朧。」

隳「むー。こういうときぐらい名前読んでほしいかな。他にいないんだし。」

犬城「わかった。よくやったな、七海。」

隳「えへへー。」

犬城「よし！んじやあガンガン作るか！」

隳「うん！ガンガンいくよ！」

蜻蛉……………

隳「…うん！たくさんできた！」

犬城「合計150本。これだけあればなんとかなるかね。」

隳「だね！そうだ！ついでに艦載機も作らない？今ならRシリーズが作れる気がする！」

犬城「んー、今はボーキが少ないから五回だけな？」

隳「よっし！はりきっていくね！」

《一回目》

隳「てりや！できたよ！」

犬城「これは…R-9A2 『DELTA』か。ついでに生首妖精もいるな。」

隳「ほんとに出来ちゃった！よし、どんどんいくよ！」

《二回目》

隳「そいやっ！できた！」

犬城「ん、次は…R-9C 『WAR-HEAD』か。おや、これの妖精は…青い生首妖精と円柱？だな。あ、これエンジェルパックか。」

隳「にしても生首妖精ってなんなんだろうね。まあ次いこう！」

《三回目》

隳「そいやー！どうよ！」

犬城「お、R-9/0 『RAGNAROK』だな。妖精はなんかうざい顔をしてるな。」

隳「そう？かわいいと思うけど。ま、次次！」

《四回目》

隳「せいはいー！よっしや！」

犬城「RX—10 『ALBATROSS』。アホウドリだな。生首は…おや、眼鏡をかけているな。それもザマス眼鏡。」

隳「にあつてるね。じゃあ、次はラスト！」

《五回目》

隳「会心の一発！きたこれ！」

犬城「…R—13A 『CERBEROS』だな。帰らぬ英雄、暗黒の森の番犬。」

隳「絶対に異次元には送らないようにしなきゃね。にしてもいい感じに主役機だね。」

犬城「…隳、あと三回回そう。」

隳「え、なんで？もう十分じゃない？」

犬城「始まりの矢が出ていない。」

隳「なるほど。たしかにアローヘッドはほしいね！よーし、開発装置回すよー！」

《六回目》

隳「うおりやー！いい感じ！」

犬城「これはR—9E 『MIDNIGHT EYE』だな。生首は…赤リボンに黄色いリボンの切れ端がついているな。それとなんか不幸そうな琥珀色の目をした妖精。」

隳「おお！よめだね！」

犬城「嫁？」

隳「お父さん、多分漢字が違う。夜目だよ夜目！」

犬城「ああ、直訳ね。なるほど。」

《七回目》

隳「K・O・！上々ね！」

犬城「これはまた…R—9DP3 『KENROKU—EN』だな。とつつきか。これは完全に使えんだろ。」

隳「フォースがあるしなんとか？」

犬城「フォース…汚染は起きないことを祈ろう。次がラストだ。」
隳「了解！」

《八回目》

隳「どうあつ！終わりよ！」

犬城「よっしゃ！R—9A 『ARROW—HEAD』！始まりの矢
！」

隳「ゆつくりは黄色リボン、そして琥珀色の目！」

犬城「ん？ゆつくりってなんだ？」

隳「この生首ちゃん！さっきからたまに『ゆつくりしていつてね
！』って言ってるから、ゆつくり！」

犬城「ふーん。ま、かわいいしいいか。よろしくな、ゆつくり。」

ゆつくり妖精達『ゆっ！』

犬城&隳（かわいい…）

第20話 よーし、伏線張ってくよー!

く山城の悩みく

山城「うーん。」

扶桑「あら、山城？秘書艦の仕事はどうしたの？」

吹雪「サボりはいけないですよ！」

山城「いや…提督と朧ちゃんが『拷問だ、とにかく拷問にかけろ！』とか言いながら工廠に走って行っちゃったのよ。仕方がないからいつきさんに任せてちよつと休みに来たの。」

扶桑「あらら。提督はいつも通りね。」

吹雪「むう！ちよつと提督と朧ちゃんを叱ってきますー！」
タツタツタツタツ：

山城「元気ねえ…。」

扶桑「それで？それ以外にもあるのでしょうか？」

山城「う、わかりますか。」

扶桑「伊達に貴女の姉をやってないわ。」

山城「…その、ですね。どうも最近、提督が私に構ってくれる時間が減ったなあ、と思って。」

扶桑「あら。…確かに山城は仕事も減って、フリーでいることが多くなつたわね。」

山城「そうなんですよ。どうも、なんというか二人きりでいれることが少なくなつて…。」

扶桑「提督の色々な情報が公になってきて、いろんな子と関わるようになってきているものね。まさか提督に娘がいるとは思ってもしなかったわ。」

山城「…は!?娘!?どういうことですかねえ様!?!」

扶桑「あら、昨日の青葉日報に書いてあつたわ。読んでないの？」

山城「え、でもあれはガセがたくさんあつたじゃないですか。信用できません。」

扶桑「それなら問題ないわ。最近提督の検閲が入るようになって、情報の信頼性は上がったから。…まあ、だいたい提督のことなんだけ

どね。」

山城「…それで、その娘って?」

扶桑「そう!それがなんと臙ちゃんなのよ!びっくりだわ。」

山城「…わけがわからないです。提督の人間関係は色々とおかしくないですか?」

扶桑「…たしかにそうねえ。でも、まだまだ隠しているだろうから今気にすることではないわ。」

山城「隠さないでほしいですけどね。」

扶桑「…貴女も隠していることはたつぷりとあるのだから、人のことは言えないわ。」

山城「うぐっ。」

ドカアアアアン…

山城「な、何の音!」

扶桑「…あら、工廠が吹き飛んでるわね。」

山城「なにしたのよあの二人…いや親子は!ねえ様、行ってきます!」

扶桑「行ってらっしゃい。」

ダダダダダダ…

扶桑「…少なくとも、一番信頼されているのは貴女よ、山城。頑張りなさい。」

《工廠》

犬城「…いやー、やっちゃまったな。」

臙「だから言ったじゃん。下手に装備しない方がいいって。」

犬城「まさか集中を解いたら発射しちゃうとは思ってもなかった。」

臙「いやそもそもチャージしなきゃよかったじゃん?」

犬城「いやほら、やっぱやってみたいじゃん?」

臙「その気持ちはすごいわかるけど…。はあ。カーニバル波動砲だったからよかったけど、これがライトニング波動砲とかだったら工

廠壊滅だったよ。」

犬城「あははは…。反省してます。」

山城「その親子！なにやらかした！」

犬城「ぬおう!?山城!?!」

隴「親子：親子かあ…。初めて言われたかも。なんか：嬉しい。」

山城「なにをしたの提督！」

犬城「い、いやそのな、この前EDFから送られてきたかんしゃく玉を手違いで天井に投げてしまっただけだ。被害は天井だけだ！」

山城「はあ…。なにをしてるんですか。反省してください。」

犬城「します！」

山城「もう。ほら！さっさと執務に戻りますよ！サボりは厳禁！」

犬城「はい。」

山城「隴ちゃんもほら！曙ちゃんが置いてかれて少し涙目だったから戻ってあげなさい！」

隴「はい！」

く 来客く

犬城「山城ー。いつきー。今日お客さんが来るから執務、おねがいねー。」

山城「お客さん？誰ですか？」

犬城「んー？なに、野崎重工の人が来るだけさ。」

いつき「え、野崎重工？それって確か秦山航空と双壁をなす大企業じゃん!?な、なんでうちなんかに来るの!?!」

犬城「…ま、ちよつとな。」

山城「て、提督…。なにをやらかしたんですか？」

犬城「はあ…。覚悟を決めねばならんな。ま、行ってくる。」

山城「え、ちよ!?!なにをやったんですか!?!」

いつき「…行っちゃった。」

山城「な、なんなのよ！もー！不幸だわああああ！」

ピクシー「んで、結局どれぐらいのレベルのお偉いさんがくるんだ？」

犬城「どれぐらいだと思う？」

ピクシー「幹部クラスか？」

犬城「答えはこの後すぐ！」

ピクシー「おい。」

…ゴオオオオオ…

犬城「…お、来たな。」

ビショップ「家用ジェットとは…どこの金持ちだ？」

犬城「…野崎重工の、社長だ。」

ピクシー「…まじか。」

ビショップ「大丈夫なのか？会社の方も、暗殺とかの危険の方も。」

犬城「…問題ない。手配済みだ。」

ビショップ「ならいいのだが…。」

ピクシー「…降りてきたな。」

野崎重工工業株式会社社長：野崎 維織「…お久しぶりです、犬走大將。」

秘書：川田 由良里「お久しぶりです。ふむ、ここは開けていて少し危険ですね。犬走大將、中へ移動できますか？」

犬城「ああ。車に乗ってくれ。…ボディーガードさん、あんたも。」
ボディーガード「了解しました。」ビシッ

犬城「ピクシー、一応スクランブル出来るようにしておいてくれ。」
ピクシー「わかった。」

蜻蛉……………

《鎮守府・応接室》

パタン

犬城「…はあ。ここなら盗聴とか狙撃の心配もない。安心していい。」

ボディーガード：野崎 久藤「ふいー。やつとか。」

維織「全く：世の中物騒。」

ゆらり「ですが、なにがあるかわかりませんから。」

犬城「そうなんだよなあ。まあ、久しぶりです。維織さん、久藤さん、由良里ちゃん。」

維織「ええ、久しぶり、初。」

久藤「久しぶりだな、初くん。」

ゆらり「お久しぶりです、初さん。」

犬城「皆元氣そうですね。会社の方はどうですか？」

維織「准が頑張ってくれてるおかげで順調。」

久藤「ただ准はかなり大変みたいだけどな。社長はこんなだし、ピエロとかには未だにまわりつかれてるしな。」

犬城「まだあの人たちはつきまといっているんですか…。あ、そういえば縁ちゃんは何？」

維織「お留守番。」

犬城「大丈夫なんですか？」

維織「大丈夫。世納に任せただから。」

犬城「なるほど。」

ゆらり「二人とも縁ちゃんの世話を世納さんに任せっきりで、しかも二人きりのときはイチヤイチャしだすのもう大変です。そういえば、初さんは『彼女』とはどうなんですか？」

犬城「ん？ああ、順調だ。」

ゆらり「ならよかった。このまま、頑張ってください。」

犬城「ああ、わかっている。…さて、では本題に入りますか。」

維織「ええ。まず、波動砲。あれの作成はかなり難航していたけど、七海ちゃんが作った波動砲のおかげでかなり進展した。ただ、どうやっても出力が足りない。核融合クラスでなんとか。」

犬城「ふむ、そうか。そうなる基本は地上での砲台としての使用、搭載するとなると戦艦・空母となるな。」

維織「核融合炉の小型化ができればいける。これをきっかけに進めばいいのだけど。」

犬城「そうですね。」

ゆらり「それと、秦山さんの方ではR-9Aの開発が順調に進んでいるそうです。スタンダード波動砲の試作型も完成して、さらに艦娘装備型のデータを元にザイオング慣性制御システムの開発も成功したそうです。今年度中にはR-9Aの一号機をロールアウトできるとのことですよ。」

犬城「早いな…。」

維織「データがあるだけで進みが違う。本当に。」

犬城「なら、役に立ってよかったですよ。」

維織「ええ。助かった。そして、私も頑張ったからゆらり、お姉ちゃんって呼んで。」

ゆらり「維織様、まだ仕事は残っています。」

犬城「同じ事を何度も何度も言っていると嫌われますよ、維織様。」

維織「な、初まで…。」

久藤「あー、そこまでにしといてやってくれ。あとが面倒だ。」

ゆらり「面倒？ どうせイチャコラするだけじゃないですか。そのせいで私や准様はどれだけ苦労しているか…。ああ、いつそ逃げようか。夜逃げしましょうか。」

犬城「あ、そのときは言ってくれ。手伝う。」

維織「え、ゆらり逃げないで…。謝る、もうあまり言わないから…。ゆらり「冗談ですよ。ですが、次に言うのはせめてプロトタイプが完成してからにしてください。」

維織「うう…。わかった。」

久藤「…にしても、維織と初くんは従姉弟なのに、全く似てないな。」

犬城「ああ、それは僕が母親に似たからだ。」

久藤「母親か。会ったこと無いな。」

犬城「僕が大学に入学したのと同時に行方不明になりましたから…。」

久藤「…そうなのか、すまない。」

犬城「いえ、かなり昔のことなので。」

維織「樵さん、どこへいったのかしら。」

犬城「わかりません。ただ、生存は望めないでしょう。」

維織「そう…。椀さんのカレー、好きだったのだけど。」

犬城「ですね。あれは、美味しかった。」

久藤「ふむ、カレーか。維織さん、初くん。今度カレーを食べにでも行かないか？」

維織「カレー？どこの店？」

久藤「遠前町にある『カシミール』っていうカレー屋だ。美味しいぞ。」

維織「…帰ったらすぐ行く。」

犬城「僕は今からは流石に…」

ゆらり「帰ったら仕事です。ほら、帰りますよ。」

犬城「送るよ。」

ゆらり「お願いします。」

維織「そ、そんな…。」

久藤「ま、今度な？」

維織「…うん。」

く波動砲と言えぱく

犬城「やつぱり、量産するならスタンダード波動砲Ⅲじゃないか？扱いやすいし火力も十分ある。それに変な軌道をしないから誤射しにくい。」

臃「いやいや、やつぱりハイパードライブのつけたハイパー波動砲でしょ！ロマンがないよ、ロマンが！」

犬城「冷却が必要なのがネックだから、扱いづらんだよ。というかロマンでいくならパイルバンカー帯電式H型だろ。」

臃「むう。確かに。」

犬城「ハイパー波動砲は特性を知らん他のやつらには中々に厳しいだろうから、七海が使えばいい。普通のやつらにはスタンダード波動砲でいいだろう。」

臃「そうだね。なら早くビットを作らないと。」

犬城「そうだな。」

ガチャ

大和「提督！今波動砲って言いましたか!？」

犬城「ぬおお!? 急に入ってくるな! せめてノックしろ!」

大和「そんなことはどうでもいいんです! 波動砲ができたのですか!?!」

犬城「いや、(ヤマトの波動砲は) できてないが。」

大和「そ、そうですか…。 ついに航空戦艦になれるかと思ったのですが…。」

犬城「ははは、まあいつかなれるさ。」

大和「そうですねえ…。」

「いぬだけどいぬじゃない」

衣笠「うーん、どうしてこうなった?」

犬城「ミサイルサイロに修理に来たら自動ロックの誤作動で閉じ込められた。」

衣笠「いや、色々おかしいでしょ。なんでうちにこんなものがあるの?」

犬城「昔、ピクシーからの要望をうけて作った。ちなみにV2もあるぞ?」

衣笠「へ、核が!?!」

犬城「いや、ドイツ産のあれ。」

衣笠「び、びつくりした…ただのミサイルの方かあ。というかなんでこれの存在を隠してるのよ。」

犬城「ん? 別に隠してはないぞ? ただ単にお前らが気にしてなかっただけだ。」

衣笠「え、そうなの?」

犬城「ああ。聞かれれば答えだし、そもそも発射口とかおもいつきり見えてるし。」

衣笠「ちよつとまって、発射口見えてるの?」

犬城「ああ。広場にある石畳のところ。」

衣笠「あ、あそこなんだ。…んで、どうやってここから私たちは出るの?」

犬城「そうだなあ。ミサイルに掴まって出るか？」
衣笠「却下で。」

犬城「だろうな。じゃ、だれかが気づいて助けに来るのを待つか。
一応大淀には行き先は教えてあるしな。」

衣笠「やつぱさそうなるかー。じゃ、暇だし話そ？なんか話無い？」

犬城「その話の振り方ははじめてだよ。うん。そうだなあ。じゃあ、あの話でもしようか。」

衣笠「あの話？」

犬城「ああ。この前七駆の四人に怪談として話した『わんわんらんど』っていう話だ。」

衣笠「へー。あまり怖くなさそうね。」

犬城「聞いた後もそんな事を言っていられるかな…？」

衣笠「よっしゃ、ばつちこい！」

《五時間後、地上・ハッチ前》

潮「ここが…大淀さんの言っていた司令官と衣笠さんが行ったところ、ですか。」

曙「でもこれ…どう見てもメンテナンスハッチよね。」

漣「メンテナンスハッチ…あう。」

霧島「あらあら？四人ともどうしたの？」

朧「えっと、そのー。」

／七駆説明中／

霧島「…なるほど。それでメンテナンスハッチが怖いと。」

潮「はい…。」

曙「提督、あの後何度聞いても冗談だとか作り話であるとか言わないのよ。大抵『さあ？』か『わからん。』ばっか。」

霧島「うふふ、そんな非常識的なことなんて無いわよ。ほら、あけるわよ。」

…わんわんわん わんわんわん…

霧島「…?この声は…提督と衣笠?」

隴「提督!?何て言ってるの!?!」

霧島「その…わんわん言ってるわ。」

漣「ひ、ひえええええ!」

潮「きゆう…」ボタン

曙「ちよ、ちよつと!?!まずいじゃない!提督も衣笠さんも帰ってこないの!?!そんな、そんなあ…」

隴「お父さん…嘘…」

霧島「…いえ、そんなわけがありません!ハッチを開けます!」
ガチャ

犬城「ぬおわあああ!」

衣笠「うひやあああああ!」

霧島「ひやあああああ!?!」
ドサツ

犬城「は、はあ…助かった…」

衣笠「危ない危ない…、もうちよつとで取り込まれるところだったよ…」

曙「て…提督?」

漣「無事…なの?本物?」

隴「お父さん…ああ、よかった…」

犬城「アブナイトコロダッタ」

衣笠「あ、修理は無事に終わったよ。」

霧島「…そうですか。ほら、四人は…そういえば非番だったわね。つれてきてごめんさいね。」

漣「あ、はい。ボーノ、ボーロ、潮っち運ぶの手伝って。」

曙「うん。わかったわ。」

隴「お父さん…大丈夫?」

犬城「ああ、大丈夫だ。とりあえず潮を運んでやれ。」

隴「わかった。ほら、二人とも行くよ!」

漣「ちよ、引っ張っちゃダメ、潮っちちぎれる!」

曙「ちよ、ちよつと!待ってよ!」

ワーワーギャーギャー…

霧島「それで、実際はどうなんですか？」

犬城「んー？何の話だ？ヨクワカラナイナー。」

霧島「わんわんらんの話です。」

犬城「んー、とりあえずこのハツチは大丈夫だ。ただ、そのハツチが本当にあるのか、それとも無いのかは不明だ。」

霧島「はあ、そうなのですか。」

犬城「ま、多分作り話だが。」

霧島「ならいいのですが。」

犬城「あ、衣笠。この後ちよつと付き合ってくれ。」

衣笠「わかった！」

第21話 遂に

「始まりの『杭』」

犬城「…あの、東野社長。」

泰山航空工業株式会社社長：東野源一郎「なんですか？」

犬城「私は、R戦闘機の一号機が完成したと聞いてやって来たのですよ。」

東野「そうですね。」

犬城「私は、てつきりR-9Aがあるもんだと思っていたのですよ。」

東野「そうでしよな。」

犬城「それでは…なぜR-9DP『HAKUSAN』があるんですか！」

東野「いやー、実はですな、波動砲のデータが来るまでは波動砲の開発、というよりは波動の収束とそのベクトル変更にかなり手間取っていたのですよ。そこに波動砲ではなく波動をまとったパイロバンカーを装備した機体があるという情報が入ってきて、一部の…まあロマンを追い求めている技術者たちがやる気を出して作り始めてしまいました。結果、ザイオング慣性制御システムの完成と共に本機体も完成したのです。」

犬城「…確かにロマンはかなりのものですが…アローヘッドよりも早くできてしまったのですか。」

東野「はい。まあ…我々はデータを再現しているに過ぎず、R-typeの世界のように一から開発しているわけではありませんから。こういうことがあっても良いのではないかと。やる気があることはいいことですしな。」

犬城「…まあ、そうですね。ですが…この世界の空ではこんな近接戦闘機なんて使えませんよ。」

東野「機体の強度もそこまでではありませんからな。R-typeの世界のように敵機をぶつかって撃墜する、なんてことはこのハクサンでも、現在九割九分完成しているアサノガワでもむずかしいでしょ

う。」

犬城「待つてください!?!アサノガワもほぼ完成しているんですか!?!」

東野「ええ。前方防御を大幅に増やし、さらにパイルバンカーの射出に波動エネルギーを使用して更なる高速射出及び高火力化、弾頭の高硬度化による波動エネルギー容量の増加、そしてTLシリーズのハイブリッド波動砲システムを応用してパイルバンカー使用後の砲部分に試作型のスタンダード波動砲も仕込んであります。まあ：アサノガワというよりはアサノガワII、と言ったところでしょうか。形は元と同じですからな。」

犬城「なんとというか：詰め込みましたね。」

東野「やりすぎだと私は思いますけどね。ただ、試験運用の上では全く問題がありませんでした。強いて言うならパイルバンカー射出時の反動が殺しきれていないため、戦闘機動を取りながらの攻撃が少々難しい、というところですか。直進しながらであれば確実に当たるのですが。」

犬城「かなり強い機体ですね。この調子だとケンロクエンなんかはすごいことになりそうですね?」

東野「そのケンロクエンもすでに50%は完成しておるのですが：、まず前方防御がアサノガワのパイルバンカーを50回、ケンロクエン自身のパイルバンカーであっても10回は受け止めることができるそうです。また射出に使用する波動エネルギーを増やしてさらに火力を上げ、反動も後方へ余剰エネルギーを噴射することで解決しました。現在は、スタンダード波動砲試作型をメガ波動砲かハイパー波動砲に換装する作業をしています。」

犬城「もうなんというか：強いですね。それしか言葉が浮かばないほどには。」

東野「ただまあ：コストは恐ろしいことになりましたが。」

犬城「：：して、いくらで?」

東野「900億円。米国のF-22制空戦闘機の約6倍ですな。」

犬城「：確かに、恐ろしいですね。ここまで高価だとエース専用機

になりそうですね。」

東野「まあ、パイルバンカーなんてエース中のエースしか扱えないものですから、問題は多分ないとは思いますがね。全体に配備していくであろうR-9Aはイーグルと同レベルのコストになる予定なので大丈夫ですし。」

犬城「ならまあ…。ただ、あまり変なシステムはつけないでくださいね。」

東野「わかっておりますとも。」

く好きな艦く

青葉「司令官、質問です！」

犬城「おうっ!?なんだ、青葉か。なんだ？」

青葉「とりあえず今作っているプラモの詳細を！」

犬城「これか？R-9/0『RAGNAROK』のプラモだ。地形すら貫通するメガ波動砲、波動砲の連射を可能にしたハイパードライブシステム、完全に一から人が編み出したシャドウフォース。それらを装備しているのがこの機体なんだ。」

青葉「R-9…:というタイプですか。」

犬城「ああ。波動砲の連射というロマンを成し遂げた機体だ。」

青葉「ふむふむ。司令官はこの機体が一番好きなのですか？」

犬城「うーむ、一番はやっぱR-13A『CERBEROS』かな。あの機体は強いしかっこいいしなにより悲劇の機体だ。アイレムらしさもあって良い機体だと俺は思うな。」

青葉「なるほどなるほど。」

犬城「…それで？他に質問があるんだろ？」

青葉「おお！よくお分かりで！」

犬城「まあ長い付き合いだからな。」

青葉「最初の頃は私が追いかけて回してただけですけどね。それで質問なんです…ズバリ、各艦種で一番好きな艦を教えてください！」

犬城「また変な質問だな。それは…艦娘としてか？それとも艦としてか？」

青葉「もちろん艦娘です！」

犬城「ですよー。」

青葉「では、まずは砲撃戦の華、戦艦から一人！」

犬城「山城。」

青葉「即答!?!」

犬城「ああ。戦艦では戦力としても、部下としてもトップだな。制空能力はあり、砲撃も十分。仕事の態度も固すぎず適当すぎずのちょうど良いバランスだ。」

青葉「なるほどなるほど…、では…例えば長門さんや大和さん、武蔵さんはどうでしょうか？」

犬城「うーん、長門は少々固いかな。もう少し柔軟に動ければ良いのだが、予想外の事が起きるとフリーズするのは少し良くないな。大和と武蔵は…たしかに強いんだが、燃費がきつい。それにまだ練度は中の下レベルだからな。」

青葉「なるほど。たしかに大和さんは艦娘になってから日が浅いですしね。では次に空の支配者、正規空母から一人お願いします。」

犬城「正規空母だと…瑞鶴だな。今はまだ加賀やサラトガの影に隠れがちだが、素質は十分すぎるほどある。あと一年もすれば最強の空母となるだろうな。」

青葉「それほどですか!?!」

犬城「ああ。時代が進めば装備も更になるからな、おそらく敵うものはいなくなるだろう。」

青葉「それはすごいですね。ふむふむ…。では、次に軽空母から一人お願いします。」

犬城「軽空母なら祥鳳だな。全ての能力が高レベルだから、何を任せても大丈夫だしな。」

青葉「ありや、千代田さんじゃないんですか?」

犬城「千代田はかなりおつちよこちよいだし、戦闘技術も艤装に頼るところが大きいからな。」

青葉「そうなんですか…。では次に…航巡と重巡から一人お願いします。」

犬城「うーん、まあトップは衣笠だな。あの幸運と歌声はすごいな。それに、親友だしな。」

青葉「なるほどなるほど。あ、青葉は何位ぐらいですか?」

犬城「んー、二位かな。」

青葉「へ!?高いですね。」

犬城「そりや長い付き合いだし、なによりその情報収集能力は他に類を見ないからな。」

青葉「え、えへへ。嬉しいです。えへへ。」

犬城（青葉の照れがお可愛い。めっちゃ可愛い。）

青葉「はっ!自分の世界に浸ってしまっていました!えーっと、そうそう!提督の好きな艦でした!じゃあ次は軽巡と雷巡から一人!」

犬城「んー、軽巡雷巡だと大井だな。あいつは強い。」

青葉「なるほど、それは納得です。では次に一番人数の多い駆逐艦から一人!」

犬城「駆逐艦なら霞だな。霞には戦闘も仕事も普段の生活でも色々頼りにさせてもらってるからな。ちなみに霞の作るお菓子はかなり美味しいから一度は食べさせてもらおうといい。」

青葉「ほう、それほど美味しいのですか。こんど頼んでみます!それでは:以上ですね。ありがとうございました!」

犬城「おう。」

青葉「それでは!」

ガチャバタン

く艦隊これくしょん — 提督の謎 —

漣「提督が死んだ!」

曙「この人でなし!」

犬城「殺すな殺すな。」

潮「皆の愛した提督は死んだ!何故だ!」

隼「坊やだからさ:。」

犬城「ザビ家の人間でもないからな。うん。」

漣「つれないなあ、ご主人。」

犬城「まだ死にたかねえからな。それで？呼び出したのは他にも用事があるからだろ？」

曙「ええ。このゲームがクリアできないのよ。」

犬城「んー？…トランスフォーマー、コンボイの謎か。うーん、どこで詰まってるんだ？」

潮「一面です。」

犬城「早いな!？」

隴「だって、弾がちっちゃいからよけれないんだもん。」

犬城「…とりあえず漣、やってみろ。」

漣「ほいほーい。」

デーレレーレーンテレレレレン♪（スタートの時の音楽）

テレーレレレレレ（ステージBGMの入り）

デー（被弾）

デーレレーレーンテレレレレン♪

犬城「…三步も歩いてないな。」

曙「正直に言うわ。これ無理でしょ。」

犬城「ふむ、ならば俺からクリアのためのヒントを二つ。」

漣「おお！なんですか？」

犬城「一つ、止まるな、走り続けろ。二つ、死んで覚える。以上。」

潮「…ねえ、隴ちゃん。私たち、かなり大変なものに手を出しちやつたんじやない？」

隴「みたい、だね。R-typeの七面後半復活ぐらいの難易度かな？」

犬城「ちなみに、最速クリア記録はたしか4分25秒だ。頑張れよ。」

曙「うう、頑張るわ…やってやるわ！」

《一方そのころ。》

熊野「トランスフォーム！」

鈴谷「うわあ!？く、熊野が軽空母に!？て、提督ー！」

くゆらゆらく

由良「提督さん、私に用？」

犬城「ああ。…第五回キス島ブートキャンプ、旗艦に由良、君が選ばれた。おめでとう。改二まで、頑張ってくれ。」

由良「…え？う、嘘でしょ？提督さん？」

犬城「…。」

由良「嘘だと言ってよ提督！」

犬城「…そこはバーニイで良かったんじゃないか？」

由良「それは…少し思いました。」

犬城「まあ、すまん。由良の改二はかなり魅力的だな。」

由良「うう…。頑張ります！」

犬城「頼む。」

いつき「ねー、キス島ブートキャンプってなに？」

犬城「ああ、キス島ブートキャンプは、キス島周辺にいる水雷戦隊と延々と戦闘を繰り返して、一気に改装できる練度まで上げる方法だ。ちなみに、かなり大変だ。」

いつき「うへえ。…あれ？第五回ってことは、これまでも何回かやったの？」

犬城「ああ。今までに四人。一人目は大潮、二人目は蒼龍、三人目は飛龍、四人目は祥鳳だな。それ以降は特にキス島にはいかなかったな。」

いつき「へー。あれ？じゃあなんで今回はキス島なの？」

犬城「キス島は、編成さえしつかりすれば消費する資材が少なくすすむんだ。それに対してサーモンはきついからな。」

いつき「…でもさ、由良ちゃんのレベル上げならリランカでよくない？」

犬城「…俺運悪いから、高確率で戦艦と遭遇するんだよね…。まあ、ちよつと試してみて効率の良い方をやるか。」

いつき「そうしたほうがいいね。うん。」

くさんまさんまさんま

犬城「ついに、この時期が来たな…。」

山城「そう、ですね。あの時期ですね。」

いつき「え、なにになに？なにがあるのさ。」

犬城「そりやあ決まってるだろ。」

いつき「え？う、運動会とか？」

山城「違うわ。秋刀魚漁よ。」

いつき「へ？秋刀魚？」

犬城「ああ。この時期は秋刀魚漁船の護衛を行うんだ。ついでに漁の手伝いもな。」

いつき「…軍艦が？」

犬城「それも戦艦とか空母がな。」

いつき「ええ…。」

山城「しかも、護衛した漁船の収穫量によっては特別報酬も出るわ。例えばなかなか手に入らないネジとか。」

いつき「それは、参加しなきゃ。」

犬城「当たり前よう。」

第22話 動き出す鉄の塊

3、2、1、Let's go!★

く政治フェイズwith山城く

山城「おはようございますー。」

犬城「おう、おはよう。今日の秘書艦頼むよ。」

山城「まかせてください。」

いつき「ううー、おはようございますう…。」

犬城「おはよう。とりあえず目を覚ませ。」

いつき「ううー。ねむいー」

犬城「あ、山城。冷蔵庫から午後ティー取ってー。」

山城「提督、毎日のように午後ティーを3Lも飲むのは体に悪いのでせめて1.5Lにまずは減らしてください。」

犬城「無理だ。俺の体の七割はミルクティーでできているからな！」

山城「なにアホなことを言ってるんですか…。」

犬城「ははは、まあいいのさ。んじゃ、日誌を書く…じゃない、新聞でも読むかねえ…。」

山城「日誌は提督違いでしょう…。」

いつき「うにゅー。」

山城「はあ…。それで？今日はなにがのつてますか？どつかの議員の汚職ですか？それとも著名人の不倫ですか？」

犬城「んー、良いことに違うな。『大高首相、次期主力戦闘機計画として《R計画》を発表』だそうだ。」

山城「《R計画》？なんですかそれは。」

犬城「新技術を盛り込んだ最新式、最先端の戦闘機としか新聞には書いてないな。細かいことは知ってはいるが…んー、ここでは話せないな。いつきがいるし。」

山城「あー。」

いつき「…Zzzz…」

犬城「いつきー。起きろー。工作中だぞー。」

いつき「はっ！ね、寝てません！寝てませんよ！」

犬城「嘘つけ絶対寝てた。」

いつき「うー。」

山城「まあ…それ以外には？」

犬城「んー、ん？『新しい政党あらわる、政界に新たな風か？』だ
そっだ。」

山城「また新党ですか。次はどここの離党者ですか？」

犬城「んー、帝都の都知事だそうだ。」

山城「は？いや都知事って大変な仕事でしょうに、さらに仕事を増
やすんですか？」

犬城「ようやるわ。『日本をリセットする』だと。まあ確かに今の国
会は与党が強いが…。どうやってリセットするのかね？核ミサイル
でも撃つのかな。」

山城「そんなことしたら大変なことになりますよ。まあ、しつかり
とした信念のある政党なら歓迎すべきです。意見は多い方が議論も
深まるでしょうし。」

犬城「だな。金と名誉のためでないことを祈ろう。」

コンコン

「衣笠です。」

犬城「入って良いぞい。」

ガチャ

衣笠「失礼しますつと。なんですかぞいつて。」

犬城「とある国の大王の語尾だな。それで…ああ、演習か。」

衣笠「はい。」

犬城「内容は昨日伝えた通り、水雷戦隊同士の戦鬪の演習だ。六隻
編成で、紅白戦を行う。紅軍は監督官衣笠、旗艦古鷹、五十鈴、神通、
陽炎、如月、文月。白軍は監督官…そうだな、いつきにしよう。監督
官いつき、旗艦加古、由良、那珂、不知火、睦月、皐月でいこう。演
習終了後は反省会を行い、それをもとに訓練をやってくれ。」

いつき「…Z z z…」

犬城「いつき！起きろ！」

いつき「ひゃあ!? な、なに!? 敵襲!？」

犬城「ばかもん仕事だ！演習で、白軍の監督官をしてくれ。」

いつき「は、はい！わかりました！」

犬城「頼むぞ。」

衣笠「りょーかーい♪ほら、いつきさん、行くよ！」

いつき「う、うん。わかった。」

トテテテテテガチャパタン

犬城「…あれ？演習開始は一時間後なんだが。」

山城「衣笠さんのことですし、演習前に航海練習とかがあるんだと

思います。」

犬城「なるほど。」

山城「…それで、R計画ってなんなんですか？」

犬城「国家機密だから他言無用な？あ、あと青葉、こそこそ聞くくらいなら出てこい。」

「あちゃー、ばれてましたか。」

山城「え、どこから声が？」

犬城「たりめーだ。そのぐらいわからなきや今頃ロシアの雪の下だ。」

パタン

青葉「うへ、ロシアでの戦いってそんなにやばかったんですか。」

山城「…当たり前のように天井から降りてきたわね。」

青葉「壁に青葉障子に青葉、どこであろうと青葉です!！」

犬城「嫌な言葉だなおい。ま、青葉も聞いても良いが他言無用だ。新聞もだめ。」

青葉「えー。ちよっとだけでも?！」

犬城「だーめ。」

青葉「ちえっ。」

犬城「漏れると俺が死ぬから。ま、お前らなら口も固いし話しても

大丈夫だろう。」

山城「そんなに固いかしら？」

青葉「いや、山城さんはめちゃくちや固いです。ほんと喋ってくれないですし。ポロリとも。」

山城「そうかしら？うーん。」

犬城「ま、お前らは信頼しているからな。」

青葉「国家機密を話しても問題ないと思うほどの信頼ってすごいですね。」

山城「確かに。」

犬城「…確かに。」

青葉「あはは、あ、それでR計画ってどんなものなんですか？」

犬城「んー、簡単に言うと、『ゲームの戦闘機リアルで作ってみようぜ！』だな。」

山城「…は？」

青葉「…へ？いやいやいや。おかしいでしょう!?!なんですか、SFを実現しようとしているってことですか!?!」

犬城「まあ、そうなるな。」

青葉「ええええええ…」

山城「…いや、まだよ。いくら元がゲームでもリアル寄りなものだつてあるもの。それならまだ可能性はあるわ。その戦闘機の性能とかのデータはある？」

犬城「もちろん。えーっと、機隊の型番はR-9Aで機隊名はアロー・ヘッド。全高10.8m、全長16.2m、全幅5.1m、最高速度秒速208km、巡航速度秒速51km。装備は120mmレールキャノン二門、スタンダード波動砲一門だな。」

青葉「…うへえ。」

山城「ひどいわね。なによ巡航速度秒速51kmって。」

犬城「ちなみに巡航速度でなら67時間連続飛行が可能だ。」

山城「うわあ。」

青葉「というかそんな速度だとGがやばいのでは？」

犬城「ああ、それなら問題ない。G制御…というか慣性とかベクト

ルの操作技術が盛り込まれていてな、搭乗者や機隊にかかる負荷をほぼ打ち消すことができるんだ。まあ…それでも最高速度は10Gぐらいはかかるが。」

山城「なにそれすごいわね。それで…武装のレールキャノンとスタンダード波動砲？つてなによ。」

青葉「波動砲というと、宇宙戦艦ヤマトのあれですか？」

犬城「いや、あれとはまた違ったタイプだな。あれはたしかタキオン粒子がうんたらかんたらつてやつだった。こっちは、力場を機体の前に作ってエネルギーを凝縮して、貯まったら方向を与えてドーン！つてかんじなんだ。」

青葉「ヤマトはタキオン粒子をなんかしてエネルギーを貯めて解放して撃つ！Rはエネルギーを前方に貯めて解放して撃つ！そこになんの違いもありやしねえだろうが！」

犬城「違うのだ！」

山城「なにをいっているんですか…。」

青葉「なんか言わなければならぬ気がしました！」

犬城「いや、クリボーが勝手に…。」

山城「クリボー？」

犬城「いや、なんでもない。」

青葉「ま、まあ！強い戦闘機つてことなんですよ！」

犬城「ああ。ちなみに一機あたりの値段はF-15EJと変わらないよ。」

山城「はあ!?こんな高性能機がですか!?!」

犬城「ああ。少なくとも東野社長はそう言っていたな。」

青葉「ひえー。あ、うちへの配備はどうなるんですか？」

犬城「んー、パイロットの練成が必要になるから、航空隊の配備はかなり先だろうな。あ、ただ近い内に試作機がうちに一機届くことになっっているな。」

青葉「ほうほう！そのときは取材させてくださいね！」

犬城「まあいいだろう。さて、そろそろ仕事にうつるか。」

山城「あ、本当ね。もうこんなに時間がたってる。」

青葉「じゃあ、おひらきということだ！それでは！」

く秋刀魚秋刀魚たっぷり秋刀魚く

犬城「あー！もー！秋刀魚とれねえ！」

山城「30尾とか厳しいです…。」

大鷹「提督、疲れました。」

犬城「あー、大鷹はずっと秋刀魚を追いかけ続けてもらってたものなあ。」

山城「まさか近海の秋刀魚が爆雷攻撃に巻き込まれて全滅するなんて思ってもなかったわ…。」

大鷹「だからといって空母六隻のみの艦隊を北方へ出撃させるのは如何なものかと思います。」

犬城「うう、受ける被害はかなり少ないんだよ？」

大鷹「その分消費資材が多いのでは意味がありません。それに、ル級を取りこぼして被害もらってるじゃないですか。」

犬城「ぐふっ。」

山城「14尾…まだ折り返しなあ…。」

大鷹「はあ…まあ、練度上げと思っただんばってきます。」

犬城「頼みます…。」

ザーツ

択捉『提督、秋刀魚いたよ！』

犬城「でかした！どこでだ!？」

択捉『鎮守府正面海域！』

犬城「は!?!ここ瀬戸内だぞ!？」

択捉『そもそも鎮守府の周辺に野良のくちいきゆうがいっぱいる時点で何でもアリだと思えます！』

犬城「たしかに！」

山城「納得するんですか!？」

犬城「…まあ、秋刀魚を追いかけて釣れそうだったら釣ってくれ。」

択捉『了解です！』

「スパイ？」

犬城「うーん。またやられたか。」

千代田「んー？どしたの提督？」

犬城「いや、最近敵に待ち伏せされていることが多い気がするな。」

千代田「気のせいじゃない？それか偶然とか。」

犬城「それにしても多いんだよなあ。なんか怪電波とかも受信してるとか明石がいつてたし。」

千代田「それって、鎮守府内にスパイが居るってこと？」

犬城「…まあなきいしにもあらず、つてところだな。」

千代田「そうなるよ…誰かなあ。やつぱ深海棲艦の子達かな。」

犬城「いや、無いな。少なくとも出撃先やルートを知る方法がない。基本作戦終了までは部外者へ話すことは禁じているからな。皆が守っているならあり得ない。」

千代田「え、でも盗聴機とか…」

犬城「無いな。この部屋は電波は全て遮断するし、ローテクな録音機は青葉や能代に定期的に搜索させてるからあり得ない。」

千代田「なんでその二人なの…？」

犬城「あいつらの…まあ情報収集能力というか、ストーキング能力はすごいからな。それを応用して探してもらっている。…天井裏とかを。」

千代田「それ、女の子にやらせることじゃないでしょ…。あれ、でも執務室で普通にスマホ使ってたか？」

犬城「そのときはドアか窓を開けている。」

千代田「そういえば…そうだね。あ、でもほら、コンセントとか…」
犬城「そんなものはない。ライトも全て電池式だし、冷蔵庫はドア

で隔てた別室だ。テレビは有線で別の部屋から引いている。」

千代田「…じゃあ、テレビの中とかは？」

犬城「たまにばらして直したりしているから、無い。」

千代田「何でそんなことしてるのよ…。」

犬城「楽しいからだ。」

千代田「ええ…。」

犬城「ま、そういうことで深海棲艦の線は無いな。」

千代田「あ、でもネ級は？」

ネ級「ニヤ？（なにさ。）」

犬城「なんでも無い。基本的にネ級はそういう話をするときは龍田とか千級に食堂で面倒を見てもらっている。」

千代田「ふーん。…じゃあ、裏切り者は艦娘だと言いたいのか？」

犬城「…いや、無いな。うちの艦娘にそんなやつはいない。」

千代田「ま、そうよね。」

犬城「やっぱ俺の不幸のせいかなあ…。」

千代田「不幸不幸福ってるから不幸になるんじゃない？とりあえず小さな幸せを探そうよ！」

犬城「小さな幸せ…そうだな、千代田が隣にいてくれること、かねえ？」

千代田「提督、それは小さな幸せじゃないと思うな。すごい幸せだと思うよ。」

犬城「あー、たしかにな。」

千代田「あーもうこんな時間！これから千歳おねえとお昼ごはんなんだ！じゃ、行ってくるね！」

犬城「おう、いってらー。」

トテテテテテテ…

犬城「…手を打つべきかねえ。不幸な存在になる前に。」

ネ級「ニヤ？（何に？）」

犬城「着ぐるみ野郎に、な。」

千代田「〜♪」

〜猫と人外と戦車のRPG〜

《提督用ガレッジ》

山城「提督ー？居ますかー？」

ネ級「ニャー。(いるよー。)」

山城「あら、ネ級じゃない。ふむ、提督もいるのね。提督ー!」

犬城「あーい、なんだー?」

山城「あ、いたいた。もうお昼ですしお昼ご飯一緒に食べませんか?」
犬城「おうわかった。ちよつとシャワー浴びてくるから待っててくれ。」

山城「わかりましたー。」

蜻蛉「……………」

犬城「待たせたな。」

山城「10分も経ってないですから大丈夫ですよ。ほら、行きましょう?」

犬城「おう。あ、ネ級は…」

山城「散歩に行つたみたいよ?」

犬城「ふむ、なら大丈夫か。よし、じゃあ行くか。」

山城「じゃ、食堂へ!」

蜻蛉「……………」

山城「そういえば、ガレージでなにしてたんですか?」

犬城「んー?クルマの整備だ。」

山城「車?というといつぞやのハイエースかしら?」

犬城「あ、それは既に改造済みだ。」

山城「…改造?」

犬城「ああ。ダブルCユニット改造済みで、フル超改造済みのX―トルネード★7を五つとフル超改造済みのポプコーンメーカー★7を2つ、エンジンにはフル超改造済みのモルフエウスC★7を乗っけてある。」

山城「…ごめんなさい、なにをいつているかよくわからないわ。」

犬城「まあ、そうなるな。メタルマックスシリーズをやつてるとわ

かるんだがなあ。」

山城「めたるまつくすしりーず？なにそれ。」

犬城「ゲームだゲーム。犬と戦車と人間のRPG、とか、龍退治はもう飽きた！とかが売り文句ってやつだったな。」

山城「…犬？」

犬城「ああ。犬。」

山城「へ、へー。面白そうね。」

犬城「お、じゃあやってみるか？まださらのやつがあるから、それをあげよう。」

山城「んー、うん！やってみるわ！」

犬城「よっしゃ！ゲーム機の本体はなにを持ってる？」

山城「私は3DSだけですネ。」

犬城「ならMM2Re.がおすすめだ。」

山城「え、えむえむつりー？」

犬城「あー、メタルマックス2リローデッドだ。」

山城「へー。」

犬城「おそらく始めてやる人には良いと思うな。まどろっこしいストーリーもそこまでないし、自由にやれるからな。メタルマックスらしさがわかる作品だ。」

山城「じゃあ、明後日の休みの日に一緒にやりましょう？」

犬城「わかった。」

山城「…そういえば、結局なんの整備をしていたのですか？」

犬城「ん？ああ、バイドタンク…じゃない、バイオタンクの整備だ。」

山城「バイオタンク？」

犬城「ああ。生きた戦車だ。恐竜の姿をしちやいるが、かわいいやつだよ。」

山城「へえ、今度会わせてくれます？」

犬城「ああいいぞ。」

山城「やった♪よし、じゃあ、ご飯早く食べに行きましょう！ほらほら！」

犬城「おう、わかったから引つ張るなー」

第23話 おい、デュエルしろよ。

3、2、1、Let's go!
〜飲み物〜

《柱島・執務室》

犬城「山城ー。ミルクティーとってー。」

千代田「あ、私もレモンティーお願いー。」

龍田「私はお茶でいいわー。」

山城「自分で取りに行け！」

犬城「えー。」

山城「えー、じゃない！というか仕事ならまだしももう終わらせ
たのなら自分で行け！」

犬城「はーい。」

千代田「あ、ねーねー、みんなが好きな飲み物ってなに？私はレモ
ンティー。」

龍田「うーん、私はブラックのコーヒーかしら。」

犬城「俺はミルクティーだな。甘めのやつ。」

山城「私も甘めのミルクティーね。というか午後ティー。」

犬城「んー、なにかと山城と好物が合うな。」

山城「そうね。色々と楽でいいわ。」

龍田「三人とも、そんな甘い飲み物が好きなのね。私はあまり沢山
はのめないわー。」

千代田「んー、でも私はたぶんこの二人には負けるかな。レモン
ティーはそこまで甘くはないし、ブラックのコーヒーも普通に好きだ
し。」

犬城「俺は甘めの飲み物なら大体のやつは好きだな。ただ、一部例
外ありだが。」

山城「例外？」

犬城「…リンゴジュース。」

山城「あー。」

千代田「いつきさんがパーティーのときにリンゴジュース飲まそう

としてみましたけど、あれはどうだったんですか？」

犬城「飲んだ途端にじんましんが出た。」

龍田「あらー。アレルギーかしら？」

千代田「ただの思い込みでしょ。」

山城「ぷらしーぼ、ってやつ？」

犬城「なのかなー。」

龍田「お医者さんに看てもらおうといいわ。何かあってからじゃ遅いものー。」

犬城「まあ、そうするかな。」

く杭は硬い敵に撃てく

《秦山航空重工・倉庫》

犬城「あの、東野社長。」

東野「なんですかな？」

犬城「私は完成した試作機が届いたと聞いて受け取りに来たのですよ。」

東野「ですな。」

犬城「私は、てつきりR―9Aのプロトタイプ辺りがあると思っていたのですよ。」

東野「でしょうなあ。」

犬城「では…なぜR―9DP3『KENROKU―EN』があるのですか!？」

東野「できてしまったからですな。」

犬城「できてしまったからですか…。」

東野「というのは冗談でして、しっかりと理由はありますよ。」

犬城「はあ、その理由は？」

東野「簡単なことです。通常の航空力学などの点からこの機体を見ると、どう考えても飛ぶとは思えませんでしょう?。」

犬城「まあ…そうですね。こんな前面に盾くっつけた羽の無い訳のわからない物体が飛ぶとは思えませんね。」

東野「R戦闘機はどれもなかなか飛びそうにない形をしております

が、このケンロクエンはそのなかでも特に常軌を逸した形状をします。」

犬城「そうですね。」

東野「そして、R計画は各国：特に米国は注目、いえ警戒しとります。そこで、試作機ができたとなれば……」

犬城「スパイをいれて、データを奪いに来ますかね。」

東野「場合によっては機体の奪取もあり得ます。」

犬城「……ふむ、なるほど。そこでこのケンロクエンを見せ札に使うわけですか。」

東野「はい。」

犬城「そうなる……と……しまいっばなしですか。」

東野「ええ。エンジンもかけずに放置です。ただし、有事の際はあなたに判断を任せる、とのことですよ。」

犬城「そうですね……。わかりました。責任をもって預かります。」

東野「お願いします。」

く提督の倉庫く

《とある倉庫》

古鷹「どうも、古鷹です。」

古鷹「今回は、とある倉庫にこっそりと調査に来ています。」

古鷹「何の調査か？それはもちろん、今週の古鷹日報のための調査です！」

犬城「こっそりなのにでかい声出してちゃ意味ねえだろ。」

古鷹「ひやあああああ!？」

犬城「ぐああ、耳が、耳がー!」

蜻蛉「……………」

古鷹「すいません!」

犬城「いやまあ、俺が後ろから話しかけたのが悪いんだから、いいよ。」

古鷹「うう、すみません…。」

犬城「というか、この倉庫も別に隠しているわけでもないから言ってくれば案内するよ?」

古鷹「え、そうだったんですか?」

犬城「ああ。」

古鷹「じゃあ、お願いしてもいいですか?」

犬城「いいぞ。それじゃレッツゴー!」

ダダダダダダ…

古鷹「ちよ、ちよつと待ってくださいー!」

蜻蛉……………

《第一倉庫》

古鷹「ここは?」

犬城「第一倉庫だ。主にクルマ関連だな。」

古鷹「車?」

犬城「たぶん違う。…違わないのか? うーん。ま、『クルマ』っていう種類の乗り物だ。」

古鷹「へえ…。」

犬城「第一倉庫は大抵はガレージって呼んでるな。出入りは俺が居ないときは基本禁止。」

古鷹「なんでですか?」

犬城「危ないから。ただそれだけ。」

古鷹「はあ…。」

犬城「ま、入るぞ。」

《第一倉庫・内部》

古鷹「すごいですね、これは車とかの改造のための施設なんですか? そこらじゅうに部品とか色々な道具とかマシーンとかがあります。」

犬城「その通りだ。ここはクルマの改造や整備、補給とクルマの格

納のための施設だ。」

古鷹「格納ですか？でも…どこにも車は見えませんか？」

犬城「ふふふ…。ここは地下にも施設を備えているのだよ。」

古鷹「つまり、地下駐車場ですか？」

犬城「ああ。俺が持つてるのは12台。クルマの個人所有のできる台数一杯だ。」

古鷹「へー。」

犬城「んー、一台出そうか？」

古鷹「あ、お願いします！」

犬城「おう。タッチパネルをぺちぺち叩いてドーン！
ガンツ！」

古鷹「使い方が荒いつ!?」

ウィーン　　ガゴンガゴンガゴン：

古鷹「あ、すごい。床が開いて…バイクが上がってきました。」

犬城「これが日本驚異のメカニズムだ！どうよ！」

古鷹「まあ…けっこう地下駐車場ではあるような気がします。」

犬城「がーん。」

古鷹「にしても、カッコいいバイクですね。黒くて、しかもサイド
カーまでついています。　しかも…大砲にミサイル!?」

犬城「ああ。」

古鷹「いやいやいや、なんでこんなものがバイクについてるんです
か!?!」

犬城「クルマでは普通だ。そもそもクルマってのは個人所有が認め
られている対怪獣車両だからな。」

古鷹「ええ…?」

犬城「ま、気にすんな。」

古鷹「は、はあ…。あれ?この地下駐車場にしまっていないバイクは
なんですか？」

犬城「ああ、それはだな…」

古鷹「あれ、これってD―ホイールじゃないですか!?!実在したんで
すか!?!」

犬城「ああ。…まあ、世界にこの一台しかないし、技研や泰山、野崎の力をもつてしても作ることも複製することも全て不可能だ、とのことだが。」

古鷹「…じゃあ、なぜこの一台は存在しているんですか？」

犬城「簡単なことだ。遊戯王の世界からこいつは来たんだ。」

古鷹「え!?! いやいやいや! あれはアニメの話ではないんですか!?!」

犬城「この世界ではアニメだが、あれがまじな世界もあるんだ。んで、俺はその世界に自衛隊に入隊してすぐの時に飛ばされた。」

古鷹「いや、なんでですか。」

犬城「んー、これは最近やつとわかったことなんだが、少し前に時空の歪みが見つかっただろ？」

古鷹「はい。たしか、隔たれた世界とやらがある、と新聞には書いてありましたが…」

犬城「その世界とうちの世界の狭間に落っこちて、なぜか遊戯王の世界にたどり着いた。」

古鷹「ま、まるで意味がわかりません!?!」

犬城「理解するな! 感じろ!」

古鷹「ええ…?」

犬城「それでまああつちの世界に行ったんだが、あつちで死んだらこつちに戻ってきたんだよね。Dーホイールと、冷蔵庫とかと一緒に。」

古鷹「そ、そうなんですか…。」

犬城「ああ。…んじゃ、次行くか。」

古鷹「は、はい。」

《第二倉庫》

犬城「ここは第二倉庫だ。中には歩兵用の兵器がてんこ盛り。見る?」

古鷹「はい!」

《第二倉庫・内部》

犬城「触るなよ。もしかしたら暴発するかもしれん。」

古鷹「は、はい。…あれ、あれはリバーサーですか?」

犬城「ああ。昔自衛隊がEDFと共同でフォーリナー退治をしたことがあつてな。それ以来色々和交流があるんだ。」

古鷹「へー。あれ、これは…20mm機銃ですか？あれ、でもあれって艦載兵器じゃ…？」

犬城「んー、それはひぼたんバルカンだな。弾薬を含めても70kgしかない軽い機関砲だな。」

古鷹「ちよ、ちよつとまっつけてください!?!歩兵にはきついですよ!」

犬城「んー？2tまでは問題ないだろ？」

古鷹「え…？」

犬城「まあ、普通に殴った方がいいんだけどな。」

古鷹「アタマカカエ」

犬城「ん？どうした、古鷹。」

古鷹「いえ、なんでもありません。次行けます？」

犬城「んー、これで終わりだな。第三倉庫は今度青葉と一緒にいいか？まだ見せれないんだ。」

古鷹「はあ。あ、第四倉庫は？」

犬城「古鷹。」

古鷹「はい？」

犬城「あそこはだめだ。絶対に入るな。」

古鷹「へ？なんでですか？」

犬城「あそこは…封印してあるんだ。」

古鷹「封印？なにをですか？」

犬城「お化け。」

古鷹「…本当ですか？」

犬城「嘘だったらどれだけいいか。」

古鷹「…わかりました。」

犬城「よし！んじやお開きだ。」

古鷹「はい！それじゃ、記事にさせてもらいますね！」

犬城「いちおう、完成したやつは見せてくれよ。」

古鷹「わかっています！それでは！」

犬城「おう。じゃなー。」

タツタツタツタツタツタツ：

「嘘をついてよかったの？」

犬城「ははは、お化けがいるのは間違っちゃあいないだろ？」

「僕をお化け呼ばわりとはひどいんじゃないかな。」

犬城「その姿で言われても説得力がないよ。」

「うぐっ。」

犬城「はは、さて、俺も飯でも食いに行くかな。」

「じゃあ、ずっとそばにいるよ。」

犬城「ああ。…ずっと、な。」

いつもの新聞タイム

山城「…。」パラパラ

龍田「失礼するわー。あら？山城、提督はー？」

山城『ちよつとUUバースト砲厳選してくる』とかいつて特大発に機銃ガン積みした10式戦車乗つけてどっか行ったわ。ま、そのうち帰ってくるでしょ。」

龍田「そ、そうなのー。」

千代田「しっつれいしまーす！あれ？山城さん、提督は？」

山城「…怪獣退治よ。」

千代田「ふーん。あ、今日の新聞はなにが書いてあるの？」

山城「えーつと、『R計画、その全貌が明らかに』だそうよ。」

龍田「あらあら。どんなものなのかしらー。」

山城「えつと、マツハ10を越える高速性能をもつ戦闘爆撃機だそうよ。諸元は詳しくは載ってないけど。」

千代田「待って、マツハ10!？」

山城「…ええ。」

千代田「なによそれ…。」

龍田「流石ね。うん。」

山城「次いきましよう。『新しいタイプの艦娘か？』えつと、『昨日、真珠湾近海で艦娘とおぼしき艦隊を複数横須賀遠征艦隊が発見した。』

しかし、どれもIFFにはデータはなく、また各国も関与を否定しているため、未確認の艦娘による艦隊であると考えられている。『ふん。』

千代田「へー、また新しい娘が増えるのかな？」

龍田「…おかしいわね。」

山城「あ、やっぱりそう思う？」

龍田「ええ。」

千代田「へ？なんで？」

龍田「よく考えて。新しい艦が増えるのは大抵春夏秋冬にある特殊作戦の時が大抵よ。だけど、いまはそういったものはないわ。それに、新しい艦だとしても日本の艦ならば確実に情報がくるわ。それも大本営のお膝元、横須賀なら特にね。つまり、その未確認の存在は日本艦ではない。そうなるとあり得るのは他国の秘密艦隊か、深海棲艦か、未知の存在。だけど、深海棲艦ならほぼ確実に識別できるから、他国の秘密艦隊か未知の存在。さらに絞ると、他国の艦隊ならイギリスか、アメリカか、ロシアでしようね。ただ、ロシアには利点がないから英米のどちらか。」

千代田「へー。でも別におかしくはならない？こっさり動くために隠してたのかもよ？ほら、敵を欺くにはまず味方から、っていうし。」

山城「…その敵が深海棲艦とは限らないから困るのよ。日本とかロシアになんかするためかもしれないでしょう。アメリカとしてはこれ以上日露が強大にはなってほしくないでしょうし。」

龍田「未知の存在ならそれはそれでまた大変ね。ひよんなことでその存在が敵になるかもしれない。」

千代田「うーん、大変なんだね！」

山城「…ええ、まあそうね。次いきましようか。『CONMAI社、

空中投影に成功！』」

千代田「空中投影!?それってつまりソリットビジョン!？」

山城「なのかしら？」

千代田「すっごーい！遊戯王の世界が本物になるんだ！」

龍田「とりあえずモーメントを作らないといけないわね。」

山城「私は今の環境にはついていけないから…」

千代田「えー、やろうよ、遊戯王！一緒に満足しようよ！」

龍田「正直マスタールール4はよくわからないわー。」

山城「リンクとかよくわからないわ。」

千代田「むー。面白いのにー。」

山城「…んー、それ以外は特に面白そうなものはないわね。」

千代田「そっかー。ありがとう！」

古鷹「失礼します…」

山城「あら、古鷹。どうしたの？」

古鷹「提督はいますか？記事を見ていただくかと思ってきたのですが。」

千代田「記事？見たいみたい！」

古鷹「うーん、大丈夫、かな？これです。」

千代田「おー、あの倉庫、私も気になってたんだよねー。…あれ？

これDーホイールじゃない？」

山城「…あら、本当だわ。」

龍田「提督、デュエリストだったのねー。」

千代田「よし、今度挑んでみようっと！私の幻獣機が火を噴くわ！」

龍田「がんばってねー。」

第24話

ちよつとした平行世界

3、2、1、Let's go!★

く矢は放たれた：ついでに杭もく

《柱島鎮守府・執務室》

テレビ『日本近海に現れたゴジラ亜種に対し、大高首相は特生自衛隊へ出撃を要請。また、土浦に配備されているR計画によって作られたR戦闘機の試作機にも出撃を要請しました。今回のゴジラはこれまでのゴジラと異なり、異常な速度で進化をしているとのことであり…』

プチッ

犬城「今日も特に大きなニュースは無いな。」

漣「え？いやいや、ご主人様？今かなりすごいこといつていたような気がするんですけど？」

犬城「：ああ、なるほど。確かにもうR戦闘機を公開するとは思っていないかったな。予定より三ヶ月程早いし。まあ、俺としてはその試作機のR-9Aの中に当たり前のようにデルタとアルバトロスとケルベロスが混ざっていた方が驚きだがな。」

曙「いやいやいや!?ゴジラが来てるんでしょ!?ゴジラ!」

犬城「亜種だがな。たぶん俺が特自にいた頃に倒したゴジラの幼体の成長した姿だろう（情報まとめ13話時点参照）。あれはすぐに適応進化するから一瞬でとどめをささないと厳しいだろう。あとキモい。」

潮「でもゴジラ:」

犬城「だから大丈夫だって。というか、怪獣がニュースになってるのはR戦闘機が公開されたからだろうしな。」

朧「どういうこと?」

犬城「んなもん怪獣なんて一月に一、二匹はやって来てるからな。ニュースにもならんよ。」

漣「え、一月に?」

曙「こ、この国おかしいわ:。」

プルルルルルルルル：

潮「あ、提督、電話です。」

犬城「ういうい。：はい、こちら柱島鎮守府執務室です。」

東野『どうも、初さん。東野です。』

犬城「東野社長でしたか。10日ぶりですね。」

東野『ええ。それで、早速用件なのですが、ケンロクエンの使用制限を解除いたします。』

犬城「もう、ですか？」

東野『はい。本来は三ヶ月は眠ってもらはずだったのですが、今回のゴジラ出現に関連してR戦闘機を公開したので、隠す必要も無くなってしまいましたからな。』

犬城「まあ…そうですか。公開を早めたのは対G兵器として使えるかどうかの判断のためですかね？」

東野『はい。怪獣はよく来ますが、ゴジラは滅多に来ませんからな。それに、ゴジラに効けば大抵の怪獣には効きますから。』

犬城「ですね。では…ケンロクエンはどうしますかねえ…。」

東野『初さんが乗ればいいのでは？なんとかなると思います。』

犬城「うーむ。まあ、考えておきます。」

東野『まあ、そちらにお任せします。それでは。』

犬城「はい。」

ツーツーツー

隴「何の用事だったの？」

犬城「新兵器の使用許可。」

漣「新兵器!?どんなやつですか!？」

犬城「さっきの試作機と同じ類い。」

潮「つてことはR戦闘機ですか!？」

犬城「ああ。：ロマン溢れる素晴らしい機体だ。」

曙「ロマン?」

漣「つてことはロケット機とか?」

潮「いや、きつと船なんだよ!宇宙戦艦みたいな!」

隴「意外とまともなんじゃないかな?空を飛ぶんだし。」

曙「確かに。力学というものがある以上狂った形は出来ないだろうしね。」

漣「あ、ご主人様！その機体を見せてもらえますか？」

犬城「ああ、もう問題ないぞ。あ、青葉と古鷹も呼ぶか。」

潮「なんですか？」

犬城「取材。『青葉ー、古鷹ー、執務室に来てくれー。』…よし。」

蜻蛉……………

青葉「はいはい！呼ばれて飛び出て青葉ですう！」

古鷹「提督、どうしましたか？」

犬城「おう、この前の第三倉庫の取材だ。」

古鷹「なるほど。」

青葉「でも私も呼ばれたってことは…」

犬城「ああ。その第三倉庫にR戦闘機の試作機が格納してあるんだ。んで、公開できる状態になったから呼んだってわけ。」

青葉「なるほどなるほど！じゃあさっそく行きましょう！すぐ行きましよう！ゴーゴー！」

古鷹「ちよ、青葉待ってー!？」

犬城「ま、待たんか！俺が居ないと開かんぞ！」

曙「置いてかれた。」

漣「…うん、歩いていこう。」

蜻蛉……………

《第三倉庫》

曙「着いたー。」

青葉「みんな、遅いですよ！」

犬城「お前らが先走りすぎなんだよ！」

古鷹「あう、すいません…。」

朧「あー、ま、早く見せてほしいかな。」

犬城「おう。タツチパネルで暗証番号をいれて、ポチつとな。」
グオオオオオオオン…

犬城「お、開いたな。」

曙「うわ、真つ暗ね。」

青葉「電気つて着きますよね?」

犬城「逆につかなかつたらどうしろと。ほれ、つけるぞ。」
パチツ

潮「うひゃつ、眩しい。」

古鷹「…これは…?」

青葉「え、なんですかこれは。戦闘機では無いですよ?これ。」

朧「赤いです。」

漣「つまり三倍!」

潮「大佐、邪魔です!」

曙「何を言ってるのよ…。」

漣「だつて赤いんだよ!?真つ赤だよ!?絶対シヤア専用機だよこれ!」

潮「ということはこの次は金色ですね!間違いない!」

青葉「あー、それで、これは一体?」

犬城「R-9Aの後継機の一つでありパイルバンカー装備型機体の最終型、R-9DP3『KENROKU-EN』を後世技術でさらに…まあ魔改造したR-9DP3改『KENROKU-ENII』だ。」

古鷹「パイルバンカー?」

漣「ぱ、パイルバンカーですか!?あの杭のやつ!」

犬城「ああ。最高速度秒速174km、巡航速度は最高で秒速40km、装備は120mmレールキャノン二門、波動パイルバンカー、ハイパー波動砲とメガ波動砲と拡散波動砲の切り替えが可能で機体の前方に力場を作るハイブリッド波動砲αと、パイルバンカー射出後の砲部分を使い、超絶波動砲と凝縮波動砲と圧縮波動砲の三つを切り替えられるハイブリッド波動砲β、パイルバンカー下部にあるAAMランチャー。そして何よりも前部にある盾だな。」

隴「ぶつ壊れね。」

犬城「まあ、そうなるな。」

青葉「ふむ、もつとはなしてもらいますよ!」

古鷹「お、お願いしますね!」

犬城「あいあい。」

くねこく

暁「しれーかん!野良猫拾った!」

電「飼つてもいいですか?」

犬城「んー、どれどれ:」

ねこ「シャツツ!」

ズバツ

犬城「うおっ、あぶねっ!」

暁「こら!ひっかいかやだめ!」

ねこ「フシャーッ!」

犬城「ん?このねこ首輪がついてるな。つてことは飼い猫だな。拾ったところに返してきなさい。」

暁「えー。:はーい。」

犬城「にしても気の荒いねこだな。」

電「捕まえるのに苦労したのです。」

犬城「誰もひっかかれてないか?」

雷「当たり前じゃない!この程度の動き、見切れなきや艦娘やってられないわ!」

響「暁はけっこう危なかったけどね。」

暁「い、言わないでよ!」

犬城「ならよかった。野良猫にひっかかれるのは野良犬に噛まれるのと同じぐらい怖いからな。」

電「なんでですか?確かに大きい犬さんに噛まれるのは怖いですけど、ねこにひっかかれるのはちょっといたいぐらいなのです。」

響「それに、犬だとそのまま体を食いちぎられることもあるし、なにより狂犬病もあるからね。でも、ねこでそういうことは聞いたこと

がないよ?」

犬城「まあ、そうだろうな。だが、ねこのやつでは『ねこひっかき病』ってのがあるんだ。」

雷「かわいい名前ね。」

犬城「まあ、狂犬病程ではないがな。感染症の一種で、ひっかかれただころが膿むんだ。うん。」

電「しいいかん、その先はやめてほしいのです。」

犬城「あつ、はい。…まあ、そのねこは返してきなさい。」

暁「はい!」

く似て非なるものく

山城「提督、本営から緊急電です。」

犬城「内容は?」

山城「ハワイ諸島が謎の艦娘集団に占領された、とのことですよ。」

いつき「なにそれこわい。」

犬城「あそこはアメリカの自治領だろ?…まあ被害は?」

山城「皆無だそうです。三ヶ月以上前に米軍はハワイ諸島を放棄して、住民も本土へ移住していたそうです。」

犬城「よく深海棲艦に占領されなかったな…。それで?その集団についての情報は?」

山城「皆無だそうです。ただ、どうもその集団のなかでも小競り合いをしているみたいですね。」

犬城「うーん、よくわからんがとりあえず接触してみるか?」

高野「そう言うと思っていたぞ!」

いつき「うひゃあ!」

犬城「のわあ!?!高野長官!?!」

高野「さあ、輸送機は用意してある!ここは俺といつきくんに任せていきたまえ!」

犬城「ちよ、ちよっとまってください!?!」

高野「時間はないぞ!明日にでも面子を揃えて出撃だ!オアフ島に飛行場はあるからそこに降りろ!」

犬城「だー！もう！わかりましたよ！」

蜻蛉……………

千代田「なにになに？出撃？」

犬城「緊急出撃だ。今回の目的はオアフ島における不明艦娘集団との接触、良ければ保護、収容。最悪の場合は排除だ。」

衣笠「オアフ島!?普通にいったらかなりかかるよ!？」

犬城「ああ。だから今回は空路でいく。艦娘輸送型のC-2をメビウス小隊が護衛、オアフ島の飛行場まで飛ぶ。また、今回の出撃は試作R戦闘機の試験および新艦娘兵装の試験も兼ねている。今回出撃する艦娘は、16名だ。」

隴「多いね。」

犬城「まあ、交代人員だ。まず第一艦隊は旗艦山城、日向、瑞鶴、翔鶴、サラトガ、摩耶。」

サラ「頑張りますよう！」

瑞鶴「だね！」

摩耶「つしやあ！やってやるぜ！」

犬城「次に第二艦隊。旗艦比叡、衣笠、川内、神通、霞、夕立。」

夕立「夕立、出撃っばい！」

比叡「不明艦娘…一体何者なんでしょう。」

霞「なににせよ、敵なら倒すだけね。」

犬城「次に第三艦隊。旗艦榛名、蒼龍、飛龍、大井隴、吹雪だ。」

隴「がんばりましょう！」

吹雪「おー！」

榛名「お、おー！」

犬城「最後の六隻は補助などだ。加賀、千代田、能代、明石、龍田、青葉だ。」

龍田「後方支援かしらー？」

加賀「私たちは戦闘機ですか。」

能代「ですね。」

青葉「え、私は従軍記者扱いですか!？」

犬城「いや、補欠だな。」

青葉「ならいいのですが…。」

犬城「出撃は明日マルロクマルマル! 飛行場にて集合、点呼を行う! 以上!」

「了解!」

青葉「そういえば、提督も山城さんもいなくなるなら、提督の代わりは誰がやるんですか?」

犬城「高野長官がやってくださります。はい。」

青葉「…あまり深くは追求しないでおきます。」

犬城「高野長官: はっちゃけすぎです…。」

青葉「は、はははは…。」

《次の日》

山城「提督! 全員点呼終了しました!」

黒田「荷物の積み込み終了しました!」

犬城「わかった! よし、全員輸送機へ乗り込め!」

加賀「こちら加賀、TACネーム《やきとり》、F-22。いつでも出撃できます。」

能代「こちら能代! TACネーム《チロル》、F-15C! こっちもオツケーよ!」

千代田「千代田、TACネーム《シナノ》。F-18F。大丈夫よ!」

犬城「わかった。先に上がっておいてくれ。」

千代田「了解!」

犬城「さて。」

ビショップ「なあ、初。これ…本当に飛ぶのか?」

犬城「わからん!」

ピクシー「おいおい! いいのかよそれで!」

犬城「ま、なんとかなるさ! さて、んじやいくかね。」

管制塔『メビウス1、離陸を許可します。』

犬城「了解。メビウス1、TACネーム《トリニティ》。R-9DP
3改、出撃する！」

ピクシー「おいおいおい、あんなものが本当に飛んじまったぜ。」

ビショップ「これは夢だ。きっと夢だ。」

ピクシー「夢ならどれだけいいか。」

Mobius1（犬城）『あー、あー。全機、聞こえるか？』

Mobius2（千代田）『ええ、聞こえているわ。』

Mobius3（加賀）『こちらも大丈夫です。』

Mobius4（能代）『大丈夫だよー。』

Crab1（サイファア）『こちらCrab1、荷物の方のC-2だ。
問題はない。』

Crab2（タリズマン）『こちらCrab2、艦娘の方だ。こっち
も問題ない。』

Crab3（シャムロック）『こちらCrab3、空中給油機だな。
聞こえてるよ。』

Mobius1『よし、これからハワイ、オアフ島へ向かう。先導
は俺がしよう。』

Crab2『了解した。頼むぞ。』

《オアフ島近海上空》

Mobius1『そろそろ着陸準備かね…』

Mobius3『ん？な、Mobius1！下方より敵機です！』

Mobius1『タイプは!?深海か!?それとも有人か!?』

Mobius3『艦娘の装備と同じ類いです!』

Mobius1『了解した!Crab2、艦娘用艦載機の射出準備

!龍田!例の装備、試してみてください!』

Crab2『了解。左右発射機展開。』

龍田『わかったわ。臙ちゃん、手伝って!』

臙『はい!』

ゴウンゴウンゴウンゴウン…
ガーン

Crab2『発射機展開完了、いつでも射出可能だ!』

臙『R-9A、R-9A2、R-13A、R-9/0の順で射出します!』

龍田『R-9E、RX-10、R-9C、R-9DP3の順で射出するわ!』

オレンジのゆつくり『ゆっ!』

臙『頑張つてね!よし、第一射出機、射出準備完了!』

龍田『第二射出機、大丈夫よ!』

Crab2『よし、カタパルト起動、射出!』

バシユ　バシユウ!

Mobius1『R-9Eは偵察を、それ以外の機は各機迎撃に当たれ!ただし、撃たれるまでは撃つなよ!まだ敵とは限らん!』

ゆつくり『ゆっ!』

Mobius1『それは了解ってことでもいいのか…?まあいい!全機、一旦高度をあげよう。Mobius2から4は引き続き輸送機の護衛を頼む。俺は下の偵察に行く。指揮権はMobius3へ一時的に移譲。』

Mobius3『了解。…Crab1、右フラップが出っぱなしですよ。』

Crab1『なに?…ふむ、故障のようだ。右フラップが上がらない。』

Mobius3『わかりました。…Mobius1、強硬着陸を具申します。おそらくこのままだとCrab1の燃料も厳しくなるかと。』

臙『R-9Aが攻撃を受けました!迎撃を開始します!』

Mobius1『損害は?』

隴『もちろんかわしました!』

Mobius1『わかった。R部隊は輸送機を守りつつ敵機を撃墜してくれ。Mobius3、輸送機の護衛を引き続き頼む。輸送機は右旋回して再度着陸シークエンスに入ってくれ。俺は先に飛行場へ向かい、安全を確保しておく。』

Mobius3『了解。』

Crabl『了解した。』

Mobius1『頼むぞ。』

龍田『全機発進完了よ!』

Mobius1『よし、これよりオアフ島奪還作戦を開始する!全機、行くぞ!』

ゴオツ

Crab3『…なあ、Mobius1の機体が回転しながら下の敵機群に突っ込んで行ったんだが。』

Crab2『しかも…かなりの数、敵機が巻き込まれているな。可哀想に。』

Crabl『轢き逃げか。酷いな。』

隴『ねーねー、ゆっくり達が敵機のおかわりを求めているんだけど…。』

Mobius2『うわ、もう全滅してるよ!』

龍田『R-13Aのライトニング波動砲でかなり落ちたものねー。』

Mobius4『鴨撃ち位?』

Mobius3『七面鳥撃ち…』

瑞鶴『誰が七面鳥ですか!』

Mobius3『敵機よ。大丈夫。貴女の子達は鷹より強いわよ。』
瑞鶴『へ!?あ、ありがとうございます…。』

夕立『瑞鶴さん顔が真っ赤っぽい!』

瑞鶴『う、うるさい!言わないで!』

Mobius3『…ふふっ。』

Crab2『あー、ゆっくり?達には護衛を頼む。敵機はだいたい

Mobius1のここに行ったからな。』

ゆつくり『ゆー。』

隴『えー、だって。』

Crabl『あの中で被弾なしで行けるなら行っていいんじゃないか？あの敵機がどんだん轢き殺されていくなかで。』

Mobius1『突撃ケンロクエーン！ひゃっはー！』

ゆつくり『…ゆっ！』

隴『護衛を務めさせていただきます！だって。』

Crab2『おう、頼むぞ。』

《オアフ島・元米海軍飛行場》

Mobius1『こちらメビウス1、滑走路も周辺施設も問題無しだ。データの通りに着陸してくれ。』

Crabl『了解。』

隴『提督、夜目ちゃんが敵艦隊を発見したよ。』

Mobius1『位置は？』

隴『だいたい接敵したところの真下だね。今は…こっちに向かって
いるみたい。』

Mobius1『了解した。第一、第二艦隊は降りてすぐに地上戦
闘ができるように準備しておけ。龍田、カタパルトで彩雲を12機、
30度ごとに出してくれ。』

龍田『了解。』

隴『ん？提督、真珠湾に多数の反応。敵かな？』

Mobius1『ふむ、俺が行ってみよう。』

Mobius3『お願いします。』

蜻蛉……………

Mobius1『んー？ありや艦娘か？』

アズールレーン：ホーネット「な、ヨークタウン、エンタープライ

ズ！さっきの赤いやつよ！」

アズールレ：ヨークタウン「まずいわね、さっきの戦闘で戦闘機は全滅してしまったわ。」

アズール：エンタープライズ「くそ、重桜のやつらめ……。」

アズレ：ハムマン「な、まずい！沖の方、重桜の艦隊に……セイレーンまで!？」

Mobius1『ん、ありや深海棲艦か。それに……艦娘も混ぜてるな。面倒な。』

アズ：ウォースパイト「無い物ねだりをしてても仕方ないわ。撃つしかない！」

ア：POW「全艦、撃て！」

Mobius1『ありや、真珠湾のやつらと深海棲艦の方で砲撃戦が始まったな？……うーむ、よし！敵の敵は味方つてことで真珠湾側に加勢するか。α波動砲チャージ開始。』

キュイイイン……

ア：サフォーク「な、なんですか!?!あの赤い変なやつに光が集まっています！」

ア：ホーネット「ああ、もう！なんなのよあいつは!！」

Mobius1『ハイパー波動砲チャージ完了。目標は……先頭の深海棲艦の駆逐艦でいいか。ハイパー波動砲……ファイア!』
シユイン ババババババババ

ア：ヨークタウン「……あら？なぜ……重桜が重桜を？」

ア：エンタープライズ「わ、わけがわからん。」

ア：加賀「なんだあれは。」

ア：赤城「わからないわ。ただ…気に入らないわね。」

Mobius1」さて、スピーカーをオンにして…『両軍に告ぐ。こちら日本海軍大将、犬走山城である。直ちに戦闘を中止せよ。指示に従わない艦は撃沈も辞さない。…文句があるなら無線で言ってきやがれ！以上！』

ア：エンタープライズ「…は？」

ア：赤城「…え？」

ア：加賀「…なら文句をつけてやるか。…あ、そういえば周波数がわからん。」

ア：祥鳳「意外とあの大将さんアホなんかな？まあ、全周波数でええやろ。聞かれても困るものちゃうし。」

ア：加賀「祥鳳…、なにか話し方が変わってないか？」

ア：祥鳳「んー、電波が『エセ関西弁は多少はいけるけど京都弁はわからん！』って言うてる。」

ア：加賀「なんだそれは…。まあいい。『おい、犬走とやらー！』」
犬城「…何だ？」

ア：加賀「『貴様が上から見下しているのが気に入らん。降りてこい。』」

犬城「…いや、俺ただの人間だから水の上とか立てんよ？」

ア：ホーネット「はあ!?じゃあ、ただの人間に私たちの艦載機は全滅させられたの!?!なんてこと!?!」

ア：加賀「ならば陸に上がるしかないか。姉さん。」

ア：赤城「…ええ。あっちも戦闘を続ける気は無いみたいだし、下手に大将さんを刺激しちゃうと…多分こつちが跡形もなく消し飛ばわね。なら、せめて勝ち目のある方へ持っていきましょうか。」

ア：加賀「わかりました。『犬走とやら。ならば陸で話をしたい。』」

犬城「陸となると…まあ真珠湾か。』」

ア：加賀「『ああ。お前らもいいか?』」

ア：エンタープライズ『そのお前らは私たちか?』

ア：加賀『当たり前だ。』

ア：エンタープライズ『…くつ。仕方あるまい。重桜が上陸するのは認めよう。だが、セイレーンのやつらを上げるのは許可できん!』

ア：赤城「まあ、仕方ないわね。解散よー。」

ア：加賀『わかった。これから上陸する。』

犬城「…なんか面倒事を呼び込んでしまったかもしれない。まあ…なんとかなるか。『あー、あー。山城、聞こえるか?』」

山城『ええ、聞こえているわ。』

犬城『紆余曲折あつて陸上で不明艦娘と生身で接触することになった。位置はCrablの積み荷クルマでわかるから、それで来てくれ。』

山城『はあ!?なにアホなことをしてるんですか!わかりました、すぐに皆で向かいますから絶対にバカな真似はしないでくださいよ!』

犬城『はっはっは。Lv. 999のハンターなめんな!』

山城『その慢心が怖いんですよ!もう!』

犬城『ま、頼むよ。』…さて、降りるか。』

《地上やねん。》

ア：加賀「貴様が…犬走か。」

犬城「ああ。日本海軍大将で…あと柱島の提督もやってる。」

ア：赤城「へえ…。なかなかいい男ね。」

ア：加賀「姉さん!」

ア：赤城「冗談よ。」

ア：ホーネット「貴方が艦載機たちを落としたのね。なぜ?」

犬城「いや、なぜもなにも先に撃つてきたのはそつちだろうに。確か…シーファイア。」

ア：ヨークタウン「…ユニコーン?」

ア：ユニコーン「ご、ごめんなさい…。」

ア：ホーネット「全く。まあいいわ。それで犬走。いくつか質問させて。」

犬城「別に構わんが：君たちの故郷では銃を向けながら質問するのが礼儀なのか？」

ア：ホーネット「まだ、信用はしてないから。」

ア：加賀「なにかあればすぐ殺せるからな。」

犬城「なあるほどね。それで、質問は？」

ア：ホーネット「まず、ここはパールハーバーであっているのか？」

犬城「ああ。」

ア：ホーネット「なら：なぜだれも居ないの？」

犬城「三ヶ月以上前に米軍がハワイ諸島を放棄したからだ。民間人も本土へ移動したそうだ。」

ア：ホーネット「：米軍？なに、それは。」

犬城「アメリカ軍だ。」

ア：ホーネット「：アメリカ？」

犬城「さて、アメリカを知らんのか？」

ア：エンタープライズ「知らないもなにもそんな国は無いだろう？」

犬城「あー、うわー。」

ア：ホーネット「？どうしたの？」

犬城「いや、これ面倒なやつだなー、と思ってな。」

ア：ホーネット「面倒とはどういうことよ。」

犬城「いろいろな。一度そっちからの質問を保留して、こっちから質問をやっていいか？」

ア：加賀「駄目だ。我々が先だ。」

犬城「おそらくお前らが聞いても情報は繋がらんし、いちいち説明をするのが面倒くさい。」

ア：エンタープライズ「：いいだろう。」

ア：ホーネット「エンタープライズ!？」

ア：赤城「いいわ。」

ア：加賀「姉さん!？」

犬城「では早速。まず、：そこの六人の艦名を教えてください。」

ア：ホーネット「ああ、名乗るのを忘れていたわね。私はホーネットよ。」

ア：ヨークタウン「ヨークタウンです。」

ア：エンタープライズ「エンタープライズだ。」

ア：赤城「私は赤城よ。よろしくねー？」

ア：加賀「加賀。」

ア：祥鳳「うちは祥鳳や！よろしゅうな！」

犬城「ふむ。次に所属国。」

ア：ホーネット「私たちはユニオンの艦よ。」

ア：赤城「私たちは重桜ね。」

犬城「なるほど。だいたい分かった。」

ア：ホーネット「え、たった二つの質問で？」

犬城「ああ。んで結論から言うと、この世界はお前らのいた、生きていた世界とは似ていて、そして別の世界だ。」

ア：赤城「どういうことかしら？」

犬城「まあ、俗に言う平行世界、パラレルワールドってやつだ。」

ア：祥鳳「…？」

犬城「んで、この世界ではそっちの世界で『重桜』と呼ばれている国が俺のいる『日本』という国で、『ユニオン』と呼ばれている国は『アメリカ合衆国』となっているんだ。」

ア：ホーネット「つまり貴方も重桜の人間ってこと？」

犬城「いや、違う。俺は日本の人間だ。まあ、別の国とってくれ。それで、お前らはこっちの世界へ何らかの理由で移動してしまったんだ。」

ア：加賀「…すまん。なにを言っているのかわからん。」

犬城「まあ…そうなるな。んー、SFとか読んでれば多少はわかるとおもうんだけどなあ。」

ア：赤城「まあ、続きをおねがい。」

犬城「ああ。んで、この世界ではいま、主に深海棲艦という敵の脅威がある。そして、それに対抗しているのが艦娘、そして提督なんだ。」

ア：ホーネット「シンカイセイカン？なによそれ。」

犬城「へ？さつき赤城たちの側についていたじゃないか。」

ア：ホーネット「…あれはセイレーンでしょう？」

犬城「セイレーン？」

ア：ホーネット「ええ。海を脅かす人類の敵、それがセイレーン。」

犬城「なるほど、セイレーンと深海棲艦は同じようなものなのか。」

ア：ホーネット「へー。」

ア：加賀「艦娘…ということは、私以外の『加賀』がこの世界にもいるのですか？」

犬城「ああ。というか、複数名いるな。この世界では艦娘は『艦の記憶を持ち、艦の力を以て戦う人間』だからな。」

ア：加賀「つまり、純粋な艦の我々とはちがう、と。」

犬城「ほう、純粋な艦とな？」

ア：加賀「え、ええ。そうですが。」

犬城「…まあ、いまはやめておくか。」

ア：加賀「い、一体なにをしようと…？」

犬城「ははは、気にするな。んじゃあ、いい加減に銃を下ろしてほしいんだが…」

「貴様ら、全員武器を地面に置いて両手を上げろ。」

ア：加賀「誰だ!？」

山城in十式戦車「もう一度だけ言う。武器を地面に置いて両手を上げろ。」

犬城「あー、大丈夫だよ？」

山城「だめです。全員…」

犬城「山城。」

山城「…わかりました。」

犬城「すまん。あー、皆も銃を下ろしてくれると助かる。」

ア：赤城「みたいね。みんな、銃を下ろして。」

ア：ホーネット「こっちもだ。」

犬城「ふう。」

加賀「提督、大丈夫ですか？」

犬城「加賀か。ああ。問題ない。」

ア：加賀「彼女がこの世界の加賀か。」

山城「提督、説明をお願いします。」

犬城「了解した。」

提督説明中……

山城「…つまり、平行世界の存在ってことですか。」

犬城「まあ、(ざっくり言う) そうなるな。」

山城「…もう、提督！こんな無茶はしないでください！下手をすれば殺されてもおかしくなかつたんですよ!?!」

犬城「大丈夫大丈夫。死んでも電気を流せば生き返るから。」

山城「んなわけないでしょう！もー！」

犬城「あー、まあ君たちアズールレーンは、帰還の方法が見つかるまではハワイ諸島で生活できるように手配しておく。だが、くれぐれも問題は起こさないでくれよ。」

ア：赤城「善処はするわ。」

犬城「頼む。」

第25話 山城、山城、山城。

3、2、1、Let's go!★

「秋刀魚漁お疲れさまでした」

犬城「…。」

山城「…。」

犬城「なあ、山城。」

山城「なんですか?」

犬城「秋刀魚、いくら数えても28匹しかいないんだが。」

山城「ですね。」

犬城「…まじかー。」

山城「20匹越えた辺りから全く捕れなくなりましたから…。」

犬城「ああ…報酬、もらえないのかあ。」

山城「そうですね。新しいソナー、魅力的でしたからね。」

犬城「大漁旗…。」

山城「は?旗?」

犬城「ああ。あれ魅力的じゃん?」

山城「いや、ソナー…。」

犬城「それはまあいいんよ。四式ソナー作ればいいから。それよりも家具…。」

山城「…さいですか。」

犬城「「ガーン」

「山城が三人…くるぞ霞!」

霞「来ないと思うわ。」

犬城「ん?なにいつてんだ?」

霞「いや、言わなきゃいけない気がして。」

犬城「ふーん。」

山城「提督、この書類にサインお願いします。」

犬城「うい。」

霞「何の書類？」

山城「秋刀魚漁の報告書よ。うちはギリギリまで粘ってたからね。」

犬城「まあ、そうなるな。」

能代「はーっー。」

犬城「なんだー？」

能代「なんか…けもみみ生えた娘をつかまえた。」

犬城「けもみみ？なんだそ」

ア：山城「殿様!?その声は殿様ですね！」

犬城「…だいたい分かった。」

山城「あら、重桜の山城じゃない。なんでこっちにいるの？」

ア：山城「それはもちろん、殿様と遊ぶためです！」

霞「待ちなさい。どうやってこっちに来たのよ。」

ア：山城「それは、荷物に紛れて輸送機にのって来ました！」

霞「…司令官、後でお話ね？」

犬城「…はい。」

ア：山城「というわけで殿様殿様！遊びま、うわあああ！（↑転ぶ）

犬城「うわああああ!？」

ドカーン

犬城「きゆう…」

ア：山城「いたた…ああ!?!殿様、殿様!?!大丈夫ですか!?!」

山城「うわあ、資料が床じゅうに…」

霞「…山城、私も拾うの手伝うわ。」

ア：山城「え、お二人とも殿様は!?!」

山城「大丈夫よ。ほっとけばそのうち帰ってくるわ。」

霞「それよりもこの資料のほうが大事よ。」

ア：山城「え、え？」

ガチャ

不知火「失礼します。提督、今度の休みに…?」

タラーン

☆不知火視点☆

山城↑書類整理してる

霞↑書類を拾っている

提督↑床に倒れて動かない

謎のけもみみさん↑倒れた提督の横であたふた

能代↑提督のプリン（3300円）を勝手に食べている

提督が倒れていても山城が慌てない↓そこまでの問題じゃない↓
つまり叩き起こしても問題ない

この間0.3秒！

山城「あら、不知火じゃない。どうしたの？」

不知火「提督に話があつてきました。」

山城「そう。でも提督はいま気絶してるから…」

不知火「大丈夫です。問題ありません。」

トテテテテテ…

…テテテテテト

霞「…不知火、そのバケツは一体？」

ア：山城「ふえ？なんですか？」

不知火「アイスバケツチャレンジ！」

バツシヤアアアン

ア：山城「にやあああああ!!？」

犬城「ぬわあああああ!!?つめたっ!さむっ!!？」

不知火「おはようございます、提督。」

犬城「お、おはよう不知火…。」

ア：山城「いや、普通に対応するんですか!?!せめて叱るとか…」

犬城「いやまあいつもこんな感じだし。」

ア：山城「…か、艦娘怖い。」

犬城「まあ、そうなるな。んで、不知火は何の用事だ?」

不知火「ああ、そうですそうす。今度の休みに少し買い物を手伝ってほしいんです。」

犬城「ちよつとまってね…うん。その日は大丈夫だな。」

不知火「では、お願いします。…やりました。」

ア：山城「あ、殿様！部屋の端に書類がありました！」

犬城「ん、ありがとう。」

くさむい。く

犬城「さむい！くつさむい！」

明石「うるさいですよ提督。」

犬城「でも寒いんだよ！というか明石はそんな服装で寒くないのか！？」

明石「寒いですよ！でも私はこれが制服なんです！どうしようもないんですよ！」

犬城「ああ…すまん。」

明石「はあ…。提督、どうかできませんか？」

犬城「んー、鎮守府内なら別にいいんだが、外では…やめてほしいなあ。」

明石「えー。なんでですか？」

犬城「一部の人間がうるさいんだよ。それも、口だけならまだしもひどいと当たり前のようにフレンドリーフェイスF Fしてくるんだよ。」

明石「うっわ…頭のネジ飛んでますね。」

犬城「まあ、鎮守府でならいいかな。後で全体に周知しておく。」

明石「それで…なんで工廠に来られたんですか？」

犬城「そうそう、適当に十回ほど開発しようと思ってな。」

明石「あ、そうでしたか！ではこっちへどうぞ！」

蜻蛉……………

犬城「さて、ではやっていきますか。」

明石「準備オツケーです！」

《一回目》

明石「なんですかこれ？カードケース見たいですけど。」

犬城「んー、どれどれ。……これ遊戯王のデッキだな。エクストラ15枚サイド20枚付きの。」

明石「テーマはどんなんですか？」

犬城「…これ、こつちの世界には存在しないカードだ。Rーtyp eデッキだな。」

明石「…なんでそんなものが？」

犬城「しらん。まあ、次いこう。」

《二回目》

犬城「…またデッキか。」

明石「次はなんですか？」

犬城「上から一枚めくってみるか。…『バイドバーガー』。…うん、これバイドデッキだね。」

明石「次で。」

《三回目》

犬城「お、普通だ。」

明石「155mm単装速射砲のどこが普通なのか教えてほしいです。」

犬城「だって…まだ普通じゃん？他のと比べると。」

明石「納得してしまった。」

《四回目》

犬城「む、これは…」

明石「なんですかこれ。」

犬城「THW-01『HEKTO L』だな。超絶波動砲、圧縮波動砲、衝撃波動砲を装備していて、人形形態と戦闘機形態に変形できる。」

明石「それはまた、ロマンのある機体ですね。」

犬城「ふつーにつえーしな。」

明石「でしようね。」

《五回目》

明石「これは、ミサイルですか？かなりでかいですけど。」

犬城「こいつは…あ、バルムンクだこれ。」

明石「ばるむんく？なんですかそれ？」

犬城「すいばくみっそー。」

明石「処分で。」

犬城「はい。」

《六回目》

明石「…置物？」

犬城「それも…あれだ、『日常』のひよこ？すずめ？のやつだな。」

明石「どうします、これ。」

犬城「まあ、もらっておくかな。」

明石「そうですか。」

《七回目》

明石「…冷蔵庫？」

犬城「中身は…オロナミンCがたっぷり…というよりぎっしり。」

明石「全員に配ってもあまりそうですね、これ。」

犬城「まあ、まともな冷蔵庫がひとつ増えるのは嬉しいからな。あとで執務室に移動しておこう。」

明石「とりあえず温くなくても嫌ですしコンセント指しておきますね。」

《八回目》

犬城「…服？」

明石「…パーカーですね。」

犬城「今日は変だな。」

明石「ですね。…あ、タグに『不知火用』って書いてありますね。」

犬城「…開発は実は別次元から物を持ってきているだけの可能性が？」

明石「でもこれ新品ですよ。まあ、不知火ちゃんにでもプレゼントしてあげたらどうです？」

犬城「まあ、そうするかな。」

《九回目》

犬城「…デュエルディスク?」

明石「また変なものが…。」

犬城「自前のものはあるんだが…まあ予備に持っておくか。」

明石「そうですか。」

《十回目》

犬城「ラストは…あ、これは…」

明石「なんですかこれ?」

犬城「『サイビット改』だな。かなり強い。」

明石「へー。」

犬城「たださ、これ明らかに大きさが人間用だよな。」

明石「ですねえ。」

犬城「…ちよつと装備してみるか。」

明石「え、できるんですか?」

犬城「これでも山城の端くれだ。ふむ…やはり艦娘装備だな。後でちよつと使ってみるかな。」

明石「なんか最後の最後ですごいのができましたね。」

犬城「ヘクトールも結構なものだと思うが。まあ…まともなのは三つか。ひどいな。」

明石「素直に山城さんにやってもらったらいいんじゃないですか?」

犬城「でもほら、こういうの楽しいじゃん?」

明石「確かにそうですけど、毎回毎回変なもの作られても困ります。」

犬城「むー。まあ、とりあえず冷蔵庫と置物とデッキ、あとデュエルディスクを持ってくか。」

明石「ですね。…あれ?」

犬城「どした?」

明石「さつき、十本ほど冷蔵庫からオロナミンCを取り出したんですけど、復活してます。」

犬城「外に出したやつは？」

明石「あります。」

犬城「…二つ目か…」

明石「へ？二つ目？」

犬城「ああ。執務室の二つの冷蔵庫うち、ひとつはプリンがぎつしり詰まってるだろ？」

明石「あー、あの『トリシューラプリン』でしたっけ？3300円のところも美味しいやつ。」

犬城「あれ、冷蔵庫がプリンを自動補充…というより自動生成するんだよ。」

明石「…仕組みは？」

犬城「わからん。遙か未来の技術だとか。」

明石「ばらばらにばらしたら…」

犬城「だめ。」

明石「はーい…。」

く演習く

いつき「初さんー、明日は佐世保の子達と演習だよー。」

犬城「…あー、忘れてたわ。」

いつき「明日は私と同じ提督見習いの人があるんだってー。」

犬城「ほう、じゃあいつきが相手をしてみるか？」

いつき「んー、やめとく。初を差し置いて私が出るとか相手に失礼だよ。」

犬城「そか。んじゃ、接客は頼む。」

いつき「はーい。」

曙「んで、パーティー…じゃない。編成はどうするの？」

犬城「ドラクエのやりすぎだ。んー、旗艦長門、榛名、蒼龍、千歳、不知火、潮でいいかな。」

曙「わかったわ。連絡しておく。」

犬城「頼むよー。」

《次の日》

長門「なあ、いつき。」

いつき「なにー?」

長門「私が迎えに付いてくる必要はあったか?」

いつき「一人だと怖いし。」

長門「そうか。」

いつき「あ、来たね。」

長門「あれは…駆逐艦か。艦娘出撃用に改造された艦だな。流石佐

世保だ。」

いつき「うちにも駆逐艦はあるけど、あれ艦娘仕様ではないもんね。」

蜻蛉……………

長門「接弦せずとも水上を来れば良かったんじゃないか?」

いつき「提督見習いさんが降りれないからね。」

長門「なるほど。」

いつき「あ、降りてきたね。」

長門「ふむ…陸奥、霧島、赤城、飛鷹、若葉、巖雲か。」

いつき「だね…え?」

長門「ん?どうしたいいつき。…あれが提督見習いか。緑色の髪か。…いいなあ。」

いつき「さ、さらちゃん?」

長門「ん、どうした?いつき?」

さら「…え、本当にいつきなの?」

パシヤ

さら「ひゃっ!?!」

ナオ「んふふー、さらのびっくりした顔ゲットです。」

いつき「うえ、姉御まで!」

長門「な、緑色の髪の女性が二人!来るぞいつき!」

いつき「いや、何が来るのよ。」

さら「あー、うん。まあ、久しぶり、いつき。今日はよろしくおねがいます。」

ナオ「さらの相手をよろしくね、いつき!」

いつき「久しぶりです。でも、私はただの迎いで、戦闘指揮はこの提督がやってくれるよ。」

長門「…ん?どっちも提督見習いなのか?」

ナオ「あ、私は違いますよ。私は記者の高科奈桜です。」

さら「私が提督見習いの芳槻さらです。」

長門「ふむ…芳槻さんは良いが、高科さんは提督の許可がないところ以上先には通すことはできないな。まあ…提督もすぐ来るとは思うが。」

ナオ「え、そうなんですか?むう、じゃあ今のうちに写真を撮っておかないとすかねえ。」

長門「おや、噂をすればなんとやら、というやつだな。提督が来た。」

いつき「…なんか全力で走ってない?いや、逃げてる?」

ナオ「え、あれって…。」

さら「皆さん目がよすぎませんか…?見えない…。」

犬城「ぬおおおおおおお!なんでお前がここにいるんだよおおお!」

ダダダダダダダダダダ

警視総監・神条紫杏「そんなもの決まっているだろう!リコさんに教えてもらったんだ!そして今から!6年以上私の事を放置した分を取り戻すのだ!」

犬城「俺今仕事なんだよ!というかお前仕事はどうした!」

紫杏「溜めに溜めた有給さ!大人しく捕まれ!」

犬城「うわあああああ!」

さら「あ、あれは…初くんですか?」

ナオ「んー、あれは明らかに初だねえ。…つまりいつきは長い間初のことを独り占めしてたわけか!」

さら「そうなるわね。そんないつきには…」

ナオ「おしおきが必要だねえ？」

キュピーン！

いつき「ひえ!? ゆ、許してください！」

さら「嫌です。」

ナオ「やーだ。」

いつき「いやあああああ!?!」

ガシツ　ダダダダダダダダダダダダ…

長門「…なんなんだこれは…。」

蜻蛉「……………」

犬城「くそう…リコさんなんてことを…」

セイザ

いつき「」

紫杏「それで?なんで六年以上帰ってこなかったんだ?」

犬城「いや…五年ほどは戦闘とか入院とかでどうしようもなかったし…」

ナオ「ではその後は?」

犬城「鎮守府のことです。こ舞だったし…」

長門「…だが、提督は結構休暇を取ってるではないか。」

さら「へえ…。会えたんですね?」

犬城「まあ…そうです。」

紫杏「初。」

犬城「はい。」

紫杏「今度一度帰ってこい。話はその時だ。」

犬城「…はい。」

さら「さて、では演習に行きましょうか。」

犬城「…長門。」

長門「なんだ?」

犬城「指揮は頼んだ。俺ちよつと執務室で倒れてくる。」

長門「わかった。」

紫杏「なら、私が連れていこう。その状態で一人で行かせるのは嫌だからな。」

犬城「ありがたい。…ああ、幸せはどこへやら…」

紫杏「しあわせ草ならたまに生えていると思うが…使うか？」

犬城「…パスで。」

紫杏「だろうな。」

第26話 最近平和。

3、2、1、Let's go!★

く雷巡の悩みく

犬城「…どうもオロナミンCが美味しく感じるな…だが飲み過ぎは体には良くないかなあ…だけど沢山…というか無限にあるしなあ。うーむ。」

北上「やつほーていとくー。」

犬城「おお、北上か。その持参せし大量のゲームから察するに…大井は休みか。」

北上「ご名答。大井つちは風邪をひいてしまったので、今日の秘書艦は北上サマがやるよー。ちなみに大井つちの看病は球磨ねえと多摩ねえ、あとキソーがやつてるから心配しなくていいよ。」

犬城「わかった。一応後で見舞いに行ってくるかな。」

北上「んー、やめといたげて。心配なのはわかるけどさ。大井つち提督の前だと無理していつも通り振る舞おうとするだろうし。」

犬城「そうなのか？」

北上「うん。大井つちと一番長い間一緒にいる北上サマが間違えられないじゃん。」

犬城「それもそうか。…まあ、見舞いに行くとしてもある程度よくなつてからだな。」

北上「そうしたげてー。」
ガチャ

ア：山城「殿様殿様！でっかい蜘蛛を捕まえました！」

犬城「は？蜘蛛…うわああああ！？でかい！足含めて30cm近くあるじゃねえか！？そ、そんなものをもってくるな！もといた世界に返してきなさい！」

ア：山城「で、でも殿様！捕まえたのはこの敷地内…というかこの建物の入り口横です！」

犬城「…まじかよ…。え、これどうするの？」

北上「…保健所に連絡、とか？」

犬城「でもここ島だよ？なんでいるのさ。誰か飼ってるとかか？」

ア：山城「あ、タランチュラの唐揚げって食べ物を聞いたことがあります！殿様、やってみませんか!？」

犬城「それ、維織さんですら二度と食べたくないって言ってた食べ物な気がするんだが。どちらにせよだめ。というかあれだ。重桜の山城よ、俺はたしかお前を輸送機に詰め込んでオアフ島へ送り返したと記憶しているんだが。」

ア：山城「もちろんもう一度忍び込んで来ました！」

犬城「…一度あっちの扶桑と話し合うか…。」

北上「あ、そういえばアズールレーンと柱島艦娘との演習見させてもらったよー。あれだね。まるで3D弾幕シューティングだったね。」

ア：山城「すりーでいーだんまくしゅーていんぐ、というのはあまりよくわかりませんが、艦娘の人たちもすごいと思います！だってほぼ確実に射撃を当ててきますし、クリティカルヒットも沢山出ますし！それにあれです！航空攻撃が上手すぎますね！」

北上「あの航空隊はたぶん日本でもトップクラスよん。んー、でもそっちの綾波ちゃん肉薄雷撃は見事だったね。5発全弾命中してたし。それに、ロイヤルの子達の統制雷撃も凄かったね。あ、あと愛宕と高雄の全ての武装をばらまきながら接近しての雷撃も見事だったね。」

ア：山城「す、すごいですね。雷撃は発射もあまり見えないのによく見えますね。」

北上「そりゃ、あたしは雷撃屋だからね。魚雷については右に出るのは大井つちぐらいなものよ。」

ア：山城「雷撃屋？ということは北上さんは魚雷艇とかなのですか？」

北上「魚雷艇なんかとあたしを一緒にしてほしくないかな。あたしは重雷装巡洋艦だよ。片舷20門、全40門の魚雷発射管を持つ艦は

後にも先にもあたしと大井っちしかいないだろうね。」

ア：山城「よ、よんじゅう!?それだけで十分敵艦隊を殲滅できますよ!?!」

北上「へー。あたしってやっぱりそのレベルの強さなんだー。なんだか誇らしいかな。そっちのあたしはどんな感じなの?」

ア：山城「えっと…重桜には北上さんはいませんね。」

北上「ありや、そうなんだー。ちよつと別世界のあたしがどんななのか気になってたけど、残念かな。」

ア：山城「まあ…40射線も魚雷をばらまかれたらたまつたもんじゃないですね。」

北上「んー、やっぱそうなんだろうね。あたしたち重雷装艦の全力を出させてくれるゲームもなかなか無いんだよねー。悲しいことに。」

犬城「いやまあ…ね。どこぞの海戦ゲーとかなかったことにされたもんね。」

北上「くそう。ちよつと扶桑タワー建ててくる。あー!まともなゲームで出たいなー!」

犬城「本当にまともというかりアリスティックなら航空攻撃で終わりだと思っんです。」

北上「…まあ、そうなるよねー。」

く加賀と加賀く

加賀「おや、貴女はたしか…そう、重桜の赤城さん。」

ア：加賀「そういう貴女は…日本の赤城。」

加賀・ア：加賀「……。」

ヒュオオオオ… (謎の風)

加賀・ア：加賀「加賀です。(だ。)」

加賀「でしょうね。」

ア：加賀「いや、知っていたのか。」

加賀「ハワイの時の通信、聞こえてましたし。それに雰囲気も加賀っぽいですし。」

ア：加賀「加賀っぽいというのはよく分からないが、よろしく頼む。」
加賀「ええ。よろしく。」

ア：加賀「あの指揮官の所の加賀なら…貴様も強者なのか？強きものなら手合わせをお願いしたいのだが。」

加賀「：私は、自分のことを強いとは思っていません。いえ、私は弱い人間です。提督：初がいなければ既に死んでましたし、その時に小隊の皆を守ることができませんでした。艦娘になってからも、皆を守ることで精一杯ですしね。」

ア：加賀「そうか。まあ、それならばいいだろう。姉さまはこの艦娘の加賀は強いと言っていたのだが…。」

加賀「：『姉さま』？加賀には艦として生きていけた姉妹艦は居ないはずですが。」

ア：加賀「む？赤城姉さまが居るだろうか？」

加賀「あー、赤城さんですか…。」

ア：加賀「日本の赤城も姉さまのようにさぞ強いんだろうな！ああ、楽しみだ！今すぐ会えるか？」

加賀「強いかは別として、もうすぐここに来ると思いますよ。」

ア：加賀「流石加賀だな。やはり赤城とは心通いあっていると云うことか。」

加賀「いや、赤城あんなのさんとは心を通わせたくないですね。今日はたぶん、このルートで来るだろうな！、と予想しただけですし。」

ア：加賀「このルート？何のルートだ？かーなびとか言うやつか？」

加賀「何のルートかと言うと…。」

龍驤「待たんか赤城い！今日と言う今日はお縄についてもらうで！
というかなんで毎度毎度盗み食いするんや！その精神がわからん！」
赤城「そりや、盗み食いすると美味しいからですよ！それに、ちっこい龍驤さんなんかには捕まりませんよー！」

ア：加賀「：なあ、加賀よ。あれはなんだ？」

加賀「いつものことです。大方鳳翔さんの料理を盗み食いでもした

のでしょう。さて、艦装展開…ではあまり面白くないですか。では、『変身』!」

光と共に異次元からパーツが現れ、加賀へと装備されていく。

加賀「変身完了!」

ア：加賀「なんだ、その…白黒の装備は。」

加賀「『試作艦装第112番・R-11B PEACE MAKE

R』です。さて…赤城さん。」

赤城「な、加賀さん!? 一体何故毎回毎回私の前に立ちふさがるのですか!」

加賀「赤城さん。私はもう一航戦艦の記憶の誇りに囚われることはありませんし、そんなものはどうでもいいとすら思っています。ですが! 一航戦の埃等と言われているのを見ているのは私は嫌なんです! もういい加減にしてください!」

赤城「加賀さん…。…いいえ、できません。私にとって盗み食いとは、銀蠅とは生き甲斐なのです! 止めないでください!」

加賀「そう、ですか。なら、仕方ありません。航空母艦赤城! 合計1548回の窃盗の罪で、ジャジメント!」

ア：加賀「なあ、加賀よ。なにか性格がおかしくなってないか?」
Judgement Time /

チツチツチツチツチツチツチツ:

極悪人に対しては、PEACE MAKER 装備者の要請により遙か東海道の彼方にある帝都最高裁判所から判決が下される! (ナレーション)

赤城「な、デカレンジャーですか!」

…チツチツチツ デーレーン

ア：加賀「なんだ? バツ印が出てきたが。」

加賀「デリート許可! ロックオン!」

赤城「ちよ、デリート!」

加賀「圧縮炸裂波動砲、ファイア!」
ドーン

赤城「うわあああああ!」

加賀「…。」

ア：加賀「…。」

加賀「悪は、滅びた！」

ア：加賀「いや、だめだろう。」

加賀「大丈夫ですよ。どうせ明日にはけるっとしてます。」

ア：加賀「…すごいやつだな。」

加賀「戦場だとチキンハート丸出しになるのさえ治ればいい兵士になれると思うんですがねー。」

ア：加賀「…そうか。」

加賀「そういえば、何故貴女はここに？」

ア：加賀「ああ、そうだった。姉さまを探しに来たんだ。」

加賀「重桜の赤城を？ですが私は見てはいませんが…」

ア：赤城「指揮官様？何故逃げるのかしらー？しかも…私以外の女を抱えてだなんて。」

犬城「いやいやいや！絶対お前俺か山城を刺すだろ！絶対刺すだろ！?!その包丁で！」

ア：赤城「あら、なにをおっしゃるかと思えば。指揮官様は私のものですもの。なら寄り付く虫は払うのも持ち主の仕事でしょう？」

犬城「お前の物になった覚えはない！それに、山城を巻き込む理由など無いだろう！」

ア：赤城「その女は指揮官様から飲み物を頂いたんですよ。私ですら頂いたことがないと言うのに…！ああ、妬ましい！」

犬城「んな無茶苦茶な！山城もなんか言ってやれ！」

山城「え!?えー、えと、提督は皆の物ですから、貴女だけの物ではないわよ！」

犬城「山城まで物扱いか!?ひでえ！」

山城「あ、ごめんなさい…。」

犬城「不幸だー！」

ア：赤城「もういいわ、いつまでも逃げるつもりなら霊《ゼロ》を使わざるをえませんわ！」

ブーン ブーン ブーン

犬城「ぬおっ?! 艦載機か! ならば仕方あるまい、来い、ヘクトール!

ゴオオオオオ...

加賀「...なんですかあれは。」

ア:加賀「...あー、姉さまは気に入ったらどんなことをしてでも自分だけの物にしようとする方なんだ。」

加賀「あーあー、撃ち合いを始めましたよ。というか提督、艦載機扱えたんですか。なんでもできるわね、あいつ。」

ア:加賀「...ん? いま素が出たか?」

加賀「気のせいです。」

犬城「超絶波動砲、つてー!」

ドガン

ア:赤城「きゃああああ!」

犬城「...はあ、なんとかなった...。」

ア:赤城「くっ、今日のところは退いてあげるわ。だけど、いつか貴方を私の物にするわ!」

ア:加賀「あ、姉さま帰るのですか?」

ア:赤城「ええ。帰るわよ。さよなら愛しき人。また来るわ!」

犬城「来なくていいです。じゃあな。」

加賀「さようなら、重桜の私。また会いましょう。」

ア:加賀「ああ。日本の私よ、また会おう。」

犬城「...はあ、やっと帰ったか。」

加賀「にしても提督、いくら被害を及ばせないためとはいえ山城をお姫様抱っこして逃げるとは大胆ですね。」

犬城「...あー。」

加賀「どうやら結構な距離逃げていたようですし...明日の新聞、楽

しみですね。」

犬城「…あう。」

山城「えう…提督、いい加減に下ろして…。」

くぬいぬいー、ぬいぬいー！

不知火「久々の本州です。」

犬城「あー、そういうえば不知火は長いこと柱島から出てないもんねえ。」

不知火「だいたいのは明石さんのところとAmazonをポチれば手に入りますからね。それでもたまにはお店で色々見たいですから、今日はやって来た感じですよ。」

犬城「なるほどねー。んで、何処に行くの？」

不知火「んー、まずはショッピングモールにでも行きましょう。」

犬城「りょーかい。」

蜻蛉「……………」

不知火「本土はやっぱりすごいですね。」

犬城「戦時中といつても、今は特に被害が民間に出ては居ないからね。」

不知火「はじめの頃も、明確な被害は食料が多少足りなかっただけですしね。他国に比べるとかわいいものです。」

犬城「ロシアは首都まで追い詰められ、アメリカは軍の八割がやられ…おっそろしい状況だなあ。」

不知火「ですね…。まあとりあえず今日はショッピングを楽しみましょう。」

犬城「だな。」

蜻蛉「……………」

不知火「ふむ…沢山のゲームがありますね…。」

犬城「多いな…。」

不知火「提督、なにかおすすめはありますか？」

犬城「んー…、…閃乱カグラとか？」

不知火「提督…そのゲームを女性に勧めるのはどうかと。」

犬城「まあ、そうなるな。冗談はさておき、新作マリオとゼル伝は面白いと思うぞ。あとは…メタルマックスかな。」

不知火「オアツセイとブレスオブザワイルドですか。メタルマックスは…千代田さんにも山城さんにも布教してましたね。どれだけ好きなんですか…。」

犬城「事実面白いもの。」

不知火「そうですね。」

犬城「んー。あ、このぬいぐるみ可愛い。」

不知火「え…、そのマイクラの羊のぬいぐるみですか？」

犬城「ああ。なんか気に入ったし買おう。」

不知火「そうですね。にしても提督はぬいぐるみが好きなのですか？」

犬城「うん。母さんがぬいぐるみが好きで、それに釣られて俺もなった感じかな。家の俺の部屋とかぬいぐるみだらけだしね。」

不知火「ふむ、一度見てみたいですね。」

犬城「見せてあげたいけど…いまは厳しいかなあ…。」

不知火「そうですね…。まあ、いつか。」

犬城「ああ。」

蜻蛉……………

不知火「提督、プラモ、プラモです！」

吹雪「誰がパンツですか！」

犬城「…気のせいかな？気のせいだな。吹雪の声なんて聞こえなかった。うん。」

不知火「提督、見てください！デンドロです！デンドロビウムが置いてあります！」

犬城「まじか!?!うわ、本当にあったんだ!でけえ!そして高え!」
不知火「適当に払ったら諭吉が一人お亡くなりになりますね。ですが…ここで逃せば二度と会えない気がします。」

犬城「…買う?」

不知火「はい。手伝ってください。」

犬城「わかった。」

蜻蛉……………

不知火「いやー、買いました。」

犬城「クルマで来てよかったよ。荷物がすごいことに…。」

不知火「にしても、まだお昼ですか。」

犬城「だねえ。時間もちようどいいし昼御飯にする?」

不知火「あ、なら尾道ラーメンが食べたいです。」

犬城「了解!」

蜻蛉……………

不知火「ご馳走さまでした。やはりたまに食べるラーメンは格別です。ね。」

犬城「だねえ。うーむ、午後はどうする?」

不知火「んー、まあのんびりと行きましょう。」

犬城「うーい。」

この後カラオケ行ったりゲーセン行ったりして遊んできましたと
さい。

くオナモミ2号く

犬城「…なあ、二人とも?」

山風「なに?お父さん。」

松輪「なんですか?司令。」

犬城「あのさ、いま仕事だから腕にしがみつくのをやめてほしいんだが。」

山風「嫌。」

松輪「あ…、ごめんなさい司令。」

犬城「ん、素直でよろしい。」

グリグリ

山風「な…。」

山城「いや、艦娘なんですから頭撫でて…」

松輪「♪」

山城「…ああ、そういえばまだ子供でしたね。」

山風「ん。」

犬城「ん？急に離れてどうした？」

山風「ん。」

犬城「？」

山風「なでて。」

犬城「…ふふ、わかった。」

今日も鎮守府は平和です。

第27話　もうすぐ秋イベ

3、2、1、Let's 絶望 go!★

「次元を越えて　　時を越えて」

犬城「…あの、高野総長。」

高野「なんだね?」

犬城「本当にこれを実行するんですか?」

高野「ああ。今回の任務は試作艦装の使用も許可する。君が信用している部下を連れていけ。」

犬城「…先遣隊はどうなったのですか?」

高野「皆、命からがら逃げ帰ってきた。特異な力を持った人間に殺されかけたようだ。」

犬城「うへえ。…拒否権ってあったりします?」

高野「無いな。」

犬城「ですよー。…解りました。犬走初、異層次元の調査に行つて参ります。…少し先ではありますが。」

高野「頼む。…少し先だがな。」

蜻蛉「……………」

犬城「はい、という訳で柱島で異層次元の調査に行くことになりました。」

山城「…いや、なんでですか。」

犬城「しらん。なんでか高野さん直々に命令された。」

山城「…面子は?」

犬城「なんと、俺と山城だけです。」

山城「…は?」

犬城「二人だけです。」

山城「はああああ!?!」

犬城「はっはっはっ。いやー、どうしてこうなった。まじで。」

山城「笑い事じゃないですよ！なんで二人だけで未開の地に突入しなきゃ駄目なんですか!？」

犬城「わからん！俺にもわからん！正直死んでこいっていう命令にしか聞こえないな！」

山城「…つまり、死ねと？」

犬城「そう簡単に死なせると思う？少なくとも俺は死にたかないね。」

山城「そりゃ、私も死にたくはないですけど…どうあがいてもこの命令は特攻命令です！」

犬城「さて、ここに新作の試作艦装と試作装備、さらにはクルマの投入があるとしたら？」

山城「…新手の殺戮ですか？」

犬城「んー、残念。これだけあつてなんとかかなるかなー、程度だと思われる。」

山城「は？一体どんな場所なんですか、異層次元。」

犬城「んー、バイドでも居るんじゃない？それかマザーバイド。」

山城「それ、帰ってこれないんじゃない？」

犬城「だいじよぶだいじよぶ。波動砲の使用は許可されてるよ。」

山城「…はあ。慌てた私が馬鹿みたいじゃないですか。」

犬城「でも…これでも厳しいかもしれないからねえ。」

山城「まじですか。」

犬城「ん。先遣隊は命からがら逃げ帰ってきたんだつてさ。一応特生自衛隊のエリート達だったみたいだけど。」

山城「…うわあ。」

犬城「ちなみに、出発は少し先だから。今のうちに試作艦装とか装備に慣れておけー。」

山城「あ、その試作艦装とか試作装備ってなんなのですか？」

犬城「えーっと…あったあった。艦装が、試作艦装124番・KENROKU—ENⅡと試作艦装129番・RAGNAROKⅢだな。」

山城「ちよつと待ってください。ラグナロックスリー？」

犬城「D a。」

山城「…存在しない機体ですよ？」

犬城「ああ。また秦山の発明家達がやらかした。ちなみに普通の機体もうちの格納庫にある。」

山城「…性能のほどは？」

犬城「んー、最高速度265km/s、巡航速度65km/s、んで武装はいつもの120mmレールガン、ハイパー波動砲を改良して威力・速射力を強化し冷却を必要としなくなったハイパー波動砲Ⅱ、ギガ波動砲、光子ミサイル、ここまででも十分だが、何よりこの艦装は初めてビットとフォースを実用化したんだ。」

山城「待ってください。フォースは駄目でしょう。バイドですよ、あれ。」

犬城「だいじよぶ。ビットはストラグル・ビット、そしてフォースはシャドウフォースだからな。」

山城「あー、そういうえばラグナロクはそんなのもありましたね。」
犬城「ああ。というわけだ。あとは、装備だが、こっちはサイビット改とハイパー波動砲、拡散波動砲、ギガ波動砲、超絶波動砲だな。」

山城「うわあ波動砲いっぱい。」

犬城「ま、そういうこつた。あ、クルマはバギーでいくからな。」

山城「わかったわ。よろしくね。」

く佐世保の青葉の柱島旅行日記く

《1日目》

どうも、佐世保の青葉です。私は今回、国内で唯一泊地から鎮守府へ昇格した鎮守府である柱島鎮守府へ来ています。

なぜ今回柱島へ来たかと言うと…まあ、旅行兼他鎮の見学です。日報を書いている以上知見は広い方が良いでしょう。それでよその鎮守府にいきたいなー、と提督に言ったら、なんと柱島一週間の旅を計画、実行してくれました。

さて当日。私はてっきり広島空港まで行ってから船なのかと思っていたら、なんと柱島の提督の犬走山城提督が秘書艦の山城さんと一

緒に佐世保鎮守府まで迎えに来てくれました。それも零観で。いやー、まさか平成の世になって零観に乗れるとは思っていませんでした。…まあ、その零観はしっかりと魔改造してありましたが。

遮音バツチリで、しかも20m機関砲が機首から伸びている零観のなかで色々と鎮守府について犬走提督に話を聞きました。犬走提督曰く、『大体変わり者』なんだそうです。各地に一人居るか居ないかというイレギュラーも複数人いるとのこと。これは取材が楽しみです。

柱島が近付いてきて、空から最初に目に留まったのは島の大体を使って作られている滑走路でした。本土ではあまり大きくは感じない3000mの滑走路も、この小さな島ではとても大きいものです。

滑走路から目を離すと、次に目に入ったのは沢山の艦でした。いや、最初は駆逐艦と、護衛空母と、あとはまあ魚雷艇かなー？と思っていたんですが…あれ、大和型レベルの戦艦と原子力空母、そして8隻もの駆逐艦でした。…え？いや、おかしいでしょう。しかも、聞いてみれば戦艦は日本武尊だと言うではありませんか。…あれ？たしか日本武尊って海自で伝説レベルにされてる艦のような気がするんですが。犬走提督には『一応木造戦艦オウスノミコトってことになってるからよろしく。下手に漏らすと…数十人が行方不明消になるかな☆』って言われました。日本の闇は深い。

柱島鎮守府の中はそれなりに普通の鎮守府でした。ただ、明石さんのいる酒保は佐世保や呉とは比べ物にならないくらい規模でした。なんとその品揃えはスーパーマーケットどころかデパート並み。しかも本土からのお取り寄せもできるっていう。すごい。あと、やけにゲームの品揃えが良かったです。スラもりとかメタルマックスとかはかなりマイナーな部類だと思っていたのですが、しっかりと全作品定価で置いてありました。ただ、プラモコーナーがなかったのが青葉としてはマイナスポイントですね。

スーパー明石（仮称）のあとは艦娘寮を見せていただきました。一人部屋か二人部屋を選べるそうで、大抵は姉妹や仲の良い子で二人部屋に住んでいるんだそうです。寮に居た方々と話をしたのですが、

けっこう、いやかなりどの子も私の知っている子とは違った感じでした。例えば吹雪ちゃん。佐世保の吹雪ちゃんは赤城先輩加賀先輩と言っています。柱島の吹雪ちゃんは扶桑先輩山城先輩と言っていました。なんとというか似たようなことを言っていますが柱島の吹雪ちゃんはなんだろう、なんか瞳の奥に：んー、漆黒というか、殺意の波動？みたいなのが感じられて少し怖かったです。殺るときは容赦なく殺る、みたいな？うん、騙して悪いが、仕事なんぞでな。とか言つて容赦なく殺してきそう。

そのあとはもう時間も遅くなってきていたので、執務室の場所だけ教えてもらったあと食堂で晩御飯を食べて、客室でお休みです。

明日はどんなものが見れるのか：楽しみです。

《2日目》

さて、2日目です。朝起きたら、目の前に：私がいきました。布団の中に向かい合って寝ていました。いやあ、驚きましたね。あれは。びつくりしすぎて叫びましたもの。叫び声を聞いた犬走提督がすごい勢いで突入してきましたし。

冷静になって話したところ、その青葉は柱島の青葉だそうです。朝犬走提督から私のことを聞いて、私の部屋に忍び込んだは良いものの眠くなって布団になんとかなくはいったら寝落ちたそうです。

そんなびつくりなことはありませんでしたが、2日目の観光が始まりました。最初に向かったのは執務室や各種通信施設のある鎮守府の要、執務棟。通称本丸だそうです。

それで棟の中を見ていて思ったのは：なにも、ありません。本当に何もありません。ただ、空き部屋がたくさんあるだけで、そして誰も居ませんでした。一階はなにもなく、ただ一部屋、二階の中心にある部屋が執務室として使われているだけです。その執務室も、おいてあるのは執務机とテレビが一台、それとソファとテーブルだけでした。給湯室もあるにはありますが、冷蔵庫が3つとポットがあるだけでとても簡素：いや冷蔵庫が3つあるのはおかしいですが、本当にものがありませんでした。

佐世保とか、呉とか、あとは各地泊地のような普通の執務棟ではどの部屋にも沢山の書類とか、トレーニングルームとか、通信室とかの重要なものが詰め込まれています。ですが、柱島の執務棟にはなにもありません。疑問に思っただけ聞いてみたら、『そういった大事な施設は別の場所に移してある。ただ、そこは見せられないかな。』と言われました。なぜみせられないのでしょうか。すごい気になります。諦めません。

執務棟のあとは工場を見せてもらいました。ここは大体は他の所と同じだったのですが、なぜか開発を行う機械だけは大きかったです。一度試しに回して貰ったところ、リアルサイズのF-4戦闘機が出てきました。特に問題はありませんですね！…あれ？

…まあ、今日はもう疲れたのでここまでにします。

《3日目》

3日目です。今日から三日間は柱島の艦娘の皆さんとの交流がメインになるそうです。

という訳で交流1日目。今日は主に戦艦や空母の皆さんと色々とお話をしました。

そのなかでも特に記憶に残っているのは…まずはあれですね。長門さん。佐世保の長門さんはなんとというか？軍人って感じなのです。こっちは遊び人って感じで、楽しければやる、つまらないならやらな。誰にでもフレンドリーで、すごく人生を楽しんでいる感じでした。陸奥さんによると仕事の時は真面目にやるんだそうです。公と私はしっかりと分けていますのでしよう。

ケツコン艦である祥鳳さんともお話をしました。祥鳳さんの話によると、柱島の艦娘は『記憶持ち』の割合が多いのだそうです。艦娘には海軍軍令部にある建造の機械で召喚される召喚艦と艦の記憶を持った人間が艦娘となる記憶持ちの二種類がありますが、普通は記憶持ちなんて三百人に一人いる程度です。が、柱島にはなんと記憶持ちが二十人近くもいるのだそうです。んー、どんどん疑問が増えます

ねえ。

《4日目》

さてさて交流2日目。今日は適当に駆逐の子達と話をしてきました。

どうも柱島の駆逐艦は練度の差が激しく、主力レベルの子は少ないみたいで主力の子達は忙しそうでした。逆に、練度が低い子達はある程度の訓練をしつつ楽しく遊んでいました。

そういえば駆逐艦の子達はなぜ犬走提督のことを『お父さん』と呼んでいたのか、結局わからずじまいでした。一応軍隊なんですし提督と呼ぶべきではないのでしょうか。というかこんな呼び方を広めたのは一体誰なのでしょう。不知火ちゃんとかだったら面白いですねえ。：ないか。

あ、あともうひとつ。睦月型の子達が愉悦愉悦言ってたのは一体何だったのでしょうか。多分意味は解ってないんだとは思いますが：ああ、日記が疑問メモになっている。今日はここまでにしておこう。

《5日目》

交流最終日。今日は秘書艦の皆さんとお話をしました。

なんと柱島では秘書艦のローテーションが組まれているのだそうです。佐世保では長門さんがほぼ提督兼秘書艦みたいな感じなのでびっくりしました。聞くと、昔は基本山城さんが秘書艦で、那珂さんと大井さんと祥鳳さんがたまに手伝うって感じだったそうなのですが、一度全滅する事件があつてからは人数を増やしてのローテーションにしたんだそうです。

にしても、なんだか千代田さんと能代さんは雰囲気ですこし違う感じがしました。なんででしょう、：色気？んー、わからないですねえ。まあ、そんな感じがしました。共通点が見つかれば分かりそうな気はするんですが…。

あ、明日は演習を見せていただけるそうです。せっかくですし、柱島の練度、見極めさせて頂きます！

…あ、犬走提督がくださったプリンがとても美味しかったです。また食べたいな！

《6日目》

…いやー、すごいものを見てしまいました。艦娘って、人間って空を飛べるんですね。

今日は加賀さんと山城さんとの演習を見せていただいたんですが…ええ。すごい空中戦でした。ドッグファイトでした。

二人とも量産はされていない、一部では幻であるとも言われている『試作艦装』を装備して演習をしていました。それも、船をもとにしたものではなくいま話題の『R戦闘機』をもとにした艦装を装備して、です。そこ、『戦闘機なら艦装じゃねえだろww』とか言わない。

加賀さんは敵を追尾するロックオンレーザーとあつしゆくさくれつはどーほーつてのを装備したピースメーカーっていうもので、速度と威力よりも旋回性能と命中率を重視した機体なのだそうです。

山城さんは逆に火力ましまし、速度もたつぷり。そして最強の盾であるフォースを装備したラグナロックIIIという機体だそうです。

…さて、その演習を見ていた私から言わせていただきますよう。どうしてこんなものを作った！言え！

ええい、秦山の開発陣は化け物か！すべての国を滅ぼすつもりか！あんな化け物この世にはいらんじやろて！

はあ、はあ、はあ…。もうやだこの国…。

《7日目》

はあ…。

昨日は取り乱してしまいました。あ、無事に佐世保に帰ってこれました！

帰りも犬走提督と山城さんに送っていただきました。帰りの機体は瑞雲でした。もう驚きません。

あ、そうそう！犬走提督がお土産にあの美味^{トリシューラプリン}いプリンを沢山くれました！みんなにも配ってあげようかと思えます。

いやー、長い旅でした。ほんと。ただまあ、柱島は魔境ですね。あそこは恐ろしい。高野総長の息がかかっているから余計に。にしても…さらさんは一体犬走提督とどのような関係なのでしょう。かなり仲の良い感じでしたが…あ、あと柱島の千代田さんとか能代さんとさらさんは同じような雰囲気があります。んー、なんなんでしょう。よし、明日さらさんに聞いてみますかね！
そうと決まれば明日のために寝ます！
おやすみなさい。

くレイテへく

犬城「…。」

山城「提督、どうされましたか？」

犬城「…来た。」

山城「なにがですか。」

犬城「秋イベ。」

山城「ああ、そういうえばそんな季節でしたね。今回はどこですか？ロシアですか？それともパナマですか？」

犬城「…レイテだ。」

山城「…え？」

犬城「レイテだ。」

山城「っ…、そう、ですか。」

犬城「…大丈夫か？」

山城「…大丈夫じゃ、ないです。とても…怖いです。」

犬城「山城…。」

山城「大切な人がいるから、余計に…帰れなくなるかも知れないのが、怖いです。誰かが帰ってこれないかもしれないのが、怖いです！」

犬城「…大丈夫だ。絶対に皆帰ってこさせる。それが、俺の、提督の役目だ。」

山城「提督…。お願い、しますね？」

犬城「ああ。約束する。絶対だ。」

山城「お願い…します。」

第28話 R成分多め

3、2、1、Let^絶，s^望 go！

くゆらーんく

…ガチャツ

犬城「ふへー。」

山城「やけに長い電話でしたね。」

犬城「ああ…。しかも訳のわからないところからの勧誘だった。魔術だとか死徒だとか言ってたし。」

山城「魔術って…ファンタジーやメルヘンじゃないんだから。」

犬城「…いや、艦装の召喚とか艦載機の展開とか艦娘が一人で艦を操縦できたりするのは十分に魔法じみてると思うんだ。うん。」

山城「そうですか？」

犬城「正直なにもないところから召喚できるのは魔法だとおもう。」

山城「確かに。…あれってどういう仕組みなんですか？」

犬城「もう一つ上の次元の空間軸をずらして認知できない空間に収納しているんだとか。」

山城「…？」

犬城「そうだな…。まず、俺達が認識している世界をx軸とy軸のみの二次元空間としよう。さて、そこに点Pを置きます。」

山城「なんか数学みたいになってきましたね。」

犬城「さて、その点Pがz軸方向にずれました。そうすると？」

山城「えーっと、認識できるのはx軸とy軸のみの平面上だから…点Pは認識できなくなってしまおう？」

犬城「そういうこと…らしい。結局認識できるわけではないからどういうものかはわからん。」

山城「見えたら見えたで大変ですけどね。…バイドなら見えるんですかね。」

犬城「あれは少なくとも26次元はあるみたいだし。でもまあ、バイドは居ないに越したことはないな。」

山城「ですねー。」

…ダダダダガチャ

由良「提督さん！提督さん！やりました！」

犬城「おお!?おお、由良か、どうした？」

由良「みて、この服！」

犬城「お、いい服だな。似合ってるよ。」

由良「…提督さん？」

犬城「ん？」

由良「誉めてくださいよ！改二になったのに！」

犬城「…あれ？予定ではあと一、二カ月かかるはずじゃ？」

山城「リランカでの練度上げに切り替えたからでは？」

犬城「…ああ、なるほど。おめでとう、由良。これで君も主力の仲間入りだ。これからの活躍、期待している。」

由良「はい！頑張りますね♪」

犬城「ああ、頼む。」

く C R O S S ・ T H E ・ R U B I C O N く

犬城「…。」

臃「あれ、お父さん怖い顔してどうしたの？」

犬城「…ああ、臃か。いや、これを読んでみてくれ。」

臃「んー？なにになに…？『BシリーズR戦闘機の開発について』？

…ちよつとまって。Bシリーズって…」

犬城「ああ。バイドほを利用した機体バイドがほぼ全てだ。」

臃「いや、だめでしょ!?!あんな恐ろしいものを作るなんて!という
かバイドは存在しないんだから無理でしょ?」

犬城「あはは…。どつかのバカが『疑似バイド』なるものを作ってしまったそうだ。一応浸食は起こらないようではあるが…真偽は微妙だそうだ。だが、B系統はハイリスクではあれどハイリターンだからな。…上手く行けばだが。」

臃「それでも…それでもだめでしょ。何かあったら遅いでしょ！」
犬城「まあ、閣僚でも軍令部でもそんな感じだ。ただまあ、バイド

と関係ないB―5BからB―5Dは一応候補としてはあるそうだが。…実用性は別として、だが。」

臃「ヒュロスでも量産してればいいのに。」

犬城「あれはあれでコストがかかるし…なにより人型とかあかん。一部のロマンチスト^{大馬鹿}が暴走してしまう。」

臃「あー、前例があるもんねえ…。うちに。」

犬城「ケンロクエンIIにラグナロックIIIだな。あれはおかしい。うん。」

臃「…そういえば、バイドもどきがあるならフォースも作れるのかな?」

犬城「さあ?あれはバイドのなかでもかなりエネルギーを溜め込ませたやつだからなあ。もどきが耐えられるかどうか。」

臃「…まあ、吹き飛んだら大変だしね。」

犬城「そういうこった。それに、ケンロクエンIIにあんなに詰め込めたのはフォースとビットを装備しなかったからだしな。ビットやフォースを積みあげそのぶん別のところが削られるだろうな。」

臃「んー、この世界ではないね。」

犬城「ああ。…ま、量産するならカロンぐらいで十分だろ。それ以上の化け物はいらんよ。」

臃「だねー。」

「いつもの新聞フェイズ」

千代田「おはよー、初!」

犬城「千代か。おはよう。」

千代田「お、今日も新聞読んでるね!どんな内容?」

犬城「えーっと、…また神戸^{冬木}で大火災だそうだ。」

千代田「へ?いや、そんなの知らなかったんだけど。」

犬城「俺も知らなかった。…何かしらの工作かねえ。ま、あとで高野さんに聞いておくかね。」

千代田「なんか巷では『神戸^{冬木}は燃えるもの』とか言われてるらしいけど…」

犬城「ひどい言いようだ。あとは…『太平洋上にて小規模の時空の歪み、国内のものとはまた別物か』だそうだ。」

千代田「また？」

犬城「ああ。しかも、一部では向こう側からこっちへ来たものもあるよなんだ。」

千代田「へ、なにそれ。」

犬城「…その次元の歪みの中から戦闘艦が現れたんだ。今のところ確認したのは二隻。一隻は横須賀が鹵獲したが、乗組員は一人も確認できず。調査の結果時空移動の際に消滅したと見られているそうだ。艦は横須賀で除染の後引き続き調査をしている。」

千代田「…乗組員の人たちはどうなっちゃったの？」

犬城「…よくてあちら側に放り出されて取り残された、または別の世界へ人間だけ出てしまった。一番嫌なのは…別次元に取り残されたか、ばらばらになったか、だな。」

千代田「生存は…」

犬城「絶望的だろうな。次元を越えるための装備なんかを持ってればまた別だが。」

千代田「…そう、なんだ。もう一隻は？」

犬城「現在逃亡中だ。横須賀と佐世保が搜索している。」

千代田「やばめな艦？」

犬城「ああ。大和型レベルの艦だそうだ。今は紺碧・旭日両艦隊も鹵獲または撃沈のために動いている。」

千代田「それ結構ガチだね。」

犬城「ああ。場合によっちゃうちにもお声がかかるだろうな。次は…ああ、これか。『日本武尊帰還！本土防衛に合流！』」

千代田「…あれ？うちの艦？」

犬城「ああ。一応行方不明扱いだったからな。」

千代田「…でも、うちにいるよ？」

犬城「あれ本物のおうすのみことだ。」

千代田「…？」

犬城「あー、日本武尊をおうすのみこととして配備していたけど、日

本武尊が横須賀に改装に行ったから代わりに本物の『木造戦艦おうすのみこと』が来たんだ。」

千代田「え、じゃああれ木製？」

犬城「ああ。」

千代田「：よし、あとで見にいこうつと。」

犬城「いつてら。：それくらいかな？」

千代田「あ、そういえばさ、試作艦装って見せてもらえる？」

犬城「：なんでだ？」

千代田「だってほら、気になるじゃん？」

犬城「：駄目だ。一応機密扱いだからな。こればかりはお前でも駄目だ。演習してるところを遠目に見る程度ならまあいいが。」

千代田「えー、いいじゃん？減るもんでもないし。」

犬城「だーめ。」

千代田「ぶー、けち！」

犬城「なんとでもいいやがれ。」

山城「：何をしているんですか：。」

犬城「お、山城おはよう。」

千代田「山城おはよー！」

山城「ええ、おはようございます。イチヤイチヤしてないでさっさと仕事に取りかかってください。」

犬城「はーい。ほれ、仕事するぞ。」

千代田「むー、わかった。」

く波動砲とは：人類の生み出した希望：のはず。く

犬城「あー、みんな揃ったかー？」

山城「はい、揃いましたね。」

加古「提督ー、艦娘を全員講堂に集めてなにすんだー？」

古鷹「加古、この前の放送聞いてなかったの？新しいタイプの装備が実戦配備されるから、それについての説明があるのよ。」

加古「へー。でもさ、ならなんで全員なんだ？そんななんでも誰でも装備出来るようなものなんて無いだろ？」

犬城「まあ、加古の言うとおりでそういうのは滅多になかったが、今回それができたわけだ。という訳で今回は新装備の説明をしていくからなー。」

吹雪「はーい。」

犬城「えー、今回配備が進むことになった装備の総称は、『波動砲』だ。」

大和「波動砲!? 波動砲ですか!? やった! やりました! 遂に私が宇宙戦艦となる時がやって来たのですね!」

犬城「残念、その波動砲とはまた別のやつなんだ。」

大和「…? どういうことですか?」

犬城「まあ、宇宙戦艦ヤマトの波動砲とはまた別の種類の波動砲ということだ。」

大和「…そんなあ。」

武蔵「だがどちらも同じ波動砲なのだろう? 提督よ、何が違うのだ?」

犬城「ふむ、まずヤマトの波動砲は波動エンジンにて宇宙空間からタキオン粒子として得たエネルギーをチャージして打ち出すものだ。タキオン粒子の不安定さにより空間自体へのダメージを与えることで誘爆等も起こせるが、これを使うには前提として波動エンジンが必要であり、またエネルギーをチャージするための入れ物も必要だ。それゆえに大規模なものになってしまいうし、そもそも波動エンジンが存在しないのでどうしようもない。また異次元空間では使いようがない。ここまではいいか?」

武蔵「ああ。」

犬城「さて、今回配備される波動砲は、これもしつかりと『元ネタ』が存在する。知ってる人は知ってると思うが、R-typeだ。各地でR-9Aが配備されているが、あれに装備されている波動砲がこれだ。」

武蔵「…つまり、艦載機に装備するようなものを我々が装備するということか?」

犬城「まあ、そうなるが…」

扶桑「提督、私は装備するのは嫌です。」

犬城「…何故だ？」

扶桑「私はあくまで戦艦です。それ故に艦としての誇りがあります。戦艦が戦闘機の装備するようなものを主兵装として装備するなんて、私には受け入れられません。」

犬城「…なるほど。確かにそれはあるか。わかった。別にこれを装備しろと強制はしない。だが、装備したものとこの連携のためにも一応今回は聞いておいてくれ。」

扶桑「わかりました。」

犬城「んでだ。この R-type の波動砲は機体の前方に特殊な力場を形成、エネルギーを収束させてぶっばなすって代物だ。とても簡単な仕組みだな。それに、異次元でも使える。」

武蔵「…それだけ聞くと余り強そうに思えないな。」

犬城「ところがどっこい、こいつが恐ろしいものなんだな。まず一つにこれは一番威力の低いとされる試作型スタンダード波動砲でも 2100 年代の戦艦の主砲並の威力だ。そして、このエネルギー、波動エネルギーは純粋なエネルギーだ。ヤマトの波動砲はあくまで『波動性物質』故に応用は効きづらいが、こっちはただの波でありエネルギーだ。それ故に応用が効く。」

瑞鶴「応用が効くって言われてもどんなのかわからないわ。」

大和「そうですね！ヤマトの波動砲だって拡散させたり連射したり主砲弾にエネルギーを充填したりできますよ！」

犬城「そうだな…例を出すとすると、広範囲に拡散させたり、圧縮して超長距離での狙撃をしたり、一着弾時に拡散した余剰エネルギーを着弾点に再び収束させたり、《スタンダード波動砲Ⅲ》全て貫通させたり、敵の内部で爆発させたり、電気エネルギーに変換したり、炎に変換したり、速射したり、パイロとかレールガン型の弾頭に纏わせたり、天災と呼ばれるものを引き起こしたり、防護壁を作ったり、バルカンの弾のようにしてばら蒔いたり、敵を追尾したり、けつから敵を追尾するのを撃つたり、ってところか。あ、あと空間を

引き裂いたりも別にできるぞ。」

大和「お、多い…。」

赤城「ふむ、それはたしかに応用が効きますね。」

犬城「んで、この波動砲はなによりも『その存在自体に衝撃をあたえる』んだ。」

祥鳳「どういうことですか？」

犬城「もともとの波動砲はバイドを倒すためのものだったんだが、そのバイドつてのは我々のいる四次元時空の存在ではなく、少なくとも26次元時空以上の存在だ。そして、その存在はそこまでのすべての時空に存在する。だが、我々の時空からは四次元までのバイドしか通常兵器では殺せない。しかし、波動砲はその存在自体に衝撃…波動による揺れを与えて全ての次元から消すことができるんだ。まあ、結局うち漏らしがあるとまた増えるから戦いは終わることは無かったんだが。」

祥鳳「…ですが、それが一体なんの得があるんですか？」

犬城「それはだな、どんなものでもこれなら撃てる、ということだ。通常触れたりできない時空の歪み…というかその空間にも衝撃を与えられるし、もし殺しても復活するような存在がいたとしても確実に、全ての次元から消し飛ばせる。…まあ、あまり想像はできないだろうけど。」

鈴谷「んー、よくわかんないけど、要するに強いわけだ。」

犬城「ああ。ただ、少し扱いが難しいのが難点だな。それじゃ、一旦休憩。三十分後に再開するからなー。」

ニム「はいはい、次の時間は何をするのー？」

犬城「次の時間は簡単な使い方の説明だ。ちゃんと時間にはこいよー。」

扶桑「…。」

山城「扶桑姉様、どうされました？」

扶桑「あら、山城。…その、ね。波動砲がすごいというのはわかるのだけれど、やっぱり戦艦としてのプライドというものが、ね。」

霧島「私も同意見です。それに、そんな未知のものよりも実弾の方が信頼できます。」

扶桑「…山城は？」

山城「あー、私はもう装備しちゃってるので…。」

長門「たしか…試作艦装のやつか。あれは空も飛んでいたな。…山城、お前には艦としての誇りはないのか？」

山城「うっ、…そりゃ、戦艦としてはどうかと思いますけど、なんというかあの艦装とか波動砲とかには…なにか懐かしさ？みたいなを感じるの。だから…。」

加賀「おや、奇遇ですね。私もあの艦装に同じような感情を持ちました。…あれになにかあるんですかね。」

長門「そうか。…どちらにせよ私は装備しない。私は死ぬ最後まで戦艦として在りたいからな。」

山城「…そうですか。あ、もう時間ね。」

加賀「本当ですね。では行きましょうか。」

山城「ええ。」

長門「…なあ、扶桑よ。」

扶桑「なに？長門。」

長門「山城と加賀の瞳は…何色だった？」

扶桑「…赤と、茶色だったはずよ？」

長門「今の二人の瞳…黄色に見えたのは私だけか？」

霧島「気のせいでは？瞳の色が変わるなんてほぼあり得ませんよ？」

扶桑「そうよ。疲れているんじゃない？しっかりと休んでる？」

長門「…そう、だな。疲れているのかもしれない。…さて、私達も行くか。」

扶桑「そうですね。」

第29話 波動砲が主武装

3、2、1、Let's go!^{絶望★}

「波動砲講座そのに！」

犬城「はいはい、第二回波動砲講座はつじめつるよー！」

霞「なによそのノリは？」

犬城「いやー、だつてさ？今回の講座を受けている子はみんな波動砲を受け入れてくれた子でしょ？開発に携わった人間としては嬉しいもんだよ。うん。」

衣笠「それでー？今回の講座は何をするの？」

犬城「今回は…各種波動砲の特徴とかだな。まあ、細かいところだ。」

青葉「各種…ということは一つ一つですか？」

犬城「ああ。波動砲も武器と同じで場にに応じて選ばないと意味がないからな。」

曙「なるほどね。じゃあ、さっさと始めましょう？」

犬城「まあ、そうだな。では今回は最初の波動砲についての講義ということで全ての始まりの系列、スタンダード波動砲の系列だ。この系列にはスタンダード波動砲、拡散波動砲、メガ、ギガ、ハイパー波動砲、圧縮波動砲、超絶波動砲なんかがあるな。」

潮「細かくするとどのようなものがあるんですか？」

犬城「んー、試作型スタンダード波動砲、スタンダード波動砲、スタンダード波動砲Ⅱ、スタンダード波動砲Ⅲ、スタンダード波動砲Ⅳ、スタンダード波動砲ⅩⅩ、拡散波動砲試作型…」

瑞鶴「多い！もういいからさっさと始めて!？」

犬城「あいわかった。まず、スタンダード波動砲のシリーズから行こう。最初に紹介するのは『試作型スタンダード波動砲』だ。Leoなんかに装備されたな。」

龍驤「試作型？そないなもの紹介してどないするん？実戦では使わ

へんやろ？」

犬城「いや、以外とそうでもないよ。この試作型スタンダード波動砲はチャージ容量も少ないし、威力も少し低い。だが利点として装置がとても小さいことと、外付けができることが上げられる。これのお陰でもともと波動砲を装備できないような機体にも外付けができるんだ。」

加賀「ということは…これは現在配備してあるようなF-15EJなどにも装備できる、ということですか？」

犬城「ああ。F-15EJとかF-18Fみたいなハードポイントが外にある機体はガンポッドみたいな形式で、F-22のような兵装を内部収納する機体は少し改修して内部に取り付けることもできるな。尤も、F-22の下部にであれば通常のスタンダード波動砲ものせられるだろうけどな。」

加賀「なるほど。つまり波動砲搭載の戦闘機はいくらでも増やせるのですね。」

犬城「まあ、そのぶん技術の流出のリスクも増えるけどな。あとコストもね。んで二つ目は『スタンダード波動砲』だ。試作型の完成形だな。これはチャージ容量が試作型の二倍で、破壊力も純粋に二倍になっている。そしてなにより試作型の次に小さいな。ただ、戦闘機にのせるとなると大きめのガンポッドレベルになるから戦闘機動がF-15EJとかだと難しくなる。F-22の下部になら取り付けられるが。原作ではR-9Aを始めとした機体が装備している。」

山城「それでも横に並べて一斉射撃とかはできるのならまだ運用はできますね。」

犬城「さて、この先なんだが…この先は一気に系列が枝分かれする。スタンダード、ハイパー、ギガ、拡散、圧縮だな。ま、ここからはざっくりいくかね。」

那珂「え、それでいいの？ 適当？」

犬城「まあ、大抵は新型とそのアップバージョンだからな。さ、ガンガン行くぞ。まずはスタンダード系列。これはスタンダード波動砲の上位版だな。スタンダード波動砲Ⅱ、スタンダード波動砲Ⅲ、

スタンダード波動砲X、スタンダード波動砲XXがこれにあたる。」

日向「スタンダード波動砲とはどう違うんだ？」

犬城「この四つは着弾後に余剰エネルギーが拡散して追尾、再度着弾するんだ。ⅡとⅢは着弾点に収束する。XとXXは周辺の敵を追尾する。ま、似たようなもんよ。」

那珂「いやいやいや!?アバウトすぎでしょ!？」

犬城「まあいいのよ。んじやつぎー。次は拡散波動砲の系列だな。ではまず『拡散波動砲試作型』。」

磯波「あ、それって△のR―9A2の装備していた波動砲ですね？」

犬城「おお、よく知っているな。その通りだ。」

磯波「えへへ…」

犬城「磯波の言っていた通り、この波動砲は『R―type △』にてR―9A2『DELTA』の装備していた波動砲だ。2ループチャージで、1ループでスタンダード波動砲、2ループで発射後広範囲に拡散する拡散波動砲を撃てる。ただ、威力は控えめだ。」

龍驤「控えめ言うてもF―15とかのレベルなら簡単に消し飛ばせるんやろ？」

犬城「もちろん。というか金剛型戦艦のレベルでなんとか浮いていられるぐらいだろうな。」

龍驤「…想像以上やったわ。」

犬城「ははは。んでそのアップバージョン…というか完成形が『拡散波動砲』だ。これは『R―typeⅡ』の自機であるR―9C『WAR―HEAD』の装備していた波動砲だ。」

磯波「WAR―HEAD、突き抜ける最強ですね。」

犬城「ああ。この波動砲は…まあ試作型を完成しただけだな。」

磯波「酷い!？」

犬城「そもそもR―9Cが『突き抜ける最強』たる所以は(簡単に)パイロットが生身では耐えられないほどの(加速や運動性能故)だから。でもまあ、単機での戦闘ならかなりの戦果を挙げられるだろう。」

日向「まで、我々は軍隊だ。単機ではなく小隊なんかではどうなん

だ？」

犬城「んー、誤射さえ気を付ければある程度の戦果は出ると思うけど、数があるなら拡散波動砲一択ではなく状況に応じて…って感じになるな。ただ、あまりごちゃごちゃした戦場ではFFの可能性があるから使いにくいな。」

日向「そうなのか。…うーむ、誘導できる波動砲などがあればいいのだが。」

犬城「あるにはあるけど、それはまたおいおい、ね。さて、拡散波動砲系列はこの2つだけだから、次行こう。次はメガ波動砲、ギガ波動砲、ハイパー波動砲の三つだ。」

曙「あら？メガとギガはまだしもハイパー？」

犬城「ああ。ま、そこも説明していく。まずはメガ波動砲。これは『R-typeⅢ』の自機であるR-9/0の装備していた波動砲の片方だ。この波動砲の目指すところは貫通力。スタンダード波動砲が榴弾ならばこれは徹甲弾といったところだな。」

漣「なるほど。」

犬城「んで、それを装備していたR-9/0が装備していたもう一つの波動砲がハイパー波動砲だ。この呼称は『R-type final』のもので、『R-typeⅢ』ではハイパードライブシステムと呼ばれていたな。これは試作型スタンダード波動砲レベルの波動砲を連射する波動砲だ。」

漣「…ひえっ。」

犬城「まあ、その反応だよなあ。ま、難点として装置がデカイのと凄まじい出力が必要だが。」

野分「凄まじい出力、というと？」

犬城「まー、全力だと原子炉ひとつぶんぐらいかな？」

野分「…えっ？」

比叡「原…子炉？あれ？戦闘機の武装ですよね…？」

犬城「まあ、そうなるな。んで、その2つの先にあるのがギガ波動砲だ。これはハイパードライブでチャージしたエネルギーをギガ波動砲の仕様でぶっ飛ばさせるようにした代物だ。ハイパードライブは

必須な上エネルギーが半端ないのでさらに機械がごたごた。しかも最大チャージの7ループではバイド化の危険も伴うそう。なんでもかは知らん。」

山城「待って。バイドって存在するの？」

犬城「…とあるバカが疑似バイドなるものは作ってしまったが、一応この世界においてはまだ存在していない…はずだ。だが、あれが存在するとしたらいつ来てもおかしくはない。奴等は次元を越えられるからな。」

霞「さらつと流してるけどバイド化ってヤバイでしょ!？」

龍驤「せや、もちろん対策はあるんやろ？」

犬城「…撃たないこと、6ループまででリミッターを掛けること。これくらいしか無いな。」

龍驤「…バイド化しないようにするっちゅー考えは？」

犬城「不可能と東野さんは言っていた。そもそもバイドをこの世に解き放つわけにもいかないから実験もできん。」

龍驤「…なるほど。」

犬城「…ま、次に行こうか。次は圧縮波動砲の系列だ。これは破壊力よりも精密射撃や狙撃を目的としたものが大半だ。まずは圧縮波動砲。これはその名の通り波動エネルギーをスタンダード波動砲よりも高い圧力で圧縮し、指向性を持たせてぶっばなすものだ。ちなみに実機でのテストでは最大射程は38万キロだそう。」

漣「す、スタンドも月までぶっ飛ぶこの衝撃…」

潮「事実月まで吹き飛ばされちゃうね。」

朧「その前に消滅するでしょ。」

曙「まあそうなるわね。」

犬城「んで、そのアップバージョンが圧縮波動砲Ⅱだ。ただの改良なので割愛。次。圧縮波動砲の単位時間あたりのエネルギー量を減らして照射時間を増やしたものが持続式圧縮波動砲だ。ま、それだけだな。アップバージョンにⅡとⅢがある。うまく使えばうんたら。」

由良「…適当ですね。」

龍田「…なにあれ？」

山城「…ふと、なんとなく提督がヴァンパイアハンターとか楽しそうだなー、とか呟いちやったのよ。そしたらたまたまいた香取さんがやる気を出して…ああなっちゃったの。」

龍田「…提督も災難ねえ。」

山城「全く。」

犬城「ユーキャンヒツミー…シヤノワアアアア！」

香取「魔力の管理はしつかり！即再走に繋がります！」

犬城「ドウエドウドウドウドウドウエ…」

香取「遅い！もつと早く進みなさい！具体的には『ドウドウドウドウドウドウ』ぐらいです！」

山城「再走…？RTAなのかしら。」

龍田「…にしても、変態的な気持ち悪い動きね。なんであれがヴァンパイアハンターなのよ。」

山城「日本で一番悪魔城を潰したヴァンパイアハンターの動きだとか。」

龍田「訳がわからないわ。というかアルバスってヴァンパイアハンターなのかしら…？」

山城「…まあ、そうなるな。」

龍田「…あなたは興味あるの？あれ。」

山城「…少しはあるかな？」

香取「ほう！ならば山城さんも鍛練に参加しなさい！ええ、それがいいですね！さあ！早く！」

ガシツ

山城「え!?!ちよ、待って!?!」

犬城「ふふふふ…死なばもろとも…おまえも一緒だ…山城もこつちへ引きずり込んでやる…ふふふふふふ…ふふふふふふふふふふ…！」

ガシイ

山城「ちよ!?提督まで!?た、龍田!助けて!龍田!?

龍田「うふふ。楽しんできてね〜♪」

山城「龍田ああああ!?!」

ズルズルズルズル:

龍田「頑張つて〜」

山城「呪つてやるカモノハシ:じやない軽巡洋艦の龍田ああああ!」

この日を境に互いの名前を呼び合いながら高速で移動する提督と山城が見られるようになったとか何とか。

:オチはない。

〜捷号決戦!遊撃、レイテ沖海戦!(前編)〜

大井「始まりましたね:。」

犬城「ああ。捷号作戦というと:前世における決戦作戦だったか。」

大井「ですね。捷一号作戦から捷四号作戦まであつて、今回は捷一号作戦です。」

犬城「捷一号:確か青葉が大破した作戦だったかな。」

大井「青葉大破はよくあることだったでしょ。」

犬城「まあ、そうなるな。:日本の機動艦隊が全滅した作戦:であつてるのかな。」

大井「事実上壊滅ですね。今回は:台湾へ航空攻撃を掛ける空母艦隊を水雷戦隊で撃滅、ルソンへ陸戦勢力を輸送して上陸を防ぎ、比島北方の制海権を奪取、最後にパラワンに巢食う敵を叩き潰す!って感じですかね。」

犬城「まあ、そうなるな。あ、このだんご美味しいな。」

大井「ですねー。さすが間宮さんです。:それで?提督はなにかこれに思うところはあるんですか?」

犬城「そだねえ。これでも山城の端くれだから一応奴等を叩き潰したいっていう感情はあるけど:そこまででもないな。せいぜい

トマホークをぶっぱなせるだけぶっぱなしたくなる衝動に駆られるぐらいだ。なに？核だ？気にするな。些細なことよ。」

大井「些細な…こと…?」

犬城「ま、たぶん山城の方がつらいんじゃないか?…なあ、山城?」

山城「…。」

ドヨン

犬城「山城?おーい?やましろー?」

山城「はっ!?な、なんですか?」

犬城「大丈夫か?顔色悪いぞ?」

山城「だ、大丈夫です。はい。大丈夫、ですから…。」

犬城「うん、大丈夫そうに見えるいわ。…山城、お前は休んでおけ。まだ出番は先だろうし、バッドコンディションで挑んで勝てるような相手では無いだろう?」

山城「そう、ですね。」

犬城「それに、お前もそんな状態だ。扶桑や時雨、満潮なんかはもつときついんじゃないか?」

山城「それは…まあたぶん。」

犬城「なら、せめて出撃まで皆でのんびりと話しておけ。西村艦隊の旗艦はお前なんだから、ぐったりしていちや示しがつかん。もし俺にできることがあれば言ってくれ。」

山城「…じゃあ、その…えっと…」

大井「…ふふつ。提督、私はちよつと席を外しますね。きつと、二人きりの方が山城もやりやすいでしょうし。」

犬城「ん?おう、わかった。」

ガチャ
パタン

山城「あの、提督…」

犬城「なんだ?」

山城「その…抱き締めてもらって、いいですか?」

犬城「…いいよ。俺の胸でいいのならいくらでも貸すぞ。」

山城「ありがとうございます。」

大井「頑張りなさいよ、山城……。……にしても、この（前編）つてなんなのかしら。謎だわ。」

第30話 2017年秋イベ!

3、2、1、Let's go!★

「弾薬欠乏!」

山城「艦長!撤退なさるおつもりですか!」

犬城「我が祖国よ、永遠なれえええええ!」(自爆)

青葉「最初から飛ばしますねえ。」

犬城「弾が無い!どうしよう山城お!」(ダメコン発動)

山城「知りませんよ!夏イベでもすぐに弾切れ起こしたんですから、学習して弾集めておけばよかったですか!」

犬城「だってレベリングで湯水のごとく消えてったんだもの!」

山城「ならもう少し計画的にやればよかったですか!」

犬城「なー!」

山城「うがー!」

吹雪「えっと…なんですか、あれ?」

青葉「んー?いつものことだよ。ただの口喧嘩。でも弾切れはまずいなあ。スリガオに現れた海峡夜棲姫をまだ倒せてないのに。」

吹雪「うう、それもこれも魚雷挺が悪いんです。奴等カットインを当たり前のようになぶち当ててくるんですよ。」

青葉「わかつてるわかつてる。でもほんとどうしようかねー。提督と旗艦の山城はあんな精神状態だし。あれで一番ましな想定の内想定ってんだから泣けるねえ。」

大淀「あの…『遊撃部隊 艦隊司令部』は使わないんですか?」

青葉「あー、あれね。んー、提督はそれにスロットを使うなら徹甲弾載せたかって言ってるけど…一度やってみようか。」

大淀「結局たどり着けないのが原因ですから、多少戦力が下がったとしてもたどり着いて殴った方がいいと思います。」

吹雪「でも、大破した艦を一人で下げるなんて少し怖いですね。」

大淀「一応後方の支援艦隊が回収する手筈とはなっていますが、それでも危険ではありませんね。敵本陣ですし。」

青葉「でもまあ、そこは妖精の加護を信じるしかないねえ。」

吹雪「そうですね。」

犬城「うがー！」バタツ

山城「うにゃー！」バタツ

吹雪「…え？寝た？」

青葉「…みたい？これははじめてのパターンだなあ。」

大淀「いや…作戦中なのに…。」

犬城「Z z z …」

山城「Z z z …」

大淀「…はあ。一時的に休息をとります。提督と山城さんが起きるまでゆっくりしてください。」

吹雪「あ、あははは。はい。」

青葉「はあ…。」

く超戦艦 日本武尊抜錨く

犬城「昭和18年4月18日、ブルーゲンビル島上空で戦死した連合艦隊長官山本五十六は、後世日本に高野五十六として生まれ変わることになる。」

比叡「ちようかああああああああん！…つてなにやってるんですか。」

犬城「いや、なんとなくあらすじでもと。」

比叡「OVAじゃないんですからいりません。といかなかんで私は横須賀に連れてこられたんですか？」

犬城「そりゃ、日本武尊と比叡がうちに配属となるからだ。受取に来た感じだな。」

比叡「え、日本武尊も比叡もこの前ドック入りしたばかりじゃないですか。もうですか？」

犬城「ああ。改装は全て済んだそうさ。」

比叡「はやっ。一体なにをしたんですか。」

犬城「『対超兵器改装』だ。」

比叡「超兵器？なんですかそれは。」

犬城「太平洋の時空の歪みから出現する不明艦をそう呼称するんだそうさ。超兵器一号が鹵獲された巨大戦艦。超兵器二号が昨日まで逃亡していた戦艦だ。」

比叡「ああ、あれですか。にしても昨日までつてことは降伏でもしたんですか？」

犬城「いや、陰陽両艦隊が撃沈したそうさ。最後まで抵抗していたとかで、生存者は無しだと。」

比叡「そうなんですか……。にしても、あの世界最強の潜水艦隊が苦戦するなんて考えられません。」

犬城「ああ、それなんだが敵はどうやら重力操作が可能なようで、魚雷がそれってしまったんだそうさ。結局X艦隊全艦での飽和雷撃と日本武尊のR砲フルバーストで無理矢理ぶち抜いて沈めたとか。」

比叡「……うわあ。」

犬城「正直やり過ぎよなあ。」

大石「お前らな……あの現場に居なかったからそんなことが言えるんだ。」

犬城「うおう!?大石元帥!」

比叡「というと?」

大石「あの重力場がかなりのものでな。電算機の計算では一度に50射線はぶちこまないと突破できないというものだった。故にこれでもなんとか突破できたレベルだ。おそろしいことにな。」

犬城「まじですか……。」

大石「ただ、色々と残骸から有用な物が見つかったからな。特にエンジンや対空バルカン砲なんかが特に役にたつだろう。」

比叡「ひえー。」

犬城「にしても、対超兵器改装といっても何をしたんですか?」

大石「なに、足回りの強化と兵装を強化して奴等とタイマンで殴り

会えるようにしただけさ。」

犬城「…比叡もですか？」

大石「ああ。日本武尊は火力特化、比叡は速力と手数特化といった感じだ。」

犬城「兵装と緒言を教えてもらっても…？」

大石「ああ。まず日本武尊だが、主砲を51cm三連装砲三基から61cm三連装砲二基に換装した。また、艦首に超兵器一号から手に入れたデータから作成した超音速魚雷発射管四門、VLS64セル、対空対艦両用L砲多数。発動機は核融合炉で巡航速度36ノット、最高速度71ノット、水流噴進を使うと最大87ノットまで加速できる。また最大船速までであれば左舷と右舷にあるバウスラスタで急転身が可能だ。」

犬城「…ツツコミどころが多すぎませんか!?!61cm!?!超音速魚雷!?!しかも水上艦で71ノット!?!なんですかそれは!?!」

大石「いやまあ、速度に関してはそこまで上がらなかったというのがこちらの感想なのだが。新日本武尊の時点で55ノット出せたからな。」

犬城「…はあ。えっと、比叡はどんな感じですか？」

大石「比叡か？比叡は…60口径41cm連装砲四基、五連装超音速魚雷発射管四基、対空対艦両用L砲多数、VLS32セル。核融合炉搭載で巡航51ノット、最高134ノットに水流噴進で151ノットまで加速できる。こっちも最大船速までならバウスラスタで急転身できる。」

比叡「ひえっ。」

犬城「…船？要塞？なにこれ。」

大石「まあ…目には目を、歯には歯を、超兵器には超兵器を、という理論だろうな。各地の艦も順次改装するところになっているし、航空機もR戦闘機へと替えていくが…間に合うかどうかはまだわからない。正直これでも足りるのかどうかかわらんのだ。」

犬城「まあ…未知の敵ですからね。ま、一番槍は勤めさせていただきますよ。」

大石「すまん。初、由香。頼む。」

犬城「任せてください。」

比叡「ひえー。ひえー?」

く海峡を抜けてく

《C-2改3号機》

ガガガ

犬城『：作戦内容を再確認する。これより、比島周辺海域の制海権を奪還する！既に敵防備艦隊を誘いだすため第一第二聯合艦隊は降下、戦闘を開始している。君たち第三艦隊は南から進軍、北より来る第四艦隊と合流し13隻による変則連合艦隊にてスリガオ海峡に突入、敵主力艦隊を撃滅してもらう。偵察隊の報告によると主力艦隊には双胴戦艦が1隻と戦艦多数が確認されている。』

最上「双胴戦艦って：またふざけたものが出てきたね。」

夕立「同じのが2隻並んでるよりは多分ましっばい。」

犬城『また、海峡出口東方50kmの地点に防空棲姫の亜種と思われる艦を含む艦隊と機動艦隊を確認している。こちらは我々柱島機動艦隊で対処する。スリガオの艦隊と合流はおそらくないとは思いますが、一応留意しておいてくれ。制空権は既に空母ちよだから発進したR-9K大隊が確保してあるため、敵機の奇襲以外では空襲は無いだろう。一応4機のR-9B3カスタムがそちらの直奄に就くが、場合によっては別戦線へ移動するから無いものと思って行動しておいてくれ。確認は以上だ。三十分後に降下となる。必ず勝とう。以上だ。』

山城「一応点呼をとるわ。夕立。」

夕立「ばい。」

山城「貴女はいつも通りでいいわ。綾波。」

綾波「は、はい!」

山城「貴女は今回が初めての特殊作戦だったわね。落ち着いて頑張りなさい。摩耶。」

摩耶「おう。」

山城「貴女は防空をお願いね。最上。」

最上「うん。」

山城「最上、貴女は扶桑姉様をお願い。由良。」

由良「はい。」

山城「貴女は急速錬成を終わらせたばかりなのよね…いつもの演習の通りに頑張りなさい。ただ、気を抜いてはいけないわよ。当たり前のように殺されるからね。最後に姉様。」

扶桑「大丈夫よ。航空戦艦の、扶桑型の力を見せてあげましょうね？」

摩耶「…んで、そういうお前は大丈夫なのか？」

山城「…ええ。大丈夫よ。それに、私は帰らなきゃならないから。そりゃ、怖いけどね。」

摩耶「まあ、そうだろうな。あたしはこっちの方にたどり着く前に沈んじまったから文章でしか読んだことはないけど、凄まじい海戦だったんだろ？仕方ないさ。」

山城「ありがとう。」

garuda2『降下六分前だ！』

山城「了解。全員、降下用艀装を展開して。」

夕立「ぼーい。」

綾波「降下艀装装備完了！パラシュートも大丈夫です！」

山城「…全員大丈夫ね？」

摩耶「もちろん！」

garuda2『ハッチ開くぞ！』

山城「…降下用意！…降下、降下、降下！」

摩耶「エントリーイイイ！ひゃつはー！」

扶桑「…ねえ、最上。私やっぱりこの落ちる感覚は違和感があるわ。なんで船なのに落ちていいのかしら？」

最上「意外と余裕あるね、扶桑。ま、それは慣れるしかないね。」

扶桑「船なのに…。戦艦なのに…。」

バシャーン

山城「みんな、無事!？」

摩耶「おうともさ！」

扶桑「ああ…やっぱり水の上っていいわね。」

綾波「はい！」

夕立「夕立、敵潜水艦発見したっばーい！」

最上「まあ、そうなるね。」

由良「なんとかまりました！」

山城「よし！最上は水戦を上げて直奄に！夕立、潜水艦の位置を教えて！全艦、対潜水艦戦闘用意！」

綾波「…あ！敵潜水艦、遠距離から雷撃したあと潜航しました！」

山城「雷撃は!？」

綾波「えっと…あれだと私たちの後ろを素通りします！」

山城「わかったわ！全艦、輪形陣に移行！スリガオ海峡へ向かうわよ！」

ガガガー

犬城『あー、あー。こちら日本武尊。状況の報告を。』

山城「こちら山城。降下に成功しました。潜水艦に発見されましたが。」

犬城『了解した。…既に上空にR-9B3カスタム4機が到着している。そのまま予定通りに進軍してくれ。』

山城「了解しました。」

由良「…な、対空電探にて敵機を発見！」

最上「水戦隊、迎撃に向かわせるね！」

山城「全艦、対空戦闘用意！」

最上「水戦から入電！敵機は戦闘機が七割に攻撃機が三割！攻撃機は魚雷じゃなくて爆弾を積んでるから恐らく緩降下爆撃だと思う！」

摩耶「緩降下あ？なら怖かねえな！主砲三式弾装填！」

山城「直奄のスレイブニル、敵戦闘機と戦闘を開始したわ！」

最上「水戦隊、攻撃機の迎撃を開始！」

扶桑「敵機群、主砲の射程内！」

山城「了解！主砲三式弾、つてえー！」

扶桑「てえー！」

ドオオオオン！ ドオオオオン！

山城「弾着まで20秒！10秒！5、4、3、2、時限信管作動！今！」

バアアアアン…

由良「敵機…12機抜けました！水平爆撃のコースに入っています！」

最上「敵戦闘機群一機を残して壊滅！残りは逃げていったよ！」

山城「スレイブニルは再度警戒に戻って！」

摩耶「主砲、高角砲対空戦闘始めえ！オラア！」

夕立「主砲、撃つつぽい！」

扶桑「偵察機から入電！…敵空母艦隊を発見！」

山城「位置は!？」

扶桑「私たちの侵攻ルートとは完全に外れているわ！これは…第四艦隊のルート上！」

山城「くっ、日本武尊へ連絡を！」

摩耶「よっしゃー！ラスト一機！」

バババババ…

綾波「敵機、全機撃墜しました！」

山城「このまま進むわ！」

最上「了解！」

《日本武尊艦橋》

能代「第三艦隊、敵機迎撃に成功。また、敵空母艦隊を発見のとこのとです。」

犬城「位置は？」

能代「ポイントV…第四艦隊の侵攻ルートにちょうど重なる位置です。そこから北上しているとのことなので…ポイントIにて接敵すると思われます。」

犬城「不味いな…規模は？」

能代「中心に護衛空母2隻、重巡1隻、軽巡2隻、駆逐1隻の高速機動艦隊、その周りに軽巡1隻、駆逐5隻の水雷戦隊が居るとのことです。」

犬城「潜水艦による慚撃を警戒したのか…？まあいい。出てきたものは仕方あるまい。第四艦隊はこの高速機動艦隊を迎撃して、第三艦隊の方へ向かわないように惹き付けるように下命。」

能代「だけどそれだと第三艦隊が…」

犬城「ああ。史実よろしく7隻で突入してもらおう。」

能代「大丈夫ですか？」

犬城「ああ。どうやら第一第二連合艦隊による釣りだしが上手くいったようで、第三艦隊のルート上にはそこまでの艦は居ない。史実の時のような敵艦山盛りなんてことはないだろう。魚雷艇はちと怖いが綾波と夕立に頑張ってもらうしかあるまい。」

能代「史実通りにならないといいんだけど。」

犬城「史実通りなら制空権は敵のものなんだが。それにまあ、いざとなればちよだに待機しているデルタ部隊を向かわせるし、日本武尊と比叡から砲撃もやるさ。それに、他にもあてはあるからな。」

能代「ふーん。まあいいわ。第四艦隊には連絡しておきます。」

犬城「頼む。」

《第三艦隊―ポイントW》

ガガガーツ

犬城『こちら日本武尊、聞こえるか？』

山城「こちら山城、聞こえています。現在ポイントWを通過しました。第四艦隊の状況は？」

犬城『現在敵機動艦隊と戦闘中だ。合流は難しい。』

山城「つまり私たちだけで突入しろ、ということですか？」

犬城『ああ。』

山城「…了解しました。」

犬城『…すまない。ポイントYで再度連絡をしてくれ。』

山城「はい。」

扶桑「どうしたの、山城？」

山城「第四艦隊が先程の機動艦隊と交戦したそうです。」

摩耶「まてまて。そこまで硬い艦はいないとはいえ数が多いからそれなりに時間かかるんじゃないか？」

夕立「もうすぐ合流ポイントっぽいー。」

山城「…ええ。私たちだけでの突入となるわ。」

最上「うわあ、見事にあのときと同じ7隻での突入だね。」

扶桑「抑止力みたいなものでも働いたのかしら…。連合艦隊同士の夜戦なんて大変なだけなものね…。」

由良「いや…別に連合艦隊同士でも問題ないと思いますよ？」

扶桑「いいえ、ダメなのよ…。主に処理落ちとバグが大変になるのよ、きつと。メンテも延長されるわ…。」

由良「一体なにを…？」

山城「たまに姉様は電波を受信するのよ…。どこからかは知らないけれど。ま、気にしない方が身のためだと思うわ。」

由良「は、はあ…。」

綾波「山城さん、まもなくポイントYです。」

山城「わかったわ。」

ガガガピー

山城「提督、ポイントYにまもなく到着します。」

犬城『こちら日本武「ザー」艦は現在敵「ザー」と交戦中。敵の電波妨害が「ザー」ており通信が「ザー」R-9Eを通し「ザー」に切り替える。チャンネルを157.8に変えてくれ。』

山城「了解、チャンネルを157.8に変えます。」

ミヨーンミヨーン

山城「変更しました。」

犬城『…うむ、聞こえているかね？』

山城「ノイズは無くなりました。聞こえています。ばっちりど。」

犬城『良し。先程の通信通り合流は難しい。よって第三艦隊のみで突入する。敵戦力は敵主力艦隊に駆逐艦が数隻随伴しているだけで、それ以外の戦力は確認できていない。魚雷艇が沸き出てくる程度だ

ろう。』

山城「他の艦は何処へ？まだ居ると思っていたのですが。」

犬城『どうやら見事に釣りだされたようだ。それでも用心はしておいてくれ。』

山城「了解。これよりスリガオ海峡へ向かいます。」

扶桑「やっぱり…？」

山城「はい。7隻でスリガオへ突入します。」

最上「あ、はははは。うわあ。」

摩耶「こりやまた大変なことになったなあ…。」

綾波「が、頑張つて山城さんと扶桑さんは守ります！」

山城「ありがとう、綾波ちゃん。よし。第三艦隊、スリガオへ向けて進むわよ！」

由良「はい！頑張りましたよう！」

…ドオン…

夕立「…あれ？魚雷の炸裂音が連続して聞こえるっぽい。方位は進行方向を0として015！」

山城「そつちには友軍はいないはずよ。一体なんなのかしら。…確認しようもないし、そのまま進撃しましょう。」

《深海側魚雷挺基地前方（位置はE-4ZZ1マス右下辺り）》

時系列は少し巻き戻る—

爽海「なんだかデジャブを感じるなあ。』

水神「前世でもやったものね。　小型挺基地の封鎖—。』

快龍「紅海での雷撃もやったしな。でもまあ、この後世では別にドイツやアメリカが敵って訳ではないからなあ。同じことができるのは楽だがつまらん。』

富嶽「無駄口はここまです。全艦、置き土産を撃つわよ。』

水神「わかったわー。』

爽海「小型海底魚雷、つてー！』

快龍「てー！』

富嶽「…よし、封鎖完了ね。このまま離脱するわよー。』

水神『はーい♪』

紺碧艦隊が設置していった小型海底魚雷。

これは発射後海底に待機し、あらかじめ設定された推進音に反応して再起動、追尾して敵小型艦艇を撃沈するというものである。

通常魚雷一本分で二十四本設置できるため、海底に4隻8発射管で合計768本もの小型魚雷が設置された。

時系列はそこから少し進む―

《基地内》

スリガオ沖魚雷艇指揮官：ヲ級「潜水新棲姫がスリガオへ進む艦娘どもを発見した！スリガオを守るため、出動しろ！」

PTボート「きー！」

スリヲ級「よし！待ち伏せがあるやもしれん！門を開くと同時に全員一気に飛び出せ！いいいな！」

PTボート「きー！」

スリヲ級「よし！門ひらけ！」

ゴゴゴゴゴ…ガシヤーン

スリヲ級「全員突撃！」

PTボート「きいいいいい！」

ドカアアアン

スリヲ級「な、なんだ!？」

モブホ級「せ、潜水艦です！魚雷艇が出た瞬間に魚雷発射管を開いたと思われる気泡と五十本を越える魚雷が！」

スリヲ級「五十本!? 一体何隻いるのだ!？」

PTボート「きいいいいいいい!？」

スリヲ級「あ、ああ…。魚雷艇たちが…」

ドカアアアン……………

モブホ級「……………雷撃、止まりました。」

スリヲ級「…残存艦は？」

モブホ級「……………ありません。」

犬城『あー、あれか。なに、ただ魚雷艇基地を吹っ飛ばしたただけだ。』
山城「…そう。」

犬城『あー、すまんが切るぞ。』

山城「はい。」

扶桑「…やっぱり提督?」

山城「でした。説教です、これは…。」

由良「…え、あれって核?」

綾波「いや、それはないとおもいます!提督ですし!」

山城「おおかた気化弾でしょう…。」

摩耶(でも提督、核もしかりと持つてるんだよなあ…。V2とか、トマホークとか。この前とかうっかりトマホークぶっ飛ばしかけたとか言ってたし。)

山城「はあ…進むわよ。」

蜻蛉「……………」

犬城『こちら日本武尊。戦闘、終了した。いつでも支援砲撃可能だ。』

山城「…提督。」

犬城『なんだ?』

山城「これより…スリガオ海峡を突破します。」

犬城『…了解した。』

山城「…。」

犬城『山城。』

山城「はい?」

犬城『必ず帰ってこい。それだけだ。』

山城「…はい。」

夕立「敵艦隊発見!」

綾波「イ字有利です!それに、暗いからかまだ見つかってないようです!」

山城「了解！全艦、単縦陣へ移行！スリガオを突破するわよ！」
扶桑「もちろん！主砲、つてー！」

夕立「主砲も魚雷もあるつばい！戦艦だつて私たちの前ではただの雑魚よ！」

綾波「魚雷ばらまきます！」

由良「よし、敵前衛艦隊全滅！」

最上「敵主力艦隊、単縦陣にて反航戦に持ち込もうとしています！」

扶桑「どうするの、山城？このまま反航戦、右砲雷撃戦するの？」

山城「…いえ、左転進。180度回頭！同航戦に持ち込んで、ここで殲滅します！」

摩耶「よっしゃ！やってやろうじゃねえか！」

海峡夜悽姫『イカセ……ナイ！』

摩耶「なんか扶桑と山城に似た戦艦だな？」

扶桑「やめて、摩耶。一瞬自分でもそう思ってしまったって後悔してるんだから……。」

山城「……？似てる？私があるにですか？」

摩耶「ああ。」

山城「まつさかー。」

海峡夜悽姫『ココ……ハ……トオレナイシ……。……トオサナイ……。ヨ

……ッ！』

ドーン

由良「敵双胴戦艦発砲！」

最上「回頭完了！T字有利にいつでも移行できる同航戦！」

山城「それ後ろに着かれてるっていうのよ!？」

摩耶「おらおら！消し飛びやがれ！」

ドーンドーン

由良「摩耶が敵戦艦撃沈！私も！よく狙って……てー！」

ドーン ドドーン

夕立「夕立、突撃するっばい！さあ、素敵なパーティーしましょ？」
ドーンドーン

綾波「えっと、夕立ちゃんと由良さんも戦艦を撃沈です！私だって
…主砲は手前の重巡、魚雷は後ろの重巡を狙って…てー！」

ドーンドーンパシユウ
ドカーン

綾波「やりました！」

摩耶「敵艦、残るは双胴戦艦だけだ！」

山城「主砲、つてー！」

扶桑「主砲、撃て！」

ドーンドーンドーンドーン

海峡夜悽姫『キャアアアア!』

最上「やったか！」

摩耶「馬鹿！そりやフラグだ！」

海峡夜悽姫―壊『……………ヨクモ……………ヨクモ ■■■ヲ……………。』

……………ユルサナイ！ニセモノメ！」

最上「な、片方生きてる！しかもなんか起こってる！」

摩耶「最上のばかやろう！フラグなんか建てるから！」

最上「うわあああ！ごめん！」

海峡夜悽姫―壊『アアアアアアアアアアア!』

ドーンドドーン ドドーン ドドーン ドドーン ドーン

扶桑「きゃあああああ!？」

最上「うわあああああ!？」

山城「な、姉様、最上!？」

摩耶「まさか、全門斉射を全て当ててきやがった!？」

綾波「敵戦艦、装填終了した模様!主砲旋回しています!」

山城(ど、どうする!?!あれが確実に当ててくるようなやつだったら第三射ともたずに全滅する!なら撤退?だめ、大破した扶桑姉様じゃ逃げ切れない!なら、私が殿になるしか…でも、それで皆が助かるのなら…!)

―必ず、帰ってこい。―

山城 ハッ

山城(そうよ!私は帰らなきゃならないのよ。鎮守府へ!)

綾波「敵戦艦、砲がほぼこっちを!」

山城「私は…帰らなければならぬ。」

摩耶「な、山城!?!あいつに突っ込むつもりか!?!」

反航戦

山城「この海峡を抜けて、提督の元へ!」

海峡夜悽姫―壊『アアアアアアアアアア!』

山城「邪魔だ…:…:どけええええええ!」

ドガアアアアアアアア!

海峡夜悽姫―壊『アアアアアアアアアア!』

最上「…:…:…:やつつけ、ちゃった?」

由良「…:…:…:すごい…:」

山城「はあ…:はあ…:」

海峡夜悽姫―壊『ク…:ソ…:,ニセモノ…:メ…:』

山城「…:ニセモノじゃないわ。私は私よ。それ以上でもそれ以下でもないわ。」

海峡夜悽姫―壊『…:クソ…:』

山城「…:…:…:みんな、帰投するわよ。この先に提督たちが待っているから…:」

扶桑「…:やったわね、山城。」

山城「…:へ?」

扶桑「スリガオを、過去を越えたのよ!山城!」

山城「え、あ、…はい、そうですね？」

最上「山城？どうしたのさ。反応が薄いよ？」

山城「…その、なんとというかまだ信じられないというか、実感がないというかなんというか…」

摩耶「なら、さつさと帰って祝勝パーティーでもやろうぜ！そうすりや実感するさ！ほらほら！」

摩耶（それに、提督にも早く会いたいだろ？）ボソツ

山城「な、なななな!？」

摩耶「あつはつはつはつ！ほら、早く帰るぞ！扶桑と最上は大丈夫か？」

扶桑「ええ。もちろん！」

最上「なーに、なんとかなるよ！うん！」

《日本武尊》

能代「第一艦隊、全員回収完了しました。」

犬城「了解。…山城たちは大丈夫だろうか…」

能代「信じて待つしかないでしょ。」

犬城「そうだが…」

能代「…あ、レーダーに反応。数7！」

犬城「山城！」

山城「…提督？」

犬城「山城か！無事か!？」

山城『はい。無事敵艦隊を撃滅、スリガオを突破しました。扶桑姉様と最上が大破していますが、それ以外に被害はありません。』

犬城「了解した！日本武尊にて回収する！」

山城『了解です。』

犬城「…よかった。」

能代「次のときはもうちよつと臨機応変に動けるような作戦にしましょうね。」

犬城「…だな。」

蜻蛉……………

能代「扶桑さんと最上はいっぺきで入渠しています。」

犬城「わかった。」

夕立「あ！提督さん！」

由良「提督さん、艦隊、帰投しました！」

犬城「おう、お疲れ様。綾波と由良は初めて参加する作戦だったのにすまなかったな。それに夕立と摩耶もよく頑張ってくれた。疲れているだろうか？とりあえず鎮守府につくまでは休んでいいぞ。」

摩耶「おう！提督もお疲れさまな。」

犬城「…山城はどうした？」

綾波「甲板で風に当たりたい、と言っていました。」

犬城「そうか。」

摩耶「…提督、山城のことたのむぜー。」

犬城「了解した。」

タツタツタツタツ：

綾波「…ふう。嘘をつくというのはあまりいい気分はしませんね。」

摩耶「巻き込んでごめんな？」

綾波「いえ、いいんです。私も山城さんには少しでも幸せであってほしいです。浮気はやめてほしいですけど。」

摩耶「せっかくスリガオを抜けたんだ。もちっと幸せになってもいいだろうし、個人的には提督と千代田が別れてほしい、つてもあるなあ。」

綾波「…？…なんでですか？」

摩耶「…そうだな、そうすればあたしが提督と付き合えるかもしれないだろ？」

綾波「…協力しなければよかったです。」

摩耶「あつはつはつはつ！もつと思考を追うことを覚えな！さて！とりあえず風呂でもはいるか！」

蜻蛉……………

犬城「…山城。」

山城「…提督ですか。どうしました？」

犬城「それは俺の台詞だ。どうした？風に当たりたいなんて。」

山城「…？いえ、私は摩耶にここで待つてろと言われて待つていたんですが。」

犬城「…？…んー、まあ、いいか。とりあえず…ご苦労様。第三艦隊のみで突入するとなったときはどうなることかと思っただが、無事に突破できてよかった。」

山城「そう、ですね。無事に突破できました。」

犬城「ああ。…お帰り、山城。」

山城「…ただいま、提督！」

第31話 色々と終わってしまう時期

3、2、1、Let's go!
絶望★
撃沈の代償

扶桑「…山城?」

山城「…はい。」

扶桑「…説明してくれるわね?」

山城「…はい。」

扶桑「当分の間、海に出られないというのはどういうことなの?」

山城「えつとですね、私、スリガオ海峡夜戦の時に一撃であの深海棲艦を撃沈したじゃないですか。どカーン、と。」

扶桑「ええ。たしかに見たわ。」

山城「その時、火薬の量をかなり増やして発砲したんですけど、その衝撃のせいで艦装本体にかなりのダメージが入ってしまったみたいなんです。」

扶桑「そう、だったの。だからあんなにすごい音がしたのね。それで、いつ頃艦装の修理が完了するのかしら?」

山城「技師さん曰く、そこかしこに被害が出ているから直すなら少なくとも3ヶ月はかかる、正直新調した方が早いし確実ではある、つて言われました。」

扶桑「新調ではだめなの?」

山城「はい。新調すると適合率が下がってしまいます。適合率が下がってしまうともうひとつの『RAGNAROKⅢ』の艦装の方にも影響が出てしまうので、やめておいてほしい、と提督に言われました。」

扶桑「そう…。じゃあ、3ヶ月ぐらいはどうするの?」

山城「その間は後方での支援や提督の補佐、あとは場合によってはラグナロクでの出撃もあり得ますが…多分それは無いと思います。まだそこまでの練度でもありませんし。」

扶桑「つまり、秘書艦業務のみになるのかしら？」

山城「まあ…そうですね。あとは船を操縦しての支援ぐらいしかできませんしね。」

扶桑「…わかったわ。みんなには貴女の口から説明しなさい？」

山城「わかっていきますよ、姉様。」

扶桑「頑張りなさいよ。」

ガチャ

満潮「扶桑、山城！パーティー始まるわよ！早く！」

扶桑「わかったわ。ほら、山城？行くわよ？」

山城「…はい！パーっと騒ぎましょう！ひゃっはー！」

満潮「や、山城!?どうしたのよ!?テンションおかしくない!？」

山城「私以外の戦艦ぶつとばーす！」

満潮「山城お!？」

山城「波動の力よ！米国とか英国とか独国とか消し去るべし！ミン

ナニハナイシヨダヨ！『秘密波動砲』！」

満潮「部屋のなかで波動砲を撃つんじゃないわよ山城おおお!？」

ドカーン

青葉「…爆発オチなんてさいてー。」

犬城「…まあ、そうなるな。」

…朝潮が進水日と聞いてく

犬城「という訳で…」

「「「朝潮誕生日おめでとう！」」」

朝潮「ありがとうございます！」

山城「はい、これは秘書艦全員からのプレゼントよ。頑張って精進

してね。」

朝潮「これは…鉄板?」

霞「タブレットPCよ、朝潮姉。鉄板もらってどうするのよ…。」

朝潮「いや…焼きそば屋を目指せという暗号なのかと。」

霞「いや、確かに焼きそば美味しいけど…」

朝潮「たぶれつとぴーしー…」

霞「…聞いてない。」

山城「ふふつ。それを使えるようになって、もっと頑張れるようになってね?」

朝潮「たぶれつとぴーしー…!嬉しいです!ありがとうございます!」

青葉「…。」

大井「あら、青葉?難しい顔をしてどうしたの?」

青葉「…いえ、海峡突パーティーはどうしたのかなーって。」

大井「…青葉。」

青葉「はい?」

大井「ひとつ上の話を書いてからそれなりに間が空いちやったのよ。それで、どうも思い描いていたパーティーの絵を忘れたらしいのよ。」

青葉「…?ひとつ上?絵?一体なにを…?」

大井「…まあ、メタい話はこれだけしておきましょう。朝潮ちゃんへのプレゼントも渡され終わったみたいだしね。」

青葉「はあ。」

ポーラ「むく。なーんであさしおの誕生日はパーティーもやってくれているのにポーラは適当なんでしょう?」

リットリオ「あら、それはねー、彼女がまだ未成年だからよ。」

ポーラ「ミセイネン?なんですか、それは。」

リットリオ「さあ?」

ポーラ「ええ…?」

長門「会話の外から失礼する。未成年というのは漢字の通り成人でない人のことだ。満二十歳からが成人で、それ以下は未成年となるな。ちなみに、未成年は飲酒と喫煙は法律で禁止されているからな。間違っても朝潮に酒を飲ますんじゃないぞ?良い子のみんなも駄目だぞ?長門お姉さんとの約束だ!」

ポーラ「なあるほどー。だから駆逐艦の子達はパーティーがあるんだー。」

リットリオ「未成年とはそういうことだったんですか…。」

長門「そういうことだ。にしても提督はいつになったら私を改二にしてくれるのだろうか。色々とパワーアップした改二なら今まで以上に役に立てるという確信があるんだが…。」

リットリオ「わたしもはやくイタリアになりたいです。」

ローマ「ねーさーん。」

リットリオ「あら、ローマ…？ど、どうしたのローマ、すごいお酒の臭いよ？」

ローマ「いやー、提督がくれたお酒がすつつつごい美味しくてねー？みんなで飲んでたらぐでんぐでんー。」

長門「うわ、だいたいの戦艦と一部の重巡、あと何人かの軽空母がもう酔っているではないか。めずらしい。そんなに美味しかったのか？」

ローマ「ええー。そりやもうさいつここの幸せを感じたわー。王様の友達にもらったらうれしいんだけどー、お酒あんまり飲まないから扱いに困ってたんだってー。」

ポーラ「王様の友達ってなんなんだろうー？」

リットリオ「…さあ？」

長門「英国は…女王だったか。王なんていないよなあ…、うーむ、わからん。」

ローマ「うーん、多分気にはいけないんだと思うわー。」

ポーラ「まあ、そーなるなー。」

犬城「さて、だいたいのプレゼントは渡し終えたわけだが…そうだが、何か一つ、買う権利を俺からやろう。なんかあるか？」

朝潮「何かを買う、ですか？例えば…その、日本刀とかでもいいのですか？」

犬城「…えっと、一応なんでそれを選んだか聞いてもいいか？」

朝潮「だって、日向さんとか木曾さんとか格好いいじゃないですか

！日本刀でばっさばっさと敵を切るなんて！」

木曾「あー、朝潮よ。お前にはまだ早い。」

朝潮「えっ。」

木曾「西洋剣ならいざ知らず、日本刀は鍛練あつてのものだ。素人が持ったところでまともに扱えずに折るか、やられるだけだ。」

朝潮「な、ならその西洋剣を……」

アークロイヤル「待った。西洋剣もそんな簡単に扱えるようなものではない。鍛練はもちろん必要だし、しっかりと扱うには基礎としてかなりの筋力が必要だが、アサシオはそこまで筋力があるわけではないだろう？」

朝潮「う。そ、そうですけど……。」

アークロイヤル「ならやめた方がいいな。まあ、飾るだけの剣であればあてはあるぞ？いい刀匠を岐阜で見つけたんだ。」

木曾「いや、朝潮が剣を欲しいと言ったのは飾るためではないだろう。というかなぜ刀匠？……まあ、まだ剣を持つには未熟だが俺でよければ稽古をつけてやるよ。」

アークロイヤル「私も西洋剣とかレイピアなら多少は教えることができるから、頼っていいぞ。」

朝潮「え、いいんですか!？」

木曾「ああ。」

アークロイヤル「もちろん。ウォースパイトも手伝ってくれるだろうしな。」

木曾「……そのウォースパイト本人は酔いつぶれているがな。」

朝潮「あ、はははは。」

犬城「ま、稽古についてはこちらでも話を進めておこう。んで、どうする？一旦保留、というのでもいいが。」

朝潮「うーん……あ！司令官、『ほけもん』というゲームが欲しいです！」

犬城「ポケモンか？ふむ、ポケモンか、懐かしいな……。」

北上「ポケモンかい？ならどの作品が欲しいとかはある？」

朝潮「え？え、えつと……わからないです！前に大潮がやっていたポ

ケモンが面白そうだったので！」

北上「ふむ、なら最新作がいいと思うんだけどどう思うよ提督？」

犬城「うえ？うーん、俺は『ブラック』までしかやってないから最近のはあまりわからないんだが…。」

いつき「そもそもブラックっていつのやつ？あたしは『金』までしかやったことないからわからないんだよねー。」

北上「いまは『ウルトラサン』と『ウルトラムーン』が一番新しい作品だよ。」

犬城「…遂に宝石でも色でも無くなったのか…。」

いつき「…ウルトラ？」

北上「うん。ウルトラ。」

いつき「はは、もうよくわかんないなあ。」

北上「んで、それ今あたし持ってるけど試しに見てみる？」

朝潮「はい！」

犬城「俺もみたいかな。」

いつき「んー、あたしはいいかな。うん。」

——蜻蛉

犬城「ほー、遂にDSでも3Dになったのか。」

北上「そういえば黒白はまだ2Dだったね。」

朝潮「司令官、司令官！このバシャーモっていうポケモン、すごいかっこいいです！」

犬城「うむ、バシャーモはいいぞ。ルビサファエメラルドでのうちの主力だったしな。」

北上「あ、提督はアチャモ選んだんだ。あたしはキモリだったな。」

犬城「サトシの相棒だな。」

朝潮「うん！やっぱこれが欲しいです！お願いします！」

犬城「あいよ。ポケモンなら俺としては是非ともコロシアムをやつてほしいな。」

北上「あー、あれルギアゲットできるもんね。もとに戻せるかは別

にして。」

犬城「ああ。懐かしいなあ。」

北上「だねえ。」

朝潮「北上さん、色々と指導をお願いしますね！」

北上「あいよー。」

大井「…オチは？」

山城「また波動砲撃っ？」

大井「…爆発オチなんてさいてー。」

山城「まだ撃ってないのに…。」

く雲龍来た。く

雲龍「よろしくお願いします、提督。」

犬城「…。」

雲龍「…提督？」

犬城「…やりました。」

雲龍「へ？」

犬城「宴じゃあああああああ！艦娘と妖精たちを集めろおおお
おお！」

雲龍「ひやあ!？」

隼鷹「ひやつはああああ！祭りだー！」

犬城「酒を持って！俺が赦す！」

千歳「お酒だー！」

能代「ついででクリスマスパーティーだああああ！」

四人「二」「ひやつはあああああ！」「二」

雲龍「…。」（絶句）

葛城「夜中にうるさいなあ…。うわあ？なにこれ。」

天城「あらら、こんなテンションの四人は初めて見ました。」

雲龍「あ…天城に葛城？な、なんなのかしら、これ？」

葛城「さあ？601烈風が出来ることへの喜びとか？戦闘機足りな
いからねー。」

天城 「正規空母が揃ったことへの喜びでしょうか？」

葛城 「天城ねえ、まだグラーフさんが来てないよ。」

天城 「ああ、そうでしたね。そういえばそんな方も居られましたね。」

雲龍 「ど、どうにかした方がいいのかしら？」

葛城 ↓このまま眺めているのもいいか

天城 ↓そんなことよりおながすいたよ

雲龍 「天城……。葛城まで……。」

葛城 「だってさ、このまま放っておいても問題ないと思うよ？」

雲龍 「それはどういう……。」

山城 ↓拷問だ、とにかく拷問にかけろ！

雲龍 「……へ？」

山城 「夜中にきさまらはなに騒いどるんじゃああああああ！」

E：グリーンガムの鞭

雲龍 「うわああああ!?!ちよ、ちよつと山城!?!」

葛城 「……まあ、そうなるよねー。」

犬城 「……りよっ」

雲龍 「……りよ？」

四人 「……呂布だああああ!」「……」

山城 「誰が呂布じゃああああああ!」

▼やましろ は むちをふりはらった!
ドカーン

青葉 「……結局こうなるんですか。」

大井 「まあ、そうね。」

青葉 「取り敢えず言いましょう。爆発まオチたなんてかさいてー。」

大井 「最近よく吹き飛ぶわねー。」

青葉「ネタがないんですよ、多分。」

大井「ネタがないなら作るのがライターでしょうに。世間の新聞屋を見習うべきね。」

青葉「…私が妄想で物を書いていると言っても言いたいのですか?」

大井「いいえ。貴女はまともな物書きでしょう。…この話はこちらまでよ。時間も無いわ。さっさと駆逐艦たちにプレゼントを配るわよ。」

青葉「了解です。さあ、謎の重巡サンタ、出撃です!」

大井「謎の雷巡サンタ、出撃します! 私たちの戦いはこれからよ!」

くさよならかも達また来てわんこく

《犬城の部屋》

大井「…ねえ、提督?」

犬城「んー?なんだー?」

大井「今更なんですけど、なんで二人でマツスル行進曲を延々とやってるんですか?」

犬城「そりや、大井が不幸にもこれを俺が一人でやってる時に部屋に遊びに来てしまったからさ。」

大井「不幸だわ…」

犬城「はっはっは…あ。」

大井「みすってやんのー…あ。」

犬城「お前もじゃねーかw」

大井「いや、これは提督がみすったのに気を取られたからであつて…。」

犬城「あっはっはっは!」

大井「だー! もう! こんな謎ゲー止めましょう! なんかも別のないんですか別の!」

犬城「んー、どうする? ナニする?」

大井「…。」ササッ

犬城「無言で下がらないで…。」

大井「提督が変なイントネーションで言うからです。」
犬城「すまん。」

大井「全く。私だから許しますが、もし他の娘だったらどうなつてたか。」

犬城「確かにねー。最悪通報されちゃうかも。」

大井「逆に襲われるのもありえますね。」

犬城「…誰が？」

大井「提督。」

犬城「ええ…。」

大井「まあ、そういうことはあまりしないように。」

犬城「はーい。」

大井「…あ、そういえば提督？」

犬城「んー？なんだ？」

大井「年末年始って予定はなにか入ってますか？」

犬城「んー、まだ特には。あー、いい加減に家に帰らないとヤバイな。殴り殺される。」

大井「なにそれ怖い。」

犬城「この前帰るって言っちゃったしな。多分帰らないと紫杏とかに半殺しにされる。」

大井「…提督が半殺しにされるとか想像がつかないんですが。」

犬城「…精神攻撃も混ぜてくるからなおきつい。」

大井「うわあ…。」

犬城「ははっ…。」

大井「…そういえば、最近は山風ちゃんと松輪ちゃんはあまり提督にくつついていないわね。どうしたのかしら。」

犬城「んー、親離れとか？」

大井「なら良いことね。…その、提督？」

犬城「なんだね、大井くん？」

大井「なによその…ホームズチック？なしやべり方は。」

犬城「初歩的なことだ、友よ。」

大井「どこのルーラーよ。まあいいわ。今度一緒に旅行でも行かな

い？」

犬城「いいぞー。んじやあそれのついでで家に寄っていいか？」

大井「ええ。じゃあ、予定でも考えましよう？」

犬城「あいよー。」

千代田「…はっ！」

いちかも「？」（どしたん？）

千代田「いや…なんか私の立ち位置が奪われるような予感がしただけだよ。」

さんかも「！」（なにになに？ちよちゃん空飛ぶの!?)

千代田「なんでやねん。いやなんでそうなった!?!」

よんかも「？」（ちよちゃんはなんで飛ぶのんー）

千代田「28歳ですけどー。ってなにやらせるのよ。」

ごかも「。（ついできごころでー。）

千代田「もう！」

ネ級「ニヤ。」（…なんであの人力モに話しかけてるんだろ。）

ポチ「ワン。」（食べるためでしょ。そんなことよりさ、ご主人のところに行かない?）」

ネ級「ニヤン。」（うん。）

テテテテテテ…

ポチ「…。」

ポチ「。（あ、そうだ。）

ポチ「ワン。」（2018年は成年だよ。間違えると恥ずかしいから注意してね。それじゃ。）

トテテテテテテ…

番外編

番外編その1 深海なお話し

「千級は語る」

犬城「なあ、千級。」

千級「なに？」

犬城「深海棲艦との和解は可能だと思うか？」

千級「ただの和解は不可能ではない。だけど、全員との和解は、無理。」

犬城「なんでだ？」

千級「深海棲艦は、大体三つの派閥に別れてるの。戦艦水鬼を中心として、ヨーロッパを基点に活動している過激派。中国を占領したのはこいつらの一派。」

犬城「ふむ。」

千級「次に、中枢棲姫を中心として、太平洋を基点に活動している中庸派。こいつらは、攻めては行くけど被害を受けたらさっさと撤退してく。所属していた私から見てもよくわからないやつら。」

犬城「日本やロシアが戦っているのはこいつらか。」

千級「うん。そして、最後に穏健派。これは港湾棲姫を中心に、太平洋で活動している…はず。」

犬城「ん、なんで『はず』？」

千級「わからないの。私は中庸派の一員だったから。穏健派は他の二つの派閥と全く連絡をとらないの。だから、どこにいるかも何をしているかもわからない。」

犬城「そうなのか。」

千級「で、過激派は基本的にヨーロッパとかアメリカ相手だから、日本の強さを知らない。だから、一気に潰せば勝機は十分ある。ただ、あいつらは戦力の強化や偵察のための犠牲を厭わないから、長引くと不利かも。」

犬城「ふむふむ。ならば、中国解放は戦力を一気に叩き込むべき

か。」

千級「うん。ただ、中国のほうの力量がわからないから一応用心はすべき。中庸派はロシアを攻撃したやつら。正直なところ、日本の攻撃でどんどん戦力が失われていってるから、このまま行けば壊滅する。」

犬城「捨て身の特効作戦なんてことは？」

千級「無い。中枢棲姫も、幹部もそんなことをさせるような人じゃない。ただ、過激派が吸収するかもしれない。早めに和解なりなんなりをすべき。」

犬城「和解に、応じるか？」

千級「それはこっちの行動次第。」

犬城「そうか。」

千級「で、穏健派だけど、基本的に戦闘はしない。警告して、それでも退かなければ戦闘にはいるらしい。負傷した艦娘がいたら治療したりもする。」

犬城「普通にいいやつらじゃないか。」

千級「そもそも戦う気がないやつら。おそらく大抵はロシアに行つたんだと思う。」

犬城「そうか。もしかしたらロシアの人を経由して連絡がとれるかもしれないな。」

千級「うん。和解は穏健派と中庸派しか無理。過激派は放置か、滅ぼすしかない。」

犬城「非情だが、そうするしかないか…。」

く中枢棲姫の日記く

○内は時期的に近い話のタイトル

○月△日 晴れ（第一話、カラオケ大会）

今日、柱島へ偵察に向かわせた千級が泣きながら帰ってきた。

皆何かされたのかと心配したが、そうではなかった。

どうやら、柱島のやつらはコンサートをやっていたようなのだが、そのなかでの艦娘の歌った歌が素晴らしかったんだそうだ。その感

動で、帰って来た今も涙が止まらないとか。

基本ポーカークフェイスなカ級がこんなになるような歌声だ。素晴らしい歌声なのだろう。

敵でなければ聞きたかった。

○月□日 快晴 (第2話、空母ごとの役割)

カ級が柱島の偵察から帰ってきた。

今回は、敵空母についていくつかの情報が手に入ったそう。

敵空母で、今回確認できたのはカガとソウリユウとズイカクだそう。

そのなかでも、カガの戦闘機隊は恐ろしいほど強いのだそう。

なにせ、ソウリユウやズイカクの戦闘機をばったばったと叩き落とすにいったそう。それも、二人の操る烈風に劣る白いゼロである。

最重要目標とするに値する空母だろう。どうもあそこの艦娘は化け物じみたやつが多い。その最たるものがタ級を沈めたシヨウホウだろう。

T字有利をとり、確実にやつらを沈めるはずだった。だが、やつらの艦爆によって、タ級は一撃で轟沈した。その後も、シヨウホウによって艦隊は壊滅、沖ノ鳥沖の制海権を失った。

やつらは化け物だ。どうにかせねば。

○月○日 少し曇り (第4話、仮面ライダーごっこ)

偵察に出ていたソ級が驚くべき情報を持ってきた。

なんと、柱島の艦娘は仮面ライダーなのだそう。実在していたとは。

仮面ライダーは深海でもかなりの人気を誇っており、戦時中の今でも古い作品が海底波で放映されているほど。

しかも、柱島の提督はBlack RXなのだそう。

…これ、勝てるのか？

負けたら降伏して…サインもらおう。

□月△日 曇り（第5話、千代田と さいしよのほう！）
なんと、柱島の提督が艦娘の一人とともに旅行へ行つた。：AC—
130で。なんでだ。

どうも、首都圏へ向かうそうさ。

私も、人間に変装してつけて見ようと思う。

おもしろそうだな。

部下には柱島攻撃を命令した。

うまく行けばいいが…。

□月□日 晴れ（第6話、横須賀鎮守府 一般公開の巻）

柱島の提督、名はたしか『犬走初』か。やはり部下が化け物なら上司も化け物だ。

あの艦娘シユミレーターを一発でクリアしていた。

あれは私も一度やったことがあるが、クリアは無理だ。できない。それを、あつさりとクリアしたのだ。化け物め。

そうそう。私と同じように犬走初を追いかけていた『大石三咲』という女性と仲良くなった。彼女は昔犬走初に一目惚れして、今も追いかけているのだそうさ。

彼女の恋が実ることをここで祈ろう。

頑張れ、三咲。

□月○日 快晴（第7話、帰ろう）

うん、なんで一介の海兵が戦艦を任されているんだ。しかも、途中で『艦砲で』潜水艦をしずめていた。どういうことだってばよ。

にしてもその潜水艦、どうもうちの所属では無いようだった。しかし、攻撃しようとしていたことから戦艦水鬼のところのやつだろうか。

やつら、こつちでなにかをするつもりだろうか。一応警戒しておかなければ。

柱島まで行くことはできなかった。今は家に帰る途中だ。

△月△日 雨 (第8話、妹)

「柱島攻撃艦隊が全滅した。」

一人も、帰ってこなかった。

なんとということか。

ヲ級の、『上陸成功』という連絡を最後にもう連絡がとれない。

おそらく柱島のやつらにやられたのだろう。

恐るべし、柱島。

△月□日 曇り (第9話、襲撃)

戦艦水鬼のやつら、やりやがった。

中国に傀儡政権を建てて、日本と戦争を始めた。

そして、早速返り討ちにあつたようだ。

しかし、和平の道が閉ざされるのは避けたい。

どうにかして外交を行うべきだろうか…？

ああ、こんな時にル級がいてくれれば…！

☆月□日 どんよりと曇り (第12話、宿毛攻略作戦)

訳がわからない。

なぜか宿毛が日の丸の機隊に爆撃されて、更地にされていた。

それも、それをやっているのは柱島のやつらだった。

ついに柱島のやつらが祖国を裏切ったのだろうか。

一旦様子見をするべきだろう。

今出たらヤバイ気がする。

☆月△日 曇り (第12話、石油危機)

確認がとれた。

どうやら、日本を裏切った宿毛の提督の始末だったようだ。

まあ、あの柱島の提督が裏切るとは思えんしな。

よかったよかった。

そういえば、最近占領下の島の一つの放射線の値がどんどん上がっ

ているという報告があった。

なにかはわからないが、一応警戒、最悪日本と手を組んで対処しようと思う。

一応日本は現地人だからな。なにか知っているだろう。

それに、これをきっかけに講話なんて話が出てくれれば嬉しい。

く戦艦水鬼の日記く

△月□日 雨（第9話、襲撃）

空母棲姫から報告があった。

なんと、中国を攻撃、傀儡政権を建てて太平洋への足掛かりを手にしたと言うのだ。

私の：いや、空母棲姫達の一派は恐怖政治や粛正、暗殺なんかでどんどん反対勢力を消して、いまやヨーロッパのみならず中東までも支配するグループとなっている。

今回の中国占領は、列車砲を潰した日本を潰すためだそうだ。

もう、あいつらを止めてくれるやつはいないのだろうか。

：中枢棲姫に連絡が取れば…！くそっ！

☆月□日 雨（12話、ルイージ掘り）

空母棲姫から報告があった。

日本の艦娘がスエズと地中海を経由してジブラルタルへ攻めてきたそうだ。

だが、噂されているほどの力は無く、すべて奇襲にて撃沈とのことだ。本当かねえ。

しかし、スエズか。たしかインド洋へ遠征に向かった艦隊がいたはずだが…、日本の艦娘のルートと被ってるな。ジブラルタルまで来ているということは壊滅したのだろう。列車砲陣地も壊滅しているから悠々と地中海を攻め込んでいったのだろうか。

このまま私のところまで来て、殺すなり捕虜にするなりしてほしいものだ。この不自由な生活は飽きた。

未知の国日本。行ってみたい。

：脱走でもしてやろうか。

☆月☆日 けむい。(第13話、犬と戦車と人)
くそつ。

脱走は失敗した。重巡棲姫のやつ、躊躇い無く撃ちやがった。

お陰で左腕が吹き飛んでしまった。治療はされたが。

一体、どういう仕組みで吹き飛んだ腕がくつついたのだろう。気になる。

部屋に戻されたあと、駆逐古鬼がやって来てなぜ脱走しようとしたのか聞いてきたので、暇だったから、と答えた。

そしたら、駆逐古鬼はため息をつきながら日本のゲーム機を持ってきてくれた。3DS、というものらしい。

それと、カセットもいくつかくれた。メタルマックスというゲームがみつくと、ドラゴンクエストというゲームをむつつ、それとスライムもりもりドラゴンクエストというやつをみつつくれた。

うん、すごい面白い。やはり日本はすごい国なのだろう。駆逐古鬼曰く、これ以外にも面白いゲームがたくさんあるのだそう。

ああ、やっぱり行ってみたいなあ。

にしても、なぜメタルマックスの発売順は3↓2↓4なのだろう。気になる。いつか調べてみたい。